



Title	日本統治下台湾における浄瑠璃・義太夫関係記事／台湾日日新報浄瑠璃・義太夫記事一覧
Author(s)	川下, 俊文
Citation	JSPS科研費「日本統治下台湾における歌舞伎・浄瑠璃を中心とする諸芸能興行研究」23K00117 研究成果報告書. 2026, p. 133-448
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/104313">https://doi.org/10.18910/104313</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

II  
資料編

川下  
俊文

# 1 日本統治下台湾における浄瑠璃・義太夫関係記事

## 【凡例】

一、本編は、『台湾日日新報』『漢文台湾日日新報』から、浄瑠璃、義太夫関連の記事を編年体集成・編集したものである。各記事の概要や、分類については末尾の記事一覧を参照された。

い。

一、『台湾日日新報』は、明治二十九年（一八九六）六月一七日に『台湾新報』として創刊したあと、その後身として、明治三〇（一八九七）年創刊の『台湾日報』と合併し、明治三二年（一八八〇）より『台湾日日新報』として創刊。昭和一二（一九三七）四月一日まで発行された。『漢文台湾日日新報』は明治三八年（一九〇五）～明治四四年（一九一一）発行である。

一、新聞は、台湾国立図書館の端末でのみ閲覧、ダウンロードできる検索システムより収集したPDFデータに基づき、国立国会図書館蔵のマイクロフィルム、有料電子コンテンツ「漢珍知識網・報紙篇（台湾日日新報＋漢文日日新報）」（漢珍数位図書館 <https://www.tbnc.com.tw/>）を補助として用いた。

一、新聞記事の翻刻にあたっては、次の要領でおこなった。

（一）改行、字空け、仮名遣いは原文の通りとした。

（二）字体は新字体に統一した。

（三）ルビ、ルビの不統一、誤植は原文通りとした。

例…北門街 正しくは北門街

例…娘義太夫 娘義太夫 娘義太夫

仮名遣いは原文通りとした。

（四）読みやすさの便宜上、句読点、作品名に「」、セリフ等には「」を補った。原文に付されていた句読点、「」「」等もこの基準にしたがって変更した箇所がある。なお作品名は、略称と段名を含めて一括して『』に入れた場合がある。

（五）踊り字（、、、々）は、正則に則して改めた。

例…あ、エ、色々

（六）二字以上の踊り字は開いて翻刻した。

例…それぞれ、大きい大きい

（七）記事の主題と副題の間は基本的に／でつないだ。

（八）編集者の注記は※または〔 〕内に記した。

（九）印刷の不鮮明、版面外の記事等の理由で、確認できない箇所がある。難読字は■とした。また記事の一部が確認できない、あるいは一部が確認できない可能性がある場合は、（版面切のため不可読）とした。

一、記事収集にあたっては、台湾国立図書館の端末内データベース

スの検索システムに「義太夫」「浄瑠璃」のワードで検索し、抽出された記事を中心としている。

一、翻刻は川下俊文が行い、中尾薫が句読点を補い『』を  
変更するなどの体裁を整えるための編集を加えた。

一、不鮮明で判読不能な箇所も少なからずあり、本冊子編集に際する誤りなどがある可能性がある。使用に際しては必ず原典を確認いただきたい。

## (1) 明治

〔明治28年 (1895-11-8) 日本による台湾統治が開始〕

□明治29 (1896-07-16) 『台湾新報』

●女義太夫 北門街一龍亭の阿波の娘浄瑠璃は中々大入りなり

□明治29 (1896-08-16) 『台湾新報』

●娘浄瑠璃 竹本一座は去十一日夜より、又々北門街一龍亭に興行人形入りにて景気好し

□明治30 (1897-07-15) 『台湾新報』

●素人浄瑠璃会 一昨日午後府前街丸三商行に於て、天狗連の浄瑠璃会ありたり。語り物は『鎌倉三代記』(喜楽)、『大功記尼ヶ崎』(友魚)、『亦助住家』(語る勇)、『千両幟』(松楽)、『合邦辻』(可水)、『寺子屋』梅枝等にして最と好評なりき

□明治31 (1898-01-16) 『台湾新報』

●鍾龍の娘義太夫評 何日聴ても聴飽きせぬは浄瑠璃なり  
鍾龍といふは大阪清津橋辺の娘義太夫席に出たとか。慥かに呂昇をしのぐの腕はあるべし。鍾龍面は二の町殊に鶯鳴かせた時代を通り越した様なれば、娘義太の主眼目的としては鍾龍落第することならんか。其芸にかけては兎に角、ゑら者なり。此人余りに顔を振り廻はすの癖あり。張紙の虎の如しとの評あり。元より仕憎き語物を出して無難に遣つてのけんと云ふ謀反なれど、毎晩の出し物、皆それぞれの瑕ある様なり。併し、そこは女の難有さ。何がなんでも大受なり。此頃幸亭にて、同人の『阿漕浦』を聞きたるが、これは十八番には非ざる様子。思ひきつて声を出すこと、愛嬌此上なし。偕て『平住住家の段』の中程より、「かゝる嘆の中へ庄屋を案内に打連れて」に始ま

り「次郎造門口から」は俄に調子荒なる所今一きわなり。「傷持つ足の」より如何にも平治の胸中左もあらんと思はる。「顔打眺め」より調強くなり「成程こなあじや」よりの道化は

たしかにこたへたり。平治の「アコアコ人違ひでござんか」より奔流の岩に激するが如く「そりや、だうあつても、あの知らぬか」より「屋さがし」のところまでよし。「柄に手をかけ」より次郎造の「ウハウハウハ」の笑ひ声大きい大きい。

「互の切先上段下段」の所最少しと思ふなり。「自業自得とあきらめて」より「たのまれてまで」まで泣かせさうなり。凡て次郎造が名乗合をなしてより、次郎造の詞の変調、それより

庄屋の来りて後、俄に又元の語調に変はりしところ、故意ならず。此浄瑠璃は一体茲処と云ふ開場なく、次郎造が身変りにたつ

つなれば、只平治が次郎造に頼む所で一泣かせする所なれども、鑄龍には寧ろ悲と云ふより他の喜と云ふ方の出し物がよからうと思ふ。只語る内途中で三行か四行飛ばして仕舞ひしは

不都合なり（はなふさ）

●明治31（1898-03-31）『台湾新報』

台北のもろもろ △義太夫語り 流してあるく義太夫語り 呼び来んで一番呻らせんとせは、一段一円をはづも事覚悟せざ

るべからず。一段一円の義太夫さへ、ハシオツテ満足には語らず。テン普拉クイタイ、即ち新内は一だん五十銭なり

●明治31（1898-05-08）『台湾日日新報』

●新竹通信（五月六日報）▲寄席 城内後車路の元栄亭といふ料理店跡へ寄席を設け、昨五日より女義太夫、加留口、昔晰し、新内音曲晰の諸芸を演せり

●明治31（1898-06-07）『台湾日日新報』

●共楽会 共楽会は去る土曜日の夜、同会場に催されたり。例に依つて立食の饗応あり。余興には竹本八重吉一座の女

浄瑠璃と、桂寿、吉川虎丸の落語講談ありて、午后十時十分散会したり。此会は従来になく寂寥しかりしかど、竹本八重吉

一座の女浄瑠璃にて頗る景気好かりき。梅虎の『千代萩の御殿』と八重吉の『お駒才三白木屋の段』は申すまでもなく、

八重吉の『おしゆん伝兵衛堀川の段』、さるまわしは妙々といふの外なし。聞く処によれば同一座は此度の台南丸にて渡台したるよしにて、船中偶然共楽会の塚本幹事に知られ、今回始めて同会に出席したるなりとぞ。道は幹事殿のお眼鏡、天晴と申す外なし

●明治31（1898-06-07）『台湾日日新報』

●共楽会 共楽会は去る土曜日の夜、同会場に催されたり。例に依つて立食の饗応あり。余興には竹本八重吉一座の女浄瑠璃と、桂寿、吉川虎丸の落語講談ありて、午後十時十分散会したり。此会は従来になく寂寥しかりしかど、竹本八重吉一座の女浄瑠璃にて頗る景気好かりき。梅虎の『千代萩の御殿』と八重吉の『お駒才三白木屋の段』は申すまでもなく、八重吉の『おしゆん伝兵衛堀川の段』、さるまわしは妙々といふの外なし。聞く処によれば同一座は此度の台南丸にて渡台したるよしにて、船中偶然共楽会の塚本幹事に知られ、今回始めて同会に出席したるなりとぞ。道は幹事殿のお眼鏡、天晴と申す外なし

□明治31 (1898-07-17) 『台湾日日新報』

●素人淨瑠璃温習会 昨日午後六時より、府直街阪友亭に於て、梅四、可水、友魚なんといへる素人淨瑠璃の温習会ありたり

□明治31 (1898-09-13) 『台湾日日新報』

●十字館の替狂言 本日は俄『平和の仇討』『捕へて見れば主人なり』、淨瑠璃『松王館の段』(梅虎)、『幡随院長兵衛』(八重吉)、『千本桜すしやの段』(八重吉)

□明治31 (1898-09-17) 『台湾日日新報』

●本日の共楽会 本日午後六時より淡水館にて開会する共楽会は、軽口(正子、米恭)、落語(朝遊、文字助)、手躍(忍夜恋の曲者)、吹寄(福助、綾子、地方金八)、音曲清元(吾妻おゑん)、義太夫(玉すし鈴八)、琴(内藤モト)。尚ほ申す大寄なれば、家族携帯の上出席ありたしとなん

●小嶋屋の座敷落成 水災の爲め大破損を生じたりし六館街小嶋屋は、去日来修繕中の処漸く工事落成し、旧の如く営業する由

●十字館本日の芸題

新作道化俄『無銭遊興』、同淨瑠璃『おしゆん伝兵衛堀川の段』、淨瑠璃は『蝶花形八ツ目』(梅虎)、

『彦山権現六助住家の段』(八重吉)、『三十三間堂平太郎住家の段』(八重吉)

□明治31 (1898-10-14) 『台湾日日新報』

●淡水館に於ける上長官送別会 既記の如新任西部都督參謀長楠瀬大佐、同第四師團附池田大佐、同教導団長小畑大佐、同大阪砲兵工廠附南部少佐、松山衛戍病院長に転ぜし松本軍医正、熊本兵器支廠長となりし大野少佐、及び同歩兵第三十九聯隊第一大隊長中村少佐、歩兵第四十二聯隊第三大隊長に転ぜし田辺少佐、其他尾上、弘岡、島等の各少佐等の爲めに官民一致して催ふしたる送別会は、予定の如く一昨日午後五時より淡水館に開かれぬ。会員は四時過ぎより続々来会し、四時半に至り虎丸、誠玉等の講談あり(このあと記念撮影・開会式・送別挨拶あり、翻刻省略) 夫れより宴に移り献酬談笑し、八重吉の淨瑠璃等ありて、一同歡を尽して散せしは午後七時過ぎなり。此日は児玉総督始め立見、木越の両將軍以下陸海軍將校、其他文官民間紳士、約二百名来会し、大倉組の寄付せるすし店には、吾妻の芸妓仲居等周旋し、文武廟街恵良氏は写真の撮影を寄付したりと。

□明治31 (1898-10-20) 『台湾日日新報』

●本日の十字館 新作道化俄『交際家の大失敗』、  
新作音曲俄『打つや太鼓越路の獅々舞』、女浄瑠璃『菅原四  
段目寺子屋の段』(梅虎)、『盛衰記三段目逆櫓の段』(八重吉)、

『忠臣講釈喜内住家の段』(八重吉)

□明治31 (1898-10-21) 『台湾日日新報』

●台北の諸興行物(つゞき) 之より三十年五月、即ち予の  
稱して在台北く内地人が永住的思想の稍々萌したる当時より今日  
に至るまでの諸興行物を列挙するに先だち、興行の舞台として

同年十二月西門外街魚市場に台北座建築せられ、文武廟街に  
も今の幸亭の設けられ、越えて本年の四月過般暴風雨の砌  
破壊したる台北座の棟上げあり。是と前後して北門街に十字屋  
なるもの専ら興行物の席に充てられたりき。而して如何なる  
種類の外題 又は出物が公衆を娯しめたるかを見るに、前の  
台北座には成駒一座の演劇あり。後の台北座には愛沢一座の  
演劇を興行し、幸亭には落語、浄瑠璃、又は清元、常磐津なる  
ものあり。其他右の興行に前後して、艫舩に成駒が乗込み、  
淡水樓の傍に一芝居打ちて、大に九州抜天の魂胆を寒からしめ、  
新起街には軽業足芸の小屋掛を為して、内地人は勿論、土人に

も大に当てみたるもの等、夫れ相応に人々に娯樂を与へし。然  
れども、当初舞台寄席の出来たりしときは面白半分興が、り

つ、木戸口を潜りし者にして、扱は引幕の一つも相談せられ、  
花びら鎮の軽い重いの詮義するやうに成りて、衆人の耳目大に  
贅沢を生じ、琉球菰の敷物は赤毛布と成り、棧敷の欄にも赤物尽  
し、誰さんゑ某よりと進上されては出鱈目の捨台詞や昔噺の落  
で笑ぬやうになり、次第次第と研究に研究を積みて漸く今の  
情勢と成りたり。即ち八重吉一座の女義太夫が六七月に幸亭に  
頭はれてより、万緑叢中紅一点際立つこと滅法界となりしより、  
幸亭に行はれつ、ありし文字助一派の落語なるもの、府前街  
の浮れ節を初め台北座の壮士、遽に転た顔色なきまで立至り  
き。而して台北座倒れたる前後に俄師正光、米茶の一派が  
京都下りを名として十字館に御機嫌相伺ひて、八重吉、朝遊、  
湾十郎、文字助も亦これに加はりて、今日にては台北市中  
興行物としての真価、悉く十字館に蝟集せる者の如し。以上述  
ぶる処を以て見るに、城の内外に依つて大に其興行物の性質を  
異になしつ、あるは事実にして其発達の程度も亦同じく、城  
の内外に拠つて其度を異にせるものなきにあらず。然り極言す  
れば城内は城内にして、新起街艫舩は新起街艫舩らしく何れも  
興行其者の趣を存せざるなし。而して其興行もの、客筋は

如何。上流か中流か將た又下流社会に迎へられたるか。八重吉の浄瑠璃を除く外は上流は愚か中流社会の人衆にすら表木戸を素通りさるゝの有様あり。是れ芸に堪能なきが第一の原因にして、第二は劇場、又は寄席夫のものが不潔なりしとに依れるものなり。然らば下流社会にのみ容れられたるかと云ふに、是も亦少し其道に堪能なるものは只馬鹿馬鹿として鼻の先で笑ふのみなれども中には一概にも參らずして、見馴れ聞馴れの量目が目度重なるにつけて、即ち今日の御客となれるものを知らは芸人たるものも誠に心細き次第ならずや。然り台北にして尚ほ如此發達の程度にては実に残念の次第なるが、中には台北在住の内地人なるものは、全国より種々の人物の落ち合ひ來れるも覺らで、只上方風か、若くは九州流を以て客を取扱へる傾あるは実に舞台上の上のもの、尤も注意すべきものなるべし。ひとり幸にして夫の共樂会が四月に起りしより、其余興として種々の演芸を演ぜらるゝが故場所柄と云ひ幾分芸人の勉勵する所より兎も角中流以上の娯樂場(尚同会にも希望は數限りなきも)たるを得しこと此上もなき幸なりけれ。因つて思ふ、中以上は共樂会に以下は現今の寄席に出掛る様にして、後日種々の名人が渡合し來るの日にあらずんば、何すれぞ快呼するを得んや。終りに臨みて斯道の有志に望ましきは、夫の台北座を再び

建築して芝居、手踊、其他諸種演芸の舞台たらしむことにこそ(雀の丞)

●丸中温泉の増築披露 新起街の池畔に数寄を悉くして建築したる丸中温泉は、今度又々広間小間等の数棟を増築し、

二十三日落成式をなす由にて、当日は平生の顧客を招待し園遊会、及び芸妓手踊等を催ふして興を添ふべしとなり。相変らず繁げ繁げ御運びあらまほしく、主人に代りて斯くなん

●本日十字館 新作道化俄『疑心暗鬼を生ず』、音曲俄『打つや太鼓越路の獅々舞』、女浄瑠璃は『一の谷三段目熊谷物語りの段』(梅虎)、『金比羅御利生記百度平住家』(八重松)、

『三日太平記 松下嘉平治住家の段』(八重吉)

□明治31(1898.10.26)『台湾日日新報』

●共樂会の余興 本夜 淡水館に開かべき共樂会 余興は軽口(正光 米茶、清元)吾妻の君子、手踊(同上)、浄瑠璃

(艇檢の小高)、落語(灣十郎)、蓄音機(前島雜貨店)より寄付、福引等なりと聞く。例に依つて家族は勿論、知己の人々

をも同伴せられたしとの事なり

●今晚の十字館 新作道化俄『高山国雑徒のぼんちえ』大芝居 五ツ幕、新作人情俄『美人の薄命』一幕、『仙台萩御殿場』(梅虎)、

いろむすめむかししやう、しろみやの段』(八重松)、『一の谷熊谷陣家』(八重吉)

明治31 (1898.10.28) 『台湾日日新報』

●共楽会 一昨夜を以て淡水館に開きたる共楽会は雨天にも拘はず頗る盛会にして、来会者無慮百名に達し、就中艦檢及城内檢の顔揃ひとて、錦しう更に花を添え、殊にまた前島雜貨店の蓄音器、及最後の福引などは近来になき大喝采なりき。各客を尽くして散会したるは十一時にして、例よりも舞台の面白かりければ、雀の丞が物したる一口評を左に

▲共楽会余興評(雀之丞)

共楽会もおひおひと進歩して、舞台上に上る連中も一方ならず勉強すること感すべし。殊に今回の余興に至りては、何れも先づ近來になき上出来なりと云ふも可なり。今雀の丞が目撃したる処を大ザツパに評せんに、最初正子、米茶の道化、両国川開き遊山ぶね、十字館で平常見る両人とは打つて変わつての出来はえ。難を云へば江戸弁に難はあれども、落も好く休度も可かりし。次に艦檢の小高の淨瑠璃『三十三間堂棟の由来 平太郎住家より木遣音頭まで』、無事に勤めしは道は舞台馴れた天晴れさと申すと増長するから、一つ二つ批難せむに、第一腹のたよりなき。第二に優長すぎて気抜の

する個処あり。尤も両三日前まで病気の身体を無理に勤めたよしなれば是非もなし。『木遣音頭』の落着加減は氣に入りましてぞ。次には城内檢の君子(前号に吾妻としたるは誤り)が清元『四君子引抜きむつの玉川』、上調子同じ檢番の小升、三味線清元寿助、初めからの美音に加えて美しく。「ドウだえ君」と鼻高うした二三の紳士もありたる筈。「桜かざして」から「風のまにまに」あたりの嬌音さ。三味線も「雪されて」から「さらす」の前後の妙に練へし腕前は、道に三浦屋の大將と申します。其次に朝遊改め灣十郎の落語、殊の外奮発したから一段人を笑はせぬ。此調子にていつも遣つて貰ひたし。又其次には君子、拍子の舞「しのお夜」、黒助、小吉の地にして一通りなりし。扇の手も無難なりき。此拍子近來おひおひ上品になり、総ての素振が上りたるやうに思はる、が、折角勉強が第一。その勢は残夢庵窓雨の趣向にかゝる福引と成つて、百人首の上の句に因みたる下の句の景品、面白面白。高幕もらつて赤面する紳士あれば、三度笠いたゞいて笑ふ白拍子など御愛嬌たつぷりも、皆幹事奔走の功德かや。嬉しく一夜を楽みたり

●共楽会の余興評「食物見立」

いざ吾れも意地穢なき食物見立てに共楽会の余興を評せん。

素人評の一筆を刺身のつまとも見玉へかし

二和加 薯沢山の薩摩汁「ドブロク」、あるは腰掛的に升酒の肴には結構ならん

小高の淨瑠璃 淡白とや称せん。甘ひとも不甘とも評しやう  
なき「刺身の妻」

君子の清元 玻璃皿に盛り水菓子になん見立て侍らんか

同三浦やの三味線 浣澗として磐上に躍り出でんする鯉の「生造り」のことし

湾十郎の語落 薯だいの「さんとん」とも見んか。女小児は慥においしいよと賞美せん

蓄音器 洋食後の菓物、結構でがす (はまのや)

●本日の寄席 十字館は新作道化「女房の一心」一幕、いぬ芝居五幕、女上り「忠臣蔵八ッ目日本蔵下屋敷」(梅虎)『お染久松野崎村の段』(八重松)『玉藻前二ッ目道春館の段』(八重吉)幸亭は『忠臣蔵六ッ目』(才吉)『伊勢音頭』(小文字)『三勝半七酒屋の段』(春登代)人情噺(しん喬)『梅川二の口村(歳八重)』若旦那遊山話(万朝)『忠臣蔵三ッ目』(鐘籠)懸取万才(文字助)さか様踊(正玉)

□明治32 (1899-02-07) 『台湾日日新報』

●基隆通信(二月四日発) ▲寄席の大入 当地寄席たる五光亭に於ては、去廿九日より向ふ十五日間、引続き講談、義太夫、新内、淨瑠璃の興行中なるが、就中松林伯寿の講談、金蝶の義太夫等は大評判。毎夜大入りなりと云ふ

□明治32 (1899-02-10) 『台湾日日新報』

●今晚の十字館 新作道化俄「三笠山」同人情俄「浮世の輕業」浄るり『千本桜すしやの段』(梅虎)『伊勢音頭油屋の段』(八重松)『古手屋八郎兵衛古手屋の段』(八重吉)

□明治32 (1899-05-09) 『台湾日日新報』

●淡水館の例月会は既記の如く、去る六日同館の二階にて催されたるが、定刻より官民の縮土は令夫人、令息、令嬢を携えて参会し。左しにも宏き楼上、立錫の地なく、其数無慮、二百五十余名と計せられぬ。余興三遊亭万朝の滑稽咄は、日頃白き歯も見せざる厳めしき頤を解かしめ、西川とく、西川楽丸の清元「種時三番」は老鶯の春を惜む風情あり。西檢の流行ッ妓、お艶が北州の舞は其綺麗なるに、一同を酔はしめ、ヒーロの箱にてマチを摺る紳士あるを見受けぬ。加代、春助の歌、愛吉、雛助の三味線いづれも日頃の腕前を現はし、「とんぼの

浦島は花やかにうつ、白浪」といふ処より鼓這入りて、一層興を添え、かよ、愛吉の唄、春助 雛助の三味線、流暢波の調に通へり。染分の社杯、唄見台等は、今回の余興の爲めに新調せるらし。美根登の源氏ぶし、『葛の葉の子別』は関東人の耳に新らしく、竹本清登太夫の浄瑠璃『梅忠』は非常の喝采。助六、金八、あや子、福助、金丸の五人女、流石に当夜の見物なり。小半、愛吉の地方手馴たもの。楽丸、とくの歌浄るり、苦勞人を泣かせぬ。午後十一時散会せり。因に記す。同日より、西洋料理明治楼は淡水館内の酒保を開業し、御手輕に廉価に客の需めに応ずるよし

●裏口からの淡水館余興評 万朝人情話は東京語に相違ない言葉尻に「ナカイテンデ」といふのが語落口調に外れて、如何にも台湾落語家然たり。清元は麒麟も於て驚馬に及ばずとやら、声のつゞかざるは是非もなし。西川師匠の三味線、小憎いほど鮮かなりき。北州は三味線可成御苦労。語りは大阪清元と聞受候。踊りは先づ無難。しかし色気沢山の処商売柄なれば是もよしとすべし。浦島三味線も語りも長唄に清元をこねまぜた様で、是が矢ツ張り芸者咽喉といふ処ならん。踊りは先

甘い方だ。面冠る処少し間が抜けたけれど、それからの芸で差引すれば、兎に角上々吉とまで行かぬも上吉上吉。義太夫、

老功骨折つたものなり。五人女は何と評せんか。先づ大阪千日前、東京浅草公園の見世物小屋にて見物せし心地す。それから暮合の囃しは手品か軽業の様な心持がする。序にいふが芸者は芸のある者斗り始終引張り出して、演せるよりは芸のない者を舞台へ出して、少々恥をかいて貰ふと将来芸者の改良、つまり奨励になるから、此献策は何處であろうかえ。(娼法芸者 反対老人)

□明治33 (1900-03-27) 『台湾日日新報』

●淡水館月例会余興評 去る廿四日同館に催したる月例会の余興を短評すれば、最初に定まりの(万朝)の落語は、席亭などにて演ずるよりは入念に勤め、次は『種蒔三番叟』引抜き雀踊りにて、(小石)の翁は台湾へ来てから丸四年初めての踊とてどうやら人目を惹き、(若清)の三番叟、式の如く、(小政)の千載は儲け役のところはコテと塗り立たれば、いつもの小政とは思はれず、引きぬき雀踊りの奴姿は意気なりき。但し奴姿の小石の首は抜けあがつた様で異様の感ありし。(長吉)の唄、義太夫声まぢりて嬉しく、(君勇)(延とし)の三味線一人は師匠一人は腕自慢、悪るからう筈なく、(光作)(愛菊)(石次)(政蝶)の鳴物、又よし。次は(竹本大枝)の浄るり『大功記

十段目、是れは大枝が十八番又ありて八重吉に劣らぬ処あり。其次は出替り引拔『花岡山』。(石次)と(小奴)の壮士踊り

大喝采にて、看客より最う一ツと所望され、石次は再び

『日清談判』を演じぬ。之にて幕となり次は(岡本亀鶴)の

新内『東海道膝栗毛』、諧謔滑稽の内にも妙味も失はず。次は

『不老門』、是れは昨年月例会に舞はせんとて、内地から衣裳

等も取り寄せ、(愛玉)(政蝶)等に舞はさんとせしに、一は

死亡し、一は入院せし折とて、其儘となりしを今回出したるに

て、曠衣裳、能舞台のかき割りに(小政)の王本行の足どり

感心感心。(若朝)の鶴、(政蝶)の亀、綺麗とより外なく、(長

吉)の唄、謡ひ声立ちしも寂に乏しく、(若清)の三味線難なく、

(石次)(光作)(延とし)の鳴物達したるものなり。(玉田誠玉

が講談よく喋りつゞけ、『子の日』『引拔玉兔』は(愛菊)(小

せい)(石次)(若石)にて何れも派出に賑はしく、兎となつて

舞台より飛出で、やがて餅搗くところ可笑しく、臼の中より

手巾を出して看客に呈したるなど、愛嬌ありし。此夜は男の

看客少なかりしも、令夫人令嬢をはじめ婦人の来会者八部通り

を占め、十時十分、散会せり

●浄瑠璃温習会

昨日午前十一時より艫艫○源座に於て  
竹本八重松の会主にて、艫艫各楼の芸娼妓、及び素人浄るりの

温習会を催したりと

□明治33(1900.09.28)『台湾日日新報』

●素人浄瑠璃会 基隆及び当地の天狗連は、今回浄瑠璃

温習会といふを催はし、府前街の吉川亭にて一昨二十六日より

開会中なるが、来る三十日まででは木戸銭入らずなりと云ふ

●新起亭今夜の物語 『御祝儀』(入登太夫)、『荳葺札掛』(豊

鶴)、『日高川』(若玉)、滑稽落語(竹馬)、『小(四字不明)心

中』(亀鶴)、講談『馬術三幅対』(誠玉)、『国分寺三庄太夫』(小

若)、音曲落語(文字助)

□明治33(1900.10.05)『台湾日日新報』

●新起亭の物語 『御祝儀』(入登太夫)、『お品福助』(豊鶴)、

『五右衛門』(若玉)、落語(竹馬)、『鏡山尾上館』(亀鶴)、新

作噺(文字助)、『かさね土橋』(小若)、講談『義士銘々伝』(誠

玉)

□明治33(1900.11.09)『台湾日日新報』

●吉川亭浄瑠璃 本日より五日間興行するよしにて、今晚の

物語は、『菅原伝授手習鑑四ツ目』(錦石)、『三十三間堂棟木由

来（柳枝）、『加古川本蔵下屋敷』（十三）、『伽羅先代萩』（相生）、

『忠臣蔵六ツ目』（竹本一三五大夫）

●今晚の新起亭 『御祝儀』（入登大夫）、『白石囃』（豊鶴）、『浦

里託住居』（若玉）、『三日本平記』（大枝）、『千両幟続き』（誠玉）、

『由井浜千軒長者』（小若）、落語（文字助）

□明治33（1900-12-12）『台湾日日新報』

●淡水館浄瑠璃会一口評（秀八）の太十声が三枝の蔭に隠れ、姿が簾の蔭にかくれて、見とれぬと聞取れぬ処、却て難有

く、露払の任務を立派にしてやられしは御苦勞千万に存する。

（春路）の『三浦別れ』押しも無ければ張りもなく、地声の一

本筋、譬へば館を引きのぼしたるごとく。御座敷で好ちやんに

聞かしてもせよなら、この甘たるさ、乳呑み声も愛嬌あれど

舞台の上では何んとやら、乳母が入りさうなり。定めて御師匠

さんの御骨が折れた事であらう。（歌吉）の『平太郎住家』ツ、

しりとして、見台に向ふての語り口、随分目眦を垂下た客もあ

りし様見受けしが、兎角の評を試みるは大人氣無き心地ぞする。

（綾子）の『三十三間堂』の下の巻、御師匠さんや阿母さんの

御丹精、中々に好味もの。儘に義太夫として聴き取られたり。

随ひ」ト天井を瞰んだオチヨボの眼に似ず、オチヨボならぬ口

から嬬々迸る声、之れが常磐津なら猶よからうと思はる。併

し芸妓の浄瑠璃としては別段批難も致難からむか。（つや）の

琴、胡弓は何時もながら精華々々。（幾久）の『利生記』、流石

は場数の巧者だけに喉も慥かなれば語り廻しもよし。憂も慥に

受け取られ、自分にも大層氣取つて居たりし。（小勇）の

『判官切腹』、流石は義太を呼びものにするだけ、夫れだけどつ

しりとして聴き答ありたり。見台に向ふて悪恐もせず落着き払

つての語り出し、芸者の温習とは見へず。「苦ふない近ふ近ふ」

といふべきを余りに急込むで、「近ふない近ふ近ふ」とやられ

しは由良の助が戸迷ひさうなり。兎に角是れなら木戸銭取つて

も余り不人氣は見ざるべし。大切り（惣掛合）の『忠臣蔵茶屋場』、

人形箱打開けし様にて奇麗なり。兎角の評すれば役割役不足

の論が持ちあがる故、先づ初日はこんな事にして明日の紙上に

二日目の評を書かう

□明治33（1900-12-13）『台湾日日新報』

●浄瑠璃温習会一口評 初日の評をしたから行蒐り上二日目の

評をせねばならぬ訳となつて、台所の味噌桶は勿論頭の脳味噌

にも防腐剤をふり撒いて、出掛けて見たらイヤハヤ非常の大入

で満場は煙草飲む隙間もなし。初日の残りとして二日目へ廻つた花吉、蔑しんだ割合に甘く狐火に聞き人までを迷はせたり。只平たき口から平打的の音が行義よく繰り出るため、高低緩急に乏しい難あり。市六の『新吉原』は大坂もの、奥州訛り、物の本を読んで居るやうな心地す。為八の『鈴が森』、引かれもの、小唄の如し。おえんの『千代萩 御殿場』、最もはまり役。彼れ位ひ語られるなら病院を自由退院しても夫れ丈の埋め合せはつくべし。住二の『蝶花形』言葉のまづい割合にさはりの所は非常によかつた。小半の『梅忠』意気に過ぎ、ヤアー新内と声かけたるは適評ならん。か代の『二度目』、言葉凡てかよはし。されど之れといふ難なく、三味線老梅八、殆ど御腕前御見上げ申候。夫れ丈の腕を持つてこそ大勢の妓が引ませ申すべし。成駒の『三日太平記』、初の内は声ふるひ、何となく耳に蒐りしが、中程からはズント落ち付き、惜しい惜しいの声沸きしも冷評斗りにあらず。しかし極甘い処ると極まづい処あるは是非なし。住栄の『六助住家』、四畳半の浄瑠璃だとケナして居たが中々以て然らず。既に浄るりの態に成つて居て骨があつて寂があつて悔りがたし。すゞめの『紙治』艶物には大き過ぎ位の声ありしも、惜い事には朗読的になつて居る。大切の『油屋』に成駒の万野が住二のおこんを呼ぶ時、何を思つて居

たか住二がぬかつて居るを成駒は五六度続けさまに呼び、住二に目配せしたは返つて実際に近かりしなり。とにかく俄稽古にしては凡て上出来とほめて置くべし

□明治34(1901-10-13)『台湾日日新報』

●義太夫の行旅病人 イヤやお尋に預つて面目次第もない。今身の上、『朝顔』の「宿屋」ではふりませぬが私も腹からの非人ではなく、以前は矢ツ張り伊予の松山で人に知られた釀酒家でふりましたが、下手の横好きとやら申す通り、糸にも乗らぬ浄るりが飯より好きにて、三味線弾を家へ呼び明けても暮れても唸統けて店の商売は奉公人任せにしておいた為、さしも手堅い身代を滅茶滅茶に潰して退けたが尚浄るりの熱がさめず、ナアー二店の金は一文なしになつても是丈浄るりが語られたらば、何処へ行つても飯は喰へると一廉語れる積りで、我から和歌太夫と名乗つて黒人の仲間入をせうと思つた処、一段聴いて皆が吹出し、これや和歌太夫ではなうて馬鹿太夫ちやと冷かされ、住みなれた松山に居る事も出来ず僅の家財を売代なして、世にある時は蒔絵したる見台の上で調子を取つた張扇も、今は骨斗りと瘦せほうけて台湾へ渡り、台中に知己のあるを幸ひ興行にでも出る積りで来た処が、来るや否咽喉炎を煩ひ

肝腎かんじんの商売道具しょうばいどうぐを台たいなしにした上うへ、搗かて、加くえて麻刺里亜まらりやに罹かり、漸やく、台北たいはいへ流れ来て、咽喉のどから血ちを吐はく憂うき艱難かんなん、食たべる餉かれもない始末しまつに病氣びやうきは益々ますますつる許かり。遂つに臙脂支署やんししよの御厄ごやく介かいとなつて行旅病人かうりょびやうじんへ入れて貰もらつた始末しまつ。何なんと馬鹿ばかげて居あるではでは、

ムりませんか  
御当地ごたうちでも随分ずぶん浄じやうるりや清元きよもとが流行りやうかうする様子やうすですが、此私このわたくしをよい手本てほん。余あまり御素人おしろうとが芸事げいごとに凝こりますと下世話げせわに申ます芸げが身みを助たすけるほどの不ふ合せ。それ私のやうに病氣びやうきに罹かつては頓とんと法はふがつかませぬ。入いらぬお世話せわながら我身わがみにつまされ蔭かげながら御案おあんじ申まますと鼻はなつまらせての述懐談じゆつわいだんを行旅病人かうりょびやうじんを見舞みまけに往いつた人ひとから転話まじら

□明治34 (1901-02-19) 『台湾日日新報』

●基隆の素人浄瑠璃会しやうるりくわい 去さる十六日の夜よ基隆福楽座ふくらくざにて雀連すずめれんの素人浄瑠璃会しやうるりくわいの催もよほし。近きん来らい稀まれなる大人おほいりにて何いれも美音びおんを弄ろうし大喝采たいかつさいなりしと

●新起亭の大寄 本日より落語、新内、源氏節、浄るり等の大寄を興行する由にて、其顔触れは落語（小芝楽）、新内（豊鶴）、落語（文字助）、新内（若玉）、素はなし（福三）、新内（飛鶴）、新作落語（権兵衛）、源氏節（若仲）、義太夫（大枝）、即席（光

芝、新内（小若）、人情講談（誠玉）、大切娘連中手踊狂言にて、木戸共二十銭。火鉢、下足、布団■■■■■■■■■■との事なり

□明治34 (1901-02-27) 『台湾日日新報』

●台北座の義太夫 台北の天狗連と基隆の雀連との催にか、る素人義太夫は銭要らずの事とて、毎夜毎夜の大人なるが、一昨夜の如きは西檢の小勇姉妹を初め金龍、はね馬等も客員として舞台に登り、又西檢のおつや、頓子等の飛入もありて、大に人氣を添へたるが、昨夜も又芸妓連中の飛入あり。尚統々なほぞろぞろ（飛入の申込あるとの事なり）

●今晚の新起亭 『忠臣蔵三段目』（小八重）、『地獄道中』（小

芝楽、新内『白石咄新吉原』（豊鶴）、『浮れの稽古屋』（文字助）、『元犬』（喬三）、『弥次喜太赤坂』（若玉）、『船弁慶』（権兵衛）、『御所桜弁慶上使』（大枝）、『即席落語』（小芝楽）、『恋娘歌掛橋』（光芝）、『阿古屋三曲』（小若）、『明治白浪つゞき』（艶玉）、『千両轎大鼓場』（若仲）

□明治34 (1901-03-29) 『台湾日日新報』

●雀連の素人浄瑠璃 一昨夜、基隆福楽座に於て雀連の素人浄瑠璃会しやうるりくわいの催もよほしあり。満場立錐の余地なき大人入りなりしが、

前回に比すれば頗る進歩せしやうに聞受けられたり

□明治34 (1901-10-16) 『台湾日日新報』

●頼子の義太夫 下手な淨るりで近所界隈の味噌を腐らせ、

漬物の味を酔つぱくするはまだしもなれど、夫れが為め亭主を  
逃げ出させるに至つては、淨瑠璃の害も又あなどるべからず

茲に西檢の頼子、拍子といふは口八丁に手八丁、合せて十六、  
島田鬻の頃より遊芸にかけては是れ知らぬといふものなく、殊

に鳴物と舞とは最得意とする処なるが、其代りに至つて声が  
不甘く、横面の三日月形と共に之れを玉に疵だと評しあへりき

然るに此程より朋輩等に勧められ竹本八重吉を師匠として淨  
るりの稽古を初めた処、師匠がた追従に其処のさはりは全で淨

るりに似て居りますから、最う十年も稽古なされたものにな  
りかけませう杯と油をかけるので、頼子はグツと乗地になり、

毎夜お坐敷から貰つて屋形へ帰ると、口三味線で此程あがつた  
『二度目の清書』のお喋へを憶面なしに呻るので、聴される

亭主も大きに弱り、「其妙な声丈は廃して呉れ」と屢歎願に及  
べど、「ナニ貴郎、心配には及びませぬ、お言葉無理とは思は

ねど、妾しの咽喉をも聞いて御覽、葉になる」と一向すまし切  
つて呻りつゞけられ、物堅い亭主は大きに避易し、真平だ真平

だ頭から布団を引つ被れど尚狼の遠吠の如く、又は豚を締め  
るやうにも聞へるので殆ど閉口し、宿世如何なる因果で斯んな  
事を聞かされるのかと顛顛を拳骨で押へ乍ら鬱き込むを見て、

「そんなに妾の三の切が悲しう聞へますか。身に染みて聞いて  
貰ふは有繋に夫婦の情合で有難う存じます。イヤお嬉しう思ひ  
ます」と益呻り立てられる事毎夜なるより、亭主いよいよ持

て余し、「足を伸して安気に寝やうと思ふ我家で斯んなに悩ま  
されては迎も生命が続きさうもない故、寧ろ晩丈は余所に止宿  
る事に仕やうか、それとも断念淨るりを廃めて呉れるか。サア

二ツ一ツの返答せよ」と詰めかけられ、流石の頼子もシヨゲ返  
り、良人の言葉を用ひねば五行の道に戻らぬ道理。さりとして夫れ  
を用ひては淨るりの五行本に戻る訳と、思案投げ首をふところ

に埋めたが、扱其投げ首を横にふるか堅にふるかは未だ決せず  
●淡水館月例会余興(つゞき) 扱其次は常磐津にて出し

ものは『戻り橋』(喜楽)の声も先般とは違ひ最も引き立ち殊  
に台詞の処は音羽屋と高島屋との仮声かとも聞かれたり。

(歳悦)の三味線は師匠丈あつて今更褒めるも野暮なれば略し、  
其跡が道化二〇加にて例の(万朝)と(一朝)なり。先月の  
月例会に『七段目』を出して大うけに受けた血がつき、今度も

『忠臣蔵』の五段目を出して、定九郎の刀に血をつけんとてなるべし。相変らず人氣もの、(万朝)、喝采を博して幕を引かれ、大切としては西檢の双雄ともいふべき(頓子)と(留吉)の『橋弁慶』なり。浄るりは牛若丸が(か代)で弁慶が(染八)とは其声より割出したものなるべし。三味線は(おちか)(八重吉)の弾き分けにて、眼覚しき程なりし。曹子の粉装大児髪に緋緘の鎧。好み通りの短袴には鳥居を描き、笹龍胆を影抜きしたる軍袍から被衣申分なく、殊に顔こしらへ威あつて猛からぬ秀貌。あれなら浄瑠璃姫も皆鶴姫もデレリとなりさうなり。花道出の処合の手を略したのは態と抜いたといふ事だが、折角のものが物足らず思はる。弁慶の出は(染八)が破れ鐘の如き浄るりに一層大きく見へたるが、何をいふも舞台が狭く、大長刀が幕へか、りさうなやら蠟燭を引かけさうなやらで、余程苦心せる様子なりし。「我身ながらもたのもしく手にたつものは」といふ語りは、最う少し滑稽に出ねば弁慶が自負の笑ひを洩す事能はず。立廻りは随分はげしかりしが「片足立」といふ処後見が一寸台を据へる事を後れた為め間が悪るかつた。慾には宙釣りにしたかりし。「此弁慶に大汗か、するは何奴なるぞ」「我は源牛若丸」「シタリ」といふ処、弁慶が笑つては行かず。怒つては行かず。「さてこそナ」といふ思入れが欲し

かりし。弁慶の着附に於ては申分なきも、顔の紅隈が余り多いのと眉毛の垂れ過ぎて居るのは何となく弁慶が弱く見へて不本意なりし。彼れこれいふものの、『橋弁慶』の頓子とまで異名を取つた丈、近來の見物、天晴れ天晴れ

●今晚の新起亭 糸操り人形芝居並に語り物は『千両幟 猪名川内の段』(竹本小八重)、『碁太平記白石噺 新吉原揚屋の段』(竹本若菜)、『奥州安達原 祭文の段』(竹本時松)、『壇の浦兜軍記 阿古屋琴貫の段』(竹本若花)、『東獅子の一曲』(山本三之助)、大切新内『夕霧伊左衛門廓文章』(岡本宮司)

□明治35(1902.01.29)『台湾日日新報』

●十把一束 ▲丸中が無代価の玉代は他の玉代を買はしむる良策にて、玉は当つても当らなくても客には大当たりだ(コシン生)

▲台北の芸妓で容貌のよいのは一力の千代。腕のあるは西檢のか代。酒の強いが東のおむら。踊りの甘いが西の留吉。鳴物なら頓子。客を逃さぬは東のお秀。舞の上手なは日本亭の小勇。慾の深いは西檢のとんぼ。優しいは東の村路、風流なは西の笑蝶。無心の上手は西のすゞめ。むしんの下手なは西のぼんた。口八丁は一力の君勇。手八丁が一力の小政。義太夫の旨いは西

の染八。声のよいのは東のおえん（爰等亭お幸）〔一頃略〕  
▲十字館は紅粉助が座元となつてから樂屋の意気込が違つて非常に人気が出たが、素財藤の頃に出した半額札を今に持つて来る人が多いには閉口して居る（肩入連）

□明治35（1902.05.31）『台湾日日新報』

●女義太夫鶴澤重八 台湾芸界の振はぬは今に初めぬ事なるか、殊にあつても宜さ、うな義太夫の如きは、素人淨瑠璃乃至芸妓の太棹位にて纒かに賑かし居る此頃、本色の太夫の新来と聞いては我人ともに聊か人意を強うするに足るでは無からうか

太夫生国は備後にて幼い時より大阪播重席の主人に養はれ、芸を磨くこと数年なりしが後、文楽座の守太夫、鶴澤重造の門に入り、十六の齡、既に播重席の三四枚目を語り、浪花番附の六枚目までに貼出さるゝに至り、連れ人氣を繊弱き双肩に荷ひて、例も高座に見はるゝ時は流石は売出しの花形、満場破れるばかりの拍手と共に「ヨイシヨ待つてました」の懸声に迎へられ盛えて居りしが、明治三十一年の頃江戸の中央は魚河岸兄いの鼻負に引立てられて、席持ち真打の一枚看板を掲げ、他席の二つ三つまで掛け持ちして自用車を走らせたる盛りの花も、漸く

姥桜の眺となりたる。近年にては芸は愈々進んで真に老巧の境に入りたりしが、太夫の最も得意とする所は『熊谷陣屋』、『天功記十段目』などの中もなりとか、幾十名の弟子中、名を譲りたるものも二十余名もある事、東京、大阪の粹人は疾に御承知ならんか、京阪の鼻負連より贈られたる幕も四十幾張りの多きに達し、美術家内藤翠香氏は自ら刻める精巧の見台を贈られたる位にて、現に此春も例の魚河岸連より切に引留めらるゝ袂を払ひて渡台したる次第なるが、台北は父兄の商業し居る地なれば、席に出づるを羞ちて辞退するも有志の勧めによりて、頃日石防街たるま寿司の二階にて語りたる『壺坂靈験記』の一段の如きは、妙音神に入つて聴く者を泣かしめしも、惜しい事には前歯の磨滅に音声の少し洩れるが玉に瑕なりといふ。太夫は此の後も宴席の余興などの招聘に應ずる筈なりといふ

□明治35（1902.06.08）『台湾日日新報』

●艫舢の義太夫温習会 久しく艫舢の女義太界に牛耳を執りたりしはね馬事、竹本八重松は今度帰国するに付き、門人社中の温習会を昨日午後一時より大溪口街の河原に催せしが、基隆の素人連も助として出演し、中々の盛会なりし由。尚ほ本日も



先づ梵語を述べます前に、少しばかり此浄瑠璃の起源を申上げて置かねばならぬが、然し此事は随分と著書がありまして、既に人口に膾炙して居りますが、まづ普通伝へます所に依れば、昔織田信長の侍女に小野のお通といへる才女が、或る時平家物語の故事を材料として、その初三河の国矢矧の駅に兼高長者と云へる人が児のない所から、之を憂ひて浄瑠璃薬師に祈りて、其御蔭で一女を設けた、ソコで之を浄瑠璃姫と名づけ、其女が後に源の牛若丸と赤縁を結んだと云ふ事柄を、つくりて、之れに節をつけて歌つたので、浄瑠璃節と称へたと云ふ事である。

□明治36 (1903.02.27) 『台湾日日新報』

●浄瑠璃本中の梵語 (二)

尚浄瑠璃の起源に就ては、これと殆んど大同小異の説がある、天明文化の頃柳雅と云ふ人の著書江戸節根本記の上巻に、かういふことが書てある

「信長公の侍女小野のお通は、秀吉公の侍女の女なり、後秀吉公の簾中に仕ふ、參州矢矧浄瑠璃姫が事をつくる、峯の薬師の申すゆゑ浄瑠璃姫と名を附くるなり、十二神をかたどりて十二段とし浄瑠璃物語といふ」

それから、延享の人菊岡沾涼の近世事談の第三巻にも、かういふことがある、

「信長公の侍女小野のお通は秀才の女也、後に秀吉の簾中に仕ふ、參州矢矧浄瑠璃姫が事をつくる、薬師の瑠璃光の緑十二神を象り、十二段とし浄瑠璃物語といふ」

又、文政の人源興清の三絃考の中にも、

「昔々物語に曰く、織田信長公の侍女小野のお通、三河国矢矧浄瑠璃御前のことを、薬師の十二神將に象り十二段の物語に作りしを、丹後七左衛門、橋本筑後に命じて節をつけさせ、城玄勾当、角都勾当、三絃に合せて、之を浄瑠璃曲といふ」

此外に望海毎段にも同様の記事があり、諸説紛々として定まらぬが、まづ小町お通が其浄瑠璃の作者であるといふことになつて居る、ソコで前申しました通り、浄瑠璃曲中に仏語の多く入り居るは謡曲が室町以来、将門の式楽として、武門の事蹟、若しくは菩提の心を演じ、説教は叡山の僧澄憲に濫觴し、仏の縁起を唱へたるものであつて、浄瑠璃曲が自然、此謡曲と説教とに依つて資するところ多きだけ、知らず知らず仏語も這入つて居るし、亦其の浄瑠璃の作が自然に仏教の因果を顯はしてある、此事は私の申す迄もなく、諸君は浄瑠璃本を御覽なをさつて、能く御了解あること、存じます。

淨瑠璃じやうるりに関する起源きげんはこの位くらいで措をきまして、梵語ぼんごを引用いんようしたることを申まを上げませう、さて此淨瑠璃じやうるりと申まをしまする題目だいめいの瑠璃るりの二字にじは、仏教ぶつぎょう經典きんげん中七宝しちほうの一ひとでありまして、其經典きんげんに書かいてある所ところは区々くくくに涉わたつてあります、「吠瑠璃はいるり」「毘瑠璃びるり」「琉璃るり」「毘頭黎びづり」「毘頭黎びづり」と斯様かやうにいろいろ書かいてありますが、此毘頭黎びづりの語ごは何なにから起おこりましたかと云いふと、始め印度いんどの教典けうてんが東漸とうぜんするに及およんで、支那しなの學者がくしゃが此教典このけうてんを翻訳ほんやくするときに、可成なるべく其原音そのげんおんに近ちかい様やうな字句じくを撰えらんだのであつて、此瑠璃るりも梵語ぼんごヴァイヅウルヤとあるのを、之これに當あてめて其原語そのげんごの意い及お音を失うはぬ様やうに、毘頭黎びづりと訳やくしたのである、翻訳ほんやく名義めいぎ集中しゆじゆに、此事このことに關くわんして載のせてあります、

焉やん応おん法師ぽうし云「或加吠字、或加毘字、或言毘頭黎、從山為名、乃遠山宝也、遠山即須弥山也、此宝青色、一切宝比不可壞、亦非煙焰所能溶鑄、唯鬼神有通力者能破壞、即此梵語このぼんごヴァイヅウルヤは、殊ことごとの外勝ほかすぐれたる名玉なたまのことであつて、さてこそ瑠璃るりといふ名稱めいしやうを附つしたものであらう、畢竟ひつぎやう瑠璃るりは、言語げんご學者がくしゃのいふ、記音文字きおんもんじであつて字義じぎは無い、外國語ぐわいごの正音せいおんを写うつすに止とどまつてある、右みぎの様やうな起源きげんであつて、我淨瑠璃わがじやうるりの題目だいめいが此梵語このぼんごより出いでたことが了解りやくされる、唯奇妙たみきめうなことは、此瑠璃このるりといふ語ごが時代じだいを異ことにして且かつ所ところを異ことにして、

我國わがくにに這入はいつて來たことである、即ちそれは、一は昔經典せききんより支那人しなじんを経て這入はいつたこと、一は西班牙人しぱんやじんによつて物品ぶつひんの名として輸入いんぱくせられたのである、而して我國わがくにの固定名詞こていめいしとなつて一は瑠璃るり(水晶すいじやうの類るい) 一はビードロ(硝子がらす)である、ソコデ此この毘頭黎びづりは葡萄牙語ポルトガル語はヴァイローレオ、伊太利語イタリア語はヴァイトロ、西班牙語スペイン語ヴァイドレオ、拉丁ラテン語語ヴァイトリウムと云いふのである、皆みな拉丁語ラテン語の動詞どうし「見る」といふヴァイドレより起おこつてある如ごとく、梵語ぼんごの毘頭黎びづりは、亦「見る」といふ動詞どうしより起おこつたのである。

訂正 前号淨瑠璃句中愛別あいべつは哀別あいべつ、法の倉くらは法の座ざの誤植ごせきに付訂正す

□明治36(1903.02.28)『台湾日日新報』

●淨瑠璃本中の梵語(三)

淨瑠璃じやうるりの中に「ふだらく」と云いふ文字もじがある、此「ふだらく」は即ち梵語ぼんごであります、今此文字いまこのもじを引用いんようしたる一二の例れいをあげると、

「ふだらくや岸打波きしつづなみは、三熊野みくまのの那智なちのおやまの詮議せんぎとは」(『梅川忠兵衛新口村の段』)

「誓ちかひは重おもき観世音くわんぜおん、ふだらくや岸打波きしつづなみの御熊野みくまののなちの御山みやまに響ひびく滝津瀬たきつせ」(『順礼阿波鳴戸』)

此「ふだらく」は、漢字の補陀落、或は補陀落迦であつて、此ふだらくは如何なる意味につかつて居るか云ふに、西域記と云ふ本に依ると、

「梵語宝陀落迦、云孤絶処、觀世音所居元山、在南海中、」

又大槻氏の言海には、左の如く書いてある、

「フダラクは、梵語海島の義、今觀世音の一名、文徳帝、齊衡、日本僧惠譚、唐の浙江明門の海島（今の寧波府の補陀山）を開き、觀世音を祈り、遂に其島客となれるに起る」

此の如く、淨瑠璃中の「ふだらく」の意味は觀世音と云ふことになつて居るが、何れも牽強付合の説である。此補陀落一名補陀落迦は、インダス河口の港名であつて、ボダラ港に關して、印度古代より觀世音に属する神話説あり、而して同港に觀世音を祀つてありしことを傳播して、其事が我國に伝はりて「ふだらく」は終に觀音の枕語となつたのであらうと思ふ。

それから魔と云ふその字が、淨瑠璃の中に沢山使つてある。されば私が例を引くまでもないが、

「傾城といふ摩がさして、人の金を盗むやうで」（梅川忠兵衛

新口村の段）

「二人の中へわけて入、隔の垣と身をなせば邪魔な女と引退る」

（阿漕の浦）

「大金にする大仕事、邪魔ひろくな」（二本桜酢屋の段）

此の〇云ふ字は、後世になつて麻の下に鬼と云ふ字になつたので、大鹿庵鳥屋の古板にかゝる丸本には、摩と云ふ字になつて居る、されば大に理由のあることで、其元が梵語から胚胎して來ている故である、梵語ではマールと云ひ、悪魔と云ふ意味であつて、パイアル中の恰もサタンと云ふのと同じ意味であつて、此語は初は吠陀梵語のマラ、即ち死と云ふ語に起源して、殺す、滅す、害す、妨ぐ、攻むると云ふ様な殘忍刻薄なることを表す動詞となり、それが遂に悪魔と云ふ非人間的名詞に變じて仕舞つた、康熙字典には、魔は音を摩とし其意を鬼としてある、然しながら始よりかやうな字が支那にあつたのではない、仏教の支那に伝はりしとき、印度經典の翻譯をなしたが、前にも申したごとく訳者が幾分か其原音を保持して、且原語の意義を失はない様に苦心した結果、此新字を發明したのであつて、恰も福沢先生の著書の中に、西洋の金貨と云ふ字を寫して弗と用ゐる、英学者が〇を岳に訳したと同一の類である。正字通に依れば、始は磨と云ふ字であつたらしい。

「訳経論曰、魔古从石作磨、確省也、梁武帝改从魔」

淨瑠璃の磨は、即ち心を乱す靈邪神、外道と云ふ意味で、凡て念想の障礙を現はしてある。尚此魔の文字に就て、余程可笑し

く感ぜらるゝことがある、我国俗間に男根のことを「まら」と云ふて居る、これが梵語の「マラ」から転化して来たのであります、何故悪魔のことが我国の男根と云ふ言葉になつたかと申

しますと、ソコにはいろいろ理由のあつたこと、思はれます。成程梵語「マラ」は悪魔、外道、邪神のことであるが、印度の僧侶は此語に邪慾、色情等の意味をもたせて、終には恋愛の神

様としたのである、ソコで印度の僧侶が猥褻淫靡なる言葉を弄するは、大に慎しむべきところであるから、此「マラ」をか

の男女の交合、若しくは淫情、情慾等を顕はす所の隠語としたのである。畢竟僧侶間の暗語であつたのが、日本に伝来して男根

を「マラ」と云つたのである、或は「マラ」の梵字が男根の形に能く似てゐるから、印度の僧侶がさうしたのであるとも伝へて居る、何れとしても言語の起源を研究してみると、実に此の如く意外なる転換を見ることがあります。

### □明治36 (1903-03-04) 『台湾日日新報』

#### ●浄瑠璃本中の梵語 (四)

それから菩薩と云ふ文字が浄瑠璃の中にある「廓の中は万灯歌舞の菩薩の色揃ひ」(『白石嘶新吉原』)

「六道の地藏菩薩に取廻り」(『彦山権現六助住家の段』)

「普門品陀誦誦の声は自ら即身菩薩の变化なり」(『出世景清』)

此「ばさつ」または「ばさち」と云ふ語は梵語の臭味があるが純粹の梵語ではないのです。原語菩提薩(ボデイサトワ)と申しまして、其意味は覺有情大門衆生、即ち大心ありて正に

仏道に入るの形、言葉を換へて申しますと、仏の次位に立つ尊号であつて、それで浄瑠璃中には此語を美人のシノニムに用ゐて居るのでございます。恰ど外面如菩薩、内心女夜叉等と謂

つたやうなもので、何も觀世音菩薩の画像から出て居るのでござい

ます。次に旦那といふ文字がございます。即ち「跡先思はず旦那寺へ駈けこうで」(『碁太平記白石嘶新吉原の段』)

「若旦那、勝五郎様ではごはりませぬか」(『覽り錢別の段』)

「これ申し尾上様、旦那様と呼べど答も涙より」(『加賀見山』)

「旦那様めつそうな」(『伊賀越道中双六六ツ目』)

とありますが、この旦那の用法は

一、宗教上 所謂神靈上の恩恵を授ける場所、換言すれば我が帰依する寺

一、単に主人

一、下級の者が上級の者を呼ぶ称号、即ち尊公の義

などでありますが、今はこの神聖な梵語も、愈々墮落してつづて「旦つく」「だん的」「馬鹿旦那」などと謂ふ世の中になりました。

旦那はまた檀那とも書きます。祖庭事苑に

「旦那此云施者」

とありますが、釈氏要覽には

「施者——梵語陀那鉢底今称檀那者即訛陀為檀去鉢底留那故也」とありまして、畢竟旦那は原語ダナパテーの略で、ダーは与ふるの義でございます。

また歐洲の語の中で、ダーといふ語が与ふるといふ意義を示して居るのが多うございますが Donation などはその一例でございます、又拉丁語の Dāre は to give から来て居り、パチーは至と訳すべきでございます。

要するに本来施主といふ旦那の語は、現今に於ては単に普通の尊称となりて了ひました。

それから娑婆といふ語がございます。

「うるさの娑婆に残らんより孫と一所に死出の三途」(『大功記 尼ヶ崎の段』)

「娑婆の名残につこりと笑うて息は絶にけり」(『八陣守護城 朝清本城』)

娑のジヤは素訶と発音します。自誓三昧経には

沙訶謨に言ふ忍或堪忍

といひ仏教経典には

娑婆は三千大千国土の総称、即ち現世蓋忍土、即ち衆生の三毒諸煩惱を忍受するの地とあります。

サは根語 Sa v Savā 即ち圧絞で奈落に對するの句、即ち獄中にあるもの、通語でございます

浄瑠璃中の梵語はまだまだ尽きませんが、他日また諸君に拝顔の榮を得た時、更めて清聴を汚し、高教を仰ぐことに致しませう。(完)

●素人浄瑠璃 大会 今四日及び明五日の二日間 北門街北門亭に於て竹本八重松が発起となり、素人浄瑠璃温習会を催す由にて傍聴無料。随意飛入を許す趣きなるが、本日の芸題は左の如く。午後正六時より開会するといふ

『御祝儀』、『八陣本城』(小八重)、『合邦住家』(宮本)、『忠臣蔵三段目』(鶴子)、『毛谷村六助住家』(白鳳)、『明烏山名屋』(繁六)、『梅忠二の口村』(花笑)、『時雨炬燵紙治内』(助六)、『鏡見山又助住家』(可蝶)、『三十三間堂柳』(瓢)、『太閤記十』(梅枝)、『弁慶上使』(德勢)、『惣五郎子別れ』(都雀)、『安達原三』

(喜楽)、『本蔵下屋敷』(十三)、三味線(八重松、大吉、常子)

□明治36(1903-04-24)『台湾日日新報』

●南龍の夫定め 抑女義太夫といへば、先肝腎の淨るりよりも舞台面のよいのが大当りで、寧ろ聴客といはんより看客といふ方が多い奴だが、爰に先達まで北門街の北門亭に居て見台で頻りに足掻、いつも中処から髪ふりさばく竹本南龍といふがあら。一寸目を惹くに足る美的とて随つて経師屋連中も多かつき纏ひ、サア何程だらう。十両じやアウンといふめへぜ、二十両ともいふだらうか、サアどの位だ、何両だ何両だといふ処より、南龍の名も鳴り響きしが何か都合がありて、先々月より基隆へ行き同地の福祿座で興行中。爰に同地雀連の新参者にピカ一と綽名する息子あり。淨るり芸題に譬ふれば、さしあたり『御所桜』『千本桜』、蝶花形の優男と南龍おぞくも恋風に誘はれ身に染み染みと、其人の面影が忘れず、『菅原伝授』のいろはにあらぬ、恋のいろはを覚へそめ、『お駒才三』の心の駒も三味線の駒語共に狂ひ出しては女の一念『矢口の渡し』ある夜ひそかにピカ一の袂を、そつと『布引の滝』なす涙をふりはらひ、四十八手の手管は知らねど、『八陣』は語つて知る『朝顔日記』の朝貌の露の情を汲み玉へと、からみついたる

『桂川』、ぬしと『妹背山』になるならば『千代萩』の御殿場の腹が減つてもひもじうない、『兜軍記』の琴責も水責火責も思かな事、『石川五右衛門』が釜責でも厭ひはせぬ、妾が命

『玉藻の前』、御所望ならば進ぜますと『彦山権現』、『壺阪寺』、金毘羅へ願かけてこの『御利生記』が届かねば、妾は緑りの髪を切り『尼が崎』となりますと名題尽しで口説き立られたので、ピカ一も自惚鼻を『鏡山』に掛け、それほど私を慕ふなら、この世は愚か『二代鏡』、『鎌倉三代記』と生を替えても『妹背の門松』『野崎村』、もしこの言葉に偽りあらば『四段目の判官切腹』、併し浮世は『盛衰記逆櫓』にたちし其時は『梅忠の二の口村』、『お俊伝兵衛の堀川』と共に命を捨撥と堅い約束してからといふものは、南龍一抱えもある腰越状が舞台に斗りは据らずして、狂ひまはればピカ一も其通り此兩人のありさまは宛然『二ツ蝶々』の如くなり

□明治36(1903-07-14)『台湾日日新報』 欄外記事

●土橋商店の淨瑠璃會 一昨日午後一時より北門街土橋商店にて煙草「花月」売弘め祝の為め淨瑠璃

□明治36(1903-10-16)『台湾日日新報』 欄外記事

●素人淨瑠璃會 今明兩夜、北門街北門亭に於て素人淨瑠璃會を催す由にて其番組は左の如しと

十六日 『玉入船』(福米)、『彦山丸』(松光)、『賢女鑑』(小柳)、『一の谷陣屋』(都一)、『大功記十段目』(美笑)、『おちよ半兵衛』

(都)、『安達原三段目奥切』(梅枝)、『忠臣蔵本蔵下屋敷』(都雀)、中入後、『累物語土橋』(南木)、『天網』

□明治36 (1903-10-20) 『台湾日日新報』

●台北の義太夫界(上)

今春以來、メツキリ勃興し出した台北の義太夫界、厳めしい玄關先の卓仔に、鬼髯の壮士が肩脇張つて奏者然と叩えて居る奥の間には、嬌治かしいサワリ文句の黄色い声がするかと思へば、または仮名に何号と銘打つた長家の内、丸鬚の妻君を相方に何うも貴様の二は何時もチツト高過ぎるので語り難い杯と妻君の課業以外の課業に御託を吐いて鼻を高めらるゝ、何級俵殿もありと云ふ現況にて、一時は今日(けふ)は都連(みやこづれ)明日は倶楽間連、イヤ何連、彼連と毎日のやうにお弁当、菓子附の義太夫会引も切らざりしが、夫れもホンの一時で演劇熱に圧倒されたか、但しは炎暑に我から辟易したのか、暫時打絶えまし

た所、此の頃(ころ)もやポツポツ素天の会がある様子(ようす)に、偶と思ひ附いたは台北の義太夫界、何んな化物(ばつもの)の集合(しゆがふ)か、天狗(てんぐ)の性体(じやうたい)洗上げて見るも、夜長(よなが)の一興(ひとき)ならずやと云つた一言(ひとこと)に賛成(さんせい)者が出来、引にひかれぬ場合(ばあひ)となつたので罪深い業(わざ)とは知りつゝも、天狗殿(てんぐどの)の仮面慮(かめんりょ)外(ほか)ながら引剥いて御覧(ごらん)に入れん先づ素天(しろてん)の方(ほう)から撮み出(だ)さんに、誰(たれ)が附けたか四天王(てんわう)と云ふのが此(この)天狗界(てんぐかい)の大王(だいわう)とやら、其(その)随一(ずいいつ)の十三太夫(じゅうさんたふ)は世界(せかい)に羽(は)を延(の)ぶ日本亭(にっぽんてい)の御亭主(ごていしゆ)、足利藤兵衛殿(あしかがとうべゐどの)は細(こま)かけれど、小さいのが残念(ざんねん)。次(つぎ)に扣(ひか)えたは大工(だいこう)の黒田公節(くろだこうせつ)も調子(てうし)も相(あ)いに相生太夫(あひまがたいふ)様々(さまざま)なれど御自分(ごじぶん)単独(たんどく)で語る癖(くせ)ありと云ふ。又(また)柳枝太夫(やなぎえたいふ)と云ふ芝居(しばい)の出語(でがた)りにても、御存知(ごぞんじ)の筈(はず)。台北(たいへい)座主(ざしゆ)笠松(かさまつ)の弟御(おとうと)、恐(おそ)しい美声(びせい)なれど其美声(そのびせい)に任(まか)せて節(ふし)に無(な)い節(ふし)を語(かた)らるゝ由(よし)。寿楽(じゆらく)と云ふは道楽屋(だうらくや)の斎藤(さいとう)別当(べつたう)生国(せいこく)は武蔵(むさし)の長井(ながい)ぢや無(な)い。だゝあがまあの奥州(おくしゅう)育(そだ)ちの癖(くせ)脱(だつ)けず。鉄(てつ)〔詠(よ)る事(こと)を云(い)ふ〕も鉄(てつ)も大鉄殿(だいてつどの)と承(うけたま)はる、此(この)四天王(しやうてんわう)に都連(みやこづれ)の都雀(みやづね)を加(く)へて五天王(ごてんわう)と云ふ新熟語(しんじゆくご)は何時(なんじ)かの民報紙(みんぱうし)上(う)で目(め)目に掛(か)つたが、四(よ)天(てん)か五(ご)天(てん)か知(し)らないが、時々(ときどき)調子(てうし)が外(ほか)れて六(む)天(てん)位(い)になる太夫(たふ)様(さま)。都雀(みやづね)とは仮(か)りの名実(なじつ)は民報社(みんぱうしや)の大番頭(おほばんてう)、田中(たなか)重助(ぢゆうすけ)君(きみ)と申(まを)奉(ほう)つて都連(みやこづれ)の首領(しゆりやう)、其幕下(そのまくか)にはお粥噺(かひすり)の名(な)人(ひと)都太夫(みやこたふ)、実(じつ)は広告掛(かきつけ)り宮本君(みやもときみ)、都柳(みやなぎ)と云(い)ふも同じ(おな)く広告掛(かきつけ)の村田(むらた)先生(せんせい)、其他(その他)都(みやこ)一(いつ)と云(い)ふも同社(どうしや)の藤林某(ふじばやし)と云(い)ふも同じ(おな)く民報山(みんぱうさん)の天狗(てんぐ)なりとかや。

総じて此都連と云ふは、師匠竹本八重松の連中にて柳枝十三、相生などの強将を生擒にして居た大吉師匠が、親子三人連れで道行を实地に演じた後は、此若松連は四裂八裂、柳枝は庄吉に相生は鐘龍に師匠変をして、後は十三太夫、此都連に加はり、一段連中の調子が高まり、其上へ粥藪りにかけては随一の名人松鶴太夫、西門外街の質屋鈴木君杯もパリパリの連中とやら

官吏側では鉄道部の馬渡殿、少少鉄気はあれど、お箱の柳が旨いとかで、如柳と名乗り、松香太夫と申すも同部の楽馬君。まだまだある筈なれど官紀何とかで宿舎と風呂屋の外は語らぬと極めて居らる、連中が多いさうで、承はつた事なければ詮方なし

商人側から行けば、株商の冬木太夫、御当人は京都人丈けに、大の鞍馬流なれど、マア義太夫が何か聴衆には判らず。併し今京都で御勉強の最中なれば何う変化したか判らず、此家の番頭、穴内一声太夫も先づ旦那の番頭位か。西門外街提灯屋の吉川梅枝様は、顔相応に語りが永いと申します

明治36 (1903-10-21) 『台湾日日新報』

●台北の義太夫界 (中)

提灯屋の八光様は新起街児島検のお隣家丈けあつて、万事が清元流で誤魔化され、西門外の三味線屋、花笑は人気沢山と云ふと好けれど、御当人何時も笑ふ癖のかず、同街踏切の金庫屋、南木太夫天晴お山の大将気取なれど、他からは左程に思ふものなし。暇遊は其昔台北検の流行妓弥次拍子、本名おこと殿の御亭主深見君にて、震ひ声の白鳳は西門街近江屋の弟殿なり。其お隣りの印判屋は栄旭とか申すよし。大倉組の藤岡不二太夫は稽古丈けは確かに古いが、上手か下手かは沙汰の限りに非らず。都公は八重松の御亭、平幸は山幸と云ふ西門の雑貨屋で、三日月は堂号を其ま、用ひた芭蕉館の本舗、可笑と寿玉は古道具屋で、白牡丹土橋の松坂君は都山太夫の御事に、寿山は専売局の守衛先生、錦石と云ふはお菜売、美笑は馬床の職工、一鳳は船大工、栄と云ふのは御用商人の北川どん、十四太夫は日本亭の帳場で、先づ御主人十三太夫のお弟子分ながら、曲節なしで文句を喰ふのが好き。十一は同亭の板場にて、寿の寿太夫、高等待合ほていの主人。春香太夫は大長で有名ななり。徳永商店の塚本小柳太夫は柳枝の弟子にて叩きで稽古をした丈けあつて三味線無しで語るが上手とかや

偕此次ぎは鞍馬一流天狗揃ひの弁護先生、先づ第一に鼻と共に甲声の高い一重太夫。器用な艶物語の本地を尋ね奉れば、

新民学堂の校長、弁護士中村啓次郎君を推さざるべからずと云へば、イヤイヤ一重大夫よりも正七位古亭大夫の方が稽古が古くて一枚上だと横槍が出たれど、夫んな事は何方でも好し。ソモ此古亭大夫は藪之内の弁護士、服部甲子造君にて五年か、つて五段習つたと云ふ強者。夫れに引かへて大川弁護士の『太閤記十段目』を二度習つて鯛二と名乗るのは滑稽で面白い。二葉大夫とは是れも弁護、花田正何位殿、淨瑠璃と云ふよりも謡と云ふ方が近いとは、定めて誰かの悪口なるべし。鬼笑とは高原繁造君、春山は大田重助先生の仮りの名にて、松鳳は多分伊藤欣蔵君の事であらう。寺松勇次郎君が一三三と云ふ名も、何か鯛二流の古事来歴がありさうなり。又鹿重と云ふ皮肉屋殿は一重大夫の手の剛の者と承はりぬ。いでやさらば是れより女天狗の方に風向きを変へんか

明治36 (1903.10.22) 『台湾日日新報』

●台北の義大夫界(下)

妻君連中では回漕屋、土勝のが秀八。之れを筆頭として次ぎは花田二葉大夫の細君花蝶、高室と云ふは高原繁蔵君の内室と云ふ所から附けた名なるべし。続いては崎陽商会米枡大夫の御内室崎広嬢、此亭主の米枡丈も中々の天狗なりとかや。

道具屋松鶴大夫の内室も亭主の好きな赤烏帽子とかで唸らる、由、権の守では古亭大夫が御寵愛の古ひささま、昔の名はだるまと申しける元西檢のおかよ、今では永井君の思ひ者軽蔑るべき口つきならずとかや。さて又女将連中を窺へば、第一は児島檢の女将おちか大夫、台湾一と大天狗の鼻を高々と延ばす足下から、待つた待つたと松之江の女将が小六の手を引き、一昨晩淡水館の腕並御覽うじたかと駆け登る後から、幾久の女将、昔の名は助六、後に引添ふは西洋料理店たるまの女将、実は繁六も我劣らじと鼻高々

斯かる所へお噂はん達待ちなはれ、瘦ても枯れても呂大夫の娘政吉、是にありと現はれ出れば、妾かて萬更義大夫に縁のない者でおまへぬと、京言葉で園香が飛出すと、住栄、留吉の兩人、余り馬鹿にしんさるなど名古屋言葉で其上手へムツと座り込むとお茶良、奴、お染の面々居并んだが、まだ義大夫と唄との区別のつかぬ連中もあるなるべし。高砂檢では村八と滝尾位にて、日本亭では小勇を旗頭にして小福、小吉、小仙等もチツト宛は唸る由なり。艦舦の方は縁が遠くて少しも判らねば省いて置く。併し富士見楼の鶴子は大抵な大天狗にも負けまじい口つき。姉の松子も少しは語るとの事。花屋の娘の鹿の子、西門街床屋の叶も物になるべし

芸妓が出た序に俳優を引張り出さうなれば、台北座の三司は物忘れする名人、八百七、鶴三郎も少し唸れば、栄座の方では五郎が第一との事。ツヒ此程の『二十四孝』のチヨボでお手並拝見、イヤ拝聴致したり。駒之丞、扇平、岡之助、百々蔵、梅二、眼之助等で、家幸の子の小金は魁とか云ふ名で頻りと寺子屋の稽古に余念なし

さてお黒人の方は如何と云ふに、之れは鼻眞鼻眞で順序も評も一切抜きとして、女では八重吉に八重松、鐘龍とは森梅の細君にて、鍛冶屋の細君常子は野澤連のお師匠株、米八の駒八、六助の玉六など、今では少し素人仲間へ足を入れ掛けて居るが、八重松の義弟子の小八重は未来のお師匠になる熱心、恐しく東京新下りと銘打った政重は面の方が別品なりとの評あり。男では台北座の時太夫を推せど、矢張チヨボ語りにて、栄座のあつまたいふよはらよはら連中、野澤庄吉は何処までも三味線弾と云ふ側なるべし。先づ是れでお了ひ。チヨンチヨン

□明治36 (1903.11.03) 『台湾日日新報』

●黄菊白菊 台北の楽園培ひよきにか、技芸の花もくさくさ麗はしく咲きほこれるを、そが中より一枝つ、手折りて、けふの祝ひの余興とはなしぬ。されど枝葉繁き為め鉢みあやまれるも

多かるめり。又外に採り残せしも数あれど、元は再び摘む日あるべし。只文学にか、つらへる向はわざと省きて載せず

〔以下、技芸と人名のみすべて摘記し、浄瑠璃関係のみ全文筆写〕

- 弓術 西野福吉
- 写真 岡田義行
- 西川派の舞 台北検 留吉
- 宝生流謡曲 岩田以貞
- 藤八拳 笠井小六
- 薩摩琵琶 田原嘉吉
- 鳳轉流生花 大谷平吉
- 笛 吾妻ちか
- 馬術 佐々木平助
- 新内 岡本龜鶴
- 能 坂東竹三郎
- 女義太夫 竹本八重吉
- 笑ひを買ふ木の下花、已に老い眉を描く窓前月、猶残れり。四十の上を五ツ六ツ、喰出したる年輩義太夫には脂肪の乗った処、其西京にありて既に一と呼ばれし八重吉、遂に未だ台北に比肩するものを見ず
- 松尾流茶道 松尾宗幽

- 俳優女形 坂東吾妻
- 自転車 若松金之助
- 長唄 芳村孝十郎
- 尺八 久芳古山
- クリツケツト 児玉総督
- 講談 玉田誠玉
- 井上流の舞 日本亭 小勇
- 池の坊生花 中村八重
- 料理 吉田寅之助
- 鼓 高砂検 とんぼ
- 撃剣 西尾可行
- 生田流琴曲 白井てる
- 囲碁 中村栄藏
- テニス 高橋辰次郎
- 清元 高砂検 繁之助
- 洋楽 村上宗海
- 落語 台北検 権平
- 玉突 鈴木芳造
- 地唄 台北検 きく
- 盆景 高桑好石軒

- 素人義太夫 足利利兵衛
- 義太夫界の素人連中 大天狗、中天狗、小天狗、数ある中に斬然一頭地を抜くものを十三太夫と云ふ。初めは若松連の重鎮たりしが、今は竹本八重松の門に在りて僧正坊と号す十三太夫、実は大稻埕日本亭の主人
- 将碁 加藤覚三郎
- 煎茶 数見鉄太郎
- 魚網 石本鑽太郎
- 山村流の舞 台北検 政吉
- 表千家茶道 田沢熊古
- 洋食仏蘭西式 岡本己之吉
- 太鼓 台北検 頼子
- 真道流生花 佐藤関左
- 俳優立役 市川滝之助
- 猿銃 蛭田萬次郎
- 狂言 竹内虎雄
- 魚釣 高萩春吉
- 観世流謡曲 高雄晋
- ベースボール 平岡寅之助
- 常磐津 常磐津歳悦

●久田流茶道 小川佐助

●手品 三好重次郎

●洋食米国式 谷口喜助

●二絃琴 藤廼舎蘆令

●遠信流生花 浜田千里

●喜多流謡曲 桂六兵衛

●火花 中坊荒太郎

□明治36 (1903-11-15) 『台湾日日新報』

●タレ義太の凹タレ 聞きに来るより見に来る人の多いは女義太夫の常にて、是を高座から見下るせば眼尻と云はず涎と云はず、壁に貼つてあるピラまでが蕨熨斗の二本棒を垂らし居る故、女義太夫の事をタレ義太といふにや。其詮穿はあと廻しとして新起横街二丁目に竹本南龍といふがあり、朝から稽古にヤアデッサヤアデッサの声を四隣に響かせ、五行本に打対つて弟子の南吉(一八)といふを仕込み居るが、此南吉といふは福岡県三井郡国分村西久留米千四百四十番戸石井太作(六九)の娘つる(四一)の、其又娘にて本名を石井くま野といひ、幼少より南龍の弟子となり、此処彼所を興行にあるき、母と祖父との三人口を自分の口一ツから出る声にて養ひ居たる処、

昨年さくねんの十月頃ごとしやう師匠しせんの南龍なんりゆうが勧めすすめにより台湾たいわんといふ国くには木きに餅もちが生なつて居みる。それで頬ほベタを叩たたくやうなよい処ところと聞きてはお伴おばんれなすつてくださいと木餅ももちよく承しょう諾だくし、其代そのはりに月つき々の仕し送しやうり、何分御面倒なにぶんごめんたうを見てくだされと渡台たいたいさせたる次第しだいなるが、根ねが襟持えりもちちの南龍なんりゆう、それを見習みならひし南吉なんきちは百行もくごうの基もとといふ孝行かうかうの心こころはなく、五行本ごきやうほんに対むかふかたはら親不孝おやふかうの声こゑを出だして頻しきりに男をとこにもたれ掛かりしなれ込かみ、誰たれ々といふ差別さべつなく巫山ふざん戯あそぶは、所謂いはゆるタレ義太たれぎたの本分ほんぶんを尽つくすものなれども、内地ないちに残のこりし母ははと祖父そふはそれが為ために送金せんぎんをせぬので、耐たつたものにあらず。搗かで、加かへて本年八月頃ねんがつごころより祖父そふの大作たさくは老病らうびやうにかゝり、母ははのおつるも眼病かんでらうの疲つかれに是も又臥戸ふしを並ならべて呻吟びやんする身みとなりしより、度々たびたび書面しよめんを出だして送金方せんぎんかたをいひ越こせば、病氣びやまの為ためにお唸うなりなさるはソリヤ当然あたふた。妾わたしかとして高座かうざの上うへで唸うなつて世渡りよわたして居みますと膠べなき返事へんじをやつたので、二人ふたりの病人びやうにんは大おほに哭なげき、此上このよへは警察けいさつの御苦勞ごくろうを仰あげても娘むすめを帰国きこくさせねばならぬと、此由このよしを旧街派出所きうがいせつしよへ願ねがひ越こしたるより、昨日きのう南龍なんりゆうと南吉なんきちを召喚せうくわんして懇篤こんとく説諭せつゆを加くへられ、兩人ふたりとも大凹おほこたれて愁嘆場しゅうたんばを演えんじ、受書うけしよを出だして帰宅きたくせりとぞ

□明治36 (1903-11-21) 『台湾日日新報』

●台北座の素人浄瑠璃 本日より三日間、台北座演劇の休業を期として天狗連の相生、柳枝、寿楽が発起となり素人浄瑠璃会を催す由にて、毎日午後四時開演、木戸場代無料にて、其乱表は左の如し

▲廿一日 『岸姫の三』(中村駒之丞)、『日吉の三』(十三)、『忠臣蔵四』(寿楽)、『鈴が森』(柳枝)、『吃又平』(澤村源之助)、『糸風雷二郎』、『白石噺』(片岡扇平)、『嘉平次住家』(国松)、『勘作住家』(嵐三司)、『鏡山長局』(実川八百七)、『百度平住家』(相生)、『忠臣蔵』惣掛合

▲廿二日 『鏡山又助』(十四)、『合邦』(十三)、『近江源氏』(寿楽)、『弁慶上使』(柳枝)、『鰻谷』(国松)、『先代萩御殿』(小柳)、『膝栗毛赤阪』(八百七)、『柳』(相生)、『蝶花形八ッ目』(阪東五郎)、『お布引の四』惣掛合

▲廿三日 『佐倉曙義作内』(十四)、『志度寺』(十三)、『忠臣蔵山科』(都雀)、『妹背山芝六』(寿楽)、『明烏揚屋』(柳枝)、『毛谷村六助』(国松)、『賢女鑑片岡』(小柳)、『松王下屋敷』(相生)、『阿漕』(五郎)、『大切』(本蔵下屋敷)、『惣掛合』(糸(鐘籠) (八重松) (重八))

□明治36 (1903-11-25) 『台湾日日新報』

●読者文芸

秋季浄瑠璃文句読込 榴亭  
秋立つや夕顔棚のこなたより  
茸狩や皆親々に誘はれ  
沙魚釣や腹がへつても飢じうない  
三十になるやならず唐がらし

□明治36 (1903-11-26) 『台湾日日新報』

●十把一束

▲大阪で一時女越路の名を博した竹本重八は今何うして居るんだ。願くば本島タレ界の為に蹶起せよ(堂摺生)

●読者文芸

秋季(浄瑠璃文句読込) 榴亭  
逢坂の関路をあとに渡る雁  
雁鳴くや一夜明石の風待に  
小倅もお役にたつて鳴子曳  
新米や難波の浦を船出して  
椎拾ひ御台若君もろともに

□明治36 (1903-12-01) 『台湾日日新報』

●北門亭の大寄と新伯知 本日より北門街の北門亭にては桂文字助、馬尻、喜位人、源平の落語、小八重の義太夫、吉川正一の西洋奇術、及び誠玉の講談、田中芳之の劍舞、及び二輪加を興行する由。又過日來同亭にて好評を博せし東京新講談土松林新伯知の講談は、二十九日を以て三日の日延も終へたるが、本日よりは基隆の有志に招聘せられ、同地福楽座に於て『北清戦史 北京籠城談』、『川上正劇オセロ』、『絲之錦世処難』、及び『桜田門外血染之雪』を向ふ三日間講演する由。

□明治36 (1903-12-02) 『台湾日日新報』

●浄瑠璃狂 二三日前の事 西門外街なる竹本八重松方格子先で漬物の御用はよろしうと呼ぶ声の聞えしも折から稽古中の事として、八重松は要りませんと答へたる儘、頻りに稽古をして居たる処稍あつて、格子戸をガラリと明け入来るものあり。へー私は只今の漬物屋で△います、什麼にも此義太三味線の音色を聞きましたは、足が先へ進みませぬから荷を半町余前に置いて戻つて来ました。一段お稽古を聞かせて頂く訳にはまゐりますまいかと、絶る如くに頼むより八重松も偏な男だナとは思ひ乍ら商売柄として膠なく云はず。マアお上りなさ

いと云はれて件の漬物屋は大に喜び草鞋を解いて上り込み折しも稽古して居る白牡丹太夫の浄るりを頻りと感に入りつてほめそやし居たる間、纏て一段了りしかば、漬物売はにじり出で、実の処私は野澤常子といふお師匠さんへ、こゝ二十日程前から入門致しましたが、今聴かして頂いて居ると、どうも貴女の方がお上手なやうに思はれますが、一体全体本当の処はどちらがお上手で△りますか。へいへい成程、それは貴女が御辞退で訳らんと仰しやりますが、どうもお上手なやうに思はれます。何は兎まれ此私にも一段語らせて載きたう△りますと、最早見台の前へ据り込み、懐中から取出したる『大功記十段目尼ヶ崎』を枕から呻り出したので、八重松も詮方なく弾いてやると、漬物はよろしうの声其儘で手古変挺な節廻しに、八重松を初め稽古に乘合して居たもの迄噴飯さんにも噴出されず、擦られるより苦しさに袖を脚、舌を噛み股を抓つて耐ゆるる漬物屋は一向平気漸く一段を語り仕舞ふ内、はや日は暮れか、りしかば、八重松は漬物の荷を氣遣ひ若し盗まれてもしてはなぬからと注意すれど、ナニぞ浄瑠璃の為に盗まれるなら、漬物荷の二荷や二荷、厭ふ事では△りませんが、最前も申た如く、貴女と常子さんとは全くどちらがお上手で△りますと、夫れ承るまではこゝにお邪魔を致しますと、ドツカと座つて動かぬにぞ、

八重松も困じ果て遂に要らぬ漬物を買つて、漸くに帰らしめた  
りといふ。そこで一口啣を一ツ浮んだからお披露しやう「此  
漬物屋は余ツ程淨り天狗と見えるが、實際自分に上手だと思  
うて居るでせうか「イ（一字闕）自分には決して上手だと思つ  
て居ないさ」それはなぜ「デモ漬物の荷を半町も先へやつて置  
いたぢやないか……」

明治36 (1903-12-03) 『台湾日日新報』

●梨園雜組（中略）▲百々蔵が義太夫の名は八百桜と云ふの  
ぢやが随分奇体な名ぢや。又岡之助は三雀と云ふて師匠の名を  
其儘用ゐて居る。まだ夫れ斗りぢやない。此頃から初め出した  
女形の多見松は梅幸と名乗つて菊五郎の二代を極め込んで居る

明治37 (1904-01-16) 『台湾日日新報』

●若松連の淨瑠璃會 曩頃渡台したる野澤三次郎 初目得して、  
若松連にては今朝二日間北門亭に於て素人淨瑠璃會を催す由  
にて、木戸銭は一切無料との事なるが、其語り物は左の如し

『賢女鑑』（小柳）、『玉三』（花笑）、『先代御殿』（不二）、『鈴ヶ

森』（一声）、『柳』（栄）、『阿波鳴戸』（南木）、『三勝酒屋』（十三）、

『太十』（松鶴）、『本蔵下屋敷』（相生）、『忠四』（寿楽）、以上

十六日 ▲『玉三』（叶）、『新口村』（花笑）、『勘作内』（松鶴）、『弁  
慶上使』（不二）、『又助内』（十四）、『合邦』（十三）、『十種香  
（小福）、『松王下屋敷』（相生）、『吉原揚屋』（柳枝）、以上十七  
日、三味線（三次郎）

明治37 (1904-02-10) 『台湾日日新報』 欄外記事

●北門亭の義太夫會 昨今兩日北門亭に於ける素人義太夫、  
本日の物語は左の如し（版面切のため不可読）

『三勝酒屋』（重八）、糸（三次郎） 其他

明治37 (1904-03-16) 『台湾日日新報』

●恤兵献金の淨瑠璃會 来る十九日午後一時より同十一時まで  
淡水水館樓上に於て、恤兵献金の目的にて当地の女義太夫、  
たけもとやへきち、浄瑠璃大会を催す由にて献金の方法  
は、凡て其語るものが分担献金し來聴者は、一切無料との事な  
れば、是までの慈善興行とは大に趣を異にするものありといふ  
べし

明治37 (1904-06-05) 『台湾日日新報』

●素人淨瑠璃會 来る六、七日の二日間、台北座に於ける

おひまろれん 浄瑠璃大会は下足料三銭、木戸場代無料にて、午後六時開会の筈なるが、語り物は左の如し

『鈴が森』（柳香）、『弁慶上使』（米八）、『先代御殿』（栄）、『尼ヶ崎』（小柳）、『柳』（春香）、『玉三』（一二三）、『野崎』、『紙治

茶屋場』（柳枝）、『岸姫の三』、『堀川』（相生）、『日吉の三』、『本藏下屋敷』（十三）、『重の井子別れ』、『揚巻助六太文字屋』（重八）

□明治37（1904.06.25）『台湾日日新報』

●十把一束 ▲市川男升の由良の助を見ましたが、蓋し従来台北に於ける由良の助中の上乗なるものでせう（贛州）▲新聞が何程 紳士の賭博など、喧ましく云はうと、警察が小兒騙しのやうな虚嚇を幾許やらうと、實際我々を捕縛することは得為ないから少しも惧くないと云つて居る賭博紳士があります（光一法師）▲賭博と義太夫に熱心なる一紳士は近頃新占領地へ渡航し、淫売屋を開かんとの計画がある由なれば御注進申す。詳細は篤と御探索ありたし（無髯便士）

●都連浄瑠璃会 本日午後六時より北門亭に於て都連の浄瑠璃会を催すよしにて、木戸下足は勿論無料にて語物は「八陣」（小八重）、「三代記八」（都喜和）、「二度目清書」（都松）、

『日吉丸三』（都鳥）、「太功記十」（二司）、「千代萩御殿」（都水）、「柳」（松鶴）、「梅よし」（鶴子）、「三日太平記」（不二）、「明鴉」（梅枝）、「布引四」（相生）、三味線（竹本八重松）等

□明治37（1904.07.14）『台湾日日新報』

●台北座浄瑠璃大会 昨十三日より明十五日まで三日間、台北基隆聯合素人浄瑠璃大会を台北座にて催す由にて、為に錦升一座の演劇は右三日間休業する筈なりと

□明治37（1904.08.20）『台湾日日新報』

●追善浄瑠璃会 本日正午十二時より北門街武藏屋に於て竹本八重吉が亡父母の遠忌追善の為、鞍馬連総取持にて浄るり会を催す由にて、其番組は左の如しといふ

『式三番』（八重吉）、「千両織」（とよ）、「二度目」（叶）、「天網島」（松の江奴）、「尼ヶ崎」（台北検おちやら）、「三莊太夫」（同園香）、「一の谷陣屋」（花蝶）、「松下住家」（台北検住栄）、「鏡山又助」（秀八）、「堀川」（梅八）、「伊賀八」（呂三）、「日吉丸三」（寄石）、「柳」（鈍八）、「阿漕」（冬木）、「中入後」、『御所桜上使』（蘭風）、「六助住家」（二葉）、「四段目」（古亭）、「臺坂」（二重）、「合邦下の巻」（十三）、「壇浦兜軍記掛合」遊君あこや（古亭）

岩永(蘭風) 重忠(二重)、榛沢六郎(十三)、三味線(八重吉)、ツレ(幸女)、琴胡弓(台北検査く)、糸(松の江しを)(幾久ひさ)(日高堂きぬ)(初音さく)(竹本鐘龍)

□明治37(1904.09.04)『台湾日日新報』

●狂歌紙礫 第十集の六

『素人浄瑠璃』

うまいぞと夕顔棚のこなたより疼もエホンと太功記かな 書生

法師

情の機微を穿つた丈に此疼人をして失笑せしむる殊にエホン

とはよき思ひ付なり(風)

目で聞けば色もくつきり素人の黒人よりはずつと上るり 御園

有武

之をめき、といふ(手)

素人の上るり聞けばことさらに可笑しみのあるチャリ

弥次喜多 漢唐太古

甚だ面白い併しちやりの弥次喜多はちとくだい赤坂の段位で

よからん(風)

不孝なる若ものどもが打よりて二十四孝をかたる浄るり 背高

入道

よろし不孝な声は古いものだが(風) しろ人といへど皆色お  
とこのつもり(書)

梅忠をかたる素人が見台を叩いて出すは金切の声 手爾波丸

三百両とでもほめてやらうか(書) 黒人ならポチになるとい

ふ処だな(風)

□明治37(1904.09.06)『台湾日日新報』

●狂歌紙礫 第十集の六

『素人浄瑠璃』

聞人のらむうぬ目見てちりぬるはア、是非もなや素人浄るり

風山堂

此退屈をどうするどうする(風)

素人の橋弁慶は牛若の飛ばぬ先から五六枚飛ぶ 銭内侍

何となく垢抜けて居る(風) 謡と間違つてはいけぬぞ(書)

素人の浄るり聞けば注進の女童せとなりける哉 琴古生

よし(風) だが息丈はせき切つて居るよ(書)

乗り出して語れど駒に乗らぬ故悪落をしつ素人浄るり 有馬坊

抑揚なり(書)

サワリ場も声 伝兵衛の素人に聞えませんと耳を堀川 手爾波

丸

舌頭老獺些のサワリをも見出し得ず（風）此よみ口猿ものなり（書）

素人のかたる三勝義理で聞けば客も今更かへられもせず 失名氏

かくて独り言にならでめでたし（風）義理にも我慢にも替えられぬ程の迷惑（書）

可笑しさはふと、せうづのほたりがるお国訛も出語りの屁幕風山堂

思はず失笑（手）

□明治37（1904.10.08）『台湾日日新報』

●送別義太夫会 当地義太夫師匠仲間にて古顔株の竹本八重松は近頃脳病の気味にて兎角果敢果敢しからねば、養生の爲め、来る廿五日一先づ内地へ引揚ぐることを為したるにつき、八重松派の都連は云ふに及ばず、其他の蒼連、若松連間にも同人送別の爲め、義太夫大聯合会を催さんと発起するものありて、程よく話も纏まりたれば、弥来る十日より三日間台北座劇場に於て三派合同の義太夫会を開く筈にて天狗連は復習に忙はしと云へり

□明治37（1904.10.09）『台湾日日新報』

●八重松の送別義太夫会 同会は明日よりの筈なりしが都合により延期し日限未定なりといふ

●十把一束（中略）▲台北料亭のよし尽し。琴水は待遇がよし。丸中は趣向がよし。魚金は安気です。松の江は隠れるによし。竹の家は御世辞がよし。吾妻は宴会によし。花屋は夜具がよし。初音は朝戻りによし。瓢亭は喰物がよし。鳥半は安上げによし。日本亭は眺めがよし。朝妻はつれ込みによし。一すじは秘密によし。武蔵屋は夫婦連れによし。江戸長は早い事によし（よしよし爺）

□明治37（1904.10.22）『台湾日日新報』

●追善浄瑠璃大会 当市の竹本鐘龍が亡父鐘太夫の十七回忌追善の爲、来る二十三、二十四、二十五の三日間、台北座に於て浄るり大会を催す由にて、鞍馬連、都連、つほみ連、老松連、雀連等、専ら補助する由なり

□明治37（1904.12.02）『台湾日日新報』

●蒼連の義太夫会 本月三四の両日北門亭にて催す。蒼連納会の番組は左の如し。又傍聴は無料なりとす

▲三日、『先代萩』(笑)、『志度寺』(三洋)、『菅四』(魁)、『二度目』(一枝)、『日吉丸』(十一)、『蝶花形』(亀鶴)、『新二村』(花笑)、『玉三』(松鶴)、『御所桜』(一声)、『阿漕浦』(十四)、『酒屋』(十三) ▲四日、『太功記』(二鳳)、『一の谷』(松雀)、『勸作』(都水)、『寺子屋』(枝雀)、『又助内』(不二)、『皿屋敷』(十四)、『本藏下屋敷』(十三)、『帯屋』(堂司)、『袖萩』(梅枝)、『鳴戸』(南木)

□明治38 (1905-02-11) 『台湾日日新報』

●浄瑠璃会 本日午後六時より本社に隣れる倶楽部に於て浄瑠璃会を催す由にて、出しものは左の如しと

▲『玉藻前三段目』(金露)、『鎌倉三代記』(曙)、『先代萩御殿』(都水)、『本藏下屋敷』(十一)、『弁慶上使』(松鶴)、『三十三間堂柳』(南木)、『三日太平記』(不二)、『百度平』(二声)、『八陣本城』(梅枝)、『播州皿屋敷』(十四)、『合邦下の巻』(十三)

□明治38 (1905-03-11) 『台湾日日新報』

●基隆の花柳界 去月末の調査に依るに基隆街に於ける花柳界の景況は左の如し

内地人 本島人 計

貸座敷	一二	一	一三
料理店	二四	一	二五
飲食店	三二	三四	六六
娼妓	九四	五	九九
芸妓	一六	一六	
酌婦	二五	二五	
仲居	一一	一一	

●素人義太夫会 蒼連にては今明兩日午後六時より北門亭にて他連聯合の例月会を催す由にて、番組は『千代萩』(二鳳)、『志度寺』(三洋)、『廿四孝』(都水)、『浜松小屋』(枝雀)、『日高川』(貴司)、『御所桜三』(松鶴)、『玉藻前三』(十四)、『本藏下屋敷』(十三) 以上 今晚 ▲『橋弁慶』(九三)、『浜松小屋』(花笑)、『本藏下屋敷』(十一)、『柳』(南木)、『先代萩』(不二)、『お千代半兵衛八百屋』(十四)、『日吉丸三』(梅枝)、『百度平』(相生)、『野崎村』(柳枝)、『以上明晩

□明治38 (1905-06-01) 『台湾日日新報』

●寄贈 基隆停車場待合所内小林末吉氏より金一元五十銭。城内府中街金子圭介氏より金十円。在台北素人義太夫蒼連より

金十二円五十銭。孰れも台北行旅病人救護所へ寄贈したり

□明治38 (1905-06-24) 『台湾日日新報』

●台北座の素人浄瑠璃 二十四、二十五日の両日、午後六時より台北座に催す蒼連の浄るり会は、木戸場代共に無料にて、其番組は下の如しと

『先代萩』(一鳳)、『浜松の段』(花笑)、『桂川帶屋』(貴司)、  
『菅原四』(都鶴)、『二度目』(枝雀)、『御所桜』(不二)、『日吉丸三』(一声)、『安達原三』(梅枝)、『染分手綱子別れ』(柳枝)、  
『箱根滝の段』(三五太夫事白鳳軒) 以上二十四日夜。『加賀見山五』(一福)、『太功記十』(三洋)、『柳』(花笑)、『三勝半七』(貴司)、  
『菅原四』(枝雀)、『日吉丸三』(不二)、  
『御所桜』(梅枝)、  
『百度平』(一声)、  
『新吉原揚屋』(柳枝)、  
『三日太平記』(白鳳軒)、  
三味線(竹本重八)(豊竹東太夫)

□明治38 (1905-08-24) 『台湾日日新報』

●素人義太夫会 素人天狗の蒼連にては今回栄座劇場を借受け、浄瑠璃大会を催す事となり、期日は昨今兩夜にて午後六時より開会し木戸銭無料との事なるが、同連には今回白鳳軒といふが加はりたる由にて、同人は西門外街の歯科医にて、内地に

ては商売人の中に加はり居たる事ありて、全く素人離れを為し居る点あり。台湾にては一寸珍らしき名人なりとて、まだ開会せぬ前より非常なる評判なりと。さて今夜の番組は左の如し

『朝顔宿屋』(南木)、  
『柳』(松鶴)、  
『蝶花形八』(亀鶴)、  
『十種孝新吉原』(花笑)、  
『先代御殿』(都鶴)、  
『寺子屋』(魁)、  
『三勝酒屋』(貴司)、  
『尼が崎』(梅枝)、  
『弁慶上使』(一声)、  
『鈴が森』(不二)、  
『合邦の下』(白鳳軒)、  
糸(東太夫)

□明治38 (1905-11-15) 『台湾日日新報』 漢文版

●桃園慈善會 桃園之婦人慈善會支部之音楽會。於去十日十一日兩日間。開設諸桃園街林家之租館内。大覺熱鬧。台北樂師村田、鈴木、田島、及北川夫人該氏。出赴該地。以參奏樂器。是日幻照活動写真。置蓄音器。活人画。則以桃園紳士夫人裝之。十日入場者。約千七百名。活人画。則扮作桃太郎。桜井駅木幡里等。一時觀者。男々女々。南北東西。置如墻垣。肩磨踵接。幾無立錫地。至十一日。則來觀者更多三回入場者。約有二千人。記者午後四時三十九分。從艫舦乘汽車向該地出發。迨至桃園。已經開會。竹内行長適登壇演說。畢、村田氏獨奏尺八(狀若洞簫二二回有嘹海天鶴之致。鈴木氏之洋琴。与北川夫人之琴合奏。声韵悠揚。翁如也。繼而田島之明笛。与鈴木氏之洋琴。及北川

夫人之三絃和之。繹如也。奏至無心処。万籟無聲。清風払々。非下里曲所可希及。衆皆忘機。不知曲終。恍恍如入清虛之境。等爲葛天氏之民。直不可思議。至蓄音器者。又爲本島人所注目。詫爲奇異者也。猶不但此。如內地人之落語、筑摩川、勸進帳、更堪唱采。如寺子屋之淨瑠璃、亦堪令人嘖目。活人画者。第一桃太郎。田舍造一茅屋。裡有翁媪兩人。瓮見桃中一小兒。兩相驚愕。第二小楠公在仏間欲自殺。其母欲止之之狀。大覺逼真。第三爲仲國横吹短笛。衣裳修偉。內有妖艷如花之少女。按小督之局琴。既聞笛聲。即使侍女持燭迎仲國。宛然如觀一幅土佐図。又有土富裾野之曾我氏兄弟報仇一劇。係芳年氏以佞神之華写之。神情栩栩欲活。此間本島人最傾心者。乃爲活動写真。至於喝采不已。及午后十二時始散會。按此慈喜會。係不發售入場券。乃以同街爲中心点。在其約一里半許之地方。募集寄附金。然後對此寄附金。而配布三千五百枚之入場券。故入場者。遠出予定額以上。實該地未曾有之盛會也。

※淨瑠璃をレコードで放送し、「本島人」が聴いたと記述されている珍しい記事。

□明治38 (1905.11.18) 『台湾日日新報』

●送別 淨瑠璃會 台北素人義太夫四天王の一人たりし笠松柳

枝太夫が今回当地を引揚げ、大連地方へ出立するにつき、平素鼻突き合はせし天狗連中にては、送別会として来る十九日午後五時より、新起横街台北座にて素人淨瑠璃會を催す筈にて、實際一文の錢をも取らぬ由。番組は、

『御祝儀』（福寿）、『太功記七』（二葉）、『布引四』（二重）、『平治内』（是調）、『日蓮記三』（都水）、『朝顔宿屋』（松鶴）、『三勝酒屋』（不二）、『紙治内』（一声）、『本蔵下屋敷』（相生）、『合邦下』（十三）、『安達三』（梅枝）、『野崎』（柳枝）、『菅原四』（白鳳軒）、大切掛合『妹背山々の段』小葉（二重）、桔梗（福寿）、雛鳥（相生）、久我之助（柳枝）、定高（白鳳）、大判事（十三）、糸（東、重八、春花、三次郎）

□明治39 (1906.01.07) 『台湾日日新報』漢文版

●高等文官、招宴、総督 去三日之夜。在台北高等文官。仮民政長官々邸。設席招待総督。総督始終高談壯論。嗣後長谷川技師長起爲総代。曰。閣下久出征。凱旋未幾。席不暖煖。而遠勞婦任。閣下之（厘の中に林？）念本島。誠令感激不能措也。茲開粗宴。蒙屈駕光臨。是固不足以酬盛意。然聊以表微忱而已。又祝総督健康。齊唱万歳。総督亦起而還礼。略曰。（総督の答辞…中略）文學種々実例。極有興趣。自是有合奏音曲義太夫等之余興。宴

終。総督在楼上休憩一時間。閑談陣中事云。

【明治39 (1906-02-23)】『台湾日日新報』

●浄瑠璃大会 本日午後四時より台北座に於て基隆雀連、台北蒼連、及天狗連合併にて浄るり大会を催す筈にて、其語物左の如しと

『御祝儀』(宝入船)、『三日太平記』(梅士)、『明烏山名屋』(梅枝)、『朝顔日記』(花笑)、『沼津』(南木)、『鳴門』(鳴子)、『太功記十』(弥生)、『加賀見山又助』(吾才)、『御所桜三』(三洋)、『新吉原揚屋』(貴司)、『忠臣蔵本蔵』(亀鶴)、『合邦』(白鳳軒)、『千両職猪名川内』掛合、猪名川(都水)、大阪屋若者(一声)、鉄ヶ嶽(松鶴)、角力使(三声)、おとわ(不二)、三味線(三次郎)、『菅原寺子屋』掛合、松王(十三)、千代(花遊)、玄蕃(弥生)、百姓子供(十雀)、御台(吾勇)、菅秀才(三声)、戸浪(一声)、源蔵(糸雀)、三味線(三治郎)、『忠臣蔵一力の段』掛合、平右衛門(十雀)、九太夫(糸雀)、伴内(吾勇)、力弥(三声)、おかる(相生)、重太郎(三治郎)、弥五郎(花笑)、喜多八(都八)、亭主(貴司)、仲居(大勢)、由良之助(十三)、三味線(東)、鳴物(楽屋)、唄(小福)

【明治39 (1906-03-09)】『台湾日日新報』

●東北飢饉救恤浄瑠璃大会 東北三県窮民救恤の為、竹本八重吉が発企となり、鞍馬連中に於て、来る十日、十一日の両日午後六時より、台北座に於て浄るり大会を催す由にて、其番組は左の如しと

『紙治炬燵』(万朝)、『日吉丸三段目』掛合、久吉(吾妻三すじ)、は、吉春(同勝迚)、竹松(松の江奴)、『三十三間堂平太郎内』(児島つる)、『新吉原揚屋』(同きく)、『太功記七』(幾久あつこ)、『日蓮記勘作内』(同ひさ)、『三勝半七』(一九久)、『一の谷三段目』(笑燕)、『彦山六助住家』(秀八)、『松王屋敷』(台北■■■■)、『千代累物語』(児島秀八)、『十種香』(四楽)、『玉藻前三』(錦)、『御所桜三ツ目』(吾福)、『三代記三浦別』(三国)、『阿漕平治内』(不二)、『染分手綱三吉別れ』(豊泉)、『本蔵下屋敷』(寄石)、『佐倉宗五郎』(呂三)、『布引四段目』(一三三)、『福鳥さかろ松』(冬木)、『沼津千本松』(十三)、『菅原四ツ目』(二葉)、『和泉三郎館』(蘭風)、『あこや三曲』(古亭)、『壺坂寺沢市内』(一重)、『堀川猿廻し』掛合、おつる、伝兵衛(豊風)、母(呂三)、お俊(古亭)、与治郎(一重)、三味線(八重吉)、ツレ(台北お鶴)、琴、胡弓(同きく)

□明治39 (1906-09-14) 『台湾日日新報』

●朝日座の人形浄瑠璃 疾くにも乗り込むべき同座人形浄瑠璃の一座は盆興行の為に援止められて止むなくも渡台の遅延せし由なりしが、再昨日の福岡丸にて其前持らへとして人形側の十数名先駆して渡台し、目下座内の飾り付け其他に従事し居れるが、太夫連の一行が次便にて来北次第直ちに盛んなる開場式を挙げ、引続き足拍子勇ましく開場の運びに至るべしと云ふ

□明治39 (1906-09-21) 『台湾日日新報』

●女浄瑠璃操人形の初日 朝日座の女浄瑠璃操人形は昨日太夫と人形使との町廻りをなし、午後五時より鱗落しをなし、愈よ本日午後六時より初日を出す由なるが、興行は二日替りとなし、木戸は大人十五銭 小人八銭 場代は割一等人二十銭 二等一人十銭にて、今明晩の出し物は左の如し

『式三番叟』(御祝儀)、『由良の港山の段』(小富)、『屋島合戦三段目』(小富士)、『奥州秀衡三段目』(葉龍)、『阿波の鳴門八ツ目』(小龍)

□明治39 (1906-09-22) 『台湾日日新報』

●朝日座の人形浄瑠璃 名代男

幾ら巧く語つても床語りは番附に入れぬと云つた位のもので、今東京で三味線弾をして居る鶴澤儀風が、未だ豊竹和国太夫と云つて芝居町に出て居た頃は、相当の語り手と云はれたものであつたが、寄席は朱引内を禁まはれ、場末ばかりを打つことを余義なくせられた、斯う云ふ風で義太夫の本業とは人形に合して語つてを意味し、文楽が斯道に重きをなして居るのも畢竟これが為めであるのだ、然るに台湾にはこれまで一度も此の本業語りが来ず、今度の朝日座の一座が草分けと云ふ訳合である、如何にも床語りとしては九重太夫のやうな老巧者も来、又た白鳳軒のやうな本業の型を語る人も居るが、併し目前人形に合して同時に耳目を楽ましむる本趣向で遣つて貰へるとすれば、太夫が女太夫などと贅沢も云はれず、是非に一度は聴きに出掛けて、久し振りの枯腸を満たすべきである

義太夫は大阪が本場であるが、而かもその本元は阿波である、お刺付けに大阪は近來ケレンを交へるやうになつたが、流石阿波の浄瑠璃は堅い、いでや鱗落し当夜の語り口を評さうか、先づ小富の『御殿』は口を抜して「上使入」から語つたが、年の割には甘く将来望みがある。小富士の『堀川』は当人大きく語る積りであらうが、何うも幅が足らぬ、尤もこれは声の上から云ふことで、義太の質は決して悪くない、取前の葉龍の

『安達三』は大したヨガラセを遣られた、大向から堂摺の声頻りに掛つたのは宜べなりである、中吉と評して置く。とりかた小龍の『質屋』は流石なことで、而かも新内出ではあるまいかと思はれる程浄瑠璃が綺麗であった。元より訛るやうなことなく艶もあり、先づは上吉と申す。元来女太夫の三味線は総体調子の高いものであるが、此の一座のは彼の八重松の如く高からず、彼の八重吉の如く低からず、能くその中庸を得ては居るが、何うも撥放れが綺麗でない、今一度聴くまで巧妙の褒め言葉はお預りとして置く。

次ぎは人形の番、昔から云ふことだが、文楽の人形は、人形に魂が入つて、夜中光秀と秀吉が喧嘩をする程度に上達して居るが、此の一座は無論それまでには行かねど、人形が汗を掻く文けの車輪には遣つて除けた、即ち鯉若のお染は格好に勝り、幸八の袖萩は科に勝り、文五郎の久作は軽しと云ふよりも荒きに勝つて居つた、その他黒ん坊連は御苦勞御苦勞で御免を蒙つて置く

書割は流石大野の仕事、綺麗この上なし、間々道具で手の来たのは御手柄御手柄

明治39 (1906-10-09) 『台湾日日新報』

●浄瑠璃会 当地の天狗連と基隆の雀連合併にて明日後十一の二日間、北門街鳥留の楼上(元武蔵屋大広間)に於て、浄瑠璃大会を催すべき由なるが、時間は午後五時開始にて、其語物連名左の如し

『四ツ谷怪談伊右衛門内』(一声)、『安達原三』(一二三)、『大閻記十』(梅枝)、『本藏下屋敷』(基十雀)、『鈴ヶ森』(花糸)、『八陣八ツ目』(花笑)、『忠臣蔵六』(南木)、『加賀見山又助内』(基弥生)、『新吉原揚屋』(木の葉)、『菅原四段目』(三笑)、『妹背山御殿』(貴司)、『柳平太郎住家』(貴昇)、『御所桜三』(松鶴)、『日吉丸三』(基糸雀)、『三勝半七酒屋』(相生)、『志度寺』(十三)、三味線(野澤三次郎)

●朝日座 替り芸題九日十日の分、『妹背山二段目』(小富)、  
一『あこぎ平治内』(小富士、人形治郎造文五郎、内室幸八)、  
一『日蓮記三段目』(葉龍、お伝鯉若、上人文五郎)  
一『布引小桜ぜめ』(小龍、行綱鯉若、小桜親玉、平治文五郎)  
一『忠臣蔵三段目』惣掛合(判官喜若、師直喜楽、勘平文五郎、おかる親玉、伴内鯉若)

明治40 (1907-06-19) 『台湾日日新報』

●台南の義捐演芸大会

北部陸軍線前進隊慰問のために開かれたる台南の義捐演芸会は愛国婦人会、台湾慈善婦人会、篤志看護婦人会等の在南各會員諸媛四十四名の發起に係かり、又一面官民中重立ちたる人々七十余名の支援とありて、既記の如く本月十五日の夜より三夜間、台南座に於て挙行さる。一度此挙あることを知りたる市内の官民は、上となく老幼となく皆大いなる同情を以て迎へ、十四日即ち開演の前日に於て、已に早くも千二百余円の入場券は売尽され、其他郭炭来氏の二百四十円及無名氏のもの五十円等を始めとして、単に寄付のみを申込み来るもの多数にして、人氣は頓に昂騰せり。愈々初日即ち十五日の夜に於ける開演に際しては、午後六時と云ふに已に陸統乎として観覧者は押かけ来り、約一時間を過ぐるの頃は場内全く立錐の余地なきまでに詰め掛け、総員大約七百余名と註せられ、遊廓検査小供連の『式三番』に依て開演し、次に城内外の老妓連の手並みを誇れる素ばやし(正札)唄立吉、三味線三太郎、小鼓奴太鼓金六、一曲を奏したる後、村上庁長夫人は三婦人会を代表して、左の祝辞を述べ。拍手は急霰の如くに起りて満場為に轟々然たり。夫れより貴婦人連(夏の曲)の弾琴あり。以下『春の梅』『鶯遷閣』『鎌倉三代記三浦別れ』(遊廓検査)、『膝栗毛』『柿盗人』(有志男連)、『供奴』(台南検査)、『忠臣蔵

一力茶屋場』(遊廓検査)、『千本校道行』(男女有志)等の順序に依て演ぜられたるが、何れも大出来にして、僅々兩三日間の稽古としては誠に天晴なるものなりし。又観客何れも満足の体に見受けられたり。翌十六日の夜も前同様にして、貴婦人連の出物は千鳥の曲弾琴に代へて梅香、金時、立吉(地方)等の『山姥』吾妻太夫(浄瑠璃)、勝次(舞)、三太郎以下四人(地方)等の『北州』を加へたるに過ぎざりし。其他観覧者及場内の光景も前夜と大差なく、場内外の設備は極めて質素なる中に、何処となく壮雅のところありて、入口には大アーチを飾付け、場内も亦却々に手の入りたる飾付けをなしたれば、直に荒涼たる台南座も一見見まがふ程の光景を呈したりし(台南特派員報)

※続いて發起人一同挨拶が載る。翻刻省略。

●夜会の余興 十七日の総督官邸夜会の余興は第一番目『乗合萬歳』舞(一字闕)龍、いと子。地方近、糸滝尾繁之助▲第二番目義太夫歌舞伎十八番『勸進帳安宅閑所の段』弁慶竹本大島太夫、(一字闕)樫山城太夫、義経つばめ太夫、海尊軒登太夫。三味線鶴澤仲助、連れ弾き仲治、仲太郎、勝之助▲第三番目『お兼晒』舞邑子、光菊、梅八、歌小福、小蝶、鈴(一字闕)。三味線千代、邑、きく。太鼓勇子。二挺

小太郎▲第四番目ヴァイオリン演奏田中正風▲五番目剣舞田中正風▲第六番目『五人ばやし引拔夏船頭』舞三ね子 鈴子 糸子、鈴奴、三次。●歌滝尾、才三、六べ。●三味線いと、こい、繁之助。太鼓、滝龍。笛近といふ顔触れであつた▲芸妓の手踊はいつも処々で定評もあるから、改めて言はず。こ、には唯新来の義太夫と剣舞とを聊か紹介しやう▲久しく太棹に渴して居た処へ大隅太夫に亜ぐ大島がやつて来たといふ評判は、船がまだ基隆棧橋へ着かぬ前から人々の口に伝へられて居たので、当夜参合の面々は固唾を呑み呼吸を殺して聞惚れて居たのも無理はない。殊に出し物が出し物だけに一層我人の耳を楽しました▲先づ大島太夫からいふと成程姿勢態度の沈著充分にあり。音吐亦朗々として如何な大席でも一人で背負つて行くに余りある美声「旅の衣は篠懸の」の出の如きは、久し振りで成田屋の舞台を観るやうな気がした。山城の富樫、これは大島に比べれば音声は稍下るが何処までも左衛門然たる態でやつて退けたは嬉しかつた。その問答の辺り表情 確かに声の外に活躍して聞えた、つばめの義経 鞍登の海尊いづれも申分ない。さて仲助の糸、これはまた其の技 神に入つたともいふものか。撥の牙えから手の調子、全く以て多く聞かれぬ妙腕である。流石は団平の遺弟子だけがあると、敬服に禁へなかつた。唯団平

は人に優れた沈著家であつたのに、彼れは少々気合が掛かり過ぎるやうに思はれた。けれども此の瑕は彼れの妙技に何等の難もつけざらしめた。連れ弾の撥 亦大席でなければ聴かれぬ妙があつた。要するに将来は知らず、今日までには斯かる名人上手の渡台が無かつたので、待ち焦がれた聴衆の受けはお話にならず、其の幕となつた時の如きは、さしも物事に騒がぬ紳士連も、此時ばかりは殆ど狂喜の態で拍手喝采。漸く止んだかと思ふと、後はアアといふ感嘆の声。暫くは動揺めき巨つた。序ながらお近の笛、是亦舞塵の妙を現した▲次に田中正風氏のヴァイオリン、中々お手に入つたもの。日比谷辺りで何の位ヤンヤを言はせたものやら。次に同氏の剣舞、初めに『曾我兄弟』、二番目に『川中島』を演じたが、二番とも吟詩も剣舞も一人でやつたには感心した。剣の捌き、吟声いづれも嘆賞に値あるが、扇の扱と身振とは、何だかにやけてお座がさめた。殊に三味線入りの剣舞は、大向ふの受け甚だ宜しくなかつた(一里者)

●朝日座の淨瑠璃 総督府始政記念会余興出演の為 東京より有名なる竹本大島太夫、鶴澤仲助の一行が渡台せるを此儘に帰すを遺憾として、当地の吾妻、魚金、日本亭の三大料亭が請元となり、昨日より五日間、朝日座に於て興行する事となり、既

に昨夜は鞍登太夫の『十種香』、山城太夫の『油屋』、津ばめ太夫の『弁慶上使』、大島太夫の『堀川』等に大喝采を博し、

到底台湾では聞かれぬ浄るりに孰れも腹を膨らしたる由なるが、今晚二日目の語物は左の如く。又木戸は三十銭場代は特別一円五十銭、一等一円、二等八十銭、割二十銭なりと

『御祝儀宝入船』（入登太夫）、『伊賀越道中双六円覚寺段』（竹本松島太夫）、糸（鶴澤仲吉）、『八陣守護城正清本城段』（竹本鞍登太夫）、糸（鶴澤勝三郎）、『本蔵下屋敷段』（竹本山城太夫）、

糸（鶴澤仲太郎）、『碁太平記新吉原揚屋段』（竹本つばめ太夫）、糸（鶴澤仲治）、『西国三十三箇所壺坂寺沢市住家段』（竹本大島太夫）、三味線（鶴澤仲助）、ツレ（鶴澤仲太郎）

□明治40（1907.06.22）『台湾日日新報』

●台北倶楽部の義金淨瑠璃。今度始政紀念祭余興出演の為東都より竹本大島太夫一座が渡台せるを機とし、婦人慈善会にては浄るり会を催し、其揚り高を隘勇前進隊の慰問義金に充つる

考なりしが、大島太夫の一座が帰国日取切迫し居るより、台北倶楽部有志者に委嘱し、明二十三日午後六時より台北倶楽部に於て右の一座を招し、浄るり会を催す事となり、一枚一円宛の切符二百枚限りを発布したるが、大島太夫は此

美拳を賛成し、一座に對する謝金の如きは悉く寄付する筈なりといふ

●十把一束 朝日座の大島太夫は艶物許りを演じて居るが、什麼かといへば艶物には幅がありすぎるから、チト時代物を語つたら甚麼かと思ふ。又津葉女太夫は本筋の浄るりとして歓迎するが、惜し事には声を潰して居るから、聞き人も又胸が苦しいやうな処がある。山城太夫の世話物と来たら実に感心。是一

ツで満腹する佃がある（ヨウヨウ連）

●朝日座の今晚の語物左の如し  
御祝儀『宝入船』（竹本松島太夫）（鶴澤仲吉）、『彦山権現毛谷村六助住家』（竹本鞍登太夫）（鶴澤勝之助）、『阿波鳴戸十郎兵衛住家』（竹本山城太夫）（鶴澤仲太郎）、『忠臣蔵六段目勘平腹切』（竹本津ばめ太夫）（鶴澤仲治）、『桂川連理柵』（竹本大島太夫）（鶴澤仲助）、大切御好につき歌舞妓十八番義太夫『勧進帳』（太夫総掛合）三味線（仲助）（仲治）（仲太郎）（勝之助）

●大島一座を聞く 吾輩は数年前の朝太夫を、下足札で煙草盆叩きながら天下一品と崇め奉つた程の頗る義太通なることを憚ながら一寸断つて置く。偕て一昨夜朝日座の語物、つばめ

太夫の『宿屋』と大島太夫の『宿屋』（※「酒屋」の誤記である）は少からず吾輩を促したので、アノ百万の蒸気ポンプで

浴せかけられる様な雨の中、御苦勞様にも南門外の寓居から飛び出した、つばめの『朝顔』は余が予想の頗る大なりし丈、少なからず落胆した。聞けば太夫は咽喉を痛めて居るとのことだから、無理もないが、要するに徹頭徹尾声が足りない、肝心なところに少しも身が入らぬ、ドーしても吾人が胸臆に潜む或ものに触る、ことを得ぬ。御気の毒ながら頗る不感服仕つた、大島太夫の三勝半七は半兵衛と宗岸の語り別け、ドーも明瞭でない、ソレに時々余計な言葉を加へたりするなどは耳障りなること限りなく、半兵衛が啖が詰つて咳込むところなどは、あまりに故意とらしい、「今頃は半七さん」、以下さわりの方は稍々聞くに足れりと思ふ。尤も之も或は吾輩一人かも知れぬ、要するに出来たであつた、大切の『勸進帳』の総掛合、吾妻の芸者三人は天神様の成損ね見た様な恰好して、笛吹いたり鼓打つたり、甚だ賑かではあつたが、これも好か悪いかは言はぬが花として置く。聞けば一座は檜舞台では第三流とやら斯く言ふのは少々酷かも知れぬが、吾人は一座に対する要求の大なりし丈、ソレ丈失望の度を強からしめた訳だ、然し天狗連の素人義太の外には滅多に聞かれぬ台北の天地だけ、毎夜の大入は魂消たものなり(おの字)

●朝日座の浄瑠璃 島田法官部長談

島田法官部長は厳正、不可侵好法官であつて、青年時代より、今日の栄職に登る迄の間には、頗る大波瀾ある歴史を有して居つて、特に今日の学生諸君の爲めには立志談的の事蹟ある人で、不日記者は其小伝とも云ふべきものをものして之れを江湖の学生諸君に問はんと欲して居るが、此人又至つて或理由よりして浄瑠璃に堪能であつて、台北に於ける斯界のオーソリチーたる人はも許し、恐らくは自己自身も許して居らるゝであらう。今此適評者たる氏の談片を得たれば、茲に掲載する事とした、一座は勿論聴者の参考となるは、蓋しすなからずと信す先づ大島太夫一行を総評すると、台湾では実に空前であつて斯界に渴して居つた吾々は、少なくとも十年は寿命が延びたやうな心地がする。即ち或る点迄は其技倆を認めるに吝かならぬのだ▲乍併彼の太夫を以て、撰津大隅を除けば之れを推すなどと過賞しては大反対である。先づ彼の特長から云へば、声の丈夫と腹の強いのは如何にもドツサリたる資格を供へて居るが、其欠点から言ふと元來浄瑠璃は所謂美文であるから、其文勢に添はねばならぬ。然るに彼は非常に単調で一気呵成で、只聴者をして厭はしめざる、所謂人氣一片であると云はねばならぬ。換言すれば汪洋たる大河のその如く悠々として迫らざる処もあれば、激流奔湍碎けて散ずる其飛沫は人をして思は

ず悽然たらしめ、或は鉄腸を割き、或は涙窩を開かしめ、或は又恍然自失せしめねばならぬ筈の者だ。然るに聴者をして一言を味しむるの余地、毫も留めざるに至りては、決して大家と賞するに足らぬ▲又浄瑠璃系統から云ふと彼は決して大阪系統ではない。換言すれば本筋ではない。東京の素人を相手に、只ドースル連を喜ばしむるのみで、断じて破格である▲以下二枚目三枚目に至りては却て純粹の大阪系統、所謂正格であつて、上がたらぬとか腹が弱いか、何れも自然の欠点は免れぬが、却て敬服するの価値ありだ▲三味線仲助はなかなか感心な腕前を持つてゐる。如何にも立三味線として毫も不服はない。団平の門人だと言ふが、弾き振りから掛声に至る迄善く似て居る。之れは争はれぬ証拠である▲乍併初日の時に三味の糸を切り、狼狽を極めて替三味線さへも用意せず、不得已連引きの三味を奪つて続けたなどは、如何にも聴者に不礼なるのみならず、軽卒の誹は免れぬ。もしも此時連引きが居なかつたならばどうする積か。実に冷汗背に流れた▲終りに不思議なのは、何故に二枚目三枚目は世話時代をやつて居るのに、ドツサリが世話許りをやるのか。之では資格顛倒で実力の判断はつかぬ。之れは自重心の上から註文の如何に聞らず、是非時代も語つて聴者に実力を示すの義務がある云々

□明治40 (1907.08.09) 『台湾日日新報』

●義捐義太夫会決算 曩に有志者に於て、隘勇線前進隊慰問義捐の目的を以て、台北クラブにて開会したる大島一座の義太夫会は収入百二十五円、支出百三十四円二十六銭五厘にして、内百円は義捐金に充て、他は雑費に使用したるが、不足金九円二十銭余は有志者に於て寄付せられたりと

□明治40 (1907.08.17) 『台湾日日新報』

●老松連の浄瑠璃会 老松連にては今回芸妓となりし同連の師匠竹本重八に花を添へんとて、昨夜七時より一力楼上にて浄瑠璃会を催す由なるが、其語り物は左の如し

『日蓮記勸作住家』(都水)、『菅原寺子屋』(十三)、『紙治茶屋場』(柳枝)、『鏡山又助住家』(鱗)、『十種孝』(雨凌)、『御所桜弁慶上使』(不二)、『忠臣蔵六ツ目』(三洋)、『梅忠新の口村』(貴昇)、『一の谷熊谷陣屋』(勝木)、『鎌倉三代記三浦別れ』(松鶴)

□明治40 (1907.09.20) 『台湾日日新報』漢文版

●北投淡水觀月列車 鉄道部訂以來二十一及二十二之両日。運轉其中秋觀月之列車。其場所廿一夜為北投及淡水、廿二夜則僅在北投、往復車資。北投二十錢。淡水二十五錢。雖可各乘列車

以行。然至適意而歸。応募淡水十時出發之臨時列車。他如通用之車票。則北投限二日間。淡水限一日間。其赴北投者。即一泊乃歸。仍無妨礙也。○北投之設備 自停車場迄溫泉場。各處皆点有枝灯。照耀道路。浴場及茶店。則滿飾紅灯。由北投俱樂部始。多有眺望絕佳之処。其間各置坐椅數十隻。以便休息。且設飲食路店數軒。材料既皆新鮮。價格尤極低廉。可以供客之需。外此余興所闕。則北投俱樂部。有芸妓開演手踊及淨瑠璃(曲名)等。此事該地支序長自為中心点。民間有志者。亦訂各表大熱心以歡迎之。○淡水之設備 于停車場棧橋。約備端艇五艘。以小輪船曳之。而至于海水浴場。凡午后抵淡水水駅之乘客。皆妥為引導之。該浴場亦置有坐椅數十隻。及草席約百枚。以為觀客之便。又設飲食店二所。材料之新鮮与價格之低廉。亦与前同。其余興之所計畫。尚將放煙火至數十發云。

□明治40 (1907.11.29) 『台湾日日新報』

●送別 淨瑠璃會 女太夫の利物にして珍重されたる竹本重八が、今度帰国するに就き、来る二十九、三十の両日午後五時より、朝日座に於て浄るり會を催す由にて、其語物は左の如しと

『鈴ヶ森』(一声)、『太十』、『壺坂』(国芳)、『関取二代鏡』(一鳳)、『柳』(小柳)、『八陣』(梅枝)、『朝顔宿屋』(寿)、『皿屋敷』、『三

日太平記』(白鳳)、『御殿』(小嵯峨)、『菅四』(都鶴)、『日吉丸』(栄旭)、『忠四』(十三)、『逆櫓』(相生)、『沼津』(常盤)、『忠六』(山水)、『日蓮記』(都水)、『安達の三』(三洋)、『野崎』、『三勝』(柳枝)、『蝶花形』(亀鶴)、『柳』(叶)、『陣屋』(三笠)、『安達の三』(团治)、『太十』(松鶴)、『鳴門』(南木)、『すし屋』(三ヶ月)、『二十四孝』(雨綾)、『陣屋』(勝木)、『又助住家』(鱗)、『御所桜』(肥声)、『揚屋』(瓦笑)、『堀川』(鈴八)、『明烏山名屋』、『梅忠新口村』(竹本重八)、『総掛合』(茶屋場)、『由良之助』(十三)、『力弥』(国芳)、『平右衛門』(相生)、『伴内』(梅枝)、『おかる』(柳枝)、『九太夫』(白鳳軒)、『千崎』(松鶴)、『矢間』(一声)、『竹森』(都鶴)、『仲居』(亀鶴)、『亭主』(勝木)

□明治40 (1907.12.11) 『台湾日日新報』

●北埔義金淨瑠璃大会 当地素人義太連の有志發起となり、十一、十二の両日午後六時より、朝日座に於て浄瑠璃大会を催し、其の収入金を以て北埔事変遭難者に義捐せんとし、一人十五銭の入場料にて、お聴に達する由、而して初日二日目の語り物は左の如し

『妹背山御殿』、『忠臣蔵二段目』(寿)、『太平記十』、『日吉丸三』(治鶴)、『加賀見山又助内』、『先代萩御殿』(南木)、『百度平』、『

『忠臣蔵六』（一声）、『彦山毛谷村』、『お染久松質店』（初下り

照月）、『お俊伝兵衛堀川』、『聚楽町梅の由兵衛』（国芳）、『布

引四』、『岸姫松三』（相生）、『忠臣蔵赤垣出立』、『壺阪』（鐘籠）、

『沼津』、『忠臣蔵四』（十三）、三味線（照月）（鐘籠）、初日目

掛合、『朝顔日記宿屋』、みゆき（国芳）、岩代（照月）、駒沢（一

声）、下女（治鶴）、徳右衛門（相生）、三味線（鐘籠）、二日目

掛合、『太功記十段目』、は、（南木）、みさを（一声）、重次郎

（治鶴）、初菊（国芳）、久吉、光秀（相生）、三味線（照月）

□明治40（1907.12.19）『台湾日日新報』

●浄瑠璃大会の義金 去る十一十二の両日、朝日座に於て催

したる当地素人連の浄瑠璃大会は、其の趣旨北埔事変遭難者へ

の義金を得んためにありしを以て、其の純益金五十七円三十八

銭を、本社へ託送方申込み来れり

□明治41（1908.01.12）『台湾日日新報』

●互友連浄瑠璃会 本日午後六時より府前街遠藤写真店に於

て同連の浄瑠璃会ある由、其語り物左の如し（聴手随意）

『儀作内』（一声）、『ちやり野良子屋』（梅枝）、『柳』（柳枝）、『御

殿』（南木）、『逆櫓』（相生）、『鈴ヶ森』（亀鶴）、『玉三』（勝木）、

三味線（竹本鐘籠）

□明治41（1908.01.14）『台湾日日新報』

●素人浄瑠璃会 荅連改め東蜜連の素人浄瑠璃会は、本日午後

六時より新起街一力に於て開催する由、其語り物は左の如し

（参聴随意）

『酒屋』（二口）『亦助住家』（都八）、『御殿』（都鶴）、『妹背山

御殿』（可朝）、『本蔵下屋敷』（鱗）、『沢市内』（不二）、『柳』（小

嵯峨）、『十種香』（山水）、『国性爺楼門』（三洋）、『朝顔浜松』（亀

鶴）、『玉三』（勝木）、『松王屋敷』（松鶴）、『弁慶上使』（肥声）、

『五郎助住家』（清花）、掛合『太十』光秀（可朝）、十次郎（亀

鶴）、初菊（小嵯峨）、操（鱗）、臯月（都鶴）、久吉（清花）、

三味線（東太夫）

□明治41（1908.02.16）『台湾日日新報』

●稽古屋観 李王太郎

（浄瑠璃東太夫）

突き当りの欄間には黒塗の連名札が掲げられてある、菅連改め

東蜜連と書いた札を第一番に不二、三洋、松鶴、亀鶴、可笑、

鱗、米花、小蝶、南勢、喜楽、小嵯峨、都鶴、などの連名がズ

ラリと並べられ、更に黒札四枚を隔て、毎月休み日、十日廿日の札が殿りとなつて居る。

向うに閉て切つた障子の奥には次の間も、或は次の次の間もあるかは知らぬが、見た処四畳半と他に畳一枚と半間の押入があるのみで頗る手狭のやうだ。

四畳半の中央にブラ下る洋灯の下、壁を小楯に主人の豊竹東太郎、三味線膝に見台引付けて、ムンズと座を構へた横には西門外街の世話方、何で屋の安さんと云ふ男、箱火鉢の薬缶から急須に湯を注いで、大に輪旋して居るその向う側には詰めかけた連中三名、壁に凭れて兀然たり、伸せば手の届く上り端、勝手元の側には張り替への三味胴が十重二十重の金剛縛り、恰かも戒具を施された囚人の如くに転がって居る連中の一人は見台に向つて座を直した、名は都鶴、頭髪の疎い一寸見は老人のやうな、その癖若い人、此家では古い唸り人であるさうな、三味線の糸はテンと弾かれた、此の処語ります浄瑠璃の芸題は『箱根靈驗滝の場』だ。「忠孝の身にも因果は廻り来る片輪車の飯沼を乗せて綱手を初花が」静かに語り出される、却々調子のい、語り口だ「勝五郎さん此処ら辺りは山家ゆゑ」可愛らしい初花の詞が路次の奥まで透る様で、座は森として来る。「法事を手がかりに敵の安否をア、コリヤ壁に耳」

此辺から稽古本の紙幾枚か、刎ねられ「後に立切る障子をさつと」と滝口上野の出て文句を飛ばす、折から遅がけながら連名の筆頭不二太夫が聊か酔ふた赤い顔を油をぎらして這入つて来た、都鶴さんは最う車輪の体、滝口、初花、勝五郎早蕨、以上四名の口跡、使ひ分けも鮮やかに滝口の引込みとなり。又紙を飛ばして筆頭の二度目の目になる。師匠の東太夫、此時頃の辺りへ手をやつて蚊を払ふ、都鶴さん益々大得意「一向奴めはとんと訳が分らない夢ではないか、と朶れ顔」この「夢でないか」の処を「あき——い、れエ——がア、ほ」と三度計り語り直し「武運も光る玉櫛笥」惜い惜いと漸く一段を終つた、「却々結構ですナア」と不二君が賞讃する、都鶴さん会釈して引下ると東太夫一寸一服、さし代つて見台に向つたは張物屋、喜楽さんの『皿屋敷鉄山館』だが、これは日が浅いと見えて師匠に随いて喰つて居る。紙なら四五枚処で退却する、今度是不二さんの番で、既に出来て居る『阿波十』のお浚へだ。今日は酔つて居りますからと「順札歌」を抜きにし、お鶴の詞になつて大分咽喉が乾いたらしく、ガブガブと湯を呑み初めたが、声は全く涸いて仕舞ひ、頗る苦しさうだ。兔に角語り終つてホツと一息「明日の晩が思ひやられる」と自らの御懸念、蓋し明夜は井筒館で連中の会があるのださうな、連中はそろそろ座を立ち

初めた、向うの壁を見ると小間物屋、てんぐの柱磨が掛けてある。浄るりの稽古場に天狗屋の引札、面白い配合だ、若い連中の一人は、ドレ一風呂お先へ失敬と出で去つた。僕も続いてお暇ま……三尺の路次を突とお通りへ出ると陰曆十三夜の月は寒むさうに冴えて電線を渉る風の音 思ふに今し方出て行つた男は、湯気立ち籠る栢榴口を晴れの床として、その声その節廻し、三助の你やが眼を丸くする程度に大発揮をして居るであらう

□明治41 (1908-02-19) 『台湾日日新報』

●基隆雀連の浄瑠璃会 同地雀連にては昨今の兩日公会堂に於て浄瑠璃会を開催せる由なるが、三味線は三次郎にて各料理店芸妓連も之に加はる筈なりと云ふ。其語物は

『安達ヶ原三 (可笑)、『三日太平記九 (ねぶか)、『忠臣蔵三三 (福雀)、『日吉丸三 (呉服)、『紙治内の場 (小ふじ)、『野崎村 (京糸)、『玉藻前三 (大石)、『太功記十 (弥生)、『鏡山又助内 (吾才)、『本蔵下屋敷 (十雀)、『阿波鳴戸八 (かしく)、『大日本旭旗揚旅順攻撃 (小)、『壺坂沢市内 (松雀)、『彦山九ツ目 (糸雀)、『千本桜三 (吾勇)、『二十四孝十種香より狐火まで』総掛合 (小ふじ、若奴、小妻、琴治)、『以上十八日分) 『一の谷能谷陣屋』 (一聞)、『鏡山又助内』 (福雀)、『梅の由兵衛内』

(小妻)、『菅原松王屋敷 (ねぶか)、『中将姫雪責 (春助)、『太功記十 (駒之助)、『三十三間堂平太郎内 (大石)、『賢女鑑十 (弥生)、『日吉丸三 (吾才)、『忠臣蔵六 (糸雀)、『紙治内の場 (松雀)、『お俊伝兵衛堀川 (小)、『阿漕浦平治内 (十雀)、『四ツ谷怪談伊右衛門内 (かしく)、『百度平内 (吾勇)、『伊勢音頭』総掛合 (糸雀、小、やよひ、吾勇、かしく、十雀) (以上十九日分)

□明治41 (1908-02-21) 『台湾日日新報』

●聯合浄瑠璃会 基隆台北の素人連聯合して二十一、二十二、二十三の三日間、新起横街台北座に於て浄瑠璃大会を催す由、開会時間は午後六時より、木戸場代無料。出席人名左の如し

一声、梅枝、柳枝、相生、南木、勝木、松鶴、小柳、小勢、亀鶴 (以上台北)。吾勇、十雀、大石、弥生、糸雀、小、(以上基隆)

而して大切掛合としては初日『伊勢音頭油屋』中日『菅原寺子屋』三日目『お染久松野崎村』なりと

□明治41 (1908-03-06) 『台湾日日新報』

●東寧連の浄瑠璃会 当地東寧連の連中数名は、今明両日午後六時より、朝日座に於て浄瑠璃会を催す由にて、その語り物番組は左の如くなり」と

『阿波鳴門八ツ目』、『鎌倉三代記』（一水）、『加賀見山又助内』、『璧鏡別場』（一笑）、『日吉丸三段目』、『岸姫松三段目』（米花）、『先代萩御殿』（都鶴）、『太功記十段目』、『鱗七上使』（可笑）、『由良港汐汲』、『三十三間堂』（だるま）、『菅原四段目』、『本藏下屋敷』（鱗）、『忠臣蔵二番目』、『信功記』（南勢）、『阿漕平治内』、『加賀見山又助内』（於多福）、『壺坂花の山』、『御所桜三段目』（不二）、『壺坂花の山』（小嵯峨）、『百度平内』（小蝶）、『忠臣蔵六ツ目』、『国姓爺』（三洋）、『皿屋敷』、『太功記七ツ目』（喜楽）、『朝顔日記浜松』（亀鶴）、『璧仇討十一段目』、『三日太平記』（白鳳軒）、三味線東太夫、小蝶

□明治41（1908.03.14）『台湾日日新報』

●基隆の浄瑠璃会 来る十六日、基隆日本亭に於て雀連の浄瑠璃会を催す由にて、其語り物は左の如くなり」と

『太功記十段目』（紅雀）、『三日太平記三』（ねぶか）、『本藏下屋敷』（福雀）、『忠臣蔵裏門』（小）、『玉藻前三段目』（大石）、『賢女鏡十』（弥生）、『日吉丸三ツ目』（吾才）、『鏡山又助住家』

（十雀）、『忠臣蔵六ツ目』（糸雀）、『二代鏡秋津島内』（かしく）、『お俊佐兵衛堀川』（吾勇）、『三勝半七酒屋』（松雀）、大切『忠臣蔵茶屋場』総掛合、三味線三次郎

□明治41（1908.03.27）『台湾日日新報』

●朝日座の素人浄瑠璃会 本日午後五時より朝日座に於て西門外街の安原会主となり、東寧連の特別温習会を開催する由、今其の語り物を聞くに左の如し

『御所桜の三』（一笑）、『合邦下の巻』（巴昇）、『加賀見山の五ツ目』（米花）、『本藏下屋敷』（十二）、『寺子屋』（都鶴）、『日吉の三』（於多福）、『璧の仇討十一冊目』（鱗）、『岸姫の三』（不二）、『壺坂沢市内』（小嵯峨）、『平衛門の切腹』（喜楽）、『三日太平記九ツ目』（亀鶴）、『逆櫓』（白鳳軒）、三味線（東太夫）等

□明治41（1908.05.01）『台湾日日新報』

●鞍馬連の浄瑠璃会 明二日午後六時より、西門街法曹俱樂部に於て鞍馬連浄瑠璃会を催す由にて、其語り物は

『梅川忠兵衛新の口村』（都水）、『松王下屋敷』（五二九）、『二度目清書』（二葉）、『白石嘶揚屋』（古亭）、『箱根滝の段』（蘭風）、

掛合『堀川の段』、母(呂三)、おつる(蘭風)、伝兵衛(同)、おしゆん(都水)、与次郎(古亭)、糸(八重吉)、ツレ(千賀子)

□明治41 (1908-05-12) 『台湾日日新報』

●朝日座の浄瑠璃会 同座には昨今の両日、基隆雀連の温習会  
ある由

『宿屋』(梶子)、『大日本旭の旗上げ旅順攻撃の段』(小)、『赤垣出立』(弥生)、『忠六』(糸雀)、『菅四』(十雀)、『鳴戸の八』(かしく)、『百度平内』(吾勇)、掛合『油屋』、貢(糸雀)、喜助(かしく)、北六(叶)、お鹿(吾勇)、岩治(弥生)、おこん(小)、万野(十雀)、三味線野澤三次郎

□明治41 (1908-05-15) 『台湾日日新報』欄外記事

●合同浄瑠璃会 当地東寧連と桜鳴連合同し、十五、十六の両日朝日座に於て開催する筈にて、其語物左の如し

〔数行版面範囲外〕

『吉原』(友枝)、『本蔵下屋敷』、『重の井子別』(松鶴)、『御所桜三段目』、『忠臣蔵四ツ目』(白鳳軒)、糸(東太夫)(小蝶)

□明治41 (1908-05-29) 『台湾日日新報』

●朝日座の娘浄瑠璃 次興行物 仕入の爲め、目下内地へ赴き居る三戸朝日座主は、今度大阪にて娘浄瑠璃の一座を約束し、近日同道帰台し、来月早々蓋を開ける由なるが、真打の小浪は京阪中にて美貌、美声の評あるものにて、顔振れは左の通りなりと

豊澤町の助(一六)、竹本亀之助(一六)、豊竹尾の治(一四)、竹本咲栄(一八)、竹本千代治(二二)、豊竹光玉(二三)、竹本小浪(二七)、三味線豊澤町七

□明治41 (1908-06-09) 『台湾日日新報』

●朝日座、今晚の語り物は左の如し

『近江源氏八つ目』(亀之助)、『伊賀越沼津の里』(尾の治)、『彦山権現九つ目』(浪亀)、『二十四孝四段目』(浪栄)、『阿波鳴門八つ目』(光玉)、『安達原三段目』(小浪)

●朝日座の娘義太夫 名代男

評者は遅れ走せに朝日座の三日目を見聞に行つた、亀之助の『大江山』と尾の治の『合邦』とが済んで、今や浪亀が盛んに『酒屋』を語つて居る、弾語りでないだけに難有い、聴て惜し惜しで御簾が下りた、次ぎに代つて頭れたのは美貌を以て名あ

る浪榮『日吉の三』と云ふ出し物で大車輪、簀落ち、リボン飛び、束髪崩れて散し髪、チヨイチヨイと利かすケレンに、無性に聴者を唸らせ、非常の喝采に送られて高座を退くや、次に頭れて語り出したは光玉の『堀川』節廻しも巧みにて、お剩けに大汗の景物さへ添へたれば、聴手一同は大満足の体、殊に猿廻しになつてからの連弾きには、甘い甘い連発銃、パチパチの拍手豆を炒る如し、次ぎに「待つて居ました」の声に迎へられたは取語りの小浪『腰越状三段目和泉三郎の館』語り口の確かりしたのと、声の宜いので随分大きいものも行けることを示めし、肩衣一つピリツともせぬ。ドツサリにお目留められませうと云つた塩梅、ヤンヤと云はせて打出したと褒め上げたら、読者は定めし多寡が垂れ義太、評者を以て肩入れの一人に数へんが、女に免れぬ仮名読み違へ絶句もなく、訛りもなかつたは實際だ、別けて町造の勉強は三段も三味線も勤め、しかも功妙の撥に語り手を導く処、同じ物でも楽に語らするの徳ありて、久し振りでの溜飲を下げさせる、これを要するに此の一座の客種は、三四郎連四分に、助右衛門連三分、残り三分は堂摺連と見ば大差なからう

□明治41 (1908-06-24) 『台湾日日新報』欄外記事

●朝日座娘義大夫の打揚げ 初日以来大人気なりし朝日座の娘義大夫も既に興行二十日に及たれば、愈々明二十五日を以て打揚(版面切のため不可読)

□明治41 (1908-06-26) 『台湾日日新報』

●●●●● 歡迎余興 来二十七夜。訂在新築彩票局為新方伯及令夫人開歡迎会一事。聞其余興如左。即六玉川為台北檢。六歌仙為高砂檢。淨瑠璃芳衛総踊為台北檢。石橋為艦舩檢是也。

※「彩票局」は「彩票局」の誤、官宮宝くじ。「新方伯」は直前の記事に「大島方伯」とあるため、先月(明治41年5月)に着任したばかりの民政長官・大島久満次。

□明治41 (1908-09-19) 『台湾日日新報』

●鞍馬連淨瑠璃大会 明日午後六時三十分より法曹俱樂部に於て鞍馬連の淨瑠璃大会開かる、由、語物の順序は左の通りなりと

『御祝儀宝入船』(可)、『壺坂』(二重)、『毛谷村』(古亭)、『忠臣蔵四』(蘭風)、『二度目清書』(二葉)、『八陣』(都水)、『布引四』(二三)、『平次住家』(冬木)、『三日太平記』(百三)

○明治41 (1908.10.03) 『台湾日日新報』漢文版

●●●南部撮要 (九月三十日発)

▲大懇話会 愛国婦人会台南委員部。為冀会移之発展。此次将開會員大会。訂来二日以新設劇館南座為会場。定是日下午五勾鐘。開大懇話会。聞台湾支部長大島信子。亦欲与会焉。余興即高松最新式活動写真及義太夫等々。此外参会者。擬供以茶菓並鮪醋飯等。会費分文不要云。

○明治41 (1908.11.10) 『台湾日日新報』

●共進会の浄瑠璃 本日は共進会、臨時余興として午後六時より浄瑠璃を余興場に催す由にて。其語り物は左の如しと

『大閤記十段目』(鳳玉)、『忠臣蔵六段目』(米花)、『鈴ヶ森』(亀鶴)、『先代萩御殿』(松鶴)、『八百屋』(南木)、『百度平』(一声)、『寺子屋』(十三)、中入後『御所桜』(肥声)、『三勝酒屋』(相生)、『躰仇討』(白鳳)、『掛合』(本蔵下屋敷) (南木) (松鶴) (一声) (亀鶴)、糸(かね龍) (東太夫)

○明治41 (1908.11.18) 『台湾日日新報』

●鞍馬連浄瑠璃会 本日午後六時より西門街法曹俱樂部にて開催、語物左の如し

『壺阪沢市内段』(都水)、『玉藻前三段目』(五二九)、『岸姫松三段目』(呂三)、『佐倉曙儀作内』(呂三)、『忠臣蔵四段目』(蘭風)、『彦山九ツ目』(古亭)、『大功記十段目前』(一重)、『同十段目奥』(二葉)、三味線(八重吉)

○明治41 (1908.12.04) 『台湾日日新報』

●天狗連浄瑠璃大会 柳枝、十三、相生、白鳳軒、其の他当地在住天狗連は忘年会の為め、来る六日より三日間朝日座に於て浄瑠璃聯合大会を催す由にて、中には新顔の若手太夫、一三三といふが加はりて、大に聴衆を堂擡らせる由

●給仕日誌(木曜日)

六日から素人浄瑠璃連の忘年うなり会を催すとのことだが、気の早いこと夥だしい、恐らく今年の忘年会の先だらうなア

○明治41 (1908.12.06) 『台湾日日新報』

●朝日座の浄瑠璃大会 今六日午後六時より三日間、朝日座に於て開催さる、臺北浄瑠璃聯合大會の語り物は左の如し

▲初日『弁慶上使』(一鳳)、『彦山権現の九』(米花)、『二度目の清書』(珍寶)、『三日太平記の九』(雷雀)、『皿屋敷』(鱗鳳)、『鏡山又又住家』(東福)、『太功記尼ヶ崎』(松鶴)、『志度寺』(白

鳳軒)『寺子屋』(柳枝)、『合邦』(相生)

▲二日目『忠臣蔵六段目』(常盤)、『紙治内』(一聲)、『日吉丸三段目』(東福)、『朝顔日記濱松』(亀鶴)、『先代萩御殿』(三洋)

『鏡山五段目』(肥聲)、『菅原四ツ目』(松鶴)、『玉葉の前三度目』(相生)、『御所櫻三段目』(白鳳軒)、『白石嘶揚屋』(柳枝)

▲三日目『基盤太平記揚屋』(鱗鳳)、『鏡山五段目』(米花)、『伊賀越六段目』(常盤)、『忠臣蔵六段目』(三洋)、『阿波鳴門子別れ』(一聲)、『弁慶上使』(肥聲)、『菅原寺子屋』(一鳳)、『白木屋鈴ヶ森』(亀鶴)、『太十』(柳枝)、『お俊伝兵衛堀川』(相生)、『合邦玉手物狂ひ』(白鳳軒)、『千両幡』掛合(白鳳軒、相生、柳枝、一聲)

□明治41(1908.12.12)『台湾日日新報』漢文版

●慈善演芸 汎愛慈善会。本日及明日将在鉄道旅館。開会演芸。其首日演芸種目。係開会之詞。及事業幻燈。活動写真。歌唱田

村(伊藤欣造氏) 熊坂(松本鉄治氏) 浄瑠璃(鞍馬鞞) 講談(秦秦斎柏葉) 落語(同上) 三曲(生田流 笹川夫人 白

井夫人 賀田夫人 竹因夫人) 奏樂洋琴(西時愚提礼斯氏)(同夫人) 演説(村田誠治氏) 予定午後六時開会。至十一時閉会。

当夜鉄道旅館。修飾美麗。且開放任來会者縦覽云。

□明治41(1908.12.16)『台湾日日新報』

●鞍馬連浄瑠璃会 今晚六時より法曹俱樂部に於て鞍馬連の浄瑠璃会あり。又幕間には新起街の上田屋が蓄音機を据ゑて種々の謡曲をお慰みに供ふといふ。さて芸題は

『玉三』(五二九)、『古八』(都水)、『鏡山又助内』(冬木)、『大功記七ツ目』(二葉)、『伊賀越六ツ目』(古亭)、『千本桜鮎屋』(蘭風)、『本藏下屋敷』(呂三)、『大切』関取千両幟』掛合、猪名川(五二九)、女房おとわ(都水)、鉄ヶ嶽(呂三)、三味線(竹本八重吉)

□明治42(1909.03.04)『台湾日日新報』欄外記事

●鞍馬連浄瑠璃会 明晩六時より、法曹俱樂部に於ける鞍馬連浄瑠璃会の語物左の如し

【以下版面外】

□明治42(1909.06.19)『台湾日日新報』

●一昨日の城内 一昨日は始政記念日として官衙は素より各会社・商店も業を休みて祝意を表したれば日中の暑にも恐れず市中も賑合ひ種々の催しも人出多かりし

【四項目略】

▲市場の出入 始政紀念の祝意を表して煙花の打揚げ、八角堂には素人淨瑠璃、其他さまざまの夜店、軒を連ねて人の足止をなしたること、て、宵の中より構内は人波を打つて身動きもならぬ混雑を呈せり。中にも氷店の如きは早や八時より売り切れとなり、どしどし客を断る好景氣にて、何の店も相当の売行きを見、商人大喜び、見物大熱々の体なりし

●朝日座 今晚の語物

『加賀見山又助住家』(浪之助)、『太十』(浪亀)、『酒屋』(浪粟)、『熊谷陣屋』(千浪)、『百度平』(小浪)、新内『関取千両幟猪名川内』(玉菊)

□明治42 (1909-07-09) 『台湾日日新報』

●基隆の女義太夫 此程まで朝日座にて興行せし女義太夫一座は一昨夜より基隆公会堂にて、向ふ一週間興行を始めしが、其収益の一部は同会堂へ寄付する筈なりと

□明治42 (1909-08-17) 『台湾日日新報』

●南部だより 南部演芸界を大観すれば、彼の台中の台中座は姑く措き、嘉義以南は高松同仁社の興行独占と云ふも過言にあらず、即ち嘉義には嘉義座を、台南には南座を、打狗には

打狗座、阿緞には屏東座を新築し、最も巡業の便を得たり▲右の内、南座の建築は稍や、他のものと異なるも嘉義座、打狗座、屏東座は殆んど同型同規模の劇場にて、何れも定員八百と称し、其地方に比し不足なき建築なり▲目下南部の興行は嘉義座の活動写真、台南座の新演劇、南座の娘義太夫、打狗座の奇術、および喜劇並びに幕間の活動写真にて、屏東座は休業中なるが、尚ほ此の他にも時々同仁社の手に寄席の色物などの一座を連れ来り、台南公館に興行することあり。兎に角台中以南は入れ物には不自由を感ぜざるに至り、各種の娯楽趣味を供給せらるるに至りぬ▲台北にては栄座の新俳優に對し退去及び戒告をなしたる由なるが、台南座出勤の菊田逸郎と云ふ新俳優も今回其筋の注意を受け、台南を退去せざるを得ざること、なり、十三日出発、台北に赴きたり。同人、台中座鱗落しの際招かれたる重金會の殘党にて、以来台南に腰を据え居る内、芸娼妓は元より終には有夫の婦と關係し、良家の家庭を紊したるの罪に坐したるもの、由なり

□明治42 (1909-08-22) 『台湾日日新報』

●義捐素人淨瑠璃會 大阪大火義捐の爲め、明後二十四日より三日間、朝日座に於て慈善素人淨瑠璃會を催ふす由にて、

入場券は一枚十五銭均一。語物は

『平治住家』(一声)、『宗五子別れ』(梅枝)、『岸姫松兵衛館』(米花)、『加賀見山又助住家』(常盤)、『日吉丸五郎助住家』(珍宝)、『皿屋敷鉄山館』(鱗鳳)、『玉三』(花笑)、『染分手綱沓掛村』(雷雀)、『阿波十』(語蝶)、『壺坂沢市内』(小嵯峨)、『藤栗毛並木』(吾勇)、『太十』(燕司)、『蝶花形八ツ目』(三洋)、『朝顔浜松小屋』(亀鶴)、『宗五郎子別れ』(勝木)、『松王屋敷』(松鶴)、『弁慶上使』(肥声)、『補助』、『本蔵下屋敷』(柳枝)、『酒屋』(相生)、『合邦住家』(白鳳軒)、『三味線』(東太夫)、『松助』、『アイ』尚ほ大切掛合は初日『寺小屋』、『二日目』『忠臣蔵六ツ目』、『三日野』『目崎村』なりといふ ※『野目』は誤植

□明治42 (1909.09.01) 『台湾日日新報』

●義捐浄瑠璃 延期に延期を重ねし大阪火災義捐素人浄瑠璃大会は、愈々準備整ひたれば、来る一日より三日間、毎夜朝日座に於て開催する事となり、演題は既報の分と多少の變更ありたり。左の如し

『阿漕平治内』(一声)、『岸姫松』及『毛谷村住家』(米花)、『日吉丸三段目』及『二度目清書』(珍宝)、『玉藻前』(花笑)、『千本桜すしや』及『沓掛』(雷雀)、『壁滝』(鱗)、『日吉丸三』及

『杉の森』(語蝶)、『壺坂』及『合邦』(小嵯峨)、『太十』及『お駒才三鈴森』(燕司)、『蝶花形』(三洋)、『浜松』及『五右衛門釜入』(亀鶴)、『宗五郎』及『百度平』(勝木)、『太十』及『先代萩』(松鶴)、『弁慶上使』及『亦助住家』(肥声)、『四谷怪談皿屋敷』及『秋津島切腹』(白鳳軒)、『掛合』、『初日目』『忠臣蔵本蔵下屋敷』本蔵(松鶴)、『伴左衛門』(雷雀)、『三千歳』(亀鶴)、『家来』(燕司)、『若狭之助』(小嵯峨)。同二日目『菅原四段目』松王(肥声)、『玄蕃』(亀鶴)、『源蔵』(勝木)、『戸浪』(松鶴)、『千代』(小嵯峨)、『百姓』(燕司)。同三日目『忠臣蔵六ツ目』勘平(一声)、『かや』(三洋)、『郷右衛門』(米花)、『弥五郎』(亀鶴)、『角兵衛』(雷雀)、『種ヶ島六』(小嵯峨)、『滅法弥八』(肥声)、『三味線竹本松助』、『同たつ女』、『豊竹東太夫』

□明治42 (1909.09.18) 『台湾日日新報』

●愛国婦人会活動写真 愈々来る二十一日より、台北演芸場に於て開催する愛国婦人会の活動写真は、最初一週間を成るべく内地人の趣味に適合する写真を選び、跡の一週間を以て本島人の嗜好に適合する写真と選択する由なるも、強ち内地人当てるの興行本島人当てるの興行といふ區別なければ、それは観覧者の随意なるべきが、凡て

活動写真には瓦斯や器械の音が轟しきと、光線の発射が眩きとの欠点免れずして、婦人などの中には長時間の映写を嫌ふ向もあれば、耳を休め眼を休める一策として、且つ其趣味を多から

しめんが為め、旧劇の映写には、特に前後に義太夫を語り、此間に耳と眼とを休め、扱愈々舞台懸りとなる頃より写真を描写し、活動と相俟ちて興味を深からしめ、尚映写終りて後も、義太夫を継続して其一幕を完了せしむる筈なりと。入場券は一等一円、二等五十銭、三等三十銭にて、殊に小供の観覧料は一律安く、一等三十銭、二等二十銭、三等十銭の割合なり。尚前号に紹介せし写真説明の続きは左の如し

〔以下ルビ無し小活字〕

▲裾野の夜嵐 是れは誰も知る曾我兄弟の敵討にて討入より五郎の捕はれる処までを写し其前後を義太夫にて繋ぎ鳴物仮声入りなり

▲執達吏の呆れ顔 これは差押へられたる家財を二階の窓から運ぶ写真なり

▲三人皇女 仏国古代の三人皇女が互に皇后の位を争ふといふ極彩色入りの長尺ものなり

▲ほと、ぎす これは徳富蘆花の脚本新劇ほと、ぎすの全編にて矢張り鳴物声色入りなり

▲水兵の悪戯 死んだ振りさせる水兵を見て後難を慮れ余所へ運び置くを又発見者が余所へ移し斯の如くして全市中を運び送る滑稽物なり

▲児島高德 史劇なり桜樹を削りて「天勾踐」を書く処より大立廻りまで鳴物入にて映写するよし

●演芸雑俎 大稲埕に今度新らしく建つた滅法美しい支那劇場淡水戲館は、明後二十日が舞台開きと極まつた。同日の昼間は台北の重立つた官民約数百名を招待して観覧に供するといふこととで、今日あたりそれぞれ案内状を發した筈。而して記念の繪葉書を配るさうだ。普通興行は午後六時からで、木戸場代凡てを含んで一等一円二等五十銭三等二十銭といふ大勉強。舞台は榮座と同じ八間舞台で、観覧席は全部籐椅子、又は丸椅子を据ゑ、尚ほ千二百余名は楽に詰まる広さである。兎に角昨年以來、久しく杜絶えて居た支那劇のことだから初日勿々囃

受けるだらう▲朝日座も一昨晩から源氏節岡本美根二が真で、娘義太夫竹本國芳の返り咲き。それに当地の芸人が加勢しての諸芸大寄せ、早口、手品、落語などといふ賑かな取合せで、初日の晩は八分通りの入り。大部評判が好さうに見た。國芳は以前とは違ひ、場数をこなした丈けあつて、若いに似合はず、喉も出来、調子も好く、語口に余裕が出た丈け、修業が積んだ

のど、

証拠。此分で行けば将来有望。美根二の源氏節は只老熟、音曲は遠かに耳を傾くべしである。其他の連中は台北では古い古い馴染。只引つ束ねて御苦労さまと申し置く

○明治42 (1909.11.02) 『台湾日日新報』欄外記事

●鞍馬連の淨瑠璃會 本日午後六時より小〔以下版面外〕

○明治42 (1909.12.11) 『台湾日日新報』

●朝日座の淨瑠璃 今明両夜、朝日座にて東寧連本年の納會として素人淨瑠璃大会を催す。其の語物は

『御祝儀宝の入船』、『百度平』、『四ツ谷怪談』(一声)、『彦山権現』、『岸姫松』、『米花』、『弁慶上使』、『三日太平記』(鹿生)、『三十三間堂』、『合邦住家』(小嵯峨)、『太功記十段目』、『沼津の段』(燕司)、『鈴ヶ森』、『三勝半七酒屋』(佐藤)、『本藏下屋敷』、『日吉丸』(亀鶴)、『又助住家』、『弁慶上使』(肥声)、『三味線東太夫』  
松助

○明治43 (1910.01.11) 『台湾日日新報』漢文版

●中樞初会 去九日午前九時。篤志看護婦人会台北支会。在赤十字社支部医院楼上。举行新年初会式。以義太夫三曲。及其他

福籤等為余興。亦一時之盛會也。

○明治43 (1910.01.13) 『台湾日日新報』

●無絃琴 筑士太夫の名に素人淨瑠璃の真打と聞えた島田法官部長は、今度昇進した内祝と云ふので、一昨夜花屋に宴会を開いて、多数の知人を招待されたさうな▲日頃交際円満を以て官民の間に知人の多い部長のことで、其來賓も各方面に涉つて、殊に初めから胡坐式でと云ふ主人の挨拶であつたために、頗る打解けて近來の盛興を尽した▲來賓の多くは、義太夫同好の士であるし、主人の手前に対しても、是非一席を所望せざるを得ない、実は宴会席上の義太夫は、余り沢山聞されては、却て興が覚めると云ふので、中には今夜は屹度中とられることと覚悟をして居た連中もあつたらしいが、案外にも義太夫だけは全く出なかつた▲強ひて主人にと異口同音に所望はしたが、部長は飽まで之を固辞して、実は地を弾くものが無いからと逃げたものである、這般の消息になると、部長は何処までも卓越した通人である▲近日内地から、太棹の名人が来るさうな、素義太の連中は昨今頻りに待構へて居るので、斯道は是より益々紳士界に振ふことであらう

□明治43 (1910-03-02) 『台湾日日新報』 漢文版

●日本医学会彙報

(3項目略)

▲確定余興 ●一日夜於公会堂開大阪高等医学校歡迎演芸会。選

南校書精粹者三十六名。為新案舞蹈、並淨瑠璃、新劇等。二  
日夜為有志者歡迎觀劇会。閱覽帝國座演芸。

□明治43 (1910-05-01) 『台湾日日新報』

●芳野座建築由来記

恋に上下の隔てなしといふ、上下を

上下と訓んで、直ちに女義大夫に應用すれば、眼と眉毛を一所  
に寄せ口を歪め、齒を剥き出すも愛嬌の内なりと長らく狭斜の  
遊びにも飽いた某弁護士、東京の某亭で不図タレ義太の国芳と  
いへるを見馴め段々素性を探つて見ると、台湾には永らく居つ  
て不日台北へ戻る女との事に、益膝をす、め其下心で毎日通  
ひ、祝儀を撒いて居れば先方にも其願ふりが目につき、譬ふれ  
ば『一条大藏卿』に髻をつけ、『網島』の治平を赤作り仕立  
たやうなお方だと、是まで身に触れた事のない風が襟元から立  
ちそめ、其人の面影が忘れず、『菅原伝授』のいろは送りな  
らぬ、恋のいろはを心に描きて、『お駒才三』の心の駒と、  
三味線の象牙駒までが諸共に狂ひ出し、女の一念『矢口の渡』

最新なれば『法界坊』の法界愷氣も構ふものかと、或日浅草の  
料亭で出逢つたを幸ひ、『布引』ならぬ袖曳て、滝なす涙に  
真実をこめ、四十八手は知らねども『八陣』はお手のもの、  
『朝顔日記』の露の情け、色よい返事をしてたべと、からみつ  
いたる『桂川連理の柵』しがみつ、君と『妹背山』になるな  
らば『千代萩の御殿場』ならねど、腹が減つてもひもじくない  
『兜軍記』の琴責も水責火責は愚な事、『石川五右衛門』の釜責  
に遭ひ、命の『玉藻の前』御所望ならば進ませませう、此事に若  
し偽りあらば『彦山権現』『金比羅御利生』どんな罰でもうけ  
ます。斯ういひ出して聞かれぬ日には妾しは今から髪を切り、  
『尼ヶ崎』となつて行ひすましますと、名題尽しに口説き立て  
られ、弁護士某は大に恭悦、国芳の背を撫でて、夫れ聞か  
は和女の心『鏡山』にかけて見るよりも、よく訳つた、此の上  
は台湾へ伴ひ帰り、此世はおるか『二代鏡』や『三代記』  
『妹背の門松』『野崎村』決して嘘を申さうか、乃公の言葉に詐  
りあらば、『四段目』の如く切腹せん。心配するなど携へ帰り、  
今は自宅へ『腰越状』を据多させ、扱こそ『三十三間堂』の大  
きさはなくも一万余円を投じ、棟木を立て、国芳の芳の字に我  
が姓の野の字を加へ、芳野座と命名して建築する事とはなりけ  
る

□明治43 (1910-07-02) 『台湾日日新報』欄外記事

●芳野亭の素人淨瑠璃 新起横街芳野亭にては、今二日及び明日

三日の二日間午後六時よ

(教行版面範圍外)

段目 (白鳳軒)、三味線 (竹本国芳、鶴澤三次郎)

□明治43 (1910-07-27) 『台湾日日新報』漢文版

島内電報

▲討蕃演芸会 当地開演三社駢合討蕃慰問演芸会。經由昨日午後五時。開于台中座。先由台湾新聞社長山移氏起述開會之詞。

次小学校生徒唱歌。次筑前琵琶、薩摩琵琶、義太夫、及本島人琴笛合奏、以及芸妓四十名手舞。共十余番。以十一時半散會。

入場者約九百人。真未有之盛會也。(念六日由台中發)

□明治43 (1910-07-28) 『台湾日日新報』漢文版

島内電報

▲台中慰問演芸 台中座第二日慰問演芸会。於昨日午後六時開演。山移台湾新聞社長叙述。即將前夜所未畢演者演畢。淨瑠璃、

合奏、琵琶清樂、手踊等演奏十數番。皆博大衆非常喝采。抵十二時散會。入場者約有千人。滿座無立錫余地。較前夜尤盛況

也。(二十七日台中發)

□明治43 (1910-07-30) 『台湾日日新報』漢文版

内外要電

▲討蕃慰問演芸 本社主催之東京十五新聞社贊助之討蕃隊慰問第一演芸会。訂來三十一日在木挽町歌舞伎座開演。有市村座年少俳優素踊。女義太夫真打総出演。以蒐集滿都人氣。

□明治43 (1910-10-02) 『台湾日日新報』

●演芸会收入金寄贈

阿緞庁下蕃薯寮街有志者主催に係る、同地演芸会開催の收入金二百六十円を、今回討蕃隊慰問金として愛国婦人会台湾支部へ寄贈し来れり

演芸界

●女義太夫 芳野亭竹本千代登一座の今明両夜の語り物は左の

如くなり

二日『御所校弁慶上使』、三日『壺坂靈驗記沢市宅』(国芳)、

二日『朝顔日記宿屋』、三日『腰越状泉三郎館』(錦木)、二日『妹背山御殿』、三日『日蓮記勘作住家』(花千代)、二日『三勝半

七酒屋』、三日『菅原寺子屋』（団菊）。二日『阿波鳴戸順礼歌』三日『日吉丸三』（千代登）

□明治43（1910-1004）『台湾日日新報』

●筑前琵琶の送別会 「高島旭仙の台湾巡業。討蕃隊慰問演奏、同好会組織を手がけ、素人を教授。このたび台湾を去ってアモイ・広東・香港方面へ向かう。義太夫ではないため翻刻を省くが、音曲芸能の外地進出の事例として興味深い。」

演芸界

●娘義太夫を聴く

芳野亭へ新来の娘義太夫千代登一座の初日を聴いた。『御祝儀宝入船』と云ふ浄瑠璃は、人から聞き伝へては居るが、不幸にして未だこれを高座の御簾内に聴くべき熱心が無く、例に依つて後れ走せ花千代の『宗吾郎』から聴いた素人評だ

▲花千代の『佐倉曙』 当人は未だ若い黒田清輝式の美人であるが、却々活潑な愛嬌者で潤沢仕た咽喉一杯、縦横に語り科し、大車輪の体は頗る達者と云はねばならぬが、何処かに未だ味の足らぬ節が見える。併しこの『佐倉曙』は箱入の一つださうで満場の拍手喝采

●国芳の『太十』 芳野亭国芳嬢の語り口は、三次郎の三味線と相俟つて世既に定評あり。その表情に富みたる高座のスタイルは恍惚として聴者を酔はしめ人気山の如し

▲団菊の『三十三間堂』 次座としてお聴に達せられ、団菊の『三十三間堂』は語り口に於て確かに成功し、咽喉に於て聊か不成功と云はねばならぬ。最も咽喉を痛めて居るの可知らぬが折々苦しく聴かれたり。併しながらタレ義太一流の耳障りなるケレンなるもの少しも無く、鳥渡底の方に皮肉を見せる語り口は、其沈着と共に堂々乎として、声は即ち玉に疵。但し美貌は

一行中の第一位で、高座は為に四分の利益がある

▲千代登の『先代萩』 ドツサリの千代登丈は年配と共に引締つて、流石は座長として重きを為す価値がある。其語り口は往年渡合した小波に髣髴たるもので「お末が業」から「雀の唄」さては奥の「誠に国の礎」に至るまで、頗る巧い調子で聴者も大得心なれど、強て云へば演劇で云ふ臭味が聊か見える様だ、重い貫目と咽喉の調子が自由な所、丈の身上である

▲咲造の三味線 頗る確かな三味線ではあるが、素人には少々撥の当方が強い様に思はれる。併し此調子で弾かれたら太夫の方で楽に語られる事受合だ。三味線から身体が踊るのか、身体から三味線を揺り出して鳴らすのか。其辺は疑問として文楽の

人形然たる身振は、我れには宥せ敷島の道として近い内に「櫓の曲弾」が聴きたいものだ（奎太郎）

□明治43 (1910-10-05) 『台湾日日新報』

演芸界

●娘義太夫 ●芳野亭千代登一座の娘義太夫は好評にて、本夜より更に大切に掛合を加ふる筈にて、本夜（五日目）の語り物左の如し

『三十三間堂平太郎住家』（国芳）、『二十四孝十種香』（千代玉）、

『腰越状三段目』（錦木）、『利生記百度平』（花千代）、『太功記

十段目』（团菊）、『安達原三段目』（千代登）、大切掛合『桂川

帯屋』（長吉国芳、儀兵衛花千代、母おとせ团菊、おさぬ錦木、

長右衛門千代玉）

□明治43 (1910-10-07) 『台湾日日新報』

演芸界

●娘義太夫 ●芳野亭千代登一座の娘義太夫本夜（七日目）の語り物左の如し

『三勝半七酒屋』（国芳）、『安達ヶ原三段目』（千代玉）、『八陣

八ツ目』（錦木）、『鈴ヶ森』（花千代）、『玉藻前三段目』（团菊）、

『松王下屋敷』（千代登）、大切物掛合『一力茶屋場』（由良之助千代登、平右衛門錦木、おかる团菊、伴内国芳、九太夫花千代）

□明治43 (1910-10-08) 『台湾日日新報』

演芸界

●娘義太夫 ●芳野亭、今晚の語り物は左の如くなり

『菅原寺子屋』（国芳）、『由良港山の段』（千代玉）、『御所桜三段目』（錦木）、『壺坂沢市内』（团菊）、『鎌倉三代記八ツ目』（花千代）、『伊勢音頭油屋』（千代登）、大切『忠臣蔵茶屋場』（物掛合）

□明治43 (1910-10-11) 『台湾日日新報』

演芸界

●娘義太夫 ●芳野亭千代登一座の娘義太夫、本晩の語り物は左の如し

『朝顔日記宿屋』（国芳）、『宗五郎子別』（千代玉）、『鈴ヶ森』（錦

木）、『二十四孝四段目』（团菊）、『鏡山七つ目』（花千代）、『お

千代半兵衛八百屋の段』（千代登）、大切惣懸合『お染久松野崎

村』（おみつ花千代、久松千代玉、久作国芳、お染团菊、母錦木）

□明治43 (1910-10-12) 『台湾日日新報』

演芸界

●娘義太夫 芳野亭娘義太夫、本夜の語り物左の如し

『白石嘶茶屋場』(国芳)、『播州皿屋敷』(千代玉)、『先代萩御

殿場』(錦木)、『菅原松王下屋敷』(花千代)、『腰越状三つ目』(団

菊)、『中将姫雪責の段』(千代登)、『大切総懸合お駒才三白木

屋の段』(喜造国芳、丈八花千代、お駒団菊、庄兵衛錦木、稚

丁千代玉)

□明治43 (1910-10-13) 『台湾日日新報』

演芸界

●娘義太夫 芳野亭娘義太夫、今晚の語り物は左の如し

『鎌倉三代記八つ目』(千代玉)、『菅原松王下屋敷』(錦木)、『三

勝半七酒屋の段』(花千代)、『安達原三段目』(団菊)、『お染久

松野崎村』(国芳)、『岸姫松飯原館』(千代登)、『大切総掛合忠

臣蔵本蔵下屋敷』(本蔵国芳、三千歳団菊、播右衛門錦木、下

部花千代)

□明治43 (1910-10-14) 『台湾日日新報』

演芸界

●娘義太夫 芳野亭、娘義太夫、本晩の語り物左の如し

『先代萩御殿場』(千代玉)、『お千代半兵衛八百屋の段』(錦木)、

『日吉丸三段目』(団菊)、『伊勢音頭油屋の段』(花千代)、『二十四

孝十種香の段』(国芳)、『三十三間堂原太郎内』(千代登)、大

切総掛合『忠臣蔵本蔵下屋敷』(本蔵国芳、三千歳団菊、伴右

衛門花千代、下部錦木)

□明治43 (1910-10-20) 『台湾日日新報』

演芸界

●娘義太夫 引続き芳野亭にて好評を博し居たる千代登一座の

娘義太夫は、愈々来る二十二日限り千秋楽として台中へ乗込

む由なるが、今晚の語り物は左の如くなり

『恋女房重の井子別』(千代玉)、『日吉丸三段目』(錦木)、『二十四

孝十種香』(団菊)、『菅原寺子屋』(花千代)、『加賀見山七つ目』

(千代登)、『お駒才三鈴ヶ森』(国芳)、『太功記』(総懸合)

●芳野亭の次興行 別項の如く、千代登の娘義太夫打上後は、

二十三日より引続き内地初渡台の三遊派落語、娘新内、二輪加

等、合同一座にて開演の筈

□明治43 (1910-10-30) 『台湾日日新報』

演芸界

●女義太夫一座 芳野亭にて久しく喝采を博せし竹本千代登一座は、其後新竹塹俱樂部に乗込非常なる人気にて、初日より毎夜大入を占めしが、高松同仁社が本日より同俱樂部にて、例の台湾正劇を興行するにつき、二十七日限打揚げ、二十八日台中へ向ひ同地にて、本日より興行の筈

□明治43 (1910-11-08) 『台湾日日新報』欄外記事

●台南公館の娘義太夫 娘義太夫千代登一座は、七日より台南公館にて初目見得、お聴に達しまする初日の語物は〔以下版面範囲外〕

□明治43 (1910-11-09) 『台湾日日新報』漢文版

●台南演芸 娘義太夫千代登一座。自七日始。在台南公館開演。第一日即頗見盛況。

□明治43 (1910-12-26) 『台湾日日新報』

●七面棒 一昨夜府前街を通ると千代登一座が朝陽亭の二階に繰り込んで盛に義太夫を語つて居る▲下手と言つても矢張、義太夫を常食として居る人間は兎角上手なものだ。素人がアレ丈

になるには十五年もかゝるだらう▲之に就て思ひ出すのは

昨今、台北に於ける娯樂の流行である。即ち樂は近きにあるにも拘らず。皆遠きに求めて居る傾向があるではないか▲旭仙の筑前琵琶を聞けば、無暗矢鱈に其真似をしたがつて、マー先生教へて下さいなどと出懸けて行く。骨董屋が来れば、我も我もと通を振り舞して、何んとか蚊とか理屈を言ひ、揚句のはてには偽物を買せられて喜んで居る。国芳の義太夫を聞けば、我輩も一つやつて見やうと、飛んでもない所に力を入れる。其癖、碌なことも語り得ないじやないか▲それから謡曲の流行は、又何と云ふさまか猫も杓子も鴛鳥式の声を張り上げて、近所隣の迷惑も何んの其の、一向御構ひなしで、謡曲をやると御腹が減つて身体がよくなるなどと理屈を附けて一生懸命になつて居る▲其他浪速節玉突など、数へ立てたら数限りもない程、妙な娯樂が流行つて居るだらう▲併し七面棒子をして言はしむれば、義太夫は国芳の徒に、琵琶は旭仙の徒に、謡曲は桂光風の徒に一任すべし。人各本分あり。紊りに他の真似をなすべからず。須く「自己」の職業に精勵して以て楽しみとなすべしである。

□明治44 (1911-01-03) 『台湾日日新報』漢文版

●陣中之元旦 此日南投審界討伐隊。各著武装。於蕃山雲霧之

中。歡慶祝杯。望東三呼萬歲。全線和氣雍々。在本部則久保前進隊長。率幕僚一同。共拳國運擴張之壽盃。余興則以筑前琵琶義太夫其他數種之高音器。陣中新年之祝賀會。如此亦可謂盛矣。

〔明治44 (1911-01-14) 『台湾日日新報』〕

演芸界

●義太夫初大会 明十五日午後六時より、女紅場にて東寧連義太夫大会を催し、其の語物は

『御祝儀』（入登）、『紙屋治兵衛内の段』（一声）、『日吉丸』（米花）、『鈴ヶ森』（■枝）、『三日太平記』（筑紫）、『玉藻前』（蝶■）、『野崎村』（月松）、『酒屋の段』（小嵯峨）、『岸姫松』（亀鶴）、『■の谷』（鵬声）、『御所桜三段目』（相生）、『忠臣蔵四段目』（和楽）、『儀作内の段』（白鳳軒）、三味線（東太夫）

〔明治44 (1911-02-02) 『台湾日日新報』漢文版〕

台政要聞

●共進会彙報 其一

▲紀共進会各館 台南嘉義阿緞三庁農会所聯合南部物産共進会。既於昨日始開催。其期為三星期。茲以其設備各級略紀於左。〔中略〕

▲協賛会余興日程

〔二月一日・二日・三日略〕

▲同四日（星期六）是日除生花大会而外。由午後一時迄夜半。并在新公館樓上開歌留多大会。樓下広間。則由午後一時迄五時。有芸妓舞踏。其繼之者。夜間六時迄十時。復有子弟戲及子弟淨瑠璃會。其余興所開。皆發一例通行券。大人三十錢。童子十五錢。晝夜皆可觀覽。又在夜間者。每人各徵席料五錢。

〔明治44 (1911-02-03) 『台湾日日新報』漢文版〕

台政要聞

共進会彙報 其二

▲協賛会余興日程  
▲同五日（星期日）是日仍在新公館樓下為芸妓舞踏。並子弟戲子弟淨瑠璃會。

〔中略〕

▲同十八日（星期六）是日午後一時迄五時新公館樓下有芸妓舞踏。夜間六時迄十時。復有子弟戲及子弟淨瑠璃會。聞舞踏芸妓中有奇術者五名。有支那人槍術者亦數名云。

〔明治44 (1911-02-11) 『台湾日日新報』〕

●素人／浄瑠璃盛況

去る四日夜開演すべかりし素人浄瑠璃大会は、時間の都合にて延期せられ居たりしが、昨今の両夜新公館にて開かれ、昨夜は十数番の後、師匠野澤吉六「壺坂」を語りたるが、同人は盲人なるを以て、自身の境遇と語物と一致し、大喝采を博したり。其他の台南の木の葉連には、素人離れせし上手あるのみならず、芸妓側よりも御影花壇の五郎、歌仙の駒吉、亀甲屋の春香、山吹の頓兵衛など、太棹専門のもの加はる事として、堂摺連の肩を入る、もあり、かたがた盛況なり（十日台南発）

○明治44（1911-02-26）『台湾日日新報』

演芸界

●活動館 娘義太夫、千葉一座今晩の語り物は

『玉藻前三段目』（梅玉）、『忠臣蔵六』（小三咲）、『佐倉曙儀作内』

（小町）、『御所桜』（梅之助）、『おしゆん伝兵衛堀川』（光玉）、『太功記』（千葉）

●娘義太夫素人合評 ※竹本千葉の顔写真あり

▲千葉嬢 際立つて甘い処も見えないが、平凡の裡に聴衆を魅する腕前があるのは、遠が一座の頭領 ▲光玉嬢 甲の声は飽く迄伸びて健やかなものだから、甲から乙に移る処が寸斗苦し

い。然かし嬢ありて一座の声価を保つて居るかの感じがする

▲梅之助嬢 年輩も恰度宜いが節廻しも中々老熟で確実したものだ。然し嬢には声に一種の疾があるのは惜しい。（拾得）

▲梅之助嬢 語り口は先頃芳野亭に興行つた千代登に似て居る。寧ろ彼女以上伸びの伸びした声曲をもつて居る丈、将来は有望だ

▲光玉嬢 先年来た時よりは、語り口に渋いところも出来、落付きも増した。殊に初日の『三十三間堂』はシンミリ

聞かれた ▲千葉嬢 仇ッぽい顔丈が真打で、声曲は未だ若い若いといふの外なしたが、又若い中にもシツカリした所もないではないと、花を持たせて置く。三味は三次郎と町造、一座

に取ては先づ申分がない。（次郎兵）

○明治44（1911-03-01）『台湾日日新報』

●素人義太夫 新起横街芳野亭に於て、本夜より三日間連夜

素人義太夫の大会を催し、当地デン界の素人名人は挙つて顔を揃へる筈なりと

○明治44（1911-03-05）『台湾日日新報』

●愛国婦人会台湾支部では、昨日の活動館

愛国婦人会台湾支部では、昨日午後一時から会員の為に特に





●活動館崩潰 一昨日午後六時四十分頃、撫台街活動館にて、轟然たる異様の音響起りたれば、附近の人々等は何事の椿事出来かと驚き駈つけけるに、同館内舞台の周囲約二十四坪程の屋根墜落し、殆んど同館の三分一以上崩潰したるものにて、幸ひに同館は目下休演中なりしを以て、人畜の被害はなかりしも、その損害の程度は約七八百円以上の上る由にて、修繕を施すべき可取壊しにすべきかは、問題中なり。原因と云ふべきは未だ判明せざるも、先頃同館に支那奇術師一行の演技したる際、天井に重き梁木を吊り上げ、其儘放任したるに、自然緩みが出来、前記の始末となりたるならんとの説なり

●素人浄瑠璃中止 昨夜活動館に於て開かるべき筈なりし素人浄瑠璃は別項、活動館崩壊の為、遂に当分お流れとなり、追て更に日を定めて開催すべしと

□明治44 (1911-06-21) 『台湾日日新報』漢文版

時事小言

▲内地摂津大掾。新任東京音楽学校之邦楽調査係。聞大掾義太夫也。義太夫雖卑俗。不失為平民的之趣味。大掾能精之。故可委以調査。明治之世。自頒行憲政。益見同仁一視。獨樂不若与衆樂。邦樂之調査必要也。挾一芸一技。猶可以卓然樹立於世。而

況士之抱奇才者哉。

▲台湾之音樂當調査乎。當改良乎。曰當調査當改良者。不僅音樂一門。習慣上當調査者多。精神上當改良者多。無適當之物。則不能行適當之調査。冀適當之改良。故吾人每絶叫曰。台湾島民之向上。非教育不足以勝此大任。國語學校例年生徒募集数殊少。國費而外。高等學校及其他実業專門學校不可不設。盛世之時。野無遺臣。固為美事。使其子弟有美質者。皆得受相當教育。遂相當發達。然後進而為世用。猶善中之善者也。

▲清国自兩戰役敗北以來。國民之覺醒進步匪尠。国内有小、中、高等諸學校。留學外國者多。■新知識以歸。視南洋諸島勞動者之援金。其貢獻於國家。猶出一籌。彼等人士穩健者多。運動憲政。近乃設立朱福一團政黨。讀其政綱規約。亦有可觀。或曰支那人種能理論不能实行。雖然理論者实行之前提。目清国之覺醒。誰曰不可。本島人當研究向上之道。為我國家報効。毋落支那人之鞭後也。

□明治44 (1911-06-26) 『台湾日日新報』

●東海岸南下録 (八) 墾丁にて 益子生

〔恒春種畜場の新元技師、高田局長、佐藤阿緞庁長官と同宿。三人が詠んだ短歌が素人義太夫に關係するため、抄出して翻刻〕



なかりしは御盛んのこと、いふべし

○明治44 (1911.11.25) 『台湾日日新報』漢文版

●家族共楽会概況 大昨日之本社家族共楽会。本擬古亭庄之清涼亭。因大雨驟下。仍移艸野野亭。飯劇場一座。為演芸之処。社員及家族環坐若觀劇者。十時開會。团长今井社長述開會之辭。模擬店正午開始。余興奇術。落語。筑前琵琶。喜劇浪花節滑稽忠臣蔵。義太夫。喜劇悲劇。円山公園。芸妓小菊住宅等。又和文記者扮支那革命大本營悲劇。黃黎党首及漢口美人。最博一同喝采。式終爆竹三發。社員家族。各抽福引。極終日之歡適而後散。

○明治44 (1911.11.27) 『台湾日日新報』

●素人淨瑠璃納会 本日午後五時より、新起横街魚金楼上に於て、素人淨瑠璃東寧連納会を開催する由にて、傍聴隨意。その番組、左の如し

『お染久松野崎村の段』(相生)、『御所桜三弁慶上使の段』(肥声)、『太功記十段目』(魁)、『朝顔日記宿屋の段』(勝美)、『玉藻前三段目』(鱗鳳)、『三日太平記九ツ目』(藤枝)、『お駒才三鈴ヶ森の段』(花笑)、『志度寺』(三洋)、『菅原伝授四段目』(達摩)、

『壺坂』(菊八)、『日吉丸三段目』(富代)、『忠臣蔵本蔵下邸』(金之助)、『二十四孝』(福治)、総掛合『千両幟』、三味線(東太夫)

○明治44 (1911.11.30) 『台湾日日新報』

●素人淨瑠璃会 ▲廿七日の晩 素人淨瑠璃が魚金に有ると云ふから駆け附けて見たら、丁度簾中で語つて居つたのは『菅原の寺小屋』、うまいと思ふたら其筈、真打の相生太夫であつた。今聞いた儘を並べて見やうなら、前座として罷り出たのが勝美太夫とて、小林工務所の主人である。語り物は『朝顔宿屋の段』。氏は今度が初舞台とのこと、何うかと思つたら案外スラスラと遣つて退けた。声に於ては恐らく当夜の白眉だらう。勝美君、継続勉強し賜へ。次が『太十尼ヶ崎』魁太夫の龍木さん。此芸題は大分語り悪いさうだが、先づは無難で拍手の裡に引込む。○三洋太夫の牛乳やさん、髻と云ひ体格と云ひ、押出しは当夜の第一等、頗る立派なものだ。芸題は『志度寺四ツ目』、語り工合から声まで申分ないとは見物人(聞き手に非ず)の評を其儘。肥声太夫の『弁慶上使の段』は人が来て遺憾ながら聞洩したが、次は『玉三小坂部館の段』、太夫は鱗鳳と云うて、八甲庄の橋本さん。優男の美声と来て居るから丁度語り物に適まつて居た。魚金の富代姐さんは『日吉丸三の切』、菊八姐さ

んが『壺坂山寺の段』、何れ劣ぬ梅桜。世に云ふ海山千、其千まいば一枚張りで人を恐れぬ遣り工合。成程うまいと感心した。茲等が当夜の花だらう。『鈴ヶ森』は可笑大夫、吾妻の帳場だと聞いたが、別段批評の点はない。露骨に云へば今少し勉強をして欲しいとは僕計の考なさうな。代り合まして罷りつん出たのは例の金之助姐さん、見台据ゑて真面目の姿はスキースキー煽つて管捲く時とは大分違つて居る。『本蔵下屋敷』は能く當つたが、僕は『寺小屋』のよだれくりでも聞かしてもらひたかつた。藤枝大夫の『三日太平記』、何うしても素人とは思へない。古者屋をやめて模範家屋で義大夫のお師匠様はどうですか。真打として悠々構へたのが相生大夫、語り物は『お染久松野崎村』。流石は真打、天晴々々。福治姐さんの『二十四孝』。取止めだと云ふ。其の故を問へば「満洲へ知れませず」とは何の事やら。場内に張り出された「何々姐さんへ」とか「勝美文へ」とか寄附品積んで山の如し。中に「万金丹一万粒、姐さん輩と勝美文へ」は頗る振つて居つた(松坊)

○明治45 (1912.01-12) 『台湾日日新報』

●南座の素人浄瑠璃公会

台北の東大夫来南せしに付ては、来る十二、十三の兩日、南座に於て台南天狗連の義大夫会を催

ふす筈なるが、同日は遊検の頓平、御影の五郎、桔梗屋の春香等の芸妓連も出演の筈にて、尚ほ同大夫一行は、打狗、鳳山、九曲堂、阿緞、蕃薯寮及び各精糖会社所在地等をも廻る筈なりと

○明治45 (1912.01-15) 『台湾日日新報』

演芸界

●追善浄瑠璃会 豊竹三玉の追善として十五、十六、十七の三日間 午後五時より八甲庄日蓮宗布教所に於て素人浄瑠璃各連聯合大会を催すべく、其出演 左の如し

十五日 『御祝儀宝の入舟』(登山)、『朝顔日記浜松』(笑昇)、『御所桜弁慶上使』(静)、『忠臣蔵三段目』(如月)、『皿屋敷鉄山館』(我楽)、『三日太平記光秀切腹』(真砂)、『三勝半七酒屋』(亀鶴)、『野崎村』(柳枝)、『藤栗毛赤坂並木』(白鳳軒) 十六日 『四ツ谷怪談伊右衛門住家』(一声)、『義士銘々伝赤垣出立』(勝木)、『三日太平記松下住家』(藤枝)、『三十三間堂平太郎住家』(喜楽)、『御所桜弁慶上使』(岬)、『佐倉宗五郎義作切腹』(みよし)、『日吉丸五郎助切腹』(松鶴)、『加賀見山又助住家』(肥声)、『忠臣蔵本蔵下屋敷』(相生) 十七日 『太閤記十段目』(花笑)、『菅原四段目』(花遊)、『三

勝半七酒屋』（長枝）、『玉藻前三段目』（鱗鳳）、『義士銘々伝赤垣出立』（嵯峨）、『加賀見山又助』（魁）、『忠臣蔵勘平切腹』（三洋）、『皿屋敷鉄山館』（松香）、『お半長右衛門帯屋』（和紫白鳳軒掛合）、『先代萩御殿場政岡忠義の段』（五角）

#### 花柳界

●福治の足洗ひ 検番明書中、其二の席を離れず、追に腕のある女は異つたものと料土をして驚嘆せしめた魚金の福治拍子は、この全盛を名残りとして、今度断然廃業すると云ふ。而して曰く「東京の妹から金を送つて来ましたさかい、借金を返して帰ります」と。真相は知らず。兎に角お芽出たい事だ

#### □明治45（1912.01-19）『台湾日日新報』

●素人義太夫大人 八甲庄日蓮宗布教所内に開催せし追善素人義太夫は、十五、十六、十七の三日間大人入叶にて「イヨ一提灯ヤー」「ヘイ金貸しも致します」杯と高座と聴衆との飛んだ掛合あり。師匠三玉婆さん、大喜びなりき。

●十把一束 ▲霧島通りの長屋の妻君は声自慢の義太夫を夜更け迄やられるので、裏通りの人々迄が迷惑してゐる（裏の人）

#### □明治45（1912.01-20）『台湾日日新報』

#### 演芸界

●淡水の素人浄瑠璃 淡水の素人浄瑠璃歎音連にては、来る二十一日午後五時より、同地公会堂に於て初会を催す筈にて、其語り物左の如くなり

『三勝半七酒屋』（笑楽）、『朝顔日記宿屋』（春笑）、『御所桜弁慶上使』（三笑）、『菅原伝授手習鑑寺子屋』（雪溪）、『忠臣蔵二段目の清書』（錦声）、『鎌倉三代記三浦別』（■玉）、『玉藻前三段目』（梅枝）、『皿屋敷鉄山館』（一声）、『八陣正清本城』（弥生）、『三十三間堂平太郎住家』（基楽）、『箱根靈験記滝の段』（白鳳軒）、三味線（豊竹三玉）

#### □明治45（1912.02.07）『台湾日日新報』

#### 演芸界

●素人浄瑠璃会 八甲庄日蓮宗布教所内に於て開催中なる素人義太夫は、六日限りにて打止めの筈なりしが、好人氣の爲め、更に今晚まで延期する由にて、その語物は左の如しと

『桜丸切腹』（白鳳軒）、『合邦内の段』（美好）、『志度寺の段』（松香）、『岸姫松三の切』（岬）、『又助住家』（三玉）、『平太郎住家』（喜楽）、『沢市内の段』（小嵯峨）、『本蔵下屋敷』（相生）、大切

『野崎村の段』（総掛合）、三味線東太夫、鐘籠、三玉、三次郎

● 明治45 (1912.02.13) 『台湾日日新報』

● 一昨日の円山

※義太夫にかかわる部分のみ翻刻

▲豊川稲荷 一汽車の度毎に吐出される台北の紳士淑女、坊ちゃん、嬢ちゃん、お鍋、権助、你や等は、先づ豊川稲荷へと志す。「開運豊川陀尼尊天」の赤青、藍、黄白、茶杯の色々の旗が立つて景気を添へて居る。稲荷堂では今お経の最中「ナンナンナンナムニヤムニヤムニヤムニヤ」何んだか一向分つたものじや無い。他の建物の方で余興が始まつて『靈馬の漣』とかの題で筑前琵琶をやつて居た。夫れから此度が義太で「え、此のところお聴に達します外題『朝顔日記 宿屋の段』」、語り具合もまづかつたが、ズラリならべた生花もまづいな

● 最近の澎湖島

▲素人、義太夫会 二月三日夜、横山庁長主人となり、官邸素人義太夫会を開く。太夫は足立要塞司令官、沢田医院長、其他数名なりしが、来会者は林郵便局長、田村庶務課長、斎藤警務課長、平井財務課長、平野税関支署長、其他百余名にして非常の盛会なりき

▲浪、速節来る、二月初旬より吉川梅雀一行、媽宮に來り、料亭吐月に於て講演したるが、娯楽機關に乏しき同地のこと故非常の大人氣にて、毎夜百余名の入場者ある由

● 明治45 (1912.03.06) 『台湾日日新報』

演芸

● 娘義太夫 芋助一派の喜劇で興行を続けて来た芳野亭へは、今度其上置とし女形二名を加へる他、別働隊として京阪に名のある娘義太夫の若手連数名を、国芳が引率して渡台する事となり、既に四日神戸発の信濃丸に乗込んだと云へば、堂摺連も気が採める事なるべし

● 明治45 (1912.03.15) 『台湾日日新報』

● 朝日座 上村一座の人身浄瑠璃本夜の替り芸題は、前「生写朝顔日記」切「伽羅先代萩御殿の段」にて、其太夫如左

秋月巴之助屋敷（浪尾太夫、糸浅次郎）、小瀬川の段（鳥勢太夫、糸千賀平）、摩谷ヶ嶽の段（綱登太夫、糸仙右衛門）、浜松小屋の段（春木太夫、糸千賀平）、徳右衛門宿屋より大井川迄（浜太夫、糸仙右衛門）、深雪岡助道行の段（懸合）、千代萩御殿（内匠太夫、糸勝次）

□明治45 (1912.03.16) 『台湾日日新報』

演芸

●芳野亭 本夜よりの替り芸題は一番目『二人娘』三場、二番目『大冒険鼻』二場にて、中幕『恋娘昔八 文鈴ケ森』

(団加津、糸三次郎)、『先代萩御殿場』(国芳、糸三次郎)、喜劇の配役左の如し ※配役翻刻省略。

●朝日座 人形浄瑠璃 本日の替り芸題は、『近江源氏先陣館』、『艶姿女舞衣』、『酒屋』、『肥後の駒下駄五条鯉屋の段』等にて、太夫左の如し

和田兵衛隠家の段(綱太夫、糸千賀平)、佐々木盛綱陣家の段(内匠太夫、糸勝治)、三勝半七酒屋の段(浜太夫、糸仙右衛門) 肥後駒下駄鯉屋の段(春木太夫、糸浅次郎)

□明治45 (1912.03.18) 『台湾日日新報』

演芸

●人形浄瑠璃 朝日座の上村源之丞一座は、開演以来雨の為に余り捗々しい人氣が無いが、人形の立派な事は一般の認むる処である。その人形の活動は或点に於て確かに芝居以上の趣きを見せ、恰度歌麿の絵の様なものがある。『酒屋』のお園の如き、人間以上の色気と艶がある。併し如何も余り土地に適應しない様

なのは氣の毒な事だ

●朝日座 十八日替芸題。前『奥州秀衡有髮婿』、中『箱根靈驗記十一段目』、切『都五条牛若弁慶仕合段』にて、重なる語場は

池田駅宿屋の段(春木太夫、千賀平)、藤原秀衡館の段(内匠太夫、勝治)、後藤昌司館の段(綱登太夫、千賀平)、箱根靈驗記三人上戸段(浜太夫、仙右衛門)、都五条橋段(かけ合)

●芳野亭 国芳の帰来と団加津の加入、五郎丸と十三里の復帰とに依つて、芳野亭の人氣は大したものだ。蓋し其人氣たるや芋助一派の奮闘的よりも、二女義の乱れ髪にあるらしく、中幕頃を計つて、特に客足が繁くなる様だ

十把一束

▲朝日座の人形は舞台は感心だが淨るりは詛まりだらけね(人形新)

□明治45 (1912.03.26) 『台湾日日新報』

演芸

●漸く賑ふ 現在の演芸界は恰度更衣時期で、朝日座では活動写真、楽座では二代目の雲右で開場。孰れも繁ぎの興行で

あるが、この繋ぎの間には反つて多くの変化が起り、先客様は

入れ替りの眼先きの変わった興行が行はれる、現に活動写真は

少国民君の人氣を引付けて、ブーカドンドンの大当り、雲石で

も批評の如何に聞らず、これも相当の御入来があり、殊に

芳野亭の如きは引続き大に當つて居る様だ処で

●栄座では、本月末に新劇一行の乗込みを終り、来月一日より

開演する運びとなる筈だ。又一方

●朝日座は活動写真を打揚げ次第、直ちに大阪文楽連の浄瑠璃

を懸ける筈だ。尤もこの文楽の太夫連は、去る地方の同好

天狗連が大に力瘤を入れたので、渡台する事となつたさうだ。

その太夫の顔触れは津国太夫、其太夫、鶴尾太夫以下数名で、

三味線は大四郎、六之助、六蔵等である。遅くも一兩日中には

開演すべしと云へば、定めしデン通連の大人氣あるべし

□明治45 (1912.03.28) 『台湾日日新報』

演芸 ●芳野亭 本夜よりの替り芸題は『相統争ひ』三幕

『靈魂不滅』二幕にて、義太夫及役々左の如し

『お染久松野崎村』(団加津、糸三次郎)、『菅原伝授手習鑑寺子

屋』(国芳、糸三次郎)

※配役翻刻省略。

●朝日座 津国太夫一座の浄瑠璃、本夜の語り物左の如し

『御所桜弁慶上使の段』(国子太夫、糸六之助)、『玉藻前道春館

の段』(里太夫、糸六之助)、『盛衰記逆櫓の松の段』(其太夫、

糸大四郎)、『日吉丸小牧山城中の段』(鶴尾太夫、糸六三)、『菅

原伝授手習鑑寺子屋の段』(津国太夫、糸大四郎)

□明治45 (1912.03.29) 『台湾日日新報』

演芸

●朝日座の浄瑠璃 其初日は余り大入でも無かつたが、客の多

くは斯道で苦勞をして居る。所謂自称天狗連丈々に、孰れも

熱心に耳を傾けて居た。一般の評判を聞くと遠がに確かりとし

た語り口で、一人として落が無いと大に感寸満足して居た様だ。

聞く処に依るとこの太夫の一行が神戸で乗船の際、艇船が顛覆

し、見送りの婦人連迄で海に落ち、既に一命危ふかりし処を、

漸く救上げられたさうで、命懸けて来たのだとは、遠路如何

にも御苦勞様である、本夜の語り物は左の如くだ

『三十三間堂』(国子太夫)、『忠臣蔵六ツ目勘平切腹』(里太夫)、

『本蔵下屋敷』(其太夫)、『お駒才三鈴ヶ森』(鶴尾太夫)、『太

功記十段目』(津国太夫)

十把一束

▲雲声、雲吉、不知火、福右衛門、雲丸、小雲、龍城、如雲、雲林の外に桃中軒と号して巡業するものあらば、雲入道に關係なき者なり。星、巴、風、柳、誠、以下皆然り。詳細は福岡市外八反田桃中軒へ（岡本家）

明治45（1912.03.31）『台湾日日新報』

津国太夫を聴く

▲朝日座では二十七日の晩から大阪文楽若手連の淨瑠璃で開演した。男義太夫としては四年前に大島太夫一座が見えた計りで、当地の素人義太夫連の爲めには、恰も浪党が燕平や雲柳に依つて溜飲を下げてると同様、尠からず医渴の思ひで歓迎されたらしい。でなくとも眞の淨瑠璃を味はんとせば団加津とやら国芳とやらの挑発的語り振を見るより、矢張り男太夫のドツシリとした処を僕は好む。

▲近頃 東京 義太夫組合の古老連は、稍もすれば男義太夫が不振の状態に傾きつつあるを慨き、是が振興策として大阪文楽式の後進養成所を設置せんと内議中だとか、兎も角大阪の文楽はデン界の淵藪、こゝで咽喉を拵らへた。今度の一座、亦必ずや聴くべきものあらんと、遅がけ乍ら飛出す。

▲成る程若手揃だ、其太夫の『弁慶上使』は中程から聴いたのだが、例のおわさのサワリは惜しいかな、今些し艶を保たしたかつた、然し熱心な処は買はざあなるまい。

▲次は鶴尾太夫が六之介の糸で「朝顔」を語る、頗る沈著た語り口声に、幅のないのが憾だが、得意は世話物らしい。「露の干ぬ間」の琴唄も悪くなし。「語らう間さへ夏の夜の」のサワリに入つてからは一段フツクリを持ち前の涼しい音を流して大向ふの天狗連を納得させ、又「天井川の場合」も極めて力が這入り、大喝采

▲切はイヨー待つてましたの津国太夫の「合邦」と、遠がは真打だ前に語つた鶴尾太夫と彼あも総ての点に段が異うかと、兎耳して聴く、冒頭からシツトリと客に堅睡を呑ませ、語る程に聴くほどに合邦も母もお辻も益々活きて来る。「幽霊もさぞ空腹からう」の合邦の詞は真情が溢れ、母の欣々しつ、娘お辻との対話も温か、殊に手負ひになつてのお辻の述懐からは何とも云ぬ妙味を含み、又「南無まいだあ、南無まいだあ」は悲痛深刻だつた。斯して終まで客を起せぬ技倆は、確かに当地のデン界を喰せることだらう。大四郎の糸は音光沢もあり撥も軽い。

（烏天狗）

演芸

●芳野亭 里の家新喜劇 替芸題、三十一日より一番目

『親心』二幕、二番目『見合』二幕、中幕『忠臣蔵六ツ目』

(竹本団加津)、八陣六ツ目正清本城(竹本国芳)等にて喜劇

の配役左の如し ※配役翻刻省略。

●津国太夫一座 大阪文楽座若手、竹本津国太夫一座は昨晚限

り千秋楽を告げ、基隆座に乘込み、明日一初日開演

□明治45 (1912.04.13) 『台湾日日新報』

演芸

●芳野亭 十三日の語り物左の如し

『御所核三段目弁慶上使の段』(勝子)、『朝顔日記宿屋の段』(団

加津)、『忠臣蔵八つ日本蔵下屋敷の段』(は昇)、『三十三間堂

棟木由来平太郎住家の段』(国芳)、『絵本太功記尼ヶ崎の段』(勝

玉)

●芳野亭の娘義太夫

阪神娘義太夫なるもの組織されたので、二日目、即ち十日の

夜、一寸聴いて見た。恰度新来の勝子と云ふ当座の年少者が

『朝顔日記』の浜松を力一ぱい語つて居たが、然しまだ磨き初

めの玉だ。末頼母しいには違ひないが、歳の割には好く語つて

居る。次は団加津の『本蔵下屋敷』であつたが、当人天性艶物

を語る事が出来るを自覚して語つて退けつゝ、あるは、聴客の

多く認める処である。然し未だ海の物とも山の物とも定まらね

ば、熱心に奮励してよからう。其の次は新顔のは昇、『阿漕ケ

浦平治住家』を無難に語り終つたが、一段中抜く事約中ばと云

うてよい程の抜き語りだ。其れも時間と声の都合上、万已むを

得ぬ事と察して置く。次ぎは国芳の『太功記十段目』、艶のあ

る声で語り出した時は満場国芳の態度に視線は寄つたが、無暗

に扇で見台を叩いたり、平手を打つたり、首をいやに前に突き

出したりする巧者は今は面白く思はぬ。併し当座で艶物を語る

人は国芳の外にない事は確に認めて置くが、殊更に悪い癖を慎

しんで語つてもらひたい。其次ぎが新渡台の勝玉で、題物は

『伊賀越道中双六 沼津の里』を鏗のある声で語り出した時は、

其態度がドツシリして居るので、真打の価値は充分あるが、

『沼津』で平作が「左様なれば帰ります」からは一段好く聴か

れた。アノ悲しい声で物語に移つた時、沁々と親子の者を眼前

に髣髴たらしめたゞけは感心する。又「御臨終で御座りますか」

と云ふた一声が、聴客の腸をえぐらしめたと同時に満足の二字

はありありと頭の中から湧いて来た。真打は真打だけであると

感心して置く。何にがさて、聴客は皆な義太夫に素養のある人

ばかりだから、語る人も聴く人も一生懸命で、気持ち好く思はしめて居た。糸は溟菊を改めた港玉で、四五年前とは腕も余り変つて居ない様に思はれたが、妖艶な処は已に褪めた今、慾を言ふならば神戸より国玉を呼び寄せて、上置きとしたれば、此上もなき一座と思ふ（鯨太郎）

□明治45 (19120417) 『台湾日日新報』

演芸

●芳野亭 十七日の語物、左の如し

『菅原手習鑑寺子屋の段』（勝子）、『三十三所つば坂霊現記沢市内の段』（団加津）、『彦山権現六助住家の段』（は昇）、『朝顔日記宿屋の段』（国芳）、『一の谷熊谷陣屋の段』（勝玉）

●基隆座 此程より例の阿波人形上村源之丞一座にて興行中なるが、同地素人浄瑠璃雀連より、毎夜一幕つつの助語りを出す為め、相当の人氣を呼び、昨夜は吾勇の『赤垣徳利の段』、また今十七日は吾妻の米八、愛之助が『桃太郎』、奈良江、小富士などの連三味線にて『野崎村』を演ずる由なれば、引続き好人氣となるべしと

□明治45 (19120420) 『台湾日日新報』

演芸

●芳野亭 二十日の語物、左の如し

『忠臣蔵三ツ目けんか場』（勝子）、『撰州合邦ヶ辻合邦内の段』（団加津）、『朝顔宿屋の段』（は昇）、『御所桜弁慶上使の段』（国芳）、『三勝半七酒やの段』（勝玉）

●淡水素人浄瑠璃會 同日観音連素人浄瑠璃例會は、二十日午後六時より、川口屋旅館に於て開催。語物は左の如し

『宝の入舟』（入登）、『二度目清書』（三笑）、『日吉丸三段目』（弥生）、『安達原袖萩祭文』（二声）、『太功記十段目』（香玉）、『御所桜弁慶上使』（雲漢）、『菅原寺子屋』（錦声）、『甕仇討滝の段』（松玉）、『三十三間堂平太郎住家』（笑玉）、『加賀見山又助住家』（梅枝）、『八陣正清本城』（可幾久）、（三味線）豊竹三玉

□明治45 (19120430) 『台湾日日新報』

十把一束

▲中毒生に答ふ。能く泣き大口開いて笑ふは旧式にして、高尚なるものにあらず。殊に素人浄瑠璃の趣味は泣入、笑声の研究にあらざるなり（喜多六）

□明治45 (19120605) 『台湾日日新報』

演芸

●芳野亭 五日より芸題替。最初娘義太夫出語。一番目『無言の夫婦』二幕、二番目『嫉妬の競争』四場にて、役割は(※芝居の配役紹介、翻刻省略)

●同娘義太夫は、五日語物、左の如し

『白石嘶吉原揚屋』(勝子)、『先代萩御殿』(団加津)、『お染久松野崎村』(は昇)、『菅原手習鑑寺子屋』(国芳)、『撰州合邦辻』(勝玉)、糸(港玉)

□明治45 (1912-06-07) 『台湾日日新報』

演芸

●芳野亭の義太夫 今夜の語り物は左の如し

『日蓮記勅作住家』(勝子)、『安達ヶ原袖萩祭文』(団加津)、『彦山権現六助住家』(は昇)、『お染久松野崎村之段』(国よし)、『伊賀越六ツ目沼津里の段』(勝玉)、三味線(糸湊玉)

□明治45 (1912-06-08) 『台湾日日新報』

演芸

●芳野亭 八日より替狂言は娘義太夫を初めとし一番目『無理心中』三場、切狂言『お染久松野崎村』茶番一場にて

配役は(※芝居の配役紹介、翻刻省略)

●同娘義太夫の八日語り物は

『御所桜弁慶上使』(勝子)、『阿漕平治』(団かつ)、『忠六勘平腹切』(は昇)、『撰州合邦』(国芳)、『日吉丸小牧山』(勝玉)

□明治45 (1912-06-15) 『台湾日日新報』

●バラック売店の余興 新公園内バラック商店にては既報の如く売店繁昌策として、愈々今夜より余興を開始する筈にて、其種類は浪花節、義太夫、能狂言、仕舞、剣舞、其他にして、尚各商店にては店頭にて電気仕掛の造り物を陳列すべしと

演芸

●芳野亭 今夜より『代診』及『恋の失敗』六場にて義太夫其他の配役左如(※芝居の配役紹介、翻刻省略)

日吉丸小牧山城中(勝子) 三十三間堂平太郎住家(団加津) 先代萩御殿場(国芳) お俊伝兵衛堀川(勝玉)

□明治45 (1912-06-21) 『台湾日日新報』

演芸

●バラック街余興 降雨のため中止中なりし。バラック街の

余興は二十一日より再び開始の筈にて、素人浄瑠璃番組は左の如し

△二十一日 『箱根靈現記（菅谷）、御所桜三の切（勝治）、三

日太平記（艶治）、千代萩竹の間（菊水）、鏡山又助（我笑）、

『弥治喜多赤坂』（和楽）、『布引四段目』（相生）、糸（かね龍）

●芳野亭 本夜より『嫉妬』二幕『野晒』三場にて、義太夫語りのおよびはいやくとう語物及配役等、左の如し

『日吉丸小牧山城中』（勝子）、『朝顔日記宿屋』（団加津）、『蝶

花形小坂部館』（国芳）、『菅原寺子屋』（勝玉） ※配役翻刻省略。

#### □明治45（1912.07.06）『台湾日日新報』

#### 演芸

●昨今の演芸界 浪曲界の明星雲右、南去して以来台北の劇界は至つて寂寞たるものだ。朝日座、栄座、芳野亭共に拍子抜けのした様に動いて居る。一日も早く推移向上した社会に伴ふ発展が必要であらう

●芳野亭 同亭の喜劇一行もだんだん上達の域に達して来た様だが、もう少し気障なクスグりを少なくして、筋で笑はす様にすればいいのだが……女義太夫も中々評判がいい。今度 国芳は鼻が悪くて台北医院に入院したので、一寸義太夫は淋しからう。

本夜よりの語物及び替狂言は次に

▲義太夫 『三十三間堂平太郎住家の段』（勝子）、『明烏雪の曙

山名屋の段』（団加津）、『尼ヶ崎の段』（勝玉）

▲喜劇 『ホワイトドッグ』（二場）、『紅ハンカチーフ』（二場）、『女中のお目見得』（二場）

(2) 大正

□大正 1 (1912-09-10) 『台湾日日新報』 欄外記事

●義金淨瑠璃會 風水被害救 (版面切のため不可読) たるが、

■らに■■■の素人浄るり■は、十日、十一日、十二の三日間■

■て (版面切のため不可読) 義金募集の淨瑠璃大会を催す由に

て初日の語物は左の如し

(版面切のため不可読)

□大正 1 (1912-09-12) 『台湾日日新報』

演芸

●朝日座義金淨瑠璃 十二日、三日目の語物は左の如く、これにて千秋楽

『御祝儀宝入船』(叶)、『岸姫松飯原館』(冬木)、『佐倉曙儀作内』

(美好)、『忠臣蔵六段目』(三洋)、『腰越状泉鋪』(我笑)、『御

所桜三段目』(肥声)、『太功記十段目』(柳枝)、『三十三所壺坂』

(菊八)、『三十三間堂平太郎内』(金之助)、『躰仇討滝の段』(翁

軒)、『伊賀越平作内』(和楽)、『盛衰記三段目』(相生、大切)『千

両織稲川内』(師匠連総出、三味線師匠連、櫓太鼓曲弾)

□大正 1 (1912-11-10) 『台湾日日新報』

●乃木大将 / 淨瑠璃募集 大阪市の株式会社近松座にては

乃木大将及び夫人の忠烈貞淑の事蹟を淨瑠璃に著作し開演せ

ば、更らに世道人心に裨益する処多大なる可しとて、今回

懸賞を以て操り人形演劇用新作淨瑠璃 (三幕物) を広く募集

すること、なれり。其期限は本年十二月二十五日限り。同座

ぶんげいがかりあて送付す可く、応募原稿は斯道大家に委嘱して審査

せしめ、甲賞には金三百円、乙賞には百円、丙賞には五十円を

呈すべしと

□大正 1 (1912-11-26) 『台湾日日新報』

演芸

●全島素人義太夫会 故白鳳軒追善供養の爲め、来る二十六

日より二十八日迄三日間、栄座に於て全島素人淨瑠璃大会を

開催する筈にて、乱表左の如し

『壺坂』(一声)、『玉藻前三段目』(十三)、『本蔵下屋敷』(十雀)、

『三日太平記』(藤枝)、『忠臣蔵三段目』(鱗鳳)、『熊谷陣屋』(鹿

生)、『四ツ谷』(かしく)、『新吉原』(花笑)、『又助内』(我笑)、

『三日太平記』(艶二)、『御所桜三段目』(燕)、『義経腰越状』(組

次)、『弁慶上使』(弥生)、『御所桜三段目』(不二)、『皿屋敷』(冬

木、『玉藻前三段目』(玉角)、『平作住家』(吾才)、『合邦内』(相水)、『太十』(魁)、『御所桜三』(三松)、『躰仇討』(三洋)、『忠六』(山水)、『三勝酒屋』(亀鶴)、『忠三』(菊水)、『合邦』(久木)、『忠三』(如月)、『柳』(喜楽)、『惣五子別れ』(美好)、『日吉丸三』(松鶴)、『紙治』(松雀)、『忠四』(糸雀)、『彦九』(勝木)、『陣屋』(菅枝)、『蝶形八ツ目』(口三)、『太十』(梅枝)、『吃又』(和楽)、『大文字屋』(相生)、『又助』(肥声)、『赤垣』(吾勇)、『柳』(■■■)、『先代萩』(金の助)、『紙治』(菊八)、『三勝酒屋』(鈴八)、『三味線』(■東) (竹本八重) (竹本鐘龍) (豊竹三玉)

□大正一 (1912.1.28) 『台湾日日新報』

演芸

●芳野亭 今二十八日より (三日間)、『替り芸題左の如し』

(一番目) 『だぶつ寅』二場、(二番目) 『芝居の稽古』四場 (大詰め) 『命の安売』二場

〔配役省略〕

おなじみの女義太夫 (三日間) の語り物左の如し

『玉藻前三段目道春館の段』、『伊賀越三ツ目沼津里平作内の段』、『一の谷三段目熊谷陣屋の段』(竹本勝玉) (三味線竹本国芳)

●栄座の義太夫大会

白鳳軒浦部氏の追善供養とありて、二十六日より二十八日まで三日間、栄座に開催の全島義太夫大会は、毎夜非常の人氣なるが、舞台の右側に白鳳軒の祭壇を設け、生前由縁の者は入替り焼香を絶たず。扱二十六日夜の重なる太夫の語り口、一口つつの評を下さんに△梅枝の『尼ヶ崎』一と通り△吾勇の『赤垣』手に入つたもの△寿々女の『弁慶』は今一息の修業が肝心△鈴八の『酒屋』其咽喉といひ其態度といひ、コセツカず例の『今頃は』からは艶麗大喝采△時間の都合で相生の本蔵は、遺憾乍ら聞くを得ざりしは残念(鳳梨子)

□大正一 (1912.1.12) 『台湾日日新報』

●素人浄瑠璃

本日夕刻より、八甲庄日蓮宗布教所に於て素人浄瑠璃の催あり。其の語り物左の如し

『御所桜弁慶上使』(艶次)、『伊賀越道中双六七』(梅枝)、『妹背山鱧七上使』(菊水)、『鏡山又助住家』(我笑)、『合邦辻合邦内』(久木)、『赤垣源蔵』(勝木)、『忠臣蔵六』(三洋)、『大日記十』(松鶴)、『日吉丸三』(三松)、『二代鏡秋津島内』(和楽)、『平仮名盛衰記逆櫓』(相生)、『紙炬炬燵』(愛水)、『三十三所壺坂』(一声)、『先代萩御殿』(組次)、『お俊伝兵衛堀川』(総

かけ合)、糸鐘龍

□大正 1 (1912-12-18) 『台湾日日新報』

演芸

●素人義太夫納会 十八日午後六時より八甲庄日蓮宗布教所に於て、素人連中浄瑠璃納会を催す筈にて、其語物乱表は『御所核三』(義昇)、『皿屋敷』(つばめ)、『柳』(喜楽)、『菅原四つ目』(松風)、『酒屋』(長枝)、『本蔵下屋敷』(美好)、『志渡寺』(松香)、『御殿』(五角)、『忠六』(東山水)、『弁慶』(三笑)、『赤垣』(勝木)、『又助』(肥声)、『源蔵戻り』(松鶴)、『四ツ谷』(二声)、『忠四』(相水)、『帯屋』(和楽)、『道春館』(冬木)、『合邦』(三洋)、三味線(三玉)

□大正 2 (1913-01-30) 『台湾日日新報』

●義太夫の稽古に費ふ 北門街三丁目西村雜貨店の店員長谷川勝次は、昨年八月中得意先より九円余受取り、義太夫の稽古代に入れ込み、その後桃園土名武陵街得源港方に雇はれ、西村より横領の告訴を受け、当地警務課に身柄押送取調中なるが、僅かの金なれば、示談になりさうなり

□大正 2 (1913-02-19) 『台湾日日新報』

●素人義太夫 十九、二十、二十一の三日間市場内同好会演芸場に於て、台北、基隆素人義太夫大会を催すべく、木戸無料にして、その語りもの左の如し

『壺坂』(二声)、『上かんや』(梅枝)、『本蔵下屋敷』(藤枝)、『皿屋敷』(冬木)、『白木屋』(和楽)、『璧滝の場』(我笑)、『三日太平記九』(艶次)、『阿漕浦』(組次)、『千両幟』(弥生)、『お俊伝兵衛堀川』(吾勇)、『岸姫三』(相生)、『忠六』(三洋)、『柳』(三松)、『太十』(魁)、『佐倉曙』(三好)、『合邦』(久木)、『日吉丸三』(喜楽)、『忠三』(菊水)、『鈴ヶ森』(亀鶴)、『菅四』(勝木)、『日蓮記三』(松鶴)、『先代萩御殿』(糸雀)、『鏡山又助内』(肥声)、三味線(東、鐘龍、三玉、勝玉、八重)

□大正 2 (1913-03-16) 『台湾日日新報』

頓狂詩  
答機山人 埃山人  
在島三年頻売油。時向見台声如牛。  
休笑浄瑠璃無節。圭角禁物当世流。  
〔在島三年頻りに油を売り、時に見台に向かひて声牛の如し。笑ふを休めよ浄瑠璃に節無きを。圭角は禁物、当世の流。〕

□大正2 (1913-03-20) 『台湾日日新報』

●打狗だより

▲素人浄瑠璃会 打狗にては昨今花柳界、其他にて素人浄瑠璃流行しつゝあり。二十二日より二日間打狗座にて天狗会を催す由し

□大正2 (1913-03-27) 『台湾日日新報』欄外記事

▲素人浄瑠璃会 打狗燕連の浄瑠璃会は二十一、二日打狗座にて開催したるが、土地にては始めての催ふしなるのみか、

太夫は大小天狗十余名中には三日月八重豊、新玉、鳳山亭等の芸者連ありし為め一層人気を引立て、二日間の入場者約二千人を算し、非常の盛況なりき

□大正2 (1913-03-31) 『台湾日日新報』

●浄瑠璃大会 久しく当地にありて義太夫の師匠たりし豊竹東太夫は、病気の為今回業を廃するの已むなきに至りしより、

デン界の諸氏発起となり、同人の為に本明夜朝日座に於て盛んなる浄瑠璃大会を催す事となりしが、兩夜の語り人は当地を始め基隆淡水方面の素人連を網羅し、尚台北檢及び基隆の芸妓連十数名も出演し、且つ目下滯北なる竹本隅子太夫も特に出演

する事となり、三味線は峯子、八重吉、鐘龍、三玉、勝玉、国芳、千歌、東太夫等勤むべしと云へば近來稀なる大会合と云ふべし

□大正2 (1913-05-06) 『台湾日日新報』欄外記事

▲追善浄瑠璃会 四、五、六の三日間、台南座にて故竹本越津追善浄瑠璃会開催

□大正2 (1913-07-03) 『台湾日日新報』

演芸

●栄座の大隅 何が大隅と団平の一行、請元が丸中で後援が料理屋組合、思ひ切つて派手に行くのは当然の事だ。先づ栄座の表構へを見ると積樽やら鳥渡した植込みを拵らへ頗る賑やかに出来て居る、偕て場内はと見ると、棧敷廻りに藤棚の造り花を回らし、欄干には波模様の幕に金銀の人氣玉を水玉に擬して吊り並らべ、紅ぼかしやら水色ぼかしの岐阜提灯にズラリと電灯を入れ、柱は紅白或は白と浅黄の段だら巻きである。舞台はまた大した凝り方で正面に常脚縁附きの家形を組み、上下は庭先きの植込み、上手には透し障子の伝ひ廊下を見せ、下手には灯入りの石灯笼、其他宜しく配置あり。寄贈の花籠を上下に

陳列する等、念の入り過ぎた程濃厚とした舞台の造り方は先づ眼を驚かすに足るべきものだ。そして初日の入場者は平場の第一線を検番の美人連が占領して花と語り居流れ、第二線、三線と平場一面は裕くりと坐つて殆んど詰まつて居る。棧敷も一ぱい。二階廻りも略つと埋まつて、先づ目測七百は動かぬ処の頭数であるが、官吏側のお歴々は余り見受けぬ代りに民間の大人連は殆んどお顔揃への体、その一粒選り的なる客種は、蓋し興行初まつて以来のものであつた

●栄座　大隅一行、三日目(三日)の語り物は左の如し

『伊賀越田覚寺の段』(鷹太夫、糸団蔵)、『先代萩竹の間』(明石太夫、糸小団)、『躰仇討天神堤の段』(三太夫、糸小団)、『梅の由兵衛聚楽町の段』(里太夫、糸団市)、『義経千本桜鮭屋の段』(静太夫、糸広市)、『金比羅利生記志渡寺の段』(錦太夫、糸仙市)、『近頃河原達引堀川猿廻しの段』(大隅太夫、糸団平、ツレ仙市)

●大隅の初日を聴く

○事故運參の為に記者は静太夫の『三十三間堂』から聴いたが、音量も充分あり、艶もあり、一杯に語り科して遂に弛るみも見せねば、調子の崩れる事もない。節廻しも自由自在で得心させたが、難を云へば聊か落附が無く、重味に於て欠くる処のある

様に思はれた。大車輪の語り口は蓋し大受けなり、奥の木遣りもサラサラとして味あり大に宜し。

●●●  
○錦太夫の『合邦辻』　大隅の中堅に其人ありと伝えられた錦太夫。遠がに確かりとしたものだ。音量も、調子も、色気も、艶も、悉く揃つて居る。調子の高い三味線に乗つて、平気で語り科す処、尚大なる余裕あるを示して居る。そして落附きもあり、溢れる程の情もある。「面恥気なる玉手御前」からの艶麗なる、「ヤイ儂れにはまだ咄さねど」の合邦の意気込み、さては奥になり「ヤア恋路の闇に迷ふ我身」から手負ひになつての物語りに至つて、殆んど凄絶と云ふべしだ。要するに昔し氣質の合邦とオドオドする母親と、主人公たる色気沢山のお辻とを遺憾なく活躍させ、奴入平の如きもまた独特の妙味を見せた、否聴かした。而かも技巧に落ちて小さくなる様な事もなく、どこどこでもおは大きな浄瑠璃であるのは、台湾初まつて以来のものと云つても決して過当ではあるまい。今日までこの一段ほど一生懸命に身を入れて聴かれた浄瑠璃は無かつたのである。宜なる哉。満場の聴者は、殆んど感に堪へて拍手を打つ機会に失つた様である。三味線の仙市とは殆んど競争的で、弾き負かさうとすれば、何糞と踏応へる。お蔭で吊り込まれて、聴者も汗ビツシヨリは豪気なものだ。

●●●大隅太夫の『野崎村』元気のい、調子の高い錦に引代へ、これはズンと低い調子、年齢の為ではあらうが、其処に又味があるのであらう。麒麟も老ゆれば驚馬に劣る、当年取つて六十六歳の大隅、この麒麟將に老いたりとも、決して驚馬とはなつて居らぬ。音声の洪つて来たのや、齒に洩れるのや、稍聞き辛らい点の出来て居ぬでは無いが、元来大隅は音声や艶で語つた人でない、況んや今日の大隅に於てをやで、調子は低くもあれ音声枯れて居ても、語る処は依然として道がは大隅である。言葉は殆んど地で行き盲目の病人たる母親を髣髴させ、立派な久作を現出する点に至つては無類と云ふべく、派手な艶つばい語り口を嬉ぶ連中中には、この洪い洪い型を語つて聴かせると云ふ大隅の浄瑠璃は、或は案外に思はれたかも知れぬ。劇で云へば所謂正劇の真髓とも云ふべきもので、或る一派には面白くも思はれねば、又たその妙味をも感得されぬのである。この点に於て多くは云はず、この淋びし一段の中に多くの聴き処がある事を認めねばならぬ。团平の三味はこれも云ふ丈けが野暮なり。先づ勿体ないと云つて然るべく、仙市の連れ弾きも冴たものなり。(魔雲坊)

▲栄座へ義太夫を聞に行くとか客の中に、太夫の語る事を知つた面して小声にて語つたり、又他の迷惑も不顧大声に咄し合てる奴がある。是等の馬鹿者の頭上へ一撃鉄槌を打込たく、癩に障る(都柳)

□大正2(1913.7.96)『台湾日日新報』

頓狂詩

難支城 望蜀山人

大隅奈何雖有名。余人場料高可驚。

元來義太狂我輩。每夜聽聞難支城。

〔大隅奈何に名有りと雖も、余りに入場料の高きには驚くべし。

元來義太狂の我輩も、毎夜の聽聞には城を支へ難し。〕

以娘鳴 同人

浄瑠璃大阪本場。東京斯界以娘鳴。

由來男許夜明国。寧望女義太興行。

〔浄瑠璃は大阪が本場、東京の斯界は娘を以て鳴る。

由來男ばかりで夜の明けぬ国、寧ろ女義太の興行を望む。〕

消極的 同人

從來榮座消極的。常以田舎芝居鳴。

焉知敏見機森田。這般奮発人皆驚。

〔従来茶座は消極的、常に田舎号之居を以て鳴る。

焉んぞ知らん、機を見るに敏なるの森田、這般の奮発には人皆驚く。〕

慰精神 同人

無味乾燥殖民地。我倦読書苦措身。

幸於朝日榮兩座。演芸余光慰精神。

〔無味乾燥の殖民地、我は読書に倦みて身を措くに苦しむ。

幸ひ朝日榮の兩座に於ける、演芸の余光にて精神を慰めん。〕

□大正2 (1913-07-19) 『台湾日日新報』

●盆供養淨瑠璃 十九日八甲庄日蓮宗布教所に於て、盆供養

淨瑠璃会を開催し、富子、兼子、三松、藤枝、松鶴、勝木、三

洋、三味線、竹本勝玉、大切総掛合あり。晴雨に拘らず開催す

る由

□大正2 (1913-07-28) 『台湾日日新報』

演芸

●大隅の一行 団平、錦太夫、以下大隅の一行は茶座のお名残

打揚げ後、直ちに基隆に至り、同地基隆座に於て二十八二十九

の兩日開演の上、一行は来月一日の船にて一先づ帰阪すべく

確定せし由。基隆座の入場料は一等一円、二等七十銭、三等四十銭とせり

欄外記事

●素人淨瑠璃会 討蕃将卒及び警察隊留守居家族慰安の便法と

して稲丸会主催の下に、今明の両夜六時より八甲庄日蓮宗布

教所内に於て左の通り、素人淨瑠璃会を開くべしと〔版面切の

ため不可読〕〔藤枝〕〔恋娘昔八丈白木屋の段〕〔和楽〕、『日吉

丸三段目〕〔花笑〕、『太功記十段目〕〔我笑〕、『忠臣二度目の清

書〕〔ねぶか〕、『伊勢音頭油屋の段〕〔相生〕、『忠臣蔵六段目〕〔愛

水〕、『伊賀越沼津里の段〕〔三洋〕、『阿波の鳴門〕〔三松〕、『本

蔵下屋敷の段〕〔松鶴〕、『菅原寺子屋の段〕〔勝木〕、『玉藻前三

段目〕〔二三三〕、三味線野澤兵三、兵の助、政子、芳子

□大正2 (1913-08-02) 『台湾日日新報』

●大隅太夫死す

台南医院へ入院治療中なりし大隅太夫は一時小康を伝へられた

るも、何分老体とて衰弱の度甚だしく、主治医が殆んど詰切り

の手厚き治療も、其甲斐なく遂に三十一日の夜死去し、折角

内地より急行せる子息にも今生の面会叶はざりしは遺憾至極と

い云ふべく、遺骸は防腐法を施し、一日夜子息著南の上同地にて火葬に附し、遺骨として持ち帰るべき筈なりと云ふが、同行の請元なる当地丸中三谷新八氏は、遺骨の台北著を待つて、本願寺に於て鄭重なる回向を営むべしと

### 演芸

●基隆の大隅一行 団平、錦太夫以下 大隅の一行は二十八、二十九の両夜、基隆座に於て開演せるが、非常なる好況にて、両夜共二、三等客四五百名宛の入場あり。団平の糸と錦の語り口を始めとして孰れも満足を与へ、一行掉尾の大当りにして喜び居たるが、その二日目九時過ぎ、静太夫が舞台にて『三十三間堂』を語り居る折から「アカンコイ」との電報先づ著しく、続いて又もや「大隅危篤誰れか直ぐ来れ」などと頻頻として著電あり。大当りの喜びは忽ちにして悲みとなり、悲喜交々至るの有様なりしといふ

●素人浄瑠璃 本二日より四日まで、毎夜八甲庄日蓮宗布教所内に於て当地素人連の浄瑠璃会を催すべく、その出演者は肥声、松鶴、藤枝、不二、愛水、三松、我笑、勝木、三洋、一三三、花笑、相生、和楽、魁、菊水、麟風、久木、組次、美好、冬木、燕、艶次、梅枝、一声、半吉、ねぶか、亀鶴

らくま楽間、まじりん小林、りゅうし柳枝、かみふ叶、にせうら二調等の大顔合せなれば、定めしおほにんき大人気なるべし

□大正2 (19130804) 『台湾日日新報』漢文版

### ●新評林

○憶大隅  
○薄研鱧鯛酒一壺 鳳梨雖美失疎虞。浄瑠璃作無常響。落日聞鵬憶大隅。

〔薄く鱧鯛を研り酒一壺。鳳梨美なりと雖も疎虞に失ふ。浄瑠璃は無常の響を作す。落日鵬を聞きて大隅を憶ふ。〕

□大正2 (19130908) 『台湾日日新報』

### 演芸

●新起連浄瑠璃会 素人浄瑠璃新起連は、明九日鉄道ホテル内にて大会を開催する筈

□大正2 (19130915) 『台湾日日新報』

●淡水／観月浄瑠璃会 今十五日午後六時より淡水の同好者は、同地演武場に於て観月浄瑠璃会を催す由。番組左の如し『宝の入舟』（入登）、『朝顔日記宿屋』（春笑）、『御所桜三段目』

(三笑)、『阿波鳴門順礼歌』(弥生)、『三日太平記』(錦声)、『菅原四段目』(台北ねぶか)、『千代萩竹の間』(同菊水)、『撰州合邦辻』(同松鶴)、『三勝半七酒屋』(愛水)、大切掛合『千両のぼり』鉄ヶ嶽(錦声)、稲川(三笑)、おとわ(弥生)、呼出し(愛水)

□大正2 (1913.09.21) 『台湾日日新報』欄外記事

●素人浄瑠璃 当地素人浄瑠璃稲丸連は、二十二日午後六時より新起横街魚金に於て小会を催すべく、その番組は左の如し  
『加賀見山又助住家』(半吉)、『菅原伝授寺子屋』(常盤)、『千代萩竹の間』(菊水)、『太功記尼ヶ崎』(藤枝)、『合邦辻内』(松鶴)、『日吉丸三』(花笑)、『紙治炬燵』(愛水)、『合邦辻奥』(相生)、『白石嘶揚屋の段』(里太夫)、『三味線野澤兵三』

□大正2 (1913.10.16) 『台湾日日新報』

演芸

●素人義太夫会 久しく内地へ帰還し居たる鶴澤三治郎は更らに修業の上中老格に昇進して来合せしを以て、同好の天狗連にて昇格祝を兼ね、本日午後六時より八甲庄日蓮宗 布教所に於て素人義太夫会を開くべく、その物語は左の如し

『壺坂』(一声)、『日吉丸』(松鶴)、『三十三間堂』(三松)、『阿漕平治』(勝木)、『菅原寺子屋』(梅枝)、『鈴ヶ森』(かね子)、『逆鱗』(三洋)、『秋津島』(和楽)、『三味線』(三治郎)

□大正2 (1913.10.22) 『台湾日日新報』

演芸

●芳野亭の上棟式 新築中の新芳野亭は、愈々来る二十五日上棟式を行ふ筈にて、当日は祝ひの為め五十銭以下、小銀貨入りの餅を蒔くべしと、また昨日より取替へたる新写真は左の如し 【活動写真番組省略】

●素人浄瑠璃会 二十二日午後六時より、八甲庄日蓮宗 布教所に於て稲丸連素人浄瑠璃大会を開催す

□大正2 (1913.12.08) 『台湾日日新報』

演芸

●芳乃亭 阪神娘義太夫、渡台遅れし為め、素人を交へたる当地の義太夫連に活動写真を付け加へて余興とし、十日十一日両日開場式を挙行する由

●素人浄瑠璃 師匠八重吉、鐘籠、三玉連の素人浄瑠璃納会を、今明両日八甲街日蓮宗布教所内に於て開くべく、その

語り物左の如し

『百度平』（和楽）、『岸姫三』（組治）、『菅四』（愛水）、『赤垣出立』（艶次）、『毛谷村』（松香）、『玉三』（美好）、『柳』（久木）、

『阿漕』（我笑）、『朝顔宿屋』（亀鶴）、『日吉丸三』（半吉）、『佐倉の子別』（吾勇）、『棚ヶ崎』（梅枝）、『三日太平記』（叶）、『松王下屋敷』（魁）、『熊谷陣屋』（二調）、『新口村』（貴猿）、『阿波十』（松葉）、『御殿』（吾狗）、『志度寺』（梅花）

□大正2 (1913-12-17) 『台湾日日新報』

演芸

●芳乃亭の娘義太夫 渡台延期せし京阪娘義太夫の一行は、愈々本日入港の備後丸にて到着。明夜より芳乃亭に於て開演の筈なり

□大正2 (1913-12-18) 『台湾日日新報』

演芸

●芳乃亭の娘義太夫 予期の如く昨日の備後丸にて仙千代外十余名の一行、芳乃亭へ乗込み、本夜より開演すべく、その語り物左の如し

『阿波鳴戸八ツ目』（富子）、『太功記十段目』（玉葉）、『梅野由

兵衛』（此菊）、『御所桜三段目』（国松）、『沼津里平作内』（勝玉）、『本蔵下屋敷』（光雪）、『三十三所壺坂寺』（仙千代）、三味線豊竹満菊、連引国松

□大正3 (1914-01-18) 『台湾日日新報』

演芸界

●素人淨瑠璃 十八十九の両日、午後五時より鉄道ホテルに於て、素人淨瑠璃初会あり。その語り物左の如し

『鳴門』（つばめ）、『寺子屋』（松風）、『堀川』（まつば）、『惣五郎』（美好）、『五郎助』（半吉）、『志渡寺』（松香）、『酒屋』（久木）、『五郎助』（白蝶）、『柳』（喜楽）、『太十』（梅枝）、『忠十六』（愛水）、『寺子屋』（五角）、『壺坂』（組次）、『帯屋』（和楽）、三味線三玉

□大正3 (1914-01-23) 『台湾日日新報』

演芸界

●素人義太夫聯合大会 今二十三日より三日間市場内活動常設館に於て、素人義太夫大会を催す由にて、其の語り物は

『伊勢音頭』（相生）、『千本桜』（松鶴）、『彦山権現九』（勝木）、『中将姫雪責』（三松）、『台所記棚ヶ先』（梅枝）、『紙治』（一声）、

『菅原寺子屋』(常盤)、『日吉丸三段目』(花笑)、『本蔵下屋敷』(藤枝)、『忠臣蔵四段目』(南鳳)、『一の谷陣屋』(ねぶか)、『三十三間堂』(昇)、『伊賀越沼津』(三洋)、『鈴ヶ森』(兼子)、『三勝半七酒屋』(米子)、『秋津島』(和楽)、『岸姫松三段目』(亀鶴)、『箱根権現』(我笑)、『三十三間堂』(組次)、『赤垣源蔵』(艶次)、『合邦下の巻』(久木)、『日吉丸三段目』(半吉)、『朝顔日記』(冬木)、『佐倉宗五郎』(美好)、『柳』(喜楽)、『志渡寺』(松香)、『合邦辻』(松葉)、『日吉丸』(白蝶)、『忠臣蔵六』(愛水)、『先代萩御殿』(五角)、『岸姫松』(叶)、『御所桜三』(二調)、『三日太平記』(魁)、『一の谷陣屋』(鹿生)、『加賀見山又助住家』(朝平)、『泉三郎館』(呂三)、『忠臣蔵四』(簡風)、『三勝半七酒屋』(不二)、『外台北検総連中』(三味線八重吉)、『三玉』(鐘籠)、『三治郎』

演芸界

●義捐義太夫大会 二十三日より市場内常設館にて開催すべし  
き苦なりしも、場所の都合により新起街弘法寺に於て、在台北師匠連の発起にて今回の大惨害たる鹿尾島県下へ義捐の爲め、今二十五日より二日間聯合大会を催す由

□大正3 (1914.02.08) 『台湾日日新報』

演芸界

●淡水の素人浄瑠璃 淡水演芸会にては本日午後五時より淡水倶楽部に於て春季大会を催すべく、其語り物左の如し  
『御所桜』(三笑)、『三日太平記』(錦声)、『阿波鳴門』(弥生)、『一の谷』(ねぶか)、『新口村』(花笑)、『鮭屋』(松鶴)、『紙治炬燵』(愛水)、『忠四』(南鳳)、『油屋』(相生)、『三味線』(三太郎)

□大正3 (1914.02.18) 『台湾日日新報』

演芸界

●送別浄瑠璃会 芳乃亭に在りし娘義太夫国松の帰国に付き、その送別の爲め今明両夜八甲庄日蓮宗布教所に於て、当地素人連の浄瑠璃大会あり。その語り物左の如し  
『酒屋』(相生)、『寺子屋』(松鶴)、『大文字屋』(叶)、『三十三ヶ所』(不二)、『一の谷』(ねぶか)、『岡崎の段』(鈴八)、『日吉丸三』(花笑)、『紙治』(愛水)、『柳切』(吾妻)、『新之口村』(勝好)、『松王邸』(魁)、『さかろ』(南鳳)、『弁慶』(常盤)、『一の谷奥』(二調)、『お半長右衛門』(三吉野)、『合邦』(藤枝)、『柳』(愛蝶)、『御所桜』(かねこ)、『又助』(朝平)、『三味線』(三治郎)

八重吉、国松)

□大正 3 (1914.02.27) 『台湾日日新報』

演芸界

●素人義太夫大会 台北、基隆、淡水の素人義太夫春季聯合大会を、明二十八日より五日間、芳乃亭にて開催する由

□大正 3 (1914.03.04) 『台湾日日新報』

演芸界

●素人義太夫大会 芳乃亭の素人義太夫は、一日より引続開催中なるが、本日よりの語り物左の如し

『本蔵下屋敷』、『油屋』、『百度平』、『布四』、『野崎』(相生)、『逆槽』、『寺子屋』、『忠四』(南風)、『帶屋』、『阿漕』、『布四』(三吉野)、『柳』、『日吉丸』、『新口村』(花笑)、『すしや』、『寺子屋』、『太十』(松鶴)、『十種香』、『壺坂』、『酒屋』(不二)、『本蔵』、『鈴ヶ森』、『合邦』(藤枝)、『又助内』、『本蔵』(朝平)、『三日太平記』、『沼津』(魁)、『八陣』、『一の谷』(二調)、『大文字屋』、『岸姫』(叶)、『御所』、『赤垣』(艶次)、『柳』、『合邦』(久木)、『いざり』、『蝶八』(我笑)、『秋津島』、『忠四』(和楽)、『御所』(かね子)、『沼津』、『宿屋』(三洋)、『皿屋敷』、『陣屋』(ねぶか)、『壺坂』、『

『岸姫』(組次)、『赤垣』、『壺阪』(吾勇)、『岸姫』、『玉三』(三岬)

□大正 3 (1914.03.05) 『台湾日日新報』

演芸界

●素人義太夫会 過日来より芳乃亭にて開催し居る素人義太夫会、当夜は五日目のこと、て台北天狗連中の四天王と称する人々の顔合せをなす由なれば、定めて盛会を極むるならん。其の物語は

『布引滝』(三好野)、『百度平』(相生)、『忠臣蔵六』(松鶴)、『鈴ヶ森』(花笑)、『太功記十』(藤枝)、『御所蔵三』(兼子)、『忠臣蔵四』(南風)

□大正 3 (1914.04.20) 『台湾日日新報』

演芸界

●芳乃亭 本日より取り替へたる新写真真は三崎座付き俳優中村歌扇、市川千升にて出演せる旧劇『先代萩御殿場より床下の場』にて女義太夫竹本鐘龍の出語りあり。尚ほ新派『新牡丹灯笼』を呼物とし、重なる新写真真は左の如し

〔活動写真のうち義太夫以外省略〕(旧劇)『先代萩上下二巻』

竹本鐘龍太夫出語り、声話色鳴物入り

□大正3 (1914.06.10) 『台湾日日新報』

●素人義太夫会 今十日より三日間八甲庄日蓮宗布教所に於て素人義太夫会を催す由。其の語物は

『正清本城』(ねぶか)、『又助』(半吉)、『鎌倉三代記』(明石)、『合邦辻』(まつば)、『三日太平記』(貴富)、『松王下屋敷』(魁)、『御所桜三』(吾妻)、『又助』(勝次)、『柳』(三松)、『日吉丸三』(琴水)、『柳』(鬼笑)、『菅原四』(松鶴)、『玉三』(白蝶)、『御殿』(久木)、『日吉丸三』(司)、『酒屋』(冬木)、『沼津』(如月)、『岸姫』(艶次)、『儀作』(美好)、『合邦辻』(藤枝)、『御殿』(五角)、『志渡寺』(松香)、『本蔵下屋敷』(吞声)、『紙治』(愛水)、『赤垣源蔵』(吾勇)、『四ツ谷』(一声)、『野崎村』(和楽)、『逆鱗』(三洋)、『三味線』(竹本三玉)

□大正3 (1914.06.12) 『台湾日日新報』

●新刊紹介

▲浄瑠璃 (一の二) 十銭毎月一回発行 徳島市富田浦町浄瑠璃社

□大正3 (1914.06.19) 『台湾日日新報』

●国姓爺後日物語 (十八) (劇と史実) 台

※鹿島桜巷の脚本『国姓爺後日物語』(愛国婦人会台湾支部発行、東京堂発兌、一九一四) に対する批評か。

演芸界

◎芳乃亭 本日より全部取り替へたる新写真真は中村歌扇一座の出演にて旧劇『壺坂靈験記』義太夫竹本鐘龍出語り、尚ほ新派悲劇『旧山河』上下、泰西人情劇『バウンドレリスード』上中下等の外、主なる新写真真は左の如し

『カバフト旅行』(実写)、『新馬鹿大将成功の巻』(滑稽)、『著色少女の真心』(お伽劇)

◎素人浄瑠璃大会 本日より二日間、八甲庄日蓮宗布教所に於て素人義太夫会を催す由。其の語物は

『御祝儀宝の入舟』(登昇)、『阿波の鳴戸』(兼子)、『玉藻前二段目』(森川)、『日吉丸三』(琴水)、『御所桜三段目』(三松)、『先代萩御殿』(しんど)、『三勝半七酒や』(藤枝)、『日吉丸三ノ奥』(魁)、『大功記十段目』(寿)、『菅原四段目』(松鶴)、『三勝半七酒やの奥』(不二)、『一の谷熊谷陣屋』(ねぶか)、『朝顔日記大井川』(三洋)、『日吉丸三段目』(花笑)、『佐倉宗五郎子別れ』

(一声)、『平仮名盛衰記逆鱗の松』(三吉野)、『油屋おこん十人斬』(相生)、『安達原三段目』(梅枝)、『阿漕が浦平次住家』(勝木)、『本蔵下屋敷』(二調)、『岸姫松三段目』(叶)、『佐倉宗五郎儀作切腹』(吾勇)、三味線鶴澤政七

□大正3 (1914-07-03) 『台湾日日新報』

演芸界

◎新起連の物語 今回八重吉門下新起連は弘法寺護国十善会へ金員寄付の目的を以て、四日五日の両日、浄瑠璃会を催す由なるが、重なる物語は左の如しと

『泉三郎館の段』(二調)、『志度寺の段』(検峰菊)、『三日本平記』(叶)、『絵本太功記十』(寿)、『伊賀越八つ目』(検、鈴八)、『於染久松』(呂三)、『百度平住家』(三吉野)、三味線竹本八重吉

□大正3 (1914-07-06) 『台湾日日新報』

●義太夫日曜会 台北素人義太夫三玉連は毎日曜日、師匠三玉の宅に会合して日曜会を開く由、因に今回は初会の事として、準備の都合上、本日開催の筈

□大正3 (1914-07-11) 『台湾日日新報』

●新刊紹介

▲浄瑠璃(一の三) 十一銭、徳島市富田浦町浄瑠璃社

□大正3 (1914-07-11) 『台湾日日新報』

演芸界

◎素人義太夫大会 今十一日より十二日迄二日間、八甲庄日蓮宗布教所に於て、鶴澤政七帰還送別浄瑠璃会開催す。語りものは左の如し

『御祝儀宝の入舟』(入登)、『鎌倉三代記』(兼子)、『日高川』(つばめ)、『又助住家』(半吉)、『弁慶上使』(琴水)、『中将姫雪責』(三松)、『三勝半七』(冬木)、『赤垣源蔵』(吾勇)、『布引四段目』(コックリ)、『太功記十』(艶次)、『伊賀越沼津』(藤枝)、『日吉丸三』(魁)、『忠臣蔵六』(松鶴)、『三勝半七奥』(久木)、『後藤兵衛』(我笑)、『鈴ヶ森』(花笑)、『岸姫松三』(叶)、『菅原四段目』(ねぶか)、『藻玉前三段目』(三洋)、『逆鱗の松』(三吉野)、『いざりの仇討』(和楽)、『伊勢音頭油や』(相生)、外数名。三味線竹本八重吉、竹本三玉、竹本鐘龍、竹本勝玉、鶴澤政七

□大正3 (1914-07-20) 『台湾日日新報』

演芸界

◎素人浄瑠璃大会 鶴澤政七送別浄瑠璃素人大会、延期の処  
愈々二十日二十一日の両日間、八甲庄日蓮宗布教所にて開催す  
る由

『御祝儀』（入登）、『油屋』（寿加）、『三浦別』（兼子）、『御所椀』（琴水）、『鳴戸内』（三松）、『酒屋』（不二）、『玉三』（三洋）、『御殿』（久木）、『赤垣』（団次）、『合邦』（和楽）、（廿一日）『布引四』（コックリ）、『太十』（ふたば）、『沼津』（藤枝）、『堀川』（魁）、『紙治内』（寿）、『岸姫』（叶）、『腰越状』（二調）、『鰻谷』（三吉野）、三味線竹本八重吉、竹本鐘龍、鶴澤政七（二十一日）  
※「廿一日」は「廿日」の誤植か。

□大正3（19140812）『台湾日日新報』

演芸界

◎新高館 本日より写真全部取替たるが、其呼物としては  
（旧劇）『恋女房染分手綱 重の井三吉別れの場』（浄瑠璃入）、（新派）『月の影』上下二巻全十五場（以上囃子鳴物声色入）、実写『モンテビデオ港の■景』（泰西■劇）『伊国ミラノ会社作幕前の秘密』上下二巻、（日本喜劇）『正一位稻荷大明神』（西洋滑稽）『番人の箱詰』（同）『水騒ぎ』

◎素人義太夫会 南門外に於て料理仕出し及び蒲鉾製造業主  
魚平事と和楽は、今回府中街三丁目四番戸（庁の横丁）に移転し、  
益々発展営業すべく、其開業に先だち明十三日祝賀を兼ね素人  
義太夫会を催す由。其主なる出演左の如し

相生、三吉野、叶、一声、梅枝、松鶴、不二、愛水、美好、吾  
勇、三洋、組市、艶治、久木、我笑、藤枝、魁、二調、和楽、  
其■数名

□大正3（19140819）『台湾日日新報』

演芸界

◎素人浄瑠璃大会 十九日より三日間、勤工場階上に於て  
素人浄瑠璃大会を開く

『八陣八ッ目』（ねぼけ）、『柳』（喜楽）、『三日太平記』（貴富）、  
『堀川』（松葉）、『太十』（明石）、『柳』（亀笑）、『又助』（時次）、  
『菅四』（冬木）、『日吉丸』（司）、『岸姫』（■次）、『弁慶上使』（琴  
水）、『菅四』（松風）、『玉三』（白蝶）、『儀作』（美好）、『忠三』  
（如月）、『志渡寺』（松香）、『又助』（半吉）、『忠六』（三洋）、『皿  
屋敷』（吾妻）、『酒屋』（亀鶴）、『日吉丸』（花笑）、『柳』（不二）、  
『揚屋』（久木）、『忠三』（我笑）、『御殿』（五角）、『太十』（梅枝）、  
『六助』（藤枝）、『弁慶』（二調）、『下屋敷』（松鶴）、『堀川』（魁）、

『四ツ谷』(一声)、『日吉丸』(鈴弥)、『忠三』(吾勇)、『忠四』(三吉野)、『忠六』(愛水)、『菅四』(和樂)、『柳』(きかく)、『帯屋』(相生)、『酒屋』(寿)、『志渡寺』(峰菊)、『糸三玉』、『糸鐘龍』、『八重吉』

□大正3 (1914-08-27) 『台湾日日新報』  
演芸界

◎素人浄瑠璃会 二十七、八の両夜午後六時より勸工場階上にて開会。語り物と語り手は

『二十四孝』(小鹿)、『太功記十段目』(朝平)、『三十三間堂平太郎内』(亀笑)、『日吉丸三段目』(花笑)、『弁慶上使』(琴水)、『岸姫松三段目』(冬木)、『本藏下屋敷』(藤枝)、『松王下屋敷』(魁)、『太功記杉の森』(二調)、『惣五郎子別れ』(美好)、『三十三間堂平太郎内』(検査きかく)、『撰州合邦ヶ辻』(検査鈴弥)、『三勝半七酒屋の段』(相生)、『三味線』(三玉)、『八重吉』

□大正3 (1914-10-02) 『台湾日日新報』

◎素人浄瑠璃大会 来る二三四の三日間、八甲庄日蓮宗布教所に於て故竹本鐘龍十五周年追悼のため、台北淡水の素人連の浄瑠璃大会を催す由

□大正3 (1914-10-21) 『台湾日日新報』

演芸界

◎素人義太夫会 竹本八重吉師の義太夫会は、二十一日二十二日の両日、午後六時より新起横街丸新前藤本氏宅にて催す由

『三十三間堂』(當代)、『加賀見山又助』(秀八)、『菅原松王内』(すゞめ)、『三勝半七』(寿)、『彦山権現六助内』(きかく)、『合邦ヶ辻』(鈴弥)、『菅原寺子屋』(六助)、『二度目清書』(峰菊)、『布引の四』(〇〇坊)、『太功記尼ヶ崎』(魁)、『太功記妙心寺』(二調)、『三日太平記九』(叶)、『新吉原揚屋』(小嵯峨)、『勢州阿漕浦』(三吉野)、『伊勢音頭油屋』(相生)、『忠臣蔵本藏下屋敷』(掛合(相生) (三吉野) (二調)、『関取千両幟』(掛合(相生) (三吉野) (六助))

□大正3 (1914-10-23) 『台湾日日新報』欄外記事

演芸界

◎素人浄瑠璃 二十四五両日、新高館に於て素人浄瑠璃の催しあり。語り物如左

『八陣』(ねばけ)、『弁慶』(琴水)、『岸姫』(冬木)、『下屋敷』(鱗司)、『朝顔』(久木)、『儀作』(天好)、『志度寺』(松香)、『菅四』

〔松鶴〕、『忠四』（和楽）、『帯屋』（相生）、三味線（三玉、同）

□大正3 (1914.10.31) 『台湾日日新報』

演芸界

◎素人義太夫大会 本日午後二時より午後七時迄、淡水倶楽部に於て、台北淡水合併素人義太夫大会あり。その語物は

『御祝儀』（入登）、『菅原四』（橋）、『安達原三』（一声）、『御所桜弁慶上使』（三笑）、『先代萩御殿』（メ奴）、『三日太平記』（錦声）、『玉藻前三』（岬）、『合邦』（里雀）、『梅川忠兵衛新口村』（愛水）、『関取二代鑑』（和楽）、『酒屋』（相生）、大切かけ合『大功記十段目』光秀（岬）、婆（里雀）、操（愛水）、十次郎（相生）、初菊（和楽）、三味線（竹本鐘龍）

□大正3 (1914.11.26) 『台湾日日新報』

演芸界

◎素人義太夫大会 本日より三日間、台北素人義太夫界の老練株相生が会主となり、新高館にて開催する由。三味線は鐘龍、勝玉、八重吉、三玉等にて、大切に掛合ありと

□大正3 (1914.11.28) 『台湾日日新報』

●聯合／素人淨瑠璃会

晩秋の折から台北、基隆、淡水の素人淨瑠璃の大大天狗、小天狗共が鞍馬山ならで新高館に立籠り、何れも其技を競う由なれば、初日早々牛若ならぬ年若の僕が飛び込むと、恰度檢番の美形六助、鈴弥に八重吉が高座に列んで居た。確に『柳』の木遣りを歌つて居たが訳もなく、大向うの大大当りにて引き退ると、今度はお馴染みの松鶴翁の『菅原四段目』を語る。素人として渋い処がある。之れは老熟せる結果ならんと感ず仕る外なし。次に『御所桜三段目』を岬と云ふ人、熱心に車輪に面白く語つて聴かせた。要するに此人声量充分なる為め大きく語り、却々巧なるなる語口にして達者なもの、天狗中でも先づ大天狗株とや申さん。大当り大当り。其次『本蔵下屋敷』は鈴弥で奥に重きを置きて、唯々美しき咽喉をして聴者を酔はせしめたり。ツレ六助、御苦労に存ず。『三十三所壺坂』は一声にして音調の乱れざるを以て、其人の価値あり。盲人沢市を楯にしてお里なる人を能く活躍せしめたる其技、又凡ならずと褒めて置く。其次ぎに三吉野の『帯屋』でアノ多くの人物を眼前に髣髴たらしめ、親子の情緒纏綿たる中に儀平の洒脱、長吉の輕妙は僕が沁々

感心はしたが、然し此の淨瑠璃中、長吉の恋物語の一節に改良を加へる価値は充分であると認めた。此人最も得意の語物として何処でも能く語るが、改良せざる以上は酒席の他にて濫りに語るべきものでない事を、予め自覚されたし。大切に『妹背山』の掛合があつたが聴かずに失敬した。盛況なる会であつて今晚の語物は左の如くである(僕)

『御祝儀宝入舟』(入登)、『太十』(明石)、『本蔵下屋敷』(鱈)、  
『玉三』(美好)、『寺子屋』(松香)、『壺坂』(二調)、『紙治』(峯  
菊)、『酒や』(寿)、『合邦』(菊水)、『鰻谷』(藤枝)、『柳』(久  
木)、『百度寺』(相生) 大切掛合『阿古屋琴責』(峯菊、相生、  
三吉野、六助) 三味線(八重吉、鈴弥)

□大正4 (1915-01-30) 『台湾日日新報』

演芸界

◎淨瑠璃初会 当地素人義太夫の一部は、明三十一日より二日間、勸工場楼上に於て、毎夜六時より初会を開くべく、当年八十一歳の錦老人上床する由。其語り物は左の如し  
〔五行不明〕

『玉三』(美好)、『志渡寺』(■■■■)、『又助』(■■■■)、『二度目』(明  
石)、『日吉丸』(■■)、『忠四』(錦)、『酒屋』(相生)

□大正4 (1915-03-10) 『台湾日日新報』

演芸

◎素人義太夫 本日午後六時より、城内勸工場二階に於て勝玉連の素人義太夫温習会を催す由。其語物は

『合邦内』(藤枝)、『御所桜』(かね子)、『熊谷陣屋』(ねぶか)、  
『白石揚屋』(小ぎく)、『平作内』(三洋)、『三勝半七』(三松)、  
『本蔵下屋敷』(菊水)、『日吉丸三』(松鶴)

□大正4 (1915-04-24) 『台湾日日新報』欄外記事

演芸界

◎素人義太夫大会 本日より新高館にて台北素人義太夫聯合大会を開く由。其語り物は左の如し

『忠四』(ねほけ)、『赤垣』(艶次)、『太功記十』(かね子)、『四  
ツ谷怪談』(冬木)、『二度目の清書』(明石)、『新吉原』(久木)、  
『玉藻前三』(勝二)、『玉藻前三』(白蝶)、『三勝半七』(寿)、『松  
王下屋敷』(魁)、『合邦』(松葉)、『沼津』(藤枝)、『三十三間堂』  
(小菊)、『赤垣』(勝木)、『忠臣蔵三』(菊水)、『菅原四』(勝司)、  
『鳴戸』(三松)、『河漕平治』(我笑)、『忠臣蔵六』(三洋)、『安  
達三』(司玉)、『合邦』(松鶴)、『新吉原』(巴笑)、『赤垣』(美

好)、『布引滝』(松香)、『紙治』(一声)、『岸姫松』(組次)、『忠臣蔵七』(和楽)、三味線三玉、勝玉、鐘籠、八重吉

□大正4 (1915.05.21) 『台湾日日新報』

秘密の糸

(一) 義太夫の縁

かやうにして彼女は台湾の果てまでも流れ落ちるやうな身になつた。誰一人として知る辺もないやうな、そして気候と習慣とを異にした土地で、彼女は津田の家から鈴弥と名乗つて出た。そしてそれから七八年の歲月といふものが、兎にも角にも彼女の上へ大きい運命の転回を与へることなしに過ぎて行つた。賑やかな芸者、年増芸者として彼女の名は可なりに台北の花柳界に聞えたものとなつた

それは丁度、一昨年(と、し)の十一月も末近い頃であつた。常夏の台湾の空にも初秋らしい風が立つて、どうかすると襦袢の襟を掻き合せるやうな薄ら寒さを覚えるやうな日、北の国の寒い寒い凍るやうな所から、南国へ渡る候鳥のやうに、台北の土地へ来た美しくしい一群の若い女があつた。それは北海道の小樽で芸者をしてゐた女達で、今も梅屋敷にゐる政弥、花香、静香、

政奴、それから竹の家にある舞妓の手丸などであつた。彼等は凍てつくやうな天地から逃れて、南へ南へと船路の進むまゝに、一枚々々着物を薄くして、さまざまゆきな想像を頭の中に描きながら来たのであるが、丁度その女達と一緒に、加藤といふ齡の頃は五十ばかりの、頭の禿げた親爺が、その妻のお金といふのを伴れて、やはりこの台北へ来たのであつた

この加藤といふ男が、何故その女達と一緒に北海道から遙々台湾へまで来たのか? それは彼が静香や政奴や手丸の父親であるからである(勿論お金とは腹違ひであるけれど)。娘達を遠い台湾へ遣つては、加藤も自分一人だけ冷たい孤独な北国に留まつてゐる訳にもゆかなかつた。彼は小樽で義太夫の師匠として可なりに売つてゐた地位をも捨て、三人の娘の後を追つて来たのである

然し、台湾へ来て、彼はこれといふ職業をも得ることが出来なかつた。暫くの間はたゞぶらぶらして遊食してゐたのであつたが、何時までもさうした生活が続けられるものでもない。到頭娘の縁故から梅屋敷に泣きつき、梅屋敷の主人の大和辰之助の世話で、漸く台北検査の帳場に住み込むことになつた

かうして幾らか自分の生活の保障が得られるやうになると、

加藤はやがて新起街の竜木で義太夫の師匠をしてゐる八重吉の所々繁々出入りするやうになつた。八重吉といふのはもう六十六ばかりの婆さんで、その門下には鈴弥を初め、やはり津田の六助、きかく、すゞめ、すゞ、それから竹の家の峰菊などが錚々たるものとして名を知られてゐる。

これ等の門下生はみな峯々の喉自慢家であつた。何かの機会があれば、必とそれを捕へてお温習をやることを忘れない。読者の中では、彼等が新高館などで、しやばつた声を張り上げてゐたのを聞いた人もあること、思ふ。そしてさういふ場合、加藤はいつも真打格で、最後に出るのが常であつた。義太夫が取りもつ縁——加藤と鈴弥との間は義太夫を通して親密な仲になつた。殊にお温習の会などのことは主としてこのふたりが取り極めるので、二人はその相談をするのだと言つては、よく新起横街の金勢の座敷で会ふのであつた。

□大正 4 (1915-11-25) 『台湾日日新報』

●素人浄瑠璃月並会 明二十五日、午後六時三十分より西門外街栄座前倶楽部に於て、勝玉連素人浄瑠璃会を開催し、語り物は各々得意の物を登場する由

□大正 4 (1915-12-07) 『台湾日日新報』

●浄瑠璃大さらひ 今明七八の両日午後六時より、年末納会として勝玉連素人浄瑠璃大会を城内勸商場階上に於て開催の由。尚ほ太夫連協議の上、競争的懸賞を附し、飛入連も有り

□大正 4 (1915-12-12) 『台湾日日新報』

演芸界

●素人浄瑠璃大会 今十二日午後六時より晴雨に不拘、台北勸工場に於て、古池田(勝木)氏の追善素人浄瑠璃大会を開催する由なるが、当日の出演者は斯界の老練家全部顔揃と云ふことなれば定めし聞ものならんが、語物左の如し

『四ツ谷』(一声)、『御所桜』(かね子)、『八陣』(梅枝)、『寺小屋』(松鶴)、『鳴門』(三松)、『御殿』(菅枝)、『忠六』(三洋)、『儀作』(三好)、『合邦』(寿)、『下屋敷』(柳枝)、糸(三玉、勝玉)

□大正 4 (1915-12-16) 『台湾日日新報』

十把一束

▲十二日の夜、台北勸工場二階の浄瑠璃会場に於て、足駄をお取違への方は(義太生)

□大正5 (1916-01-19) 『台湾日日新報』 欄外記事

●素人浄瑠璃初会 今十九日午後六時半より西門外街栄座前倶楽部に於て、勝玉連素人浄瑠璃会を開催する由

□大正5 (1916-01-25) 『台湾日日新報』

演芸界

□素人義太夫初会 今二十五日より三日間、台北勸工場に於て、素人義太夫初会を催す由。其語物は

- 『忠三(ねげけ)、壺坂(かね子)、五郎助(白蝶)、袖萩(松葉)、太十(ねぶか)、鈴ヶ森(勝二)、陣谷(五角)、揚屋(小菊)、忠三(菊水)、忠六(三洋)、日吉丸(半吉)、滝(我笑)、鈴ヶ森(亀鶴)、鳴戸(三松)、日吉丸(琴水)、太十(寿)、下屋敷(魁)、六助(藤枝)、太十(梅枝)、又助(隣鳳)、赤垣(艶治)、揚屋(久木)、下屋敷(美好)、志渡寺(松香)、合邦(松鶴)、鈴ヶ森(一声)、柳(巴昇)、酒屋(柳枝)、忠四(和楽)、三味線(玉)

□大正5 (1916-07-24) 『台湾日日新報』

●素人浄瑠璃 明二十五日午後六時より、八甲庄公会堂に於て

鶴澤一平連中の素人浄瑠璃あり。来聴随意にして其の乱表左の如し

『御祝儀宝入船』(入登)、『鳴門八ツ目』(古菊)、『勘平切腹』(我笑)、『梅川忠兵衛新口村』(菊水)、『太功記十段目』(艶次)、『小春治兵衛紙屋』(三十七)、『御所桜三段目』(相生)

□大正5 (1916-08-12) 『台湾日日新報』

頓狂詩  
能投機 烏有子

活動生花浄瑠璃。諸芸大会同時始。納涼売出能投機。争先集寝兒杓子。

〔活動・生花・浄瑠璃、諸芸の大会同時に始まる。  
納涼売出し能く機に投じ、先を争ひて集まらん寝兒も杓子も。〕

□大正5 (1916-11-14) 『台湾日日新報』

●素人浄瑠璃大会

●素人浄瑠璃大会 十四日及十五日の両日、八甲庄日蓮宗布教所に於て午後六時より、当地素人浄瑠璃各連中聯合の大会を催はすべく、会主は豊竹三玉にして、鶴澤一平、其他各師匠総出の応援、其

の物語左の如し

『四ツ谷怪談伊右工門内』(一声)、『伊賀越遠眼鏡の段』(梅枝)、  
『三十三ヶ所壺坂沢市内の段』(巴昇)、『安達原三段目』(白蝶)、  
『明烏山名屋の段』(二重)、『彦山権現六助内の段』(藤枝)、  
『お染久松野崎村の段』(柳枝)、『玉藻前三段目』(鱗鳳)、  
『忠臣蔵四段目』(和楽)、  
『金刀比羅利生記百度平内の段』(叶)、  
『鏡山又助内の段』(勝次)、  
『日吉丸三段目』(花笑)、  
『お駒才三鈴ヶ森の段』(かね)、  
『菅原寺子屋の段』(鹿生)、  
『忠臣蔵勘平切腹の段』(我笑)、  
『御所桜三段目』(改玉)、  
『赤垣源蔵出立の段』(艶次)、  
『楠昔嘶どんぶりこ』(ねぶか)、  
『松王下屋敷の段』(組次)、  
『朝顔日記浜松小屋の段』(松葉)、  
『三勝半七酒屋』(冬木)、  
『三十三間堂平太郎内』(小峨我)、  
『白石嘶新吉原揚屋の段』(小菊)、  
『一ノ谷三段目』(吾角)、  
『太功記十段目』(寿キ)、  
『伊勢物語三段目』(相生)、  
『忠臣蔵五段目』(山水)、  
『仙代萩御殿の段』(三洋)、  
『合邦辻下の巻』(魁)、  
『阿波鳴戸八ツ目』(三松)、  
『恋の飛脚新口村の段』(菊水)、  
『三日太平記九ツ目』(亀鶴)、  
『朝顔日記宿屋の段』(久木)、  
『時雨の炬燵紙治の内の段』(三十七)、  
『本蔵下屋敷』(美好)、  
『播州皿屋敷』(松香)、  
『蝶花形八ツ目』(栄旭)、  
『三十三所壺坂寺の段』(菅枝)、  
『腰越状泉三郎館の段』(呂三)

○大正5 (1916-11-24) 『台湾日日新報』漢文欄  
◎学生活動電戲

近來活動写真取締問題。歸於実行時代。最近東京市發布警視庁新取締規則嚴重厲行鏡面檢閲。慮其有害於風紀衛生也。顧近今台湾内地人劇界狀況。新派俳優浪花節講談。落語。娘淨琉璃等。感受活動写真压迫。有凋落之運。榮座朝日西座經營困難。勢不得不讓世界館。芳野亭諸活動写真呈滿員之盛況也。學校生徒及青年子弟姪等。流行猶甚。非教師父兄。可能制止。為惟世界館主。有見及茲。曩由内地移入理想的教育鏡面。經市内小公學校長檢閱鑑定無碍。會期二十三日上午九時至十一時半。二十五日下午一時半至四時。二十六日上午九時至十一時半。會場不販菓餅之類。觀覽料學生四錢。父兄十錢外。不敢一厘。演題若実寫飛行機製作実況。法騎渡河。非洲獵豹。印度風俗。猿及蛇虺。毛虫化蝶等。兼可以資精神上之開發云。

□大正5 (1916-12-16) 『台湾日日新報』

●新刊紹介

▲義太夫集(上卷、海賀変哲編) 俗曲文庫の第三編にして最も人口に膾炙せるもの三十番を収録し章句を嚴密に校訂し合の手の外に特殊の節は洩れなく之を挿入せるのみならず卷末には



語りもの如し

『伊勢物語』(相生)、『又助内』(梅笑)、『古八』(藤枝)、『勘平内』(我笑)、『明鳥』(花笑)、『沼津六』(吉永)、『楠三』(ねぶか)、『酒屋』(寿)、『壺坂』(小菊)、『堀川』(魁)、『梅忠』(菊水)、『太十』(久木)、『紙治』(三十七)

□大正6 (1917-07-28) 『台湾日日新報』

■素人浄瑠璃會 二十八日、二十九日両日、府前街四丁目丸福前神島表具店楼上にて開會す。語りもの左の如し

『四つ谷怪談』(二声)、『台処記棚ヶ先』(梅枝)、『お染久松野崎村之段』(柳枝)、『菅原伝授手習鑑四ツ目』(相生)、『加賀見山又助内之段』(梅笑)、『忠臣蔵六段目』(我笑)、『日吉丸三段目』(花笑)、『楠三の口とんぶりこ』(寐鱈)、『平仮名盛衰記逆櫓之段』(改玉)、『加賀越八段目岡崎之段』(菅枝)、『松王下屋敷』(魁)、『古手屋八郎兵衛』(藤枝)、『三勝半七酒屋の段』(鱈鳳)、『明烏山名屋の段』(菊水)、『壺坂寺沢市内』(小菊)、『伊賀越六段目沼津之段』(三洋)、『阿波鳴戸十郎兵衛内』(かね子)、『忠臣蔵本蔵下屋敷』(美好)、『金比羅利生記志渡寺之段』(楽間)、『玉藻前道春館之段』(中村)

□大正6 (1917-08-27) 『台湾日日新報』

●素人義太夫會 台北義太夫界の古老として美音家たる久木氏は今回内地帰還に付、同志者相謀り二十七、二十八両日間、南門外龍口亭に於て送別演芸會を開催する由にて、尚ほ同會の爲め知己諸氏よりの寄贈品多く、両夜共福引の余興ありと。因に芸題左の如し

(三味線) 豊澤三省、竹本鐘龍、竹本三玉、豊竹よし子 (朝顔日記) 久木、(楠昔噺) ねぶか、(太功記十段目) 梅枝、(新吉原揚屋) 柳枝、(新野口村)、菊水 (布引四段目) 相生、(菅岡) 鱈鳳、(沼津里) 和楽、(御所桜) 改玉、(柳井筒)、(日吉丸) 築司、(三勝酒屋) 大和、(堀川おしゆん伝兵衛) 三十七、(三日太平記) 花笑、(又助住家) 梅花、(合邦奥) 松葉、(佐倉宗五郎子別) 美好、(阿波十) 三松、(志渡寺) 松香、(忠国) 我笑、(中条姫) 組次、(本蔵下屋敷) 藤枝、(壺坂) 小菊、(合邦内) 魁、(関取二代鏡) 菅枝、(玉三) 白蝶、(三勝酒屋) かね子、(四谷怪談) 一声、(朝顔日記) 桜玉、(太功記十段目) 中糸、(本蔵下屋敷) 藤司、(平仮名盛衰記) 三洋

□大正6 (1917-08-29) 『台湾日日新報』欄外記事

●素人義太夫会 南門龍口亭に昨日迄開演中なりし久木送別演芸会は近頃になき盛況を呈し、尚各商店よりの奇贈品も多きより、尚一日の日延をなし、余興の福引ありと。本日の語りもは左の如し

『朝顔日記』（久木）、『三勝酒屋』（相生）、『沼津里』（改玉）、『四ッ谷怪談』（一声）、『壺坂』（小菊）、『阿波十』（かね子）、『柳』（三松）、『玉三』（鱗鳳）、『太十』（魁）、『谷渡り』（うぐひす）

□大正6（1917-09-03）『台湾日日新報』

●素人浄瑠璃会 今三日及び明四日の二日間台北検査階上に於て、午後正六時より、鶴澤一平連の素人浄瑠璃会を催ほす。両日の語りも左の如し

▽三日の分 『御祝儀宝入船』（入登）、『梅川忠兵衛新口村』（勝好）、『三十三所壺坂沢市内』（山根）、『本蔵下屋敷』（梅笑）、『玉藻前三段目』（我笑）、『佐倉曙儀作内』（菊水）、『才三お駒鈴ヶ森』（花笑）、『伝兵衛お俊堀川』（魁）、『大功記十段目』（花香）、『天網島紙治内』（三七七）

▽四日の分 『梅野由兵衛聚楽町』（勝好）、『大功記十段目』（山根）、『忠臣蔵六つ目』（我笑）、『加賀見山又助内』（梅笑）、『久松お染野崎村』（花香）、『梅川忠兵衛新口村』（菊水）、『三十三

所壺坂沢市内』（魁）、『浦里時治郎山名屋の内』（花笑）、『恨鰐鞘八郎兵衛内』（三七七）、大切掛合『布引四段目』紅葉局（勝好）、藤作（我笑）、又五郎（梅笑）、平治（菊水）、小桜（花笑）、松浪検校（三七七）、三味線（鶴澤一平、ツレ同小種、ツレ同梅三）

□大正6（1917-09-08）『台湾日日新報』

●素人浄瑠璃会 今明両日午後六時より、八甲俱樂部に於て三省連の素人浄瑠璃会あり。語りも左の如し

一 『御祝儀宝入船』（入登）、『お駒才三鈴ヶ森』（梅子）、『太功記十段目』（中司）、『阿波鳴門八つ目』（ねぼけ）、『鏡山又助内』（橘昇）、『三勝半七酒屋』（大和）、『朝顔日記宿屋』（桜玉）、『弁慶上使』（改玉）、『玉三』（竹司）、『撰州合邦ヶ辻』（美好）、『菅原伝授寺子屋』（鱗鳳）、『壺坂沢市内』（昔枝）、『桜曙儀作内』（一声）、『松王下屋敷』（組次）

十把一束 ▲此間龍口亭素人義太夫会で語られた橘昇君の義太夫には感心しました。一層勉強して台湾の花形たらん事を希望す（義太夫狂）

□大正6（1917-09-19）『台湾日日新報』

●追善浄瑠璃

基隆末広館主の一年祭に際し、友人知己相図り、来る二十日基隆座に於て、追善浄瑠璃大会を開催する事となり、夫々へ案内状を發したるが、当日主なる語物左の如し

『たむけ』（入登）、『壺坂寺』（松雀）、『鏡山古郷錦絵』（弥生）、『佐倉曙』（十一）、『弁慶上使』（立石）、『阿波鳴戸』（大石）、『忠臣蔵』（福德軒）、『布引四』（若衆）、『酒屋』（松花）、『八陣』（東）、『箱根靈驗記』（松香）、『勢州阿漕ヶ浦』（十雀）、『水掛村』（吾勇）、『合邦ヶ辻』（十三）、三味線、鐘籠、梅香、大阪、掛合『本蔵下屋敷』若狭之助（弥生）、三千歳姫（松雀）、下部（吾勇）、番左衛門（十雀）、本蔵（十三）、三味線（鐘籠）

□大正 6 (1917-09-20) 『台湾日日新報』

地方近事 基隆

▲追善浄瑠璃 故末広館主 糸雀事一年祭に相当するに付き、生前同人の好める浄瑠璃に因み、友人柴田弥三郎、片山松之助、足利藤吉氏等の發起にて、二十日午後五時より基隆座にて追善大会を開催し、夫々出演者多数なりしと（十九日）

□大正 6 (1917-09-28) 『台湾日日新報』

●追善義太夫会 生前斯界の美音者として大人氣を博せる故

愛水の三年忌に相当せるを以て、今回知友連中の催しにて、本日午後五時より淡水街淡水俱樂部に於て、追善義太夫大会を催はす由。語りものは左の如し

錦声（二度目）、相生（布川）、山口やすよ子（安達原）、和楽（沼津）、菊水（梅忠）、ねぶか（阿漕）、改玉（日吉丸）、小菊（壺坂）、三笑（佐倉曙）

□大正 6 (1917-12-01) 『台湾日日新報』漢文版

●慈善演劇

今秋九月杪十月初。東京大阪地方。遭暴風雨來襲其悽慘非筆舌所能罄。各界仁人。胥謀所以拯救。嘉義素人義太夫研究会。亦謀于廿七八兩日午後五時起。仮座戲園嘉義座開慈善演劇會。每夜各演十八番。發起人代表者山本久蔵、安倍馬治兩氏。極力招徠。觀客甚衆。所得戲資。分贈災黎云。

□大正 7 (1918-01-15) 『台湾日日新報』

ゑんげい

□素人義太夫会 十五日十六日の兩日午後六時より、新起街古道具屋跡に於て素人義太夫開會。番組左の如し

『双蝶々』(菅板)、『日吉丸』(改玉)、『朝顔日記』(大和)、『岸姫』(組次)、『太十』(中司)、『梅忠』(菊水)、『勘平切腹』(三洋)、『紙治』(三七十)、『寺小屋』(寿)、『四度寺』(楽馬)、『千両のぼり』(桜玉)、『忠四』(和楽)、『壺坂寺』(一声)、『三勝酒屋』(三笑)、『平次住家』(ねぶか)、『阿波十』(小菊)、『野崎』(柳枝)、『お俊』(魁)、『御所桜』(かね子)、『鈴ヶ森』(梅子)、三味線豊澤三省

□大正7 (1918-05-24) 『台湾日日新報』

□打狗浄瑠璃大会 大阪文楽座で声名を博した竹本十組大夫の娘で、父の歿後は竹本綱巴津の門に入りて、浪花の女義太界に持て囃された竹本巴津昇が今度打狗に来たので、土地の有志の後援に依り、二十四、二十五の両日間打狗公館で放棄の浄瑠璃大会を催すべく、其演物は左の如し

△初日芸題 『御所桜弁慶上使』(小玉)、『玉藻前三段目』(梅先)、『阿波鳴戸巡礼歌の段』(巴津昇)、『千代萩御殿場』(九重)、『本藏下屋敷』(巴津昇)  
△二日目芸題 『太功記十段目』(小玉)、『朝顔日記浜松小屋』(梅光)、『朝顔日記宿屋の段』(巴津昇)、『躰仇討三人上戸』(九重)、『お染久松野崎村』(巴津昇)

□大正7 (1918-05-28) 『台湾日日新報』

地方近事 打狗

▲浄瑠璃大会 竹本巴津昇の浄瑠璃大会は予報の如く、二十四、五の両日間打狗公館にて開催したるが、両夜共土地の天狗連を始め、梅屋敷の芸妓連が加はりし為め、大入りの盛況を呈したりと(二十六日)

□大正7 (1918-08-08) 『台湾日日新報』

地方近事 台中

▲倶楽部の浄瑠璃 台中倶楽部にては六日午後七時半より鶴澤一平大夫一行を聘し、浄瑠璃演奏会を催し、会員及び家族を無料入場せしめたるが、雨天にも拘らず聴集者多数なりき(六日)

□大正7 (1918-08-14) 『台湾日日新報』 欄外記事

演芸

□素人義太夫会 十四、五の両日、八甲庄日蓮宗布教所に於て、故三好常次郎追善の為め、素人義太夫会を開く由なるが、語物は左の如し

『鎌三』(文司)、『浜松』(ねぼけ)、『宿屋』(白蝶)、『二度目清

書（真砂）、『酒屋』（冬木）、『菅四』（鱗鳳）、『箱根』（松香）、  
『沼津』（三洋）、『酒屋』（柳枝）、『沼津』（一声）、『儀作』（菊水）、  
『鳴門』（小菊）、『鈴ヶ森』（花笑）、『下屋敷』（■）、『百度平』（藤  
枝）、『壺阪』（かね子）、『先代萩』（三松）、『忠四』（和楽）、『壺  
阪』（組次）、『阿漕』（ねぶか）、『八陣』（菅枝）、『五良助』（改  
玉）、『野崎』（大和）、『新野口』（二二三）、『宿屋』（中司）、『合  
邦』（松葉）、『野崎』（相生）、三味線三玉、三省

□大正7（1918-09-19）『台湾日日新報』

家光公 斯波南叟口演 第三十席 相撲浄瑠璃

※家光と秀長の家督争いを諷して、小野お通が惟喬惟仁即位争  
いの相撲を浄瑠璃に語るという場面。

□大正7（1918-09-21）『台湾日日新報』

●追善浄瑠璃大会 明二十二日午後五時より基隆座に於て、故  
大商組組長柴田氏百箇日に相当せるより、生前浄瑠璃を嗜好せ  
るに因み、追善大会を催す由。尚故人及び同好有志の追善句は  
左の如し

くりかへすことの葉もなし秋の暮 弥生

柴山の孤島に草の風透けり 雀連中

梢にもはなれて行やうめもとき 梅鶯連中  
馴れ染し港の岸も声遠く 竹本鐘龍  
手に持てるをしき一枝放ちけり 豊澤梅香  
ひとり寐のくれて淋しき秋の里 小松利三郎  
秋風にさそはれ行や深水草 宇田伊代吉  
身につけてことほりふかし秋の暮 藤川与一郎  
歌塚の雨に淋しきみなどぐち 広木秋太郎  
想思樹の細きにも似す秋の声 足利藤吉

□大正7（1918-12-09）『台湾日日新報』

ゑんげい

□素人義太夫納会 新起街新起湯、向ひ建具屋浅原方に於て、  
素人浄瑠璃納会を催す由にて、語物左の如し

『太十』（ねほけ）、『上使』（かね子）、『浜松』（改玉）、『二度目』  
（真砂）、『柳』（文司）、『五良助』（記玉）、『宿屋』（白蝶）、『野  
崎』（太郎）、『壺坂』（小菊）、『八陣』（菅枝）、『酒屋』（柳枝）、  
『小坂部館』（三洋）、『岸姫』（冬木）、『菅四』（鱗鳳）、『忠六』（我  
笑）、『鈴ヶ森』（花笑）、『六助内』（藤枝）、『滝』（松香）、『鳴門』  
（三松）、『四ツ谷』（一声）、『梅忠』（菊水）、『堀川』（魁）、『本  
藏下屋敷』（相生）、三味線（豊竹三玉）

□大正7 (1918.12.14) 『台湾日日新報』欄外記事

ゑんげい

□素人浄瑠璃大会 今十四日午後六時半より、新起街魚金裏、芸妓富丸宅に於て、台北素人浄瑠璃大会開催の由。大切には『実録先代萩対決』総掛合との事なり

□大正7 (1918.12.16) 『台湾日日新報』

●素人義太夫会 今明両日魚金向ひ古物競売所に於いて素人義太夫大会を開催する由なるが、語り物は左の如し

『白石噺新吉原』(梅子)、『三十三間堂』(小柳)、『関取千両幟』

(一三三)、『三勝半七』(中司)、『壺坂沢市』(兼子)、『朝顔宿や』

(桜玉)、『八陣政清本城』(菅枝)、『志渡寺』(松香)、『新口村』

(菊水)、『阿漕浦』(藤鱈)、『忠六』(我笑)、『鳴門』(三松)、『岸

姫』(竹司)、『中将姫』(組次)、『お駒才三』(鱈鳳)、『野崎村』

(柳枝)、『四つ谷怪談』(一声)、『お俊佐兵衛』(魁)、『弥次郎

兵衛喜多八』(和楽)、『布四三人上戸』(相生)、中切に筑前琵琶を演す。三味線(豊澤三省)

□大正8 (1919.01.20) 『台湾日日新報』

●素人浄瑠璃会 今明両日市内北門街鍼力屋菅方にて

素人浄瑠璃大会を開催す。来聴隨意なりと。読物左の如し

『浜松』(ねはげ)、『三代記』(文司)、『二度目』(真砂)、『弁慶

上使』(冬木)、『玉三』(白蝶)、『壺坂』(小菊)、『梅忠』(菊水)、

『蝶花形』(三津)、『いざり』(松杏)、『安達三』(菅枝)、『沼津』

(相生)、『菅原四』(鱈鳳)、『沼津』(一声)、『宿屋』(かね子)、

『又助』(我笑)、『鳴戸』(三松)、『太十』(清花)、『日吉』(喜楽)、

『日吉』(花笑)、『酒屋』(柳枝)、『柳』(山玉)、『壺坂』(粹石)、

『堀川』(魁)、『忠四』(和楽)、『皿屋敷』(ねぶか)、『杉の森』(組

次)、三味線(三玉)

□大正8 (1919.01.23) 『台湾日日新報』欄外記事

●義太夫天狗会

台北素人浄瑠璃界に於て優に玄人の累を

し、或は之れを凌ぐとの定評のある五六の自称名人は、本日午後六時より料亭一〔版面切のため不可読〕を求むべく、所謂天狗競演会を催す由。語り物は左の如し

『二度目』(美佐子)、『御所』(冬木)、『儀作』(菊水)、『壺坂』(一

声)、『忠四』(和楽)、『酒屋』(相生)、三味線豊竹三玉

□大正8 (1919.02.07) 『台湾日日新報』

●浄瑠璃大会 ▽台北の素人天狗連

来る七、八、九の三日間城内東本願寺に於て新年聯合素人淨瑠璃大会を開催する由。今回は特に内地新来の老練家の新顔も加はり、市内全部の素人天狗連六十七人が各自得意の語物を選び、精々唸るべしと

□大正 8 (1919.02.15) 『台湾日日新報』

●淨瑠璃会総評 ▼台北の素人天狗会 連日の大会幹旋方の奔走、真に御苦勞千萬。但し斯道の為め感謝に堪へず。将来共御配慮を願つて置いて、偕て三日間を通じ諸氏の奮闘振りに

は、ほとほと感服 面白く拝聴しました。就ては無遠慮ながら一寸批評を加へる事を許して頂きたいと思ひます

◇兼子嬢、近来頗る上達、些のあぶな気無きに至りしは修業の効か。唯女性の為め時々上走る声の出るのは致方なし。可成太く力を入れられたし

◇鱗鳳氏、君は時々不出来の事あるも、先夜の『三勝』は近來の上出来。兎に角気性より割り出すものか、性急にして落附を欠くは遺憾なり。彼の二調氏の類ならんには残念なり

◇菊水氏、熱心だけありて近來めきめき上達したるは嬉し。得意の『二の口村』は誠に結構。唯一言を呈せんに、少しも風采と云ふ事に頓着せず。胸を明け放し体を左右に振り、宛然

芝居の鱗七を見るが如きは感服せず。床に上りし以上は沈着の態度と鷹揚の語口とを研究されたし

◇三松氏、『阿波の鳴門』が三松か、三松が『鳴門』かと云ふ程成功せるものなり。生來の美音にてお引親子の情愛をしんみりと演出し、ハンカチーフを絞らしめしは、三日間を通じて第一位に押す可きか。これと反し御殿に対しては遺憾の点少々ならず。要するに君の美音が類をなして所謂悪と云ふ点は零なり。

『御殿』は政岡の忠義、栄御前の威厳、八汐の真悪と三段に談つて欲しかりき。此点は層一層の研究を望む

◇藤枝氏、相変らず御勉強の事と見へ、『合邦の奥』は面白く拝聴せり。目下台北に於ける花形として数へらる、一人ならん。唯時々言葉などに稍々早すぎる点あり。如何にや

◇住登氏、押出し、態度、將た音声とも仲々立派なる太夫と見えしも、余りに評判高かりし為め、却つて期待を裏切られし感ありたり。但台北斯界の重鎮たるは云はずもがなである

◇組治氏、得意の語り物『飯原兵衛館の段』は先づ他に類なしと云ふ可きか。これに対して愚評を下すは礼に非ざるべし

◇一声氏、初め『沼津』を聞きたり。申分無き出来なり。これ等の大家に対して愚評は慎むも、望むらくは将来語り惜みをなさず、進んで出演、後進を指導されたい

●●柳枝氏、斯界元老の一人悪からう筈も無く、『本藏下屋敷』

『白石噺』共感服せり。夫れにつきて思ひ出すは二十年前東京にて紋左衛門より四代目播磨太夫となられし太夫は、台北斯界連中の君にして君の浄瑠璃を聞きて播磨の昔を偲び、常に樂しみ居る次第なり。茲に感謝の意を表す

◇終りに附言したきは三日間中驚かさし事二回あり。一二三と云ふ名によつて例のお爺さんかと思ひしに、実物は若い人にて中々の功者。之れは捨物か。今一つは呂三氏は中村代議士方に居らる、老人ならんと思ひしに、之れ亦同名異人なりき。妄評多謝（一老爺投）

□大正 8 (1919-02-19) 『台湾日日新報』

頓狂詩

天狗 望蜀山人

読浄瑠璃会総評。技巧何難弟難兄。名雖称素人天狗。長足進歩実可驚。

〔浄瑠璃会の総評を読むに、技巧は何れも弟たり難く兄たり難し。名は素人天狗と称すと雖も、長足の進歩実に驚くべし。〕

□大正 8 (1919-03-07) 『台湾日日新報』

●三玉連浄瑠璃会 ▽七八両日一力亭にて

台北の素人浄瑠璃三玉連は今回華やかなる緞帳、御簾、引幕等を新調したるを以て、右披露を兼ね月並会を七八の両日、新起街一力楼上に於て開催し、御得意の美音を聞かせる由。同好者の来聴を希望すと。但語物は左の如し

『忠三（ねほけ）、三十三間堂（喜楽）、寺子屋（鳳玉）、弁慶上使（太郎）、二度目清書（真砂）、平太郎内（山玉）、壺坂寺（粹玉）、鎌三（文司）、又助（三昇）、沼津（一声）、酒屋（麟鳳）、下屋敷（菊米）、玉三（我笑）、皿屋敷（松香）、日吉丸（白蝶）、壺坂寺（三津）、堀川（相生）、忠臣蔵六（呂三）

□大正 8 (1919-04-18) 『台湾日日新報』欄外記事

●浄瑠璃会 本明両日間午後七時より、新起街魚金前競売場に於て、三玉連浄瑠璃会を開催する由にて、語物左の如し

『御祝儀宝入舟（入登）、日吉丸三段目（喜楽）、赤垣源藏出立（三昇）、時雨炬燵紙治内（一声）、播州皿屋敷（文司）、壁仇討（我笑）、太功記十段目（ねほけ）、白石噺揚屋（美玉）、三十三間堂柳（山玉）、一谷陣屋（麟鳳）、安達原三

段目』(菅枝)、『お染久松野崎村』(三津)、『先代萩御殿』(白蝶)、  
『朝顔日記宿屋』(粹玉)、『玉三』(真砂)、『阿波鳴戸十郎兵衛内』  
(三峯)

□大正8 (1919.04.26) 『台湾日日新報』

●素人浄瑠璃会

本日午後七時より、新起街料亭一方の楼上に於て晴雨に係らず  
勝玉連月並会を開催する由、何人も随意入場差支へなしと。  
今回は二三の新顔もあれば定めて盛会ならん。語物は左の如し

『宝入船』(入登)、『二ノ谷』(相生)、『鎌三』(富貴子)、『柳』(天  
野)、『御所桜』(かね子)、『沼津』(隅登)、『鈴ヶ森』(みさ子)、  
『毛谷村』(菅谷)、『寺子屋』(鬼城)、『吉日丸』(二三)、『先  
代』(峰菊)、『合邦』(竹司)、『八陣』(組弥)、『百度平内』(三  
松)、『酒屋』(柳枝)、『太十』(常盤)

□大正8 (1919.05.06) 『台湾日日新報』

●浄瑠璃例会

来る六七日午後七時より、新起街一方に於て  
若松連浄瑠璃例会開催する由にて。番組左の如し

『岸姫』(竹司)、『日吉丸三』(叶)、『鈴ヶ森』(みそ子)、『酒屋』  
(中司)、『八陣八』(小柳)、『聚楽町』(二三)、『弁慶上使』(か

ね子)、『又助住家』(改玉)、『紙治』(大和)、『太十』(小林)、『二  
代鏡』(菅枝)、『御殿』(三松)、『玉三』(鱗鳳)、『矢口』(組次)、  
『野崎村』(柳枝)、『逆櫓』(相生)、『合邦』(三笑)

□大正8 (1919.05.26) 『台湾日日新報』

●素人浄瑠璃会

▽山城館にて

台北素人三玉連の浄瑠璃会は本日午後六時より山城館にて開催  
され傍聴無料なりと。殊に今回は素人中の名人と云はれし  
三十七大夫の出演あり。大切には三玉、三昇、鳳玉の掛合にて  
『壁の仇討三人上戸』を出演すべしと

□大正8 (1919.06.07) 『台湾日日新報』

●素人浄瑠璃会

台北三玉連一部の素人浄瑠璃連は、今七日午後六時より  
南門外の公会堂に於て素人浄瑠璃会を開き、入場随意にて成る  
べく多数の来聴を希望すと

□大正8 (1919.06.15) 『台湾日日新報』

●素人浄瑠璃会

南門方面の素人義太夫三玉連の人々は、本十五日午後七時より、



地方近事 嘉義

●●●素人淨瑠璃會

▲素人淨瑠璃會 来る廿日廿一日の両日間嘉義座に於て素人淨瑠璃會を開催せる由なるが、出演者は永島質屋、田中洗濯屋、薛香豆屋、音吉畳屋、其他台南台中よりの応援もある筈。尚ほ右終りて大切には素人芝居の『忠臣蔵五段目』『壺坂』等を演ずる筈なるが、当日は公開するを由(十九日)

□大正8 (1919-11-06) 『台湾日日新報』

●●●田新総督を訪ふ

▽令嗣篤氏其平生を語る

▽囲碁好き隠芸は義太夫

◇新総督田健治郎男の平常をと思ひ、本日(十月三十日)午前十一時頃麻布広尾の私邸に男爵を訪問した、(中略)

◇玄関に訪れ刺を通ずると、取次ぎの案内で奥十畳の間に通された。処が其処には既に令嗣篤氏が待ち顔であつた。不取敢

祝詞と共に来意を述べると、氏は初対面ながら恰も旧知の如く、始終笑を含みながら打解けて語る、(中略)

何か総督には隠芸と云つた様なものはと問を発すると、あります、あります、これはまだ誰も知つて居ないだらうと思ひますと、答へて、さも云ひ難さうに大笑して、後は又中絶してしま

つた、更に問ひを發して促がすと、詮方なげにそれは

◇義太夫です。時折外出先から酔つて帰つた時などは、口三味線で何でもかまはず、目の前にある火鉢鉄瓶などを叩いて調子を合せ、独りで唸つて居ます。どウせ場所所で談る様な義太夫じゃありませんと、哄笑しつ、ある折柄玄関に人のけはひがした、篤氏は早くもそれと察し今父が帰つた様です、御紹介致しましやうと立つて行く、時計を出して見ると恰度十二時が五分過ぎて居る、待つ間程なくフロッツ姿の

◇田総督が現はれた、(中略)折柄来客があつたので総督は一寸と挨拶して立たれた、後は又篤氏が引繼いで四方山の話に移つたが、余り長座しては失礼と思つて十二時半頃辞した

□大正8 (1919-11-10) 『台湾日日新報』欄外記事

演芸

□淨瑠璃大会 今十日午後正六時より基隆座に於て、雀連の古老として十余年、斯道に尽瘁せる松雀勇退の送別として淨瑠璃會を開く由にて、当日の語りもの左の如し

『御祝儀宝の入船』(入登)、『■の寿式三番叟』(若■、小半、鈴八)、『八陣』(土雀、柳)(小半)、『二十四孝』(若■)、『又助』(■雀、三代記)(■雀、太十)(鈴八)、玉三(大石)、



●素人浄瑠璃会 台北府中街旧台北庁舎跡、関柔道館に於て、  
本月二十五日より四日間、三玉師匠送別浄瑠璃大会を開催す  
と。談物左の如し

『いざり十』（ねぼけ）、『朝顔』（おどけ）、『妹背山』（とぼけ）、  
『柳』（文路）、『御殿』（関戸）、『日吉』（可丈）、『玉三』（可笑）、  
『沼津』（鳳玉）、『忠六』（三洋）、『壺坂』（三吉）、『岸姫』（艶  
次改七五三雀）、『野崎村』（柳枝）、『御所桜』（七五三登）、『紙  
治』（二声）、『朝顔』（白蝶）、『安達』（山玉）、『白石噺』（清花）、  
『忠六』（記玉）、『寺小屋』（三昇）、『鈴ヶ森』（麟鳳）、『皿屋敷』  
（真砂）、『御所桜』（都）、『志渡寺』（松香）、『鳴門』（三松）、『下  
屋敷』（菊水）、『壺坂』（小菊）、『儀作』（組次）、『滝』（我笑）、  
『酒屋』（相生）、『朝顔』（かね子）、『鈴ヶ森』（竹司）、『柳』（太  
郎）、『八陣』（菅枝）、『日吉丸』（寿）、『堀川』（魁）、『寺古屋』  
（藤枝）、『梅忠』（花笑）、『二度目』（みさ子）、『二代鑑』（和楽）、  
『志渡寺』（峯菊）、『太十』（石磊）

□大正 9 (1920.04.25) 『台湾日日新報』

●素人浄瑠璃会

今明二十五、二十六の両日、八甲庄日蓮宗妙見寺に於て  
素人浄瑠璃春季大会開催の由。因に人名、語り物左の如し

相生、柳枝、隅登、魁、藤枝、菅枝、三松、竹司、三友、  
二二三、峯菊、竹子、かね子、みさ子、『三勝半七』、『野崎村』、  
『忠六』、『壺坂』、『菅四』、『三十三間堂』、『二十四孝』、『鳴戸』、  
『合邦』、『太十』、『岸姫』、『日蓮記』、『玉三』、『阿漕ヶ浦』

□大正 9 (1920.05.21) 『台湾日日新報』欄外記事

演芸

□花声会の義太夫 廿一日新起街西本願寺別院に於て、宗祖  
大師降誕会余興として催はざる、義太夫会の語りもの、差の  
如し

『御祝儀宝の入舟』（入登）、『三十三間堂』（七五三嬢）、『お駒  
才三鈴ヶ森』（竹司改め七五三柳）、『太十』（艶次改め七五三雀）、  
『鳴門八ツ目』（七五三子）、『日吉丸三の切』（琴馬）、『寺小屋』  
（組次改七五三寿）、『沼津』（七五三登）、大切東上る新内節『千  
両幟』掛合（七五三子、七五三登）、櫓太鼓入り、三味線曲弾  
十八弾

□大正 9 (1920.06.21) 『台湾日日新報』

●素人浄瑠璃会

八甲庄法華寺で  
本日より引き続き三日間、午後六時より八甲庄法華寺に於て、

故井部茂吉追善淨瑠璃大会を開催する由なるが、久々にて斯道の老練家、若手、花形等、在台北の天狗連、殆んど総出にて各自の十八番物を出演すべしと。因に傍聴は無料

□大正9 (1920.09.26) 『台湾日日新報』欄外記事

演芸界

●娘義太夫 大阪娘義太夫、竹本弥栄子の一行は一昨日の笠戸丸にて着台、本日より先づ二日間新竹座にて開演。其の初日の語り物、左の如し

『御祝儀宝の入舟』(入登)、『信功記上かん屋』(竹本弥広)、『日吉丸三段目』(竹本湊栄)、『佐倉之曙宗五郎住家』(付「ママ」本春子)、『安達原三段目』(竹本源之助)、『朝顔日記宿屋三段』(竹本君広)、『三十三間堂平太郎住家之段』(竹本龍光)、『太閤記十段目』(竹本弥栄子)、『大切総掛合白石斬揚屋之段』

□大正9 (1920.09.28) 『台湾日日新報』

●栄座の娘義太夫

▽竹本弥栄子の一座

娘義太夫 義太夫 〓それは随分久しぶりに聞く声である、今は某君の夫人となつて居る芳乃亭の国芳時代には折々高座に見るべき

機会もあり、栄座へも何やらの一座がか、つた事もあつた、以来それが久しく忘れられて居た形である、然るに今度山本営業部の手で大阪娘義太夫、竹本弥栄子の一行が渡台して今夜から栄座で開演する、この弥栄子は未だ若い滴るやうな女、呂昇の門下で師匠順業中はそのキリ三を語つて居た花形だつたと云ふ事だ一行は七八名で、機を得て君広、龍光、弥栄子の三人を聴いたがいづれも相当によく語る、僕の聴いたのは君広の『朝顔の宿屋』、龍光の『菅四』、弥栄子の『壺坂』であつた、君広の聲は頗る豊富であるが少しく若々しい、それは未だ年が若い為である語り口は確かりして居るが言葉より筋に於て優れて居た、又た龍光の『菅四』は流石に幅物を語る鼻れとして上乘のものである、お千代の戻りから語つたが重味のある立派なものだ、松王夫婦の口説きには思はずホロリとさせられた、但し暫らく休んだ為か裏声が少しく割れて聞えたがこれは敢て問題にならぬ程度であつた、要するに淨瑠璃聴きの聴くべきものである座長弥栄子は愛嬌で捏上げたやうな若い別嬪だ、それが呂昇の門下丈々に弾語りで、夢が浮世から谷底まで一段語つたが流石に達者なものだ、声も沢山あるし三味線も確かである、始めの内は少しく上りの気味であつたが奥に進むほど力が入つて来て山の段など殊に面白く聴いた思ふに堂摺連

の一問題たるべき事を保証する（みの字）

【写真】栄座に開演の竹本弥栄子

エンゲイ

□栄座の娘義太夫 大阪娘義太夫竹本弥栄子一座は、本夜より栄座に開演。入場料は特等一円五十銭、一等一円二十銭、二等八十銭、三等四十銭にして、初日の語り物左の如し

□御祝儀宝入船（竹本入登）、『忠臣蔵六段目勸平腹切』（竹本弥栄玉）、『日吉丸三段目小牧山城中』（竹本湊栄）、『新版歌祭文野崎村』（竹本源之助）、『御所桜三段目弁慶上使』（竹本君広）、『三十三間堂棟木由来平太郎住家』（竹本龍光）、『太功記十段目尼ヶ崎』（竹本弥栄子）

□大正9（1920-09-29）『台湾日日新報』欄外記事

エンゲイ

□娘義太夫二日目 栄座弥栄子一座、本夜の語り物左の如し

□御祝儀宝入船（入登）、『先代萩御殿』（湊栄）、『佐倉宗五郎子別』（春子）、『廿四孝十種香』（源之助）、『朝顔日記宿屋の段』（君広）、『日吉丸三段目』（龍光）、大功『三十三所花山赤坂寺

之段』（弥栄子）余興、総掛合

□大正9（1920-10-06）『台湾日日新報』

●追善浄瑠璃会 来る六、七、八の三日間府後街旧庁舎後関道場にて故三省師追善の爲め、浄瑠璃会を催す由

□大正9（1920-11-02）『台湾日日新報』

演芸

□娘義太夫 栄座に開演中の娘義太夫、竹本弥栄子の一行は相変らず人気を呼んで居るが、今夜から当地お馴染の竹本勝玉師匠が一座に加はつて一段語事となつた、それで勝玉連の応援総見、否総聴などて、今明二日間は錦上更に花を添へるだらうが、本夜の語り物は左の如くである

□八陣八ツ目（湊栄）、『佐倉宗五郎子別』（春子）、『岸姫松三段目』（源吾）、『先代萩御殿』（君広）、『忠臣蔵本蔵下屋敷』（勝玉）、『玉藻前三段目』（龍光）、『伊勢音頭油屋の段』（弥栄子）

□大正9（1920-11-05）『台湾日日新報』欄外記事

演芸

□義太夫 今迄左程上手とも美声とも思つて無かつた連中

も、弥栄一座の高座に加はつて競技の咽仕合をしたので吃驚。勝玉と云ふのはあれ程上手だとは思はなかつたんで、今更のやう鯨子張つて聴いて居るものが多かつたには、勝玉師も一寸悦しかつたらう。話は違ふが此の勝玉師に比敵する例の龍光だか、今迄誰人も氣附かないで居たが、実は非常な近視眼で見台の本が読めない、だから従つて本の必要を感じ無い。其れでも最初のうちこそ一二枚捲くても見るが、後は其儘恰度浪花節を語ると同じ調子ですとは楽屋裡の話

□大正9 (1920-11-05) 『台湾日日新報』

●義太夫会

▽三玉連 月例会  
本夜南門公会堂にて、三玉連の義太夫会開催さる。来聴隨意なりと

『弁慶上使』(田舎)、『播州皿屋敷』(真玉)、『玉藻前三の切』(可笑)、『沼津里の段』(鳳玉)、『岸姫松三段目』(艶次)、『弁慶上使』(一二三)、『八陣八つ目』(三峯)、『三勝半七酒屋』(相生)、『合邦ヶ辻』(雷雀)、『志度寺』(松香)

□大正9 (1920-11-25) 『台湾日日新報』

●基隆小信

●●●淨瑠璃会

基隆雀連は二十五日午後六時より基隆座に於て淨瑠璃温習会を催す由。来聴を希望すと

□大正9 (1920-12-11) 『台湾日日新報』

●素人義太夫納会

十二日午後六時より新起横街芳野亭三友社にて、勝玉連素人義太夫納会を開催する由

□大正9 (1920-12-15) 『台湾日日新報』 欄外記事

●忘年義太夫会

台北三玉連の主催にて忘年義太夫会を十五、十六両日、午後五時より旧庁舎跡閑柔道道場に開催する由、一般の来聴を歓迎すと

□大正10 (1921-01-18) 『台湾日日新報』

無線電信機に／＼「君が代」や「義太夫」が聞える

京城の無線電信機に十五日の午後六時頃、突如として珍らしい声が聞えた。それは恰かも無線電話の如く「君が代」の奏楽やら義太夫を呻る声が明らかに聞えて来たといふ。斯かる声は

世界広しと雖も未だ曾て何処の無線電信界にも無い事で、実に無線界の新レコードだとあつて科学上からも大問題を惹起するであらうとの事である（十六日京城発）

□大正10（1921-04-23）『台湾日日新報』

素人浄瑠璃會

今明両日南門外公會堂に於て、素人浄瑠璃三玉連の月例会を、毎夜六時より開催。一般の來聴を期待すと

□大正10（1921-06-18）『台湾日日新報』

素人浄瑠璃

十八、十九の両日午後六時から龍口街南門公會堂で、三玉連の素人浄瑠璃月並會を催す由で、來聴を歓迎すると

□大正10（1921-07-16）『台湾日日新報』

素人義太夫會

台北義太夫界の権威一平師の門下、天狗連は十七日午後六時から撫台街二ノ角元天野商會跡に於て、天狗會を開く由、語り物は左の通り

『阿漕ヶ浦』（我笑）、『紙治』（鳳玉）、『菅四』（艶次）、『玉三』（竹司）、『鳴戸』（越次）、『合邦』（雷雀）、『下屋敷』（真玉）、三味

線（一平）

□大正10（1921-11-07）『台湾日日新報』

栄座の娘義太夫

去年は弥栄子の一行がお目見得をしたが、久し振で又大阪から播重の若手が乗込に來た。可なりデンデン党の多い事として、既に前景氣があり、その初日の栄座はなかなかの盛況で、斯道の素人天狗連が鼻つき合さん計りに詰かけて居た。御祝儀の『宝の入船』から愛子、友司、清花迄は、語まる太夫余りドツとせないもので、野次は滅茶々に殴き附て仕舞が、四人目の長清からグツと引締つて來て、流石の野次も沈黙して耳を傾ける、続いてキリ三の住助の『三十三間堂』は確かりしたものであるが、声が美し過ぎて清元でもと思はせる。靠れの文昇の『弁慶上使』は幅物語りとして得心された、御大末千代の『壺阪』、流石に聴応へがある、厭味が無くて氣持がよいが、欲を云へば少し突込の氣合が足らないやうだつた。兎に角も大小の天狗連頗ぶつて感寸な仕られたらしく、何でも飛入に靠れ處を一段と申込んだ某太夫もあつたさうだが、聴込んで來る内に怖氣が出て飛入中止となつたと云ふ咄し、要するに弥栄子等の比ではないと一般頗る好評であつた。又た三線は各々達者だが小住の

【挿絵】は恐らく台湾では稀なものであらうと、これも上々の評

(甲水)

【挿絵】竹本末千代スケッチ

□大正10 (1921.12.08) 『台湾日日新報』欄外記事

素人浄瑠璃会

台北素人浄瑠璃として大小天狗を網羅する三玉会では、本年の納会を八、九の両日午後六時から、南門公会堂に開催し、大に掉尾の勇を鼓し、親不孝声を張り上げ、漬物の相場を狂はす由。因に入場料はロハなるも仁丹の御用意然るべしと

□大正11 (1922.03.19) 『台湾日日新報』欄外記事

演芸

□追善浄瑠璃会 台南近松会では故近松翁二百年忌追善浄瑠璃会を十八、十九の二日間新泉座で開催

□大正11 (1922.05.19) 『台湾日日新報』

還暦浄瑠璃会 二十一日栄座に於て

台北浄瑠璃界の横綱格として知られた相生太夫の還暦祝の為に、来る二十一日午後五時から栄座に於て、素人浄瑠璃大会

を開くが、当日は基隆から雀連の応援もあり、入場勝手次第といふので、デン党は押寄する事であらうが、其の乱表は左の如くで、三味線は一平、寛次郎、柳玉、鐘龍、三吉野、三玉の各師匠連が勤むると云ふ

『百度平住家』(菊水)、『紙治内の段』(東玉)『松王下屋敷』(鳳玉)、『伊加越沼津』(藤枝)、『鈴ヶ森』(竹司)、『平次住家』(我笑)、『尼ヶ崎』(組次)、『弁慶上使』(三鶴)、『本藏下屋敷』(真砂)、『日吉丸五郎助内』(貴昇)、『合邦内』(美登郎)、『沓掛村』(長勇)、『平太郎住家』(七五三登)、大切掛合『布引滝松浪琵琶の段』、平次(福水)、藤作(吾勇)、又五郎(大石)、■鳥(組次)、小桜(すゞめ)、検校(相生)

□大正11 (1922.06.03) 『台湾日日新報』

素人義太夫会

来る三、四、五の三日間毎夕六時から元八甲庄日蓮宗法華寺で故井波■茂吉追善浄瑠璃会を開催する由。木戸は勿論無料但雨天なら順延

(初日) 若手連『宿屋』(鳳玉)、『酒屋』(藤枝)、『赤垣』(艶次)、『壺坂』(貴昇)、『新口村』(菊水)、『太十』(松鶴)、『儀作』(真玉)、『日吉』(中間)、『忠三』(花玉)

(二日目) 老人連 『堀川』(松香)、『野崎村』(相生)、『四ツ谷』(一声)、『酒屋』(柳枝)、『三十三間堂』(東玉)、『岸姫』(組次)、『太十』(七五三登)、『鳴戸』(光玉)、『梅忠』(梅枝)  
(三日目) 中老連 『弁慶』(司玉)、『三十三間堂』(山玉)、『日吉』(貴昇)、『下屋敷』(加玉)、『玉三』(竹司)、『三日』(雷雀)、『沼津』(琴馬)、『安達』(新玉)

□大正11 (1922-08-04) 『台湾日日新報』

素人浄瑠璃会

八甲町法華寺に於て四日、五日の両夜、三吉野陸会連の素人浄瑠璃会開催。一般の来聴を希望すと。尚語物は差の如し

◆四日

『御祝儀寿式礼』(入登)、『太閤記十』(小高)、『三代記三浦別れ』(三峰)、『本蔵下屋敷』(古鶴)、『利生記百度平』(菊水)、『伊賀越六沼津里』(藤枝)、『三勝酒屋』(鳳玉)、『盛衰記逆櫓松』(相生)

◆五日

『式三番叟』(入登)、『日吉丸三』(工藤)、『仙代萩御殿』(古菊)、『璧仇討滝ノ段』(艶次)、『加見山又助住家』(三峰)、『勢州阿

漕浦』(ねぶか)、『廿四孝勤助住家』(三洋)

□大正11 (1922-08-16) 『台湾日日新報』

素人義太夫大会

来十七、十八両日、栄座に於て勝玉連義太夫納涼大会開催の筈にて、下足共一切無料の由。当日は連中沢山に付午後五時開演すといふ。其語物左の如し

(初(日)) 『寿式三番叟』(芸妓十名出演)、『新口村』(牛若)、『日吉丸』(勝若、壺坂) (新喜楽千駒)、『沼津』(竹乃家竹奴)、『岸姫』(日本亭吉奴)、『本蔵』(美登里)、『柳』(新喜楽千葉)、『合邦』(竹乃家峰菊)、『忠四』(勝■)、『宗五郎』(住登)  
(二日目) 『寿式三番叟』(芸妓十名出演)、『合邦』(牛若、柳) (錦糸)、『弁慶』(新喜楽千昇)、『日』(吉丸) (万屋住菜)、『■代』(新喜楽千歌)、『又助』(可笑)、『壺坂』(竹乃家勇吉)、『太十』(勝美)、『鳴門』(■松)、『野崎村』(相生)

□大正11 (1922-10-14) 『台湾日日新報』 欄外記事

義太夫会 本日午後六時より南門外公会堂に於て、竹本乙鶴門下の素人浄瑠璃会を開くと入場無料大雨は順延

□大正11 (1922-11-01) 『台湾日日新報』

素人浄瑠璃会

本日午後六時より南門公會堂に於て陸連素人浄瑠璃会を開く由。談物は左の通り。但来聴歡迎。

『日吉丸三』(くらま)、『二度目清書』(三光)、『朝顔宿屋』(松

風)、『先代御殿』(小菊)、『又助住家』(三峰)、『沼津の里』(藤

司)、『義作住家』(菊水)、『志渡寺』(艶次)、『廿四孝三』(三洋)、

『勘平腹切』(組次)、『長局の殿』(琴馬)、『蝶花形八』(延寿)

□大正11 (1922-11-04) 『台湾日日新報』

素人浄瑠璃会

本四日午後六時より、新富町不動明王社(元下塚池の端)に於て、乙女会素人浄瑠璃会開催。来聴歡迎すと。談物は左の通り。但し雨天順延

『三十三間堂』(友鶴)、『大功記十段目』(真玉)、『蝶花形八ツ目』

(延寿)、『加賀見山又助住家段』(三光)、『梅の由兵衛聚楽町段』

(大和)、『千代萩御殿』(永楽)、『忠臣蔵勘平切腹』(三洋)、『賢

女鏡片桐忠義之段』(乙鶴)

ウエルカム

▲本月中旬 栄座で三吉野氏の義太夫会がある由。久方振に氏  
の『帯屋』か『鎌腹』を聞きたいものぢや(一昔生)

□大正11 (1922-11-11) 『台湾日日新報』欄外記事

素人浄瑠璃会

大阪源之丞人形芝居一座の語手として、既に定評ある三吉野太夫は台湾に縁故者ある関係から過般渡台し、陸会なる義太夫一派を組織し、毎日毎日デ、ンデ、ンの稽古中の処、大小天狗連、ヂットしちや居られず。愈愈十六、七両日栄座にて浄瑠璃大会を開催すると

□大正11 (1922-11-15) 『台湾日日新報』

陸会の発会式 栄座の浄瑠璃大会

台北に於ける義太夫同好者で、今回陸会と云ふのを組織し、三吉野が会主となつて、その発会式として十六、十七日の両日、午後四時から、栄座で天狗連の大会を開催せるが、其語物番組は左の如くである

▲十六日初日 『仮名手本忠臣蔵大序』(三吉野)、『本蔵松伐』(乙鶴)、『殿中刃場』(菊水)、『足利裏門之場』(三峰)、『扇ヶ谷花籠』(三楽)、『判官切腹』(艶次)、『山崎鉄砲場』(い京)、『お

かる身売」(松風)、『勘平切腹』(組次)、『山科隠家』(琴馬)、『同奥』(三洋)、切『力茶屋場』総掛合、由良之助(琴馬)、平右衛門(艶次)、せかる(松風)、九大夫竹森(組次)、伴内、矢間(菊水)、力弥、千崎(延寿)

▲十七日二日目 『御祝儀宝入船』(三吉野)、『鈴ヶ森』(千歳)、『阿古屋琴責』(い京)、『菅原四段目』(一叟)、『日吉丸三』(鞍馬)、『忠臣二度清書』(三光)、『二十四孝十種香』(延寿)、『朝顔日記宿屋』(古菊)、ツレ三味線芳子、ツレ琴清子、ツレ琴光子、『加賀見山又助内』(三峰)、『お駒才三白木屋』(菊水)、『布引滝三人上戸』(藤司)、『加賀見山長局之段』(琴馬)、切『力茶屋場』(総掛合)

□大正11 (1922.11.22) 『台湾日日新報』

地方近事 嘉義

▲浄瑠璃会 竹本相之助主催で相生会なるものを組織し、其の披露として、来る二十二日二十三日の両夜、嘉義座で浄瑠璃大会を開催する筈

□大正11 (1922.12.06) 『台湾日日新報』欄外記事

ゑんげい

□素人浄瑠璃 本夜五時から旧世界館で勝玉連の素人浄瑠璃納会を開くが、下足煙草盆無料で、随意入場。その語り物は左の如し

『太子』(勝紫)、『壺坂』(千駒)、『日吉丸』(錦糸)、『朝顔』(竹奴)、『玉三』(可笑)、『二十四孝』(千葉)、『御所桜』(千昇)、『本藏下屋敷』(駒栄)、『三勝』(■■■)、『先代萩』(三柏)、『菅四』(住登)

義大夫納会

台北市新富町の素人義大夫乙鶴連では、今夜六時から警察官練習所裏手の不動堂に於て、左の順序により義大夫納会を催す由(傍聴随意)

▲『太功記』(三洋) ▲『安達ヶ原』(至玉) ▲『千代萩』(延寿) ▲『又助住家』(永楽) ▲『朝顔日記』(三光) ▲『鎌倉三浦別れ』(龍勢) ▲『三十三間堂』(友鶴) ▲『忠臣蔵』(近糸) ▲『阿波鳴戸』(真玉) ▲『太功記』(長谷川) ▲『御所桜』(天和)

□大正12 (1923.01.01) 『台湾日日新報』

賀正 児童と児童劇意義 教育上に於ける効果

台北師範附属主事 渡辺節氏談

※演劇類型の解説のなかで、「我国の浄瑠璃劇や支那劇や西洋では小楽劇」を「ドラマとオペラの間物」と定義。また、詩を「抒情詩」「叙事詩」「劇詩」に分類した場合、「日本の浄瑠璃劇」は叙事詩と劇詩の間になるとする。

□大正12 (1923-01-20) 『台湾日日新報』

地方近事 苗栗

▲素人浄瑠璃会 十七日午後七時から、苗栗俱樂部に於て川崎、六車竹内氏等の発起に係る素人浄瑠璃開催六車、秋山豊島等出演の新竹から久保、藤井等の天狗連、藤原中校の応援に人気を博し、各自筒一ぱいをさらけ出したので、満堂を唸らせ、友人既足の評出で、野次安西氏の嬉しがる事、酒と共に限りなく、翌日に越ゆる事三十分で終つた

欄外記事

浄瑠璃大会

来る二十、二十一日の両日、午後五時より、新富町不動尊に於て、乙鶴連春季浄瑠璃大会開催の由、来聴歓迎すと。語物左の通り

『安達三ツ目』(大和)、『先代萩』(近糸)、『勘平切腹』(清司)、

『蝶花形八ツ目』(松鶴)、『太十』(至玉)、『十種香』(延寿)、『千両幟』(友鶴)、『三勝』(永楽)、『鳴戸』(真玉)、『三浦別れ』(龍勢)、『二度目清書』(三光)、『寺小屋』(三洋)、『三十三間堂』(豊司)、『弁慶上使』(多美夫)、『鏡山又助住家』(乙鶴)

□大正12 (1923-01-22) 『台湾日日新報』

素人義太夫

義太夫三味線の泰斗竹澤弥七師の高弟にて、京阪神地方に於て名声噴噴たる竹澤力造師を最近招聘せる台北美登里会にては、二十二日午後四時より北投神泉閣に於て、新年宴を兼ねたる浄瑠璃初会を開催する由なるが、当日語り物左の通り

『御祝儀』(入登)、『日吉丸前』(一瓢)、『同奥』(仁光)、『炬燵』(鳳玉)、『壺阪』(鳳業)、『饅頭娘』(我笑)、『弁慶』(かね子)、『御殿』(染卜)、『油屋』(雷雀)、『吃又』(相生)、『太十』(旭昇)、

『下屋敷』(美登志)、『儀作』(菅枝)

□大正12 (1923-02-04) 『台湾日日新報』欄外記事

新竹地蔵尊奉納の為 浄瑠璃大会

新竹街老義会員等は今度、浄瑠璃大会を催し、広く一般の喜捨を受け、真言宗布教所境内に石地蔵尊を奉納すべく発起し、来

る八日午後正六時から新竹座で浄瑠璃大会を開くこととなつたが、木戸銭、下足料は一切之を受けなくて、多数の来聴を希望する。尚趣意に賛し喜捨の志ある向は新竹寺前藤原岩吉氏夫人迄申越されたしと。当夜の番組左の如し

▲『御祝儀』竹千代師 ▲『玉三』竹玉 ▲『酒屋』竹鈴 ▲『太十』竹雀 ▲『日吉』竹若 ▲『鈴ヶ森』竹光 ▲『又助』竹声 ▲『梅忠』竹豊 ▲『菅四』竹寿 ▲『忠六』竹風 ▲『安達三』(飛入) ■廻家本店ほんた

□大正12 (1923-02-10) 『台湾日日新報』

### 新竹近信

▲素人義太夫会 老義会主催の素人浄瑠璃大会は、八日午後六時から新竹座で催されたが多数の入場者あり、盛況であつた。尚ほ其趣旨に賛し、各方面からの喜捨があつたから、目的の地蔵尊奉納が出来ると会員一同は感謝してゐた

□大正12 (1923-03-10) 『台湾日日新報』欄外記事

### 義太夫／琵琶／演奏会

義太夫三味に趣味を持ち研鑽の結果、愈々師匠より名目を授けられたる中本中司氏は、台北琵琶聯合会、基隆雀連、台北三

玉天狗連の後援にて、十一日午後三時より鉄道ホテルにて披露大会を開演する由。入場希望の方は千歳町長命軒本町二ノ二山田靴店へ申込み度く、無料にて入場券を贈呈すと

□大正12 (1923-03-12) 『台湾日日新報』

### 名披露目浄瑠璃会

三味練屋の玉屋の妻君が上京して、竹本東広の許で修業を積み竹本東映の名を貰つたその名披露目の浄瑠璃会が、十三、十四日の両夜栄座で開催される。それで在北の師匠連が補助をして各連中から出演するが、両夜の出演者は

鳳玉、竹司、艶次、大和、古菊  
延寿、三光、三松、峰菊、七玉  
三登、東栄、可笑、三洋、三峰  
菊水、美登志、松風、清司、住登  
等の大人数である

□大正12 (1923-04-12) 『台湾日日新報』

### 素人義太夫大会

十二、十三の両日南門公会堂に於て睦連の月並会を相催す由、入場無料来聴を望むと(両日の語物)

『妹背山三』(い京、『大十』(くらま)、『いざり』(艶次)、『紙  
治』(古菊)、『義作』(菊水)、『酒や』(松風)、『陣や』(三峰)、  
『八陣』(三光)、『合邦ヶ辻』(藤司)、『布引三』(延寿)、『布引  
四』(琴馬)、『鳴門八』(組次)、『二十四孝四』(三洋)、『いざり』  
(東)

□大正12 (1923-04-26) 『台湾日日新報』 欄外記事

浄瑠璃大会 竹澤力造師の名披露  
昨年未神戸より竹澤力造師を招聘せる美登里会は、其名披露の  
為、愈々二十六、七両日、午後正五時より晴雨を論ぜず、栄座  
に於て浄瑠璃会開催すべく、成るべく多数の来聴を希望すと。  
其語り物左の如し

▲二十六日 『御祝儀』(入登)、『本蔵』(仁光)、『壺坂』(鳳菊)、  
『日吉丸』(かね子)、『太十』(艶次)、『油屋』(雷雀)、『忠八』(古  
鶴)、『夕顔棚』(旭)、『鳴戸』(美登里)、『千両幟』(清司)、『合  
邦』(花香)、『逆櫓』(相生)、大切掛合『寺子屋』(総出)糸力  
造、一平、乙鶴、千代寿

▲二十七日 『御祝儀』(入登)、『忠三』(一瓢)、『野崎』(鳳玉)、  
『三勝』(都一)、『日吉丸』(花笑)、『八陣』(染卜)、『弁慶』(大  
和)、『白石断』(勇吉)、『菅四』(■登志)、『岡崎』(菅枝)、『太

十』(七五三登)、大切掛合『十種香』(勇吉、越次、かね子、  
小浜)、『糸力造、東咲、乙鶴

□大正12 (1923-05-02) 『台湾日日新報』 欄外記事

勝玉送別大会

台北の義太夫師匠竹本勝玉は今回斯道研究の為に内地へ帰るの  
で、勝玉連主催で一日、二日の両夜栄座で送別浄瑠璃会を催  
すが、木戸下足無料で、語物左の如し

『宝入船』(入登)、『又助』(勝柴)、『白石』(千歌)、『壺坂』(千  
駒)、『柳』(錦糸)、『本蔵』(住登)、『玉三』(可笑)、『日吉』(寿)、  
『三勝』(峰菊)、『忠四』(勝楽)、『菅四』(千昇)、『野崎』(竹奴)、  
『新口村』(千葉)、『壺阪』(三松)

□大正12 (1923-05-04) 『台湾日日新報』

素人浄瑠璃会

四日新富町不動尊堂五日(古亭町)了覚寺に於て、乙鶴連に依  
り素人浄瑠璃会開催一般の来聴を望むと。語り物は左の如し

▲『宝の入船』(入登) ▲『阿波鳴戸』(真玉) ▲『弁慶上使』(多  
美次) ▲『太功記十段目』(鶴昇) ▲『三十三間堂』(豊司) ▲  
『関取千両幟』(清司) ▲『梅野由兵衛』(大和) ▲『仙台萩御殿』

(延寿) ▲『忠臣蔵二度目清書』(三光)

□大正12 (1923-05-19) 『台湾日日新報』欄外記事

素人浄瑠璃会

二十、二十一日両日午後六時より、台北市南門公会堂に於て美登里会月例浄瑠璃会開催する由にて、多数の來聴を希望すと。其語り物左の如し

『御祝儀』(入登)、『忠三』(一瓢)、『本蔵』(仁光)、『壺坂』(鳳菊)、『炬燵』(鳳玉)、『三勝』(都一)、『日吉』(花笑)、『八陣』(染卜)、『円寛寺』(雷雀)、『菅四』(古鶴)、『太十』(旭)、『白石噺』(勇吉)、『柳』(美登里)、『阿漕』(美登志)、『杓掛』(菅枝)、糸(力造)

□大正12 (1923-06-09) 『台湾日日新報』欄外記事

素人浄瑠璃会

九、十両夜、元八甲庄日蓮寺に於て、三玉連の素人浄瑠璃会あり。語り物は左記の通り

『儀作』(一声)、『酒屋』(鳳玉)、『鈴ヶ森』(千歳)、『又助』(中司)、『下屋敷』(加玉)、『赤垣』(艶次)、『忠臣講釈』(光玉)、『沼津』(寿)、『鳴戸』(榮玉)、『弁慶』(貴昇)、『加賀見山』(明玉)、

『皿屋敷』(司玉)、『日吉』(土口)、『志度寺』(松香)、『三十三間堂』(錦糸)

□大正12 (1923-07-21) 『台湾日日新報』

素人義太夫会

三吉野陸連中は二十一、二の両夜、南門公会堂にて義太夫会を開くと、読物左の通り

『二十四孝狐火』(三洋)、『お駒才三白木屋』(菊水)、『奥州安達原祭文』(琴水)、『妹背山竹雀』(い京)、『日吉丸五郎助内』(くらま)、『三勝酒屋』(三光)、『金刀比羅御利生百度平』(組次)、『おしゆん猿廻し』(藤司)、『三十三間堂柳』(左菊)、『布引美盛物語り』(延寿)、『三勝半七酒屋』(松風)、『又助住家』(土江)、『矢口の渡頓兵衛内』(三峰)

□大正12 (1923-08-04) 『台湾日日新報』

素人義太夫会

四日午後五時から南門公会堂で開かれるが、語り物は

『又助住家』(大和)、『棟木の由来』(友鶴)、『三浦別れ』(多美次)、『酒屋』(永楽)、『尼ヶ崎』(鶴昇)、『竹の間』(清司)、『片岡忠義』(寿美礼)

□大正12 (1923-08-19) 『台湾日日新報』

素人義太夫会

台北陸会連中は十九、二十日の兩夜、午後六時から台北市内法華寺にて、素人義太夫大会を開催する由。来聴無料。語物は左の通り

『布引三』(延寿)、『阿古屋』(い糸)、『おしゆん伝兵衛』(藤司)、『太子』(くらま)、『城木屋』(菊水)、『百度平』(組次)、『忠九』(三洋)、『すし屋』(艶次)、『弁慶上使』(土口)、『沼津』(琴馬)、『忠六』(松風)、『矢口渡』(三峰)、『酒屋』(三光)、『阿漕』(三楽)

□大正12 (1923-09-03) 『台湾日日新報』

浄瑠璃会延期

三、四兩日、若竹町法華寺に於て素人浄瑠璃会開催の筈なりしも内地不慮の災厄突発に付、此際遠慮の意味を以て無期延期すといふ

□大正12 (1923-10-27) 『台湾日日新報』欄外記事

素人義太夫会

台北陸会の天狗連は二十七、八の兩日午後五時より南門公会堂

に於て義太夫会を開くと。語り物は左の通り

『賢女鑑片岡忠義』(乙鶴)、『梅の由兵衛迎駕籠』(大和)、『彦山権現六助内』(松風)、『本朝二十四孝笥掘』(三洋)、『関取千両幟』(清司)、『矢口渡頓兵衛内』(三峰)、『蝶花形小阪部館』(い京)、『仙台萩御殿』(土口)、『義民伝義作切腹』(菊水)、『千本桜すしや』(艶次)、『伊賀越沼津の里』(藤司)、『四ッ谷怪談伊右衛門内』(巴城)、『安達原三』(琴馬)、『三勝酒屋』(三光)、『鉄山皿屋敷』(組次)

□大正12 (1923-11-03) 『台湾日日新報』欄外記事

素人浄瑠璃会

南門公会堂にて、三日午後六時より、素人浄瑠璃会を開くと来聴無料。談物は左の通り  
『御祝儀宝の入船』(入登)、『太功記十段目』(東柳)、『於染久松野崎村』(東遊)、『八陣八ツ目政清本城』(東昇)、『鏡見山又助住家』(東月)、『三拾三間堂平太郎住家』(東榮)、『二の谷熊ヶ谷陣屋』(東司)、『太功記十次郎物語』(東秀)、『おしゆん伝兵衛猿廻し』(七五三登) (糸東咲ツレ峰菊)

□大正12 (1923-11-04) 『台湾日日新報』欄外記事

素人浄瑠璃会

四日午後五時より台北栄町二丁目新高喫茶店樓上に於て美登里会月例浄瑠璃会開催するに付、多数の来聴を歓迎すと語り物の如し

『御祝儀』（入登）、『野崎』（鳳玉）、『壺坂奥』（鳳菊）、『三勝』（都一）、『鈴ヶ森』（花笑）、『妙心寺』（雷雀）、『先代萩』（古鶴）、『太十』（旭）、『壺坂前』（雛美）、『伊賀八』（菅枝）

□大正12（1923-11-09）『台湾日日新報』

素人義太夫会 台北の素人義太夫界に、野澤乙鶴と云ふのがあ  
るが、其人が今度名披露をする意味で、十日十一日の両日午後  
五時から、栄座で素人義太夫会を開催するが、補助として乙鶴、  
力造、三玉、東咲、勝玉、三吉野の各連中が応援すると

□大正12（1923-11-17）『台湾日日新報』欄外記事

追善義太夫

十七日午後五時から万華女紅場で故葉玉吉次郎氏の追善  
義太夫会を開く由で、木戸無料。来聴を歓迎すと。語り物の如  
し

『御祝儀宝の入船』（入登）、『白石嘶揚屋』（友鶴）、『千両幟』（清

司）、『鎌倉三代記』（多美次）、『加賀見山又助』（寿美礼）、『千  
代萩御殿』（延寿）、『梅の由兵衛』（大和）、『三十三間堂』（豊司）、  
『勘平切腹』（三洋）、『蝶花形』（乙鶴）

□大正12（1923-11-18）『台湾日日新報』欄外記事

素人義太夫会

十八日午後六時より、古亭庄細井植木屋に於て、素人義太夫  
会開催。一般の来聴を希望すると。語り物は左の通

『御祝儀宝の入船』（入登）、『八陣記正清本城』（三光）、『腰越  
状泉三郎館』（三洋）、『一の谷熊谷陣屋』（三峯）、『源平布引滝  
琵琶』（藤？司）『忠臣赤垣出立』（菊水）、『日蓮記勘作住家』（琴  
馬）、『関取千両幟猪名川内』（古菊）、『敵討志渡寺の段』（艶次）、  
『忠臣蔵勘平切腹』（松風）

□大正12（1923-11-22）『台湾日日新報』欄外記事

素人浄瑠璃会

二十二日午後五時より、晴雨を論ぜず、台北南門公会堂に於て  
美登里会連中の浄瑠璃例会を開催する由。来聴随意。其語り物  
左の如し

『御祝儀』（入登）、『紙治』（鳳玉）、『合邦』（鳳菊）、『三勝』（都

一)、『日吉丸』(かね子)、『妙心寺』(雷雀)、『竹の間』(古鶴)、『弁慶』(旭)、『須磨の浦』(美登志)、『鳴戸』(美登里)、『沓掛村』(菅枝)

□大正12 (1923.12.01) 『台湾日日新報』欄外記事

義太夫大会 台北師匠連の台北の素人義太夫は、日に月に盛んになって来たが、未だ師匠連の技は聴いて語りを聞く事は滅多に無かつたが、今度フトした事から話が纏り、台湾演芸社主催で一日午後五時から三日間、台北榮座で各連合同大会をする事となつた。入場料は三十銭で東光石巖一固つつを呉れる相だ

□大正12 (1923.12.07) 『台湾日日新報』

南瀛詩壇

倉岡竹塢先生招飲席上聴浄瑠璃贈呈 鷹取岳陽

燕都猶似醉悲歌。奈此胆寒情熱何。

聽到英雄紅恨曲。淚痕更較酒痕多。

〔燕都猶ほ悲歌に酔ふに似たり。此の胆寒く情熱きを奈何せん。

聽到す英雄紅恨の曲。淚痕更らに酒痕に較べて多し。〕

無限深情。十倍哀糸豪竹之感。 潤菴漫評

〔無限の深情、哀糸豪竹の感に十倍す。〕

※燕都＝帝都 哀糸豪竹＝哀しい琴の音と、力強い笛の音。巧みな楽器演奏で人心を感動させること。

□大正12 (1923.12.14) 『台湾日日新報』

義太夫納会

十五日午後六時より、台北末広町学校横神代邸に於て美登里会浄瑠璃納会開催するに付、多数の来聴を歓迎すと。其語り物左の通り

『御祝儀』(入登)、『野崎』(鳳玉)、『合邦』(鳳菊)、『鈴ヶ森』(花笑)、『新口村』(かね子)、『弁慶』(旭)、『毛谷村』(美登志)、『儀作』(菅枝)、『本蔵』(相生)

□大正12 (1923.12.22) 『台湾日日新報』欄外記事

義太夫忘年会

二十二、二十三両日午後五時より、台北榮座に於て陸、美登里の両聯合掉尾の義太夫忘年会を開催する由。木戸無料。語り物左の如し

『御祝儀』、『太十』、『寺子屋』掛合(六名出演)、『野崎』、『三勝』(鳳玉)、『沼津』、『堀川』(藤枝)、『日吉』、『朝顔』(かね子)、『忠

六』(我笑)、『阿漕』、『千本桜』(艶次)、『十種香』(延寿)、『布四』、『先代萩』(相生)、『一の谷』(三峰)、『儀作』、『赤垣』(菊水)、『彦九』、『本蔵』(美登志)、『三勝』(松風)、『伊賀八』、『太十』(菅枝)

□大正13 (1924-01-13) 『台湾日日新報』

素人浄瑠璃大会

十三日午後五時より、乙鶴連義太夫初会を南門公会堂に催す。入場無料。語り物は

△『蝶花形八ツ目』大和△『鎌倉三代記三浦別』多美江△『先代萩御殿』清司△『忠臣二度目の清書』三光△『日吉丸稚の桜三ツ目』松風△『三十三間堂』豊司△『三勝半七酒屋』栄楽△『忠臣蔵六ツ目勘平切腹』三洋

□大正13 (1924-01-30) 『台湾日日新報』

台北素人浄瑠璃会

三十日午後六時から、台北市内榮町の新高菓子店で、素人浄瑠璃初会を開く

□大正13 (1924-02-26) 『台湾日日新報』欄外記事

浄瑠璃大会 二十六、七日栄座で  
台北で多年義太夫界に尽して居る竹本勝玉師匠は、昨春以来約一年間野澤勝助師に就いて練磨し、益々腕を磨いて来たが、今度勝助師を台北に迎へ謝恩の意味で、二十六、七の両日午後四時から、栄座で浄瑠璃大会を催す事となつたが、二十六日の番組は左の通りである

『寿式三番叟』(入登)、『日吉丸』(連中掛合)、『先代萩』(池田一二三、糸勝玉)、『酒屋』(竹の家峰菊、糸勝玉)、『岸姫』(中村東司、糸東咲)、『三十三間堂』(高田錦糸、糸勝玉、ツレ勝好)、『朝顔日記』(新喜楽千駒、糸勝玉)、『太十』(梅屋敷花香、糸一平)、『御所桜』(吉田貴笑、糸三玉)、『お俊伝兵衛』(佐藤藤司、糸三吉野、ツレ里次)、『寺子屋』(中山東松、糸東咲) 忠臣蔵九段(勝玉、糸勝助)

□大正13 (1924-02-27) 『台湾日日新報』欄外記事

浄瑠璃大会二日目

栄座における竹本勝玉主催の義太夫大会、二日目の語物は左の通りである

『式三番叟』(かしく)、『白石斬』(掛合)、『八陣八ツ目』(勝柴、糸勝玉)、『太十』(龍木寿、米勝玉)、『又助住家』(石井大和、

糸乙鶴）、『蹙仇討』（有吉至玉、糸一平）、『野崎村』（竹の家竹奴、糸勝玉）、『竹の間』（笠原土口、糸三玉）、『阿波の鳴門』（小松崎三松、糸勝玉）、『合邦辻』（さくら、糸勝玉）、『沼津』（大串住登、糸勝玉）、『平太郎住家』（新喜楽千葉、糸勝玉ツレ千駒）、『すしやの段』（山田艶次、糸三吉野）、『猿廻し』（勝玉、糸勝助ツレ峯菊）

□大正13（1924.03.06）『台湾日日新報』欄外記事  
素人義太夫会

七日午後五時より、台北鉄道ホテルに於て、美登里会連の淨瑠璃例会開催する由。入場無料多数の来聴を歓迎すと。其語り物左の通り

『日吉丸』（かね子）、『阿漕』（美登志）、『梅忠』（花笑）、『太功記』（鳳菊）、『炬燵』（鳳玉）、『油屋』（雷雀）、『壺阪』（雛美）、『伊賀八』（菅枝）、『四谷怪談』（長勇）、『逆櫓』（相生）

□大正13（1924.03.15）『台湾日日新報』

演芸  
□東咲連義太夫会

十五日午後六時から南門公会堂で開催するが、出し物は在の通

りである

『御祝儀宝の入船』入登▲『御殿場』東一▲『五郎助住家』東玉▲『尼崎の段』東遊▲『菅原四段目寺子屋』東松▲『岸の姫松飯原館』東司▲『壺坂沢市内より切まで』七五三登

□大正13（1924.04.17）『台湾日日新報』  
栄座娘義太夫

大正九年に初渡台して頗るの好評を博した女義の竹本弥栄子一行が、又復十五日より栄座で開演することになったが宣伝の良しきを得なかつたのか、殆ど義太夫定連ばかりの顔振れであった。『御祝儀宝の入船』は御座附で、『大功記』の漆栄迄は語るで無く読んで居る。『朝顔』で君広が一寸目立つた。『八陣』の仙国これもまア唄てる一本調子に妙な、まりがあるが疵。『忠臣蔵六段目』に龍光のモタレだが、以前よりより以上の肥満の巨軀に対し、至つて声音の低いことが非常に聴客に不満であった。次の御大竹本弥栄子十八番もの、『壺坂』の弾語り、流石三味線の鮮と声の綺麗なのに知らず知らずホロリとさせて、棧敷面では手巾を顔に当てた婦人もあつたが、以前と違って非常に艶ぼく、ケレン沢山で彼女の三味では恐らくかたりて語手は無からうとは一般の評だ。最後の総掛合の『野崎村』は

御商売人であるなあと感心する。意気のシツクリ合ふこと丈であつた

□大正13 (1924.05.25) 『台湾日日新報』欄外記事

素人浄瑠璃会 二十五日午後六時より、台北表町二丁目関道場に於て、一平連浄瑠璃会開催する由。来聴随意。其語り物左の通り

『御祝儀』(入登)、『先代萩』(義石)、『日吉丸』(錦糸)、『又助』(土口)、『阿漕』(三楽)、『儀作』(菊水)、『紙治』(鳳玉)、『合邦』(魁)

□大正13 (1924.05.29) 『台湾日日新報』欄外記事

三玉門下の浄瑠璃大会  
台北に古くから居る豊竹三玉師匠が、渡台三十年となるので其記念浄瑠璃会を三十日から六月一日まで、三日間毎夕五時から栄座で華々しく開演する事となつた。後援者は斯界の師匠連と所謂御旦那様十数人が後押しであるから、相当に盛んなことだらう。初日の語物は左の通り

『寿式例三番叟』(かしく)、『忠臣二度目清書』(光玉)、『鏡山又助住家の段』(三峰、糸中司)、『朝顔日記宿屋の段』(桜玉、

糸三玉) 一、『先代萩政岡忠義の段』(ちとせ)、『菅原伝授寺子屋の段』(松香、糸三玉)、『日吉丸稚枝五郎助内の段』(貴昇、糸ちとせ)、『三日太平記松下住家の段』(雷雀、糸三玉)、『阿漕ヶ浦平治住家の段』(菊水、糸一平)、『伊賀越平作内の段』(琴馬、糸芳子)、『八陳記政清本城の段』(梅枝、糸三玉)、『お染久松野崎村の段』(柳枝、糸三玉)

□大正13 (1924.07.13) 『台湾日日新報』

素人義太夫会  
十三、十四の両日、南門公会堂に於て、勝玉連素人浄瑠璃納涼大会を開催すると。語物は左の通り

『宝入船』(入登)、『忠六』(浪速)、『御所』(勝美)、『壺坂』、『柳』(三松)、『沼津』、『本蔵』(住登)、『御所』、『鈴ヶ森』(一一三)、『太十』、『先代』(寿)、『三勝』、『合邦』(峰菊)、『梅由』(千駒)、『朝顔』(竹奴) 糸(勝玉、勝好、勝登)

□大正13 (1924.07.26) 『台湾日日新報』欄外記事  
ゑんげい

□素人浄瑠璃会 東咲連が納涼会として、二十六日午後六時から、西門公会堂で開催する。語り物は左通り

『御祝儀』（入登）、『野崎』（東二）、『本蔵下屋敷』（東秀）、『千代萩』（東玉）、『又助住家』（東松）、『新口村』（東遊）、『酒屋』（東鳳）、『岸の姫松三の切』（東司）、『尼ヶ崎』（七五三登）、糸（東咲）

□大正13 (1924.07.27) 『台湾日日新報』欄外記事

素人義太夫会 本朝刊掲載の西門公会堂義太夫会は、南門公会堂に訂正

※訂正元の記事は (大正13 (1924.07.26))

□大正13 (1924.09.04) 『台湾日日新報』欄外記事

素人浄瑠璃会

四日午後六時から、台北若竹町法華寺に於て、素人寄合浄瑠璃会開催する語り物は左の通り。但し雨天順延

『御祝儀』（入登）、『玉三』（巴■）、『先代萩』（千歳）、『菅四』（柳枝）、『日吉丸』（花笑）、『合邦』（雷雀）、『本蔵』（相生）、『赤垣』（艶司）、『又助』（菅枝）、素人三味線（千■、千代■）

□大正13 (1924.09.23) 『台湾日日新報』

素人義太夫会

二十三、二十四の両日、午後六時より本町一の吉田屋楽器店新築楼上に於て、素人義太夫天狗聯合会を催す由。同好者は随意。来聴を希望すと

□大正13 (1924.09.28) 『台湾日日新報』

素人浄瑠璃 二十八日午後六時から、台北市若竹町法華寺にて、左の番組で東咲連素人浄瑠璃会を開催。来聴歓迎の由

『御祝儀宝の入船』入登、『鈴ヶ森』東昇、『梅川忠兵衛二ノ口村』東遊、『本蔵下屋敷』東寿、『日吉丸三の切』東玉、『菅原四段目』東松、『一の谷三ノ切』東司、『朝顔日記』東鳳、『をしゅん伝兵衛堀川の段』七五三登、糸東咲

□大正13 (1924.10.19) 『台湾日日新報』欄外記事

義太夫月例会

台北市三吉野睦会では、十九日夜、八甲町法華寺に於て月例義太夫会を開くと。語り物は左の通り

『御祝儀宝の入船』（入登）、『一の谷須磨の浦』（むつみ）、『三日太平記嘉平治内』（三昇）、『三十三所壺坂』（河梟）、『一の谷熊谷陣屋』（五角）、『御所桜弁慶上使』（高砂）、『朝顔日記宿屋』（友鶴）、『太功記局の注進』（三三之）、『太功記尼ヶ崎』（い京）、『四

ツ谷怪談物語』（藤司）、『先代萩御殿』（輝昇）、『日蓮記勅作住家』（琴馬）、『二代鑑秋津島内』（菅枝）、『安達原一ツ家』（三洋）

□大正13（1924.10.30）『台湾日日新報』欄外記事

南門義太夫大会 南門方面の娯楽機関として有志後援の下に

生れた南門義太夫研究会は、来た十月三十日午後六時から南門公会堂に於て第一回演奏大会を催す事となつたが、曲目

▲『宝の入船』▲『太功記十段目』▲『朝顔日記宿屋』▲『三十三間堂平太郎』▲『千代萩、御堂』▲『御所桜弁慶』▲『加賀山

又助』

□大正13（1924.11.25）『台湾日日新報』欄外記事

睦連義太夫会 台北市内三吉野睦会では、二十五日午後六時から、義太夫の納会を南門公会堂に開き、一般の来聴を希望す

ると。因に談り物は左の通り

『信功記信長傘の舞』（三福）、『一の谷須磨の浦』（むつみ）、

『三十三所壺坂』（河臈）、『一の谷熊谷陣屋』（五角）、『三日太平記九段目』（三昇）、『朝顔日記宿屋』（友鶴）、『伊賀越沼津』（藤

司）、『伊賀越岡崎』（菅枝）、『加賀見山長局』（琴馬）、『義士伝天川屋』（三洋）

□大正13（1924.11.28）『台湾日日新報』素人義太夫納会

二十八、二十九の両日本町吉田屋演芸場に於て、勝玉連の義太夫納会を開催すると。語物は左の通り

▲二十八日

『柳』（入登）、『二十四孝』（新喜楽千房）、『太功記』（三松）、『日吉丸』（二三）、『本蔵』（竹の家峰菊）、『宿屋』（新喜楽千駒）、

『御所三』（寿）、『寺子屋』（栄玉）、『三勝』（藤玉）、『一の谷』（住登）

▲二十九日

『壺坂』（入登）、『先代』（新喜楽千駒）、『太功記』（寿）、『梅由』（新喜楽千房）、『鳴門』（三松）、『三勝』（二三）、『箱根』（栄

玉）、『本蔵』（藤玉）、『忠六』（住登）

□大正13（1924.12.01）『台湾日日新報』

三玉連義太夫納会

一、二の両日、南門公会堂で午後六時より、素人義太夫三玉連の納会を開催する

▲一日 『安達三』（光玉）、『柳』（喜玉）、『日吉』（松玉）、『又助』（寿玉）、『箱根滝』（栄玉）、『先代』（土口）、『沼津』（鳳玉）、

『寺子屋』（松香）、『紙治』（一声）

▲二日 『日吉』（花王）、『弁慶』（鶴水）、『玉三』（加玉）、『先代』（千歳）、『安達三』（梅枝）、『皿屋敷』（東寿）、『岸姫』（貴昇）、『赤垣』（艶司）、『本蔵』（柳枝）

□大正13（1924-1207）『台湾日日新報』

東咲連義太夫納会

東咲連では六日夜、南門公会堂で、本年の浄瑠璃納会を催すと。語り物の如し

『御祝儀』（入登）、『鈴ヶ森』（東輝）、『鳴戸』（東里）、『又助』（東寿）、『日吉丸』（東玉）、『菅四』（東松）、『岸姫』（東司）、『太十』（東艶）、『酒屋』（東鳳）、『沼津の里』（七五三登）糸東咲、七五三登

□大正13（1924-1208）『台湾日日新報』

一平連義太夫納会

素人義太夫一平連は七日午後六時から、本町二丁目吉田屋楽器店楼上にて納会を開催すると。語物左の通り

一、『宝の入船』（入登）一、『太十奥』（土口）一、『太十口』（小菊）一、『新吉原』（芳子）一、『岸の姫松』（二枝）一、『阿漕

の浦奥』（菊水）一、『日吉丸奥』（錦糸）一、『又助住家』（一景）一、『三浦別』（二徳）一、『酒屋』（一正）一、『玉三』（一平師）

□大正14（1925-01-21）『台湾日日新報』

【写真説明】

（上）大阪府知事の案内で文楽座で人形を見て居る米大使バンクロフト氏

□大正14（1925-01-25）『台湾日日新報』

素人浄瑠璃会

二十五日午後五時半から若竹町法華寺に於て、美登里会連中の浄瑠璃初会開催する由、其語りもの左の通り（但し雨天順延）  
『御祝儀』（入登）、『八陣』（都一）、『本蔵』（千歳）、『弁慶』（かね子）、『忠六』（雷雀）、『玉三』（三峰）、『三勝』（相生）、『日吉丸』（松風）、『安達』（至玉）、『又助』（菅枝）、糸（久幸）

□大正14（1925-02-15）『台湾日日新報』

陸連義太夫会

台北三吉野陸会では、十四日午後六時から市内八甲町法華寺に於て、義太夫温習会を開催すると。語物は左の通り

『御祝儀宝の入船』（入登）、『一の谷須磨の浦』（六ツみ）、『三  
日太平記九』（三昇）、『一の谷熊谷陣屋』（五角）、『千本桜すし  
屋』（友鶴）、『三勝半七酒屋』（呂京）、『おしゆん伝兵衛堀川』（藤  
司）、『伊賀越岡崎』（菅枝）、『布引滝松波琵琶』（琴高）、『彦山  
権現六助内』（三洋）、『伊賀越津の里』（三吉野）

□大正 14（1925-02-19）『台湾日日新報』欄外記事

素人義太夫／聯合春季大会

台北の素人 義太夫天狗連の鼻くらべをなすべく、春季聯合  
大会を、十九二十の両日華々しく栄座に開演する由。入場料は  
下足共無料。三味線は竹本久幸、竹本東咲、野澤三吉野、鶴澤  
一平の四師匠が勤めると

番組乱表

『松王屋敷』（艶司）、『一口村』（東遊）、『寺子屋』（東松）、『又  
助住家』（菅枝）、『堀川』（藤司）、『寿司屋』（友鶴）、『長局』（琴  
馬）、『太十』（久玉）、『逆槽』（相生）、『二代鑑』（菅枝）、『太十』  
（花香）、『阿漕ノ浦』（菊水）、『壺坂』（小菊）、『又助住家』（一  
徳）、『五所桜』（かね子）、『日吉三』（松風）、『忠六』（雷雀）、『壺  
坂』（龍鵬）、『日吉三』（司玉）

□大正 14（1925-04-19）『台湾日日新報』  
今日の催し

陸会送別義太夫会 三吉野陸会では、十九日午後六時から八  
甲町法華寺で浜中河梟氏の送別義太夫会を開くと。語り物は左  
の通り

『御祝儀』（入登）、『三十三間堂』（豊司）、『熊谷陣屋』（五角）、  
『酒屋』（河梟）、『弁慶上使』（支鶴）〔友鶴カ〕、『布引』（藤司）、  
『合邦』（艶司）、『本蔵下屋敷』（琴馬）、『仙台鱒谷』（巴城）、『菘  
工橋』（先代菘土橋）〔菅枝〕、『雪責』（三洋）、『軍法富士見西行』  
（三吉野）

□大正 14（1925-05-02）『台湾日日新報』

南門義太夫会

南門義太夫研究会では、五月二日午後六時より、南門公会で、  
素人淨瑠璃会を開くと。語り物は

一、『大序宝の入船』一、『朝顔宿屋』一、『太功記尼ヶ崎』一、  
『安達ヶ原三段』一、『加賀見山又助住家』一、『御所桜弁慶  
上使』一、『三勝半七酒屋』一、『先代菘御殿』

□大正 14（1925-06-07）『台湾日日新報』

素人浄瑠璃大会

六日より九日迄四日間、毎日午後六時より、台北末広町二丁目元盲啞学校跡に新設せる末広会館に於て、始政三十年記念祝賀として各連聯合の素人浄瑠璃大会を開催する由

□大正14 (1925-10-03) 『台湾日日新報』

今日の催し

追善義太夫会 三日午後六時より古亭町了覚寸に於て、故中本仲司氏の追善供養浄瑠璃会を催し、十数番の語り物ありと

□大正14 (1925-10-24) 『台湾日日新報』欄外記事

浄瑠璃会 養気俱樂部では二十三日(金曜日)午後六時より、小南門俱樂部に於て、鶴澤一平連を招聘し、浄瑠璃会開催すると

□大正14 (1925-11-23) 『台湾日日新報』

素人義太夫会

二十三日より二十五日まで三日間台北市内末広町会館にて竹本七五三登椽の送別素人浄瑠璃会を開催する。出演者多数

□大正14 (1925-11-27) 『台湾日日新報』

浄瑠璃納会

二十六、七日の二日間、栄座にて野澤三吉野陸連の義大夫納会の二十七日の語り物は

『御祝儀』(可祝)、『尼ヶ崎』(菅枝)、『四谷怪談』(藤司)、『玉藻前』(豊司)、『三十三間堂』(花次)、『由良港山之段』(友鶴)、『合邦』(艶司)、『鰻屋八郎兵衛』(巴城)、『源平布引松波琵琶』(琴馬)、『恋女房染分手綱』(三吉野)で、入場無料。但し下足料五銭

□大正14 (1925-12-06) 『台湾日日新報』

素人浄瑠璃納会

七日午後六時から末広町末広会館で、鶴澤一平連の素人浄瑠璃納会を催す由。語り物は

▲『御祝儀』宝の入船(入登) ▲『日吉丸三段目』(総員掛合)  
▲『御所桜三段目』(静) ▲『太功記妙心寺』(二枝) ▲『先代萩御殿』(錦糸) ▲『鳴戸八つ目』(芳子) ▲『太功記十段目』(士口) ▲『炬燵紙治内』(鳳玉) ▲『忠臣蔵本蔵下屋敷』(二平)

□大正15 (1926-02-04) 『台湾日日新報』

【写真】節分のお化け

- (1) 松花楼の花売 (2) 新喜楽の越後獅子 (3) 梅本の春駒 (4) 義太夫東咲連 (5) まんかの老妓連 (6) 巴楼芸妓 (7) 小永楽のお染、久松 (8) 見はらし支店の兵隊
- ※節分の集団仮装写真。

□大正15 (1926-03-02) 『台湾日日新報』

陸連浄瑠璃会

専売局養気倶楽部に於て、三吉野陸連の浄瑠璃会を、三月二、三兩日毎夜六時から催すことになつた。出演者は大凡専売局員であるとのこと。番組左の通り

二日 『御祝儀』 入登

『御所桜』 十三二

『柳』 茂美治

『忠王御殿』 豊司

『由良港山』 友鶴

『本蔵下屋敷』 吉峰

『すしや』 巴城

『袖萩祭文』 琴馬

『太功記十』 永楽

三日 『御祝儀』 入登

『太功記』 舟木

『柳』 千司

『又助住家』 山星

『三勝酒屋』 三石

『矢口渡し』 三峰

『日吉丸三』 ○○

『忠臣蔵四』 藤司

『沼津里』 菅枝

『彦山ノ九』 三洋

□大正15 (1925-04-28) 『台湾日日新報』

義太夫陸会は、春季大会を来る五月二、三、両日毎夜、末広町会館に開催することになつた。傍聴無料で、一人でも多く聴いて欲しいこと

□大正15 (1926-05-02) 『台湾日日新報』

陸会の浄瑠璃

台北陸会では一日、二日の両日、末広館に於て春季温習美太夫会を開く由。語り物は左の通り

初日『御祝儀三番叟』（可祝）、『玉藻前忠王館』（豊司）、『太功尼ヶ崎の段』（三福）、『三十三間堂柳の段』（三能羽）、『加賀見山又助内』（可笑）、『三勝半七酒屋の段』（三石）、『四ッ谷怪談伊右衛門内』（巴城）、『日蓮記勘作住家』（琴馬）、『昔八丈白木屋の段』（菅枝）、『花の雲佐倉曙宗五郎住家』（三吉野）  
 二日目『御祝儀宝の入船』（入登）、『三十三間堂柳』（三豊）、『妹背山竹に雀』（花次）、『御所桜弁慶上使』（多三司）、『千本桜すし屋』（友鶴）、『青山鉄山皿屋敷』（三峰）、『伊賀越沼津の里』（藤司）、『金刀比羅御利生志渡寺』（艶司）、『中将姫雪責の段』（三洋）、『ひらがな盛衰記逆槽の松』（三吉野）、三味線（野澤三吉野、同三十次、同花次）

□大正15 (1926-05-19) 『台湾日日新報』

義太夫大会 二十日基隆で  
 既報。基隆浄瑠璃同好雀連主催の故料理屋組合長十雀事、足利藤吉氏追善浄瑠璃大会は、準備整 愈々二十日午後正五時より、基隆劇場に於て盛大に挙行することになったが、大小天狗連並に日本亭、巖亭、依姫楼等の芸妓連の力演で、其の番組は次の通りである

▲『おしゆん伝兵衛堀川』、福語 ▲『八陣』、ときわ ▲『御所桜』、

みなと ▲『三勝半七酒屋の段』、高雀 ▲『日蓮聖人』、雀 ▲『壺坂』、巖雀 ▲『儀作住家』、菊水 ▲『柳』、新松 ▲『日吉丸』、喜雀 ▲『忠臣蔵』、福徳軒 ▲『合邦』、若衆 ▲『太功記』、鈴八 ▲『忠臣蔵』、小安 ▲『赤垣源蔵』、吾勇 ▲『お染久松野崎村』、相生 ▲『志度寺』、十三 ▲中人 ▲『玉三』、大石 ▲『本蔵下屋敷掛合』  
 (吾勇、十三、長勇、相生、大石、三味線竹本鐘龍師琴仁木八重子) ▲『香掛村』、長勇 ▲『お半長衛門桂川道行』掛合(倉子小房、静香、糸勇、小笑、好江、文福、千成、小勇、清子、豆力、春枝、三味線竹本鐘龍師、政栄、小安、ゆか世話、玉幸、菊江)

□大正15 (1926-05-30) 『台湾日日新報』

勝玉連浄瑠璃会

二十九日三十日午後正六時より、新世界前末広会館に於て勝玉連素人義太夫会開催の由。兩日語り物左の如しである

『七福神』（入登）、『又助』、『御所三』（新喜楽千昇）、『酒屋』（藤玉）、『御所三』、『柳』（幾久方知子）、『鈴ヶ森』（綾登）、『玉三日吉丸』（二枝）、『白石』、『新ノ口』（新喜楽千房）、『朝顔』（竹の家竹奴）、『太十』（寿）、『忠四』（勝楽）、『先代』、『壺坂』（三松）、『寺子屋』、『忠六』（住登）、『下屋敷』（勝玉）、『十種香掛

合』(幾久万知子、新喜楽千房、三松)、糸(勝玉、勝好、藤枝、  
琴子、峰千代)

□大正15 (1926-06-06) 『台湾日日新報』

義太夫聯合大会

台北市内の義太夫師匠連は、五日夜から三日間、榮座に聯合  
大会を開催する事となつた。番組は左の通り

『五日語物』『御祝儀』(入登)、『御殿』(千歳)、『宿屋』(三能羽)、

『おしゆん』(藤司)、『太十』(土口)、『御所桜』(まち子)、『鈴ヶ

森』(平和)、『太十』(千昇)、『皿屋敷』(組次)

『六日語物』『御祝儀』(入登)、『酒屋』(三石)、『忠六』(可昇)、

『宿屋』(静)、『由良港』(友鶴)、『合邦』(花香)、『講釈七』(巴

城)、『本蔵』(榮玉)、『四谷』(菅枝)

『七日語物』『御祝儀』(入登)、『御殿』(土口)、『忠六』(宝珠)、

『日吉』(至玉)、『竹雀』(花次)、『岸姫』(喜昇)、『御所桜』(か

ね子)、『矢口渡』(三峰)、『合邦辻』(艶司)

『三味線』(三玉、勝玉、久幸、一平、三吉野)

□大正15 (1926-07-03) 『台湾日日新報』

素人浄瑠璃会

台北市内有志より成る素人浄瑠璃研究会にては、三、四の両日  
午後七時より、南門公会堂に於て、第一回大会を開催する由。  
語り物左の如し(但抽籤順)

三日

『又助』(三光)、『本蔵』(榮玉)、『太十』(艶司)、『長局』(琴馬)、

『鈴ヶ森』(平和)、『菅四』(菅枝)、『日吉』(竹枝)、『先代』(柳  
枝)

四日

『日吉』(一枝)、『中将姫』(三松)、『儀作』(組次)、『太十』(梅

枝)、『酒屋』(菊水)、『鈴ヶ森』(綾登)、『紙治』(一声)、『弁慶

(一一三)

□大正15 (1926-07-25) 『台湾日日新報』

浄瑠璃大会 専売局小南門俱樂部では、二十五日午後七時か

ら竹本勝玉師を招き、浄瑠璃大会を開く。一般の入場を歓迎す

□大正15 (1926-08-14) 『台湾日日新報』

素人義太夫会

台北の素人義太夫会では、十四日から五日間、毎夜午後六時か  
ら、市内本町一ノ一五常磐生命保険会社三階にて温習会を開



文楽の人形台覧 瑞典皇儲及妃殿下

二日、高野登山を遊ばされた帰途、御来阪。大阪倶楽部に於ける中川大阪府知事招待の午餐会へ成らせられた

(写真は同倶楽部で御らんに入れた文楽座の人形芝居の人形を御興深く見入らる、両殿下)

□大正15 (1926-10-10) 『台湾日日新報』

送別義太夫会延期

九日より末広会館にて開演する素人義太夫陸会三吉野連の送別義太夫会は、風雨激しき為め中止し、開演を雨天順延と決定した

(欄外記事)

義太夫 台北素人義太夫陸会三吉野連の送別義太夫会は雨天の為め延期したが、十日夜開催十一日も、引続き開演すると

□大正15 (1926-11-06) 『台湾日日新報』欄外記事

素人義太夫大会 六日、七日、八日三日間、八甲町八甲事務所に於て、晴雨に拘はらず午後六時より、台北各連素人義太夫大会開催の由。出演者左の如し

栄玉、一声、平和、藤玉 組次、柳枝、菅枝、千歳、三峰 一枝、松香、一二三、梅枝、艶次 三光、綾登、三松、静、巴、松風、土口、錦糸、菊水、小菊 藤枝、三石、三ツ葉、琴馬、駒玉、かね子 (三味線) 栄枝、呂玉、三富久、寿、千代寿、芳子 琴子

□大正15 (1926-11-30) 『台湾日日新報』

大阪文楽座全勝 二階建百七十二坪の建物

【大阪二十九日発】大阪文楽座は二十九日失火、全焼した同座は明治三十一年十月前の興業地西区松島から移転したもので、焼失建坪は二階建百七十二坪七百五十人収容し得る大建物で、同座は市街建築法に依り、今後焼跡に再建築は許されぬ模様である

更に―平野町に飛火

【大阪二十九日発】鎮火したと見えた文楽座の火は午後零時四十五分、平野町四丁目料理店堺卯楼裏手に飛火し、倉庫二棟を焼き、更に高安病院長の邸宅に延焼し、之を焼尽し、一時御霊神社を全焼して、漸やく下火となった。原因は漏電らしく、文楽座の名物の人形は全焼した。損害莫大の見込である

□大正15 (1926-12-01) 『台湾日日新報』

文楽座失火原因判明

【大阪三十日発】文楽座の火災に就き、最初より出火原因を不審と睨んだ所轄船場署にては、関係人を召喚。嚴重取調べた所、大道具方山本亀吉(二九)が屋根裏にて、仕事中燐寸を摺つて、三階の天井裏に捨てた所、其れが造花及道具に燃え移つたので驚き水を取りに行つた所、既に火の海と化し、手の付け様がなかつたもので、失火罪として取調中である。堺卯楼火事は全く文楽座の飛火である事判明した

□大正15 (1926-12-01) 『台湾日日新報』漢文欄

文楽座及御霊神社皆全焼

本早十時三十分。東区平野町御霊神社内文楽座失火。挙坐化為烏有御霊神社亦被燃及。同神社社殿拝殿。亦全焼(大阪二十九日発延着)

失火原因

文楽座火災。最初出火原因。視為不審。經所轄船場署。召喚関係人嚴重訊問。乃知為大器具家山本亀吉。(二九)在屋蓋後作事中。打火柴。以其残枝葉于三層天井後。移燃及造花並器具等。

一時大驚。取水欲救之。已化為火海遂一時着手不及。有伝為堺卯楼火事者実即文楽座之飛火也。(三十日大阪発)

□大正15 (1926-12-02) 『台湾日日新報』

総損害高 六十万円 文楽座失火で

【大阪三十日発】焼失した文楽座の損害は松竹から五万円の届出があつたが、御霊神社其他は未だ不明なるも、全額六十万円に達する見込であると。尚文楽座道具方山本兼吉は失火罪として告発された

□大正15 (1926-12-03) 『台湾日日新報』欄外記事

義太夫納会

三日四日晴雨に拘らず、午後五時より新世界館前、末広会館に於て勝玉連素人義太夫納会開催の由。語り物は(御所)入登、(野崎)、「白石」幾久、まち子、(日吉丸)一三三、(鳴門)駒玉、(熊谷)宝珠、(二十四孝)「炬燵」新喜楽千房、(妙心寺)、「玉三」一枝。(野崎)寿、(松王)「鈴ヶ森」綾登、(寺子屋)、「太十」三松、(忠四)勝楽、(御所)、「沼津」住登

□大正15 (1926-12-05) 『台湾日日新報』

素人義太夫納会／三吉野陸連

三吉野陸連の素人義太夫納会は、来る五、六兩日、南門公會堂で、毎夜六時より開演する。入場料無料。番組は

五日 『御祝儀宝入船』(入登)、『千代萩御殿』(菊馬)、『玉藻

前三段目』(豊司)、『二谷熊谷陣屋』(巴)、『撰州合邦ヶ辻』(三

石)、『志渡寺の段』(艶司)、『お駒才三白木屋』(菅枝)

六日 『寿式札』(可四九)、『撰州合邦ヶ辻』(寿司)、『千代萩

御殿』(三能羽)、『三勝半七酒屋』(友鶴)、『矢口渡頓兵衛』(三

峰)、『忠臣蔵勘平切腹』(藤司)、『金比羅利生記』(琴馬)

□大正15 (1926-12-13) 『台湾日日新報』

義太夫納会 台北野澤一平連の義太夫納会は、十二日午後六時から、常盤生命保険社楼上で開かれるが、当夜の語物は、左の通りである

『勘平腹切』(土口)、『紙治』(鳳玉)、『日吉』(松風)、『合邦』(一

徳)、『先代萩』(錦糸)、『伊勢音頭』(花香)、『朝顔日記』(静、

『太十』(大力)、『阿漕』(我笑)、『本蔵下』(三栄)、『壺坂』(一景)

(3) 昭和

□昭和2 (1927-01-01) 『台湾日日新報』

趣味の人々／人には無くて七癖／お役人の天狗の鼻競べ

人生一番無邪気で厭味のないのは、一技一芸を持つてゐる人の所謂天狗党の鼻競べであらう、殊にお役人などと来たたら、平素無理にも苦虫を噛んだ様な顔附をして御座らねばならぬのだから、此の部類の人たちに多少でも骨相を崩させるのは鼻くらべでもしたりさせたりするのが一番捷徑 本紙の一隅に天狗党の土俵を築いたのも其のため、恐らく功德はあらたかであると思ふ。

台湾なら碁は無敵／勝負事大好／本山警務局長  
ムエキな易に凝る／変つた趣味／佐藤警務課長  
義太夫唸る迄／鼓事務官

本喰虫に甘んじてる／原口統計官

大抵やるが水準以下／碁は得意／能沢土木課長

いまはゴルフ／昔はかるた／木下内務局長

妙案の浮ぶ散歩／山登も好い／小林保安課長

【本山の談話の抜粋】

謡曲かネあんなことはやらうと思つたこともない  
殊に義太夫に至つては聴いて居ても首を引き締めらる様な気がして趣味所のさわぎぢやないネ、

【鼓の談話】

僕が義太夫をウナリ出す様になつたに就ては一つの妙な思出話があると同置して鼓一葉太夫は静かに語り出す

「最早かれこれ五六年も前のことだ、僕が総督府の駐在員として府下大井町に居た時分、鉄道線路を隔て、向ひの崖の上に第百銀行の重役で喜多某と言ふ人が住んで居た所が、此の人仲々の変り者でその広い立派な庭園内へ東屋を拵へたり。一寸した舞台などを作つたりして之を附近の人々に解放し、時々東京辺から一流所の色んな芸人を招んで友人知己や近隣の人々を招きかかせて居たが、それが何時しか粹人倶楽部と云ふものになつて仕舞つた。そんな倶楽部へ入る資格なんかは一寸もないんだが招かれるまゝ、い一度顔を出した所が、到頭深みにはまつて謹厳なる態度で稽古を初め、先づ『壺坂』から始めて『弁慶』、『朝顔日記』、『大功記』、『逆鱗』と言つた順序で上げて行つたが、さて始めの中さわりがどうのこうのと氣にして居る頃はよかつたが、少し義太夫の真諦がわかり出して来ると非常にむづか

しいものになって了つて、今では途方に迷つてゐるという有様だ

### 【原口の談話抜粋】

趣味も環境に支配されるもので、ドイツへ行つてからは音楽趣味に転じた。無器用で僕にはどんな簡単な楽器もならせ得なかつたが、ドイツの学生生活に附物の歌劇だけは每晚の様に見に行つたのでおかげで音楽とか劇と言ふものに対する趣味だけは充分体得出来た

### 【能沢の談話抜粋】

げすだと冷されるかも知れないが、八八もやればマーヂヤンも相当にやる。だが、妙なもので此の頃の様には、之を悪用する人が沢山ふえて来ると、折角面白い遊びだと思つても、ウツカリ人前で「僕も八八をやるよ」なんて大つぴらに言ひ出さうものなら、あいつも嗅いぞ、なんて痛くもない腹を探られる様な気がして、遂やれなくなつて仕舞ふ、恰度シヤミセンが或る一派の人々に殆ど独占されて居る為に、折角之に興味を感じて習ひたいと思ふ人達迄、遠慮して仕舞やうに自分さへ正しければよいとは言ふものの、そこには矢張社会生活をして居る人間の

弱さと言ふものかネ、「中略」「謡曲は何です?」「僕の郷里金沢は宝生の本場ですから、国では非常に盛ですが、僕はつひこれを覚える機会を失つて仕舞ひました。惜しい事をしたと思つても今更始めると言ふ氣にもなれず、マア僕等の様な年中忙しい仕事をして居る人間にはそんな凝つた趣味を要求したつて無理ですよ「劇に対する趣味は?」「い、ですネ、然し台湾に居ては始まりませんナ、「中略」旧劇は好きで上京した度に一度や二度歌舞伎を覗かない事はないが、さりとてセリフを覚えて居て大向をウナラせる程の熱心さもない、まア僕も大抵な趣味は解するが水準以下さね

### 【木下の談話抜粋】

凝つた趣味としては謡曲の味も一通り知りたと思つて一週間ばかり人真似をしてウナツて見たが、何だか馬鹿馬鹿しくなつてそれつきりプツつり止めて仕舞つた

### □昭和2 (1927-02-19) 『台湾日日新報』

二の午 曹洞宗布教所内豊川稲荷の二の午祭りは、十七日挙行されたが、夜間は淨瑠璃、琵琶等があつて賑かだつた

□昭和2 (1927-04-06) 『台湾日日新報』欄外記事

素人浄瑠璃会／六七の両日

六日七日の両日台北市古亭町了覺寺に於て午後六時より素人義太夫会開催の由。雨天順延。番組左の通り

六日語り物 『御祝儀』(入登、『御所』(呂正、『儀作』(菊水)、

『陣屋』(宝珠)、『又助』(三光、『本蔵』(栄玉)、『先代』(築水)、

『太十』(艶司)、『沼津』(一声)

七日語り物 『御祝儀』(入登、『太十』(いろは)、『寺子屋』(梅

枝)、『儀作』(お玉)、『松王』(綾登)、『三勝』(三石)、『鳴門』

(三松)、『赤垣』(組次)、『百度平』(竹司)

三味線 栄枝、三ふく、呂玉、琴子、小菊

□昭和2 (1927-05-20) 『台湾日日新報』

素人浄瑠璃会

十九日、二十日両夜、丸三呉服店楼上にて、素人浄瑠璃会を開催する由、一般の来聴を希望すると

十九日 『日吉丸』(いろは)、『合邦』(鳳玉)、『忠六』(巴)、『又

助』(鐘登)、『木下』(雷雀)、『儀作』(千歳)、『仙代』(土口)、『

妙心寺』(菅枝)

二十日 『大功記』(いろは)、『忠六』(鐘登)、『御所桜』(土口)、

『阿漕』(美登志)、『玉三』(三峰)、『酒屋』(鳳玉)、『太十』(鶴司)、『油屋』(雷雀)

□昭和2 (1927-05-25) 『台湾日日新報』

素人浄瑠璃会／末広会館にて

二十四日、二十五日両日、市内末広会館にて素人浄瑠璃大会を開く。尚午後八時迄の来場者には丸三呉服店より寄贈の福引券を呈すと

けふの催し

□昭和2 (1927-07-10) 『台湾日日新報』

けふの催し

▲素人浄瑠璃会 午後六時より市内末広会館にて

□昭和2 (1927-07-21) 『台湾日日新報』

浄瑠璃会の延期

二十日夜、末広会館に於ける素人浄瑠璃会は都合にて延期すと

□昭和2 (1927-07-26) 『台湾日日新報』漢文版

挙地藏尊夏祭

新竹西門弘法寺。於廿四日。在寺裡举行奉誦法会及誦經。更於

下午六時起挙行地藏尊夏祭。七時起演出各種余興。有素人劇義太夫等。至十時告畢。

【昭和2 (1927-07-30) 『台湾日日新報』】

素人浄瑠璃会

台北市素人浄瑠璃会では、来る三十、三十一の両日、市内大同会事務所に於て、素人浄瑠璃大会を催す由

【昭和2 (1927-08-06) 『台湾日日新報』】

浄瑠璃会 専売局養気倶楽部にては、六日土曜の午後六時より

小南門倶楽部階上に於て、竹本勝玉師を招き、浄瑠璃会を開催する由。一般の来聴差支なしと

【昭和2 (1927-08-28) 『台湾日日新報』】

素人浄瑠璃会

本二十七日、二十八日の両日午後七時より栄町大同会事務所に於て、素人浄瑠璃会を催す由。来聴随意

(二十七日)『儀作』(蘭玉)、『日吉』(錦糸)、『太子』(平和)、『壺坂』(光玉)、『菅四』(梅枝)、『陣屋』(茂登)、『紙治』(一声)

(二十八日)『鳴門』(筑水)、『日吉』(喜玉)、『太子』(竹司)、『柳

(小松)、『弁慶』(貴昇)、『忠六』(大路)、『酒屋』(柳枝)

台北唯一の劇場／栄座の大改変／名も共楽座と改め／経営者が

代る

台北の栄座は今迄台湾劇場会社直営の下に営業して居たが、現下財界不況等のため欠損続き其の上小宮社長の辞意も固く、会社側重役協議を凝した結果、貸賃をなし、確定的収入で欠損の整理をすることに決定したが、之れを機とし篠塚永楽

主人が借受けることとなり、本月二十日契約成立し、九月一日

から共楽座と改名し、篠塚氏が経営することになった。尚同氏

経営の料理屋喫茶店は今後家族に委せ、御大自ら劇場経営に専念従事する由、篠塚君なら適材適所と云ふべく、台北の民衆

娯楽に一進展を見せて欲しいものである

栄座 初日以来満都の人気を呼び、連日大入の連鎖劇中村かなめ一派は、謝恩興行として既報せし如く、二十六日正午から一座総出にて円山公園劍潭寺附近にて撮影せし、時代猛闘連鎖劇『孔雀の光』を二十八日より三十日まで三日間上演する

悲劇『御用船』三幕 情炎秘史『孔雀の光』四幕六場

【昭和2 (1927-09-23) 『台湾日日新報』】

台中素人浄瑠璃大会

【台中電話】 台中の遊廓方面が中心となり、素人浄瑠璃同好者連が天狗会と称するものを組織し、竹本、豊澤両師を聘し、熱心に稽古中であつたが、来る二十三日の両日午後六時より台中座に於て、最初の素人浄瑠璃大会を開き、無料公開の上聞づらうところを耳に達するさうである

○昭和2 (1927-09-24) 『台湾日日新報』

義捐浄瑠璃会

【高雄電話】 長崎、熊本両県下の暴風雨並に嘉義地方の震災義捐金募集の為、高雄の有志相図り、近く素人浄瑠璃大会を開催すべく相談中である

○昭和2 (1927-09-25) 『台湾日日新報』

送別浄瑠璃会

二十五、二十六、二十七日の三日間毎日午後七時から晴雨に拘はらず末広会館に於て斯界の重鎮住登氏夫妻内地帰還送別浄瑠璃大会を開催する由。ちなみに当日午後七時迄の来館者に限り、福引券を進呈す

○昭和2 (1927-09-28) 『台湾日日新報』

台北の浄瑠璃会二十八日夜／末広会館で台北素義会主催の大串住登氏送別浄瑠璃会は、毎夜大入満員の盛況であるが、引続き二十八日も午後六時から、市内末広会館で、勝玉連総出にて花々しく最後の幕を開く相だ。語物は左の通り

『御祝儀』（入登）、『堀川』（勝玉勝好琴子）、『新口村前』（小金）、『日吉丸』（糸栄）、『玉三』（二枝）、『新口村奥』（綾登）、『紙治』（千房）、『壺坂』（まち子）、『忠四』（勝楽）、『酒屋』（三松）、『菅原』（住登）、糸（勝玉師）

○昭和2 (1927-10-23) 『台湾日日新報』

素人義太夫大会 来る二十四、二十五両日午後六時より末広町末広会館に於て、素人連浄瑠璃大会を開催する

○昭和2 (1927-11-12) 『台湾日日新報』欄外記事

素人浄瑠璃会 十二、十三両日、午後六時より南門公会堂に於て、素人浄瑠璃会を開催する。一般の来聴を歓迎すると

法華宗御会式

来る十二月十三日、市内老松町三丁目本門法華宗立正閣では宗祖日蓮聖人会式法要を修行す。十二日は午後三時宝塔除幕式、同六時法要、引続き余興として子供舞あり。翌十三日は午後六時より説教あり。終つて素人浄瑠璃の余興あり。多数の参会を希望すと

【昭和2 (1927-11-16)】『台湾日日新報』

高雄風水害義捐金／十四日発送済

高雄の長佐、熊本両県人会主催の長崎、熊本両県風水害並に台南州下震災義捐金募集の素人浄瑠璃会収入は、七百七十一円五十銭。此内から会場費、印刷費、花火代、其他一切の費用を差引いて、残金五百三十円を左記の如く、十四日大坪与一氏より、夫れ夫れ送付した

金二百十五円長崎県、金二百十五円熊本県、金百円台南州

【昭和2 (1927-11-26)】『台湾日日新報』

三玉連浄瑠璃納会

二十六、二十七両夜、午後六時より末広町末広会館に於て、三玉連素人浄瑠璃納会を開催

【昭和2 (1927-12-01)】『台湾日日新報』

地方だより

嘉義

義太夫披露 嘉義君葉会主催、三吉野吉之助師披露浄瑠璃さらへ会は、二十七、廿八の両日、消防組集会所にて開催され、盛会を極めた

【昭和2 (1927-12-11)】『台湾日日新報』

台北みどり会／素人浄瑠璃会／あす北投に開催

台北みどり会、連素人浄瑠璃会は、十二日午後六時から北投筑前座新座敷にて、晴雨に拘らず開催する。多数の来聴を望むと

【昭和2 (1927-12-12)】『台湾日日新報』

勝玉連浄瑠璃納会／末広会館で

台北市の勝玉連浄瑠璃納会は、十二、十三の両日、午後六時から、末広会館に於て華々しく開催される。語り物は左の通り

『御祝儀』（入登）、『先代萩御殿』（勝子）、『新口村』（新喜楽千勝）、『御所桜三段目』（竹のや糸栄）、『忠信道行』（掛合（忠信、糸栄。静、まち子。竹のや、峰千代）、『野崎村』（幾久、まち子）、

『朝顔宿屋』（新喜楽千房）、『梅野由兵衛聚楽町』（綾登）、『十種香』（三松）、『加賀見山長局』（勝楽）、大切総掛『合壇浦兜軍記琴責の段』（捧澤、糸栄。岩永、綾登。重忠、三松。阿古屋千房。三曲、峰千代）

□昭和2（1927.12.13）『台湾日日新報』

末広館で開催する勝玉連の浄瑠璃会は十二日夜だけであると

□昭和3（1928.02.27）『台湾日日新報』

素人浄瑠璃会／廿六七両夜

台北みどり会にては、二十六、七日の両夜、午後六時から市内

末広町末広会館で、浄瑠璃初会を催す。談り物左の通り

（二十六日）『御祝儀』（入登）、『柳』（三能羽）、『忠六』（可笑）、

『玉三』（三峰）、『合邦』（一徳）、『御所桜』（土口）、『妙心寺』（雷

雀）、『日吉丸』（菅枝）

（二十七日）『御祝儀』（入登）、『日吉丸』（三木）、『又助』（力士）、

『白石噺』（千歳）、『阿漕』（美登志）、『炬燵』（鳳玉）、『忠四』（艶

司）、『沼津』（琴馬）、（三味線）千歳、大力、千代寿、（後見

鶴澤亀助

□昭和3（1928.04.29）『台湾日日新報』

送別素人浄瑠璃会

二十九、三十日の両日、午後六時より台北市末広会館に於て、

大路氏送別浄瑠璃大会を開催すると。両日の番組左の如し

【二十九日】『酒屋』（三松）、『棚ヶ先』（梅枝）、『弁慶』（三峰）、

『二度目』（綾登）、『先代御殿』（錦糸）、『又助内』（多美次）、『志

度寺』（大路）、『皿屋敷』（組次）

【三十日】『又助内』（三光）、『日吉』（貴昇）、『鈴ヶ森』（平和）、

『沼津』（竹司）、『玉三』（二枝）、『赤垣』（大路）、『弁慶』（艶司）、

『酒屋』（柳枝）

□昭和3（1928.05.05）『台湾日日新報』

送別浄瑠璃 来る五、六日午後六時より、栄町大同会事務所に

於て、大路氏送別浄瑠璃大会を開くと

尚武義太夫会／聴衆には福引進呈

五日より三日間、毎夜午後六時より、市内本町一六軒隣り常盤

生命保険会社三階に於いて、鶴澤亀助師及び高雄東京堂後見

で尚武義太夫会を開催するが、入場無料。午後七時半迄の

来場者には福引券を進呈。同夜直ちに品物と引替へるとの事で、

多数の来聴を希望すると

〔昭和3 (1928.05.18) 台湾日日新報〕

名披露浄瑠璃大会

京阪地方にて名声ある鶴澤亀助師を招聘せる台北鶴亀会は、当十八、十九、二十の三日間、正六時より晴雨に拘らず、末広町末広会館に於て、各連の応援を得て名披露浄瑠璃大会を開催する。時間履行に付、早くから来聴を希望すと

〔昭和3 (1928.06.09) 台湾日日新報〕

素人浄瑠璃会

九日午後六時より、南門公会堂に於て、素人浄瑠璃研究会を開催する。多数御来聴を希望すると

〔昭和3 (1928.07.07) 台湾日日新報〕

浄瑠璃大会／今明両日

台北の浄瑠璃師匠、勝玉連の浄瑠璃大会は、七、八の両日、午後六時から台北末広町の末広会館で開會する

初日の語りものは『二十四孝』、『紙治』、『棟木の由来』、『日吉三段目』、『酒屋』、『太十』、『御所三』、『判官切腹』大切総掛合

『堀(堀川カ)』で、八日は、『鈴ヶ森』、『新口村』、『壺坂』、『太十』、『阿波鳴戸』、『合邦』、『宿屋』、『日吉丸三段目』、『寺子屋』、『忠臣蔵』大切総掛合『帯屋』で、千房、まち子、千勝なども加入して居る

〔昭和3 (1928.07.20) 台湾日日新報〕

素人義太夫会

台北みどり会では二十一日午後六時半から、末広会館に於て、義太夫会催す由。多数の来聴を希望すると。語物左の通り

一、『又助住家之段』(一徳)、一、『合邦ヶ辻』(鳳玉)、一、『阿波鳴門』(千成)、一、『忠臣蔵四段目』(艶司)、一、『太功記妙心寺』(雷雀)、一、『三勝半七酒屋之段』(相生)、一、『忠臣蔵勘平腹切』(菊水)

〔昭和3 (1928.09.25) 台湾日日新報〕

素人浄瑠璃会

二十五日午後正六時より、南門公会堂に於て、勝玉連浄瑠璃例会を開催。語り物左の通り

『御祝儀』(入登)、『酒屋』(梅玉)、『忠四』(勝栄)、『鳴門』(竹

の家竹吉、『先代』（幾久万知子）、『松王屋敷』（綾登）、『朝顔』（三光）、『壺坂』（三松）、『合邦』（美登志）、糸（勝玉）

□昭和3（1928-10-05）『台湾日日新報』

長唄や義太夫の西洋音楽的独唱／永井郁子さんの新しい試み／伴奏は柀屋佐吉君の三味線

【東京特電四日発】日本歌謡の大衆進出に精進してゐる永井郁子さんは、先に伴奏楽器もピアノの代りに尺八、琴をつかひ

立派に成功を取めたが、今度更に長唄と義太夫の西洋音楽的独唱を試みやうと思ひついて研究中である。この伴奏は義太夫は太棹を、其他も皆三味線によるものである。三味線にはこの

方面の新人柀屋佐吉君に諮つたところ、二つ返事でやりませうといふことで、先づ長唄の手ほどき「よいやまち」を手がける

ことになつたが、この十二月ごろには『勸進帳』や『道成寺』を郁子さんがステージに立つて独唱し、佐吉師が椅子に腰かけて伴奏するといふ。佐吉師は語る

日本音楽は声よりし、節廻しに重きを置くから、直に声がかれたり、くづれたりします。そこで長唄を西洋式の発声法でやると、裕とりがある異つたものができて面白からう。在来の日本音楽の改作するのは反対する人があるかも知れぬが、屹度改

良されると思ひます

□昭和3（1928-10-11）『台湾日日新報』

素人浄瑠璃会 十一日午後六時半より、栄町大同会事務所に於て、素人浄瑠璃会を開催する

□昭和3（1928-10-14）『台湾日日新報』

鶴亀浄瑠璃会  
同会では十四、十五の両日、午後六時から台北南門公会堂において大会を開催するが、多数の来聴を歓迎すると

□昭和3（1928-11-23）『台湾日日新報』

素人義太夫会／来る二十三日午後六時より本町常磐生命保険会社三階に於いて素人義太夫会を開く

二十四日から正式放送 Ⅱ台北放送局発表 Ⅱ

ラヂヲファンお待ちかねのゼーエフエイケイ放送の中継ぎ放送は、機械の故障や施設不完備の為、永らく試験中であり、それも最近では中絶されて礪石セツト党の失望、やる方なきものあつたが、二十二日夜の放送試験の結果、好成绩を納めたので、

二十三日夜、今一度試験の上、二十四日夜より愈々正式に放送する旨、昨夜放送局から発表した

□昭和3 (1928-12-08) 『台湾日日新報』

素人浄瑠璃会 八、九両日、午後六時より、台北検査番楼上に於て、故井野氏追善を兼ね、勝玉連浄瑠璃納会を開催する。多数の来聴を歓迎すると。語り物は左の通り

〔初日〕『御祝儀』(入登)、『新口村』(友鶴)、『岸姫』(竹の家内竹吉)、『野崎』(万知子)、『安達』(綾登)、『百度平』(三松)、『寺子屋』(寿玉)、『本下』(勝衆)

〔二日目〕『御祝儀』(入登)、『酒屋』(梅玉)、『十種香』(三松)、『先代』(錦糸)、『油屋』(美登志)、『忠四』(勝衆)、『梅忠』(千勝)、『朝顔』(千房)、『太十』(翠香)

□昭和3 (1928-12-15) 『台湾日日新報』

万華浄楽会納会／頗る賑ふ

勝玉師匠について居る万華浄楽会では、十四日午後二時から万華女紅場で、今年の納会を開いたが、竹の家の竹吉、幾久の万知子、新喜楽の千房も加入し盛会であつた

素人浄瑠璃会

当十五、十六両日、午後五時より、ホテル横裏日の丸会館に於て、鶴亀連浄瑠璃納会開催する。成るべく多数の来聴を望むと。語り物左の通り

▲初日『御祝儀』(入登)、『鳴戸』(三能羽)、『忠六』(松風)、『布四』(琴馬)、『炬燵』(鳳玉)、『忠四』(艶司)、『白木屋』(和楽)、切掛合『野崎村』

▲二日目『御祝儀』(入登)、『弁慶』(松風)、『合邦』(三次)、『梅田』(千歳)、『妙心寺』(雷雀)、『沼津』(菊水)、『酒屋』(相生)、切掛合『本蔵下屋敷』、(糸) 大力千歳

□昭和4 (1929-01-19) 『台湾日日新報』

素人浄瑠璃会 当十九、二十両日、午後六時より明石町鉄道ホテル裏横、日の丸会館に於て、菊水氏送別鶴亀連浄瑠璃会開催する

〔御祝儀〕(入登、『鳴戸』(三能羽)、『酒屋』(松風)、『忠六』(土口)、『合邦』(鳳玉)、『松王屋敷』(艶司)、『沼津』(和楽)、『先代秋』(千歳)、『寺小屋前』(菊水)、『油屋』(雷雀)、大切掛合『本蔵下屋敷』『寺小屋』(絵出)(糸) 大力、千歳

□昭和4 (1929.01.19) 『台湾日日新報』

中村鴈治郎の『阿波十郎兵衛』／今夜六時半から二時間／大阪放送局より全国放送

▲午後六時二五分 (大阪放送局より有線中継にて全国に放送)

放送舞台劇

『阿波十郎兵衛』

(二幕四場)

中村鴈治郎

序幕開始

▲午後七時一四分

序幕終了

(大阪中継幕間台北放送局よりレコード放送)

▲午後七時三五分

第二幕開始

▲午後八時三五分

第二幕終了

阿波十郎兵衛について

▲大阪中座の中村鴈治郎一座の有線中継は、予ねて本紙上に報道した如く、大阪放送局が三年來の懸案であつて、広江常務、煙山放送部長、松竹の白井社長、今井人事部長らの斡旋諒解の

下に放送するに至つたものである。成駒屋鴈治郎が六十八歳の高齢ながら老練さを示す大がかりのものである

▲『阿波十郎兵衛』は、明和五年六月一日即ち今から略

二百六十年前大阪竹本座で興行せられ、近松半二外四名の合作。

筋は阿波の国牧野郡宮島浦の庄屋の十郎兵衛の説話と、姫路の

大名榊原式部大輔政峰といふ人が、十代目高尾の色香に溺れ、

太夫を身受けした一件と。かの近松門左衛門の作。夕霧伊左衛

門の情事との三つを巧みに組んだものである

▲ポイントは順礼歌の段。阿波十郎兵衛夫婦が主人に対する勘

気に許しを得んものと、家宝国次の名刀を詮議するため「よし

あしを何と浪花の玉造」あたりに浪人し、辻強盗となり、遂に

夫婦は熊野路に落行く。そして所謂とんどろ大師(ママ)に於てお鶴と

お弓との邂逅になる、心して聞くものは一掬の涙なきを得ない

JFAK (十九日)

▲午前十時三〇分

家庭料理講座 (笹倉定次)

(西洋料理献立、六人前宛)

【放送内容省略】

▲午後八時四五分

絃索四重奏【演目省略】

義太夫『日吉丸』台北検査芸妓竹吉、三味線竹本勝玉師  
島内各地天気実況、天気予報、ニユウス、明日のプログラム

□昭和4 (1929.01.20) 『台湾日日新報』

けふの催し

△素人浄瑠璃会 午後六時より於鉄道ホテル裏日の丸館

□昭和4 (1929.01.25) 『台湾日日新報』

素人浄瑠璃大会

市内、素人浄瑠璃同好者の春季大会が本二十五日から六、七  
の三日間、毎日午後六時開始で、本町常盤生命楼上で催される  
語物は

▲二十五日『日吉丸』、『沼津』、『阿漕』、『梅由』、『香掛』、『儀作』、  
『御殿』▲二十六日『本下』、『鳴戸』、『日吉丸』、『酒屋太十』、『岸  
姫』、『玉三』、『志度寺』▲二十七日『菅四』、『太十』、『忠六』、  
『合邦』、『又助』、『儀作』、『弁慶』

□昭和4 (1929.02.02) 『台湾日日新報』

先代追善のため来台した四代目大隅太夫／一日各方面へ挨拶廻り

大正二年来台、各地巡遊中、台南に於て病を得、惜くも其地に  
客死した三代目竹本大隅太夫の第十七回忌の法会を営むべく、  
当時師匠と行を共にし遺骨を携へ帰国し、其後四代目大隅太夫  
を襲名した当時の静太夫が、鶴澤道八、其他の一門を引連れ、  
三十一日の船で来台し、一日各方面を歴訪したが、四、五、六、  
七の四日間、楽々園に於て開催される台北義太夫会主催の追善  
義太夫大会に応援出演する事となつた。尚当時大隅太夫の  
遺言を預つて帰阪した今井梅軒氏が同伴来台。万般の世話を焼  
て居るが、四代目大隅太夫の来台と云ふ段取をつける迄には  
中々苦心したと談つて居たが、大阪でも近く三代目の追善興行  
をやるので、その結果兎に角終焉の地で、法会を営むのが当然  
であらうと云ふので、松竹でも承知したものであると大隅太夫  
に感想を叩けば謙遜しながら  
十七年ぶりに参りましたので、すべてのものがころりと変つて  
居ります。町の立派になつた事も驚く許り。それに各方面の方々  
から予想以上の御後援を戴きまして、誠に有難く思つて居りま  
す。何分この上とも御後援を  
と談つて居た

【写真】来社せる大隅太夫の一行

□昭和4 (1929.02.05) 『台湾日日新報』

楽々園 市内楽々園に於ける追善義太夫大会、二月五日の二日目語物は

一、『御祝儀』（隅寿太夫）、一、『忠六』（隅尾太夫）、一、『鳴戸』

（三能羽）、一、『又助』（三峯）一、『酒屋』（三笠）一、

『聚楽所』（千歳）一、『松王屋敷』（綾登）一、『玉三』（綱次）一、

『妙心寺』（雷雀）一、『先代菘』（源平太夫絃金弥）一、『合邦』

（隅榮太夫絃道造）一、『布四』（竹本大隅太夫、絃鶴澤道八）

此中『布四』は大隅の最も得意とするものにして、絃の妙手道八の絃は聴客をして必ずや激賞せしむるものあらん

□昭和4 (1929.02.06) 『台湾日日新報』

追善義太夫大会／大隅太夫を聴く

三代目大隅太夫の追善義太夫大会が、愈々四日から楽々園に

開催された。開場定刻前早くも楽々園は大入満員。身動きも

出来ぬ有様。あ、狭いナート云ふ感は誰もが抱いたことであつ

た。それに御客の大半が中年以上、モガやモボの姿は葉にした

くも見えないのは、時代の反映か。素人連は二十分宛で

新陳代謝。八時半迄に此方は終つて、いよいよ源平太夫の

『白石嘶』が始まる。艶のある美声。力士としてよりは太夫と

しての存在が認められた。お客も茲で溜飲が下つたと見え、や

んやの喝采、ついで隅榮太夫の『本下』も悪からう筈がなく、愈々

最後が大隅太夫の『壺坂』。絃は道八師。「夢か浮世か浮世か夢

か」の語り出しからが普通の行き方と違つて、大きく声を張り

上げ、まづ聴衆の度肝を奪つて場内水を打つたやう。次第にひ

き入れられて恰も夢心地。絃の妙手も感嘆の外なく、流石に

関西に覇を唱へるだけはあると思はせた。兎に角台湾では二度

と聴けぬ聞き物と推賞するを憚らぬ

師 【挿絵「落款「するは」？」】楽々園スケッチ 大隅太夫 道八

楽々園 大隅太夫出演の追善義太夫大会、初日は七時半に

大入満員の盛況にて、身動きも出来ない入であつた。三日目の

語物として二月六日の出演ものは

一、『御祝儀』（隅寿太夫）、一、『朝顔』（隅尾太夫）、一、『忠四』

（和楽）、一、『太十』（新）一、『本下』（美登志）、一、『御所』（竹

司）、一、『三日九』（艶司）、一、『儀作』（菊水）、一、『酒屋』（源

平太夫、絃金弥）、一、『日吉丸』（隅榮太夫、絃道造）、一、『菅

四』（竹本大隅太夫、絃道八）

絃は呂玉、大力、小菊、千代寿、勝玉などが勤めるが、大隅太

夫の『菅四』と云へば、文楽に於ても現在にては此大夫以上に語り得るものなしと云ふ定評あるもので、定めし聴客は底力ある大隅の語りと、道八の絃の妙手に酔はさる、ならん

□昭和4 (1929.02.07) 『台湾日日新報』

追善義太夫会／千秋楽の語物

毎夜大入満員の盛況を見つ、ある楽々園の追善義太夫大会も、愈々七日を以て千秋楽と云ふことになつて居る。其語物は

一、『御祝儀』(隅寿太夫)、一、『忠三』(隅尾太夫)、一、『菅四』(二口)、一、『玉三』(一枝)、一、『忠六』(巴)、一、『鳴戸』(小松)、一、『酒屋』(相生)、一、『御殿』(大路)、一、『忠四』(勝栄)、一、『油屋』(源平太夫、絃金弥)、一、『又助』(隅栄太夫絃道造)、一、『堀川』(竹本大隅太夫、絃道八)大隅太夫が語物の中、最も十八番とする『堀川猿廻し』を語るが、絃の道八とツレの金弥の絃との呼吸は、必ず絃の妙味を聴かすことならん。建碑式は雨天の為め十日と云ふことになつたさうだ。それを終つて十一日朝、台南に向け出発し、南部巡演二十日基隆で開演の予定であると

□昭和4 (1929.02.09) 『台湾日日新報』

大隅太夫歓迎会／昨夜梅屋敷に

今回大隅太夫の來台せるを好機とし、台北紳士の浄瑠璃に興味を有する人々は倉岡台北医院院長、鼓井護士、辻本山下支店長其の他計十名あまりの發起にて、八日午後六時より梅屋敷に於て歓迎宴を催ほした。先づ同家大広間の西寄に床をしつらへ、後ろに金屏風を廻し、百目蛸燭をともして全く浄瑠璃の舞台となし、大隅太夫及び糸の鶴澤道八氏着座するや、辻本氏立つて一場の挨拶を為し、それより大隅太夫は『菅原伝授手習鑑 寺小屋の段』を語つた。語り手もひき手も、素より文楽座の一流中の一流とて悪からう筈なく、武部源蔵夫婦の苦心から松王丸の首実験、松王夫妻の悲歎場など、如何にも真に迫るは言はずもがなで、一座の人々唯だもうもうポーツとして魂を奪はる、ばかりであつた。大喝采の裡に語り終るや否や宴を開き、大隅太夫と道八氏両氏を主賓として種々芸談等に花を咲かせ、午後九時半盛會裡に参会したが、当夜の出席者は豊田、丸茂両局長、高橋知事、高木、河村、三好諸氏、その他六十余名で、近來稀に見る興味深き会合であつた

養気倶楽部浄瑠璃大会



□昭和4 (1929.02.21) 『台湾日日新報』

大隅大夫一行社会奉仕／共楽座で義太夫会

既報の台北市社会事業助成会主催大隅大夫、鶴澤道八師出演の義太夫大会は、二十三日(土)、二十四日(日)の両夜共楽座に於て開催することに決定した。此催しは今回成立を見た台北市社会事業助成会の基金募集の意味に於て企てられたもので、大隅大夫一行は特に奉仕的に出演する運びに至つたもので、入場料は青券二円、白券一円である。而して此会は台北市方面委員、台北市社会課の後援になつてゐる

ウエルカム

▲大隅大夫の返り興行を、又も狭い場所で行るのは大夫を侮辱するものだ。是非共楽座でやつてほしい(熱狂生)

□昭和4 (1929.02.23) 『台湾日日新報』

大隅大夫義太夫大会／廿三日語物

台北市社会事業助成会基金募集を援助する大隅大夫一行の義太夫大会は、二十三日、二十四の両日、愈々共楽座に於て開催するが、初日の語り物左の通り

一、『恋娘昔八丈、お駒才三鈴ヶ森の段』、竹本隅寿大夫、糸鶴

澤道造

一、『御所桜堀川夜討三弁慶上使の段』、竹本隅尾大夫、糸鶴

澤金弥

一、『加賀見山田錦絵草履打の段』、竹本源平大夫、糸鶴澤金弥

一、『生写朝顔日記宿屋の段』、竹本隅榮大夫、糸鶴澤道造

一、『撰州合邦ヶ辻合邦内の段』、竹本大隅大夫、糸鶴澤道八

掛合

一、『義経千本桜道行の段』、静御前、竹本隅榮大夫、忠信、竹

本隅尾大夫、糸鶴澤金弥、同道造

□昭和4 (1929.02.28) 『台湾日日新報』

基隆の浄瑠璃塚／次回大隅大夫の一行が／人形を携へて再渡台の際／除幕式を行ふ筈

【基隆電話】二十六日基隆座に開催された大隅大夫一行の義太夫会は、談り手が談り手の上に肝入が明比実平、松田消防の両顔役とあつて同座未曾有の盛況を呈した。因に同日は年こそ異なれ、基隆義太夫界の草分け明比実平氏の前代と日本亭

先代足利藤吉氏の命日に当るので、大会肝入役の明比家当主実平氏は先代を思ふ孝心から、基隆で物故した義太夫友達の遺族

を語り、吾妻の故中根幸太郎、広木組故広木秋太郎氏、それに

故三代大隅太夫を併せ、供養を意味する浄瑠璃塚を久宝寺境内に建設する事とし、義太夫大会当日夕刻、実平氏施主となり、予定地に仮塚を立て、久宝寺小林老師を導師とし、日蓮宗堀部老師も立会ひ、大隅太夫一行各遺族及故人の知己と共に読経焼香して、懇にその霊を弔つたが、大隅太夫もこれは浄瑠璃道之美拳だとして、その主唱者に感激し、この次には人形を携へて再び渡台するから、その節改めて自ら本塚の除幕式を挙げたいと約束したと

英皇帝御名代の宮の旅情を御慰め申すべく／歌舞伎や鮎漁を御覧に入れる準備中／大阪では文楽へ御案内

【東京特電二十七日発】 英国皇帝陛下の御名代として、五月二日御来朝になるグロスター公殿下の御接伴については、既に接伴委員も仰せつけられ、宮内省、陸海軍、外務省英国大使館等に於て、御入京より八日間国賓としての御接伴をはじめ、日光、箱根及び関西地方御遊覧のプログラム等、作成中であるが、宮内省山県儀式課長、英国大使館デビンソン氏と打合せの結果、東京御滞在中の一夕、我歌舞伎劇をも御覧に入れる予定で、帝劇か歌舞伎座か、その狂言によつて何れかを台覧遊ばさる、事になるであらう。その外毎年宮内省で行はれてゐる古風

な狩猟の内鴨猟は既に時期が後れるので出来ないが、五月一日に鮎漁が解禁となるから、関西地方へ向はせらるゝ、砌り長良川の鮎漁を遊ばされる事に内定し、大阪では日本名物の文楽を御覧になるであらう

※義太夫ではないが参考記事二本

歳悦師匠引退披露／準備進む

台北検査常警津師匠歳悦の引退披露興行は、三月七日午後五時から共楽座で、華々しく蓋を開けるが、当日の出演者は台北検査芸妓多数と、万華よりさだ、だるま、千代子の三妓が加入し、目下其稽古の為に検査楼上は賑つて居るが、決定した演しものは

『子宝』、『夕月』、『将門』、『栗餅』、『松島』、『辰橋』、『うつば』、『素囃子』、『新浦島』、『三保の松』、『元禄花見踊』で、『うつば』、『三保の松』は番外で、出演者は古老株に成てる梅の家、日本亭松竹、小永楽、児島、蕙喜楽、中惣竹富つねの各女将が久し振りに腕を見せるさうだ

共楽座 浪花節五座長大会は相変らず好人気、三日目二十七日の説物と出番、左の通り

『大石江戸探り』（菊一文字）『慶安武士続き』（福造）、『兄弟の真心』（綾子）、『名優澤村淀五郎』（虎吉）、『陸奥と伊東』（一声）

尚、人気投票高は昨夜までの縮切

一番目（虎吉）二一九九票、二番目（一声）二一〇三票、三番目（菊一文字）一七二六票、四番目（福造）一五〇七票、五番目（綾子）一三七四票

□昭和4（1929.04.11）『漢文台湾日日新報』

浄琉璃会

台中天狗会。主開之浄琉璃大会。去八日夜公開於台中座。入場者頗多。

□昭和4（1929.05.11）『漢文台湾日日新報』

素人浄琉璃会 十、十一両日午後六時より、南門公会堂に於て勝玉連浄琉璃会を開催するから、多数の来聴を希望すると

□昭和4（1929.06.02）『台湾日日新報』

素人義太夫 台北市素人義太夫睦会では、一日午後七時から南門公会において、同会連中のさらひ会を催すと。尚芸題は左

の通り

『三十三間堂柳』、『太功記十尼ヶ崎』、『菅原寺子屋』、『三勝半七酒屋』、『太功記孫市切腹』、『二度目清書寺岡切腹』、『撰州合邦ヶ辻』、『国姓爺合戦』

□昭和4（1929.06.03）『台湾日日新報』

素人浄琉璃会 台北市の素人浄琉璃天狗連は三日、四日、五日の三日間毎夜六時から、市内本町常盤生命三階に於て、浄琉璃会を開催する。傍聴無料

□昭和4（1929.06.19）『台湾日日新報』

素人義太夫会／聴衆へ福引

台北万華共立検番後援の素人義太夫会は、十九日午後六時から、女紅場で開くが、当日の来聴者は四百五十人に対し福引券を出すさうで、一等は白米一俵以下、十等まで、多数の来聴を希望して居るが、語りものは

『忠三』、『木下酒屋白石噺』、『弁慶』、『玉三』、『二十四孝合邦岸姫寺子屋』、『源藏生立』、『堀川』

で幾久のまち子、竹の家峰千代なども応援して居ると

□昭和4 (1929-07-10) 『台湾日日新報』

素人浄瑠璃会／十、十一両日

台北の素人天狗連相会し、十、十一の両夜六時から楽々園に於て、素人浄瑠璃会を開くと。入場無料。読物は左の通り

十日 『宿屋』(三峰)、『合邦』(貴昇)、『忠六』(可笑)、『松王』(綾登)、『百度平』(竹司)、『酒屋』(三松)、『沼津』(一声)

十一日 『亦助』(三木)、『酒屋』(土口)、『宿屋』(小松)、『梅

由』(梅玉)、『忠四』(美登志)、『忠六』(菅枝)、『合邦』(宝珠)、  
『菅四』(組次)

□昭和4 (1929-07-24) 『台湾日日新報』

素人浄瑠璃会

台北義太夫連の若手同志が、魁倶楽部を創立し、其第一回浄瑠璃試演会を、二十四日午後六時から楽々園に於て開く由。入場無料。語り物左の通り

『忠三落合』(綾子)、『壺坂』(光玉)、『弁慶』(稔)、『太十奥』(翠香)、  
『鈴ヶ森』(勝司)、『寺小屋』(寿玉)、『又助』(三木)、  
『阿漕』(客員美登志)、  
『伊勢音頭和洋合羽』(全員)、糸(勝玉)、  
千代寿、美汀子、光玉

□昭和4 (1929-08-31) 『台湾日日新報』

基隆の義太夫及三曲演奏会日取

【基隆電話】 基隆在郷軍人分会主催、基隆振出の台北基隆合同素人名人義太夫及三曲演奏大会は、三十一日と九月一日の両日基隆座で開催の筈の所、九月一日は震災記念日なるを以て遠慮し、三十一日限りとすることに変更した

□昭和4 (1929-09-01) 『台湾日日新報』

関西浄瑠璃会の重鎮

来台せる 竹本越名太夫(右から二人目)

鶴澤寛市(右端)

其他の一行六日初日を出す筈

【兩名含め4名の写真入り】

□昭和4 (1929-09-06) 『台湾日日新報』

越名太夫／浄瑠璃会／六日楽々園で

六日より九日まで四日間、台北末広町楽々園にて開催する文楽竹本越名太夫一行の浄瑠璃会、初日語り物左の通り  
【御祝儀】(入登)、  
【白木屋】(如楽(和楽力)、  
【太十】(翠香)、  
【一の谷】(一星)、  
【新口村】(松島屋愛丸)、  
【本下】(千歳)、  
【炬

燧(鳳玉)、寺子屋(竹本亀太夫、三味線野澤吉左)、酒屋

(竹本越名太夫、同鶴澤寛市)

□昭和4 (1929.09.13) 『台湾日日新報』

新竹

新竹の浄瑠璃 竹本越名太夫一行の新竹に於ける浄瑠璃大会は

十二日午後六時から新竹座にて開演さると

□昭和4 (1929.09.21) 『台湾日日新報』

素人浄瑠璃会

台北素人浄瑠璃天狗連は二十一、二十二の両日午後六時から

市内南門公会堂に於て晴雨に拘らず浄瑠璃会を開くと入場

無料、語物左の通り

(初日) 一、『御祝儀』(入登)、一、『日吉』(静、糸甫)、一、『播

皿』(光玉、糸同人)、一、『忠六』(可笑、糸甫)、一、『亦助』(三

木、糸光玉)、一、『太十』(斗志男、糸甫)、一、『酒屋』(土口、

糸甫)、一、『合邦』(鳳玉、糸甫)

(二日目) 一、『御祝儀』(入登)、一、『壺坂』(光玉、糸同人)、

一、『亦助』(可笑、糸甫)、一、『御殿』(三木、糸甫)、一、『弁

慶』(斗志男(斗志男)、糸光玉)、一、『忠六』(土口、糸甫)、一、

『玉三』(静、糸光玉)、一、『仕度寺』(志度寺)(一声、糸呂玉)

高雄の越名太夫

【高雄電話】高雄素人義太夫連の後援で十九日夜高雄館で開演

された越名太夫の浄瑠璃は、素人連も加はり殊に大隅以来の聴

物として開演前から聴衆は詰かけ大人の盛況であつた

□昭和4 (1929.10.05) 『台湾日日新報』

素人浄瑠璃大会／南門公会堂で

来る十月五、六両日、午後六時より市内南門公会堂に於て素人

浄瑠璃大会を開催する由。語り物左の通り

(五日)『堀川』(富士)、『太功記十』(三光)、『太功記奥』(南玉)、

『阿漕浦』(菊水)、『合邦口』(竹司)、『合邦奥』(菅枝)

(六日)『三勝半七』(竹司)、『日吉丸』(平和)、『宗五郎内ノ段』

(菊水)、『梅ノ由兵衛』(梅玉)、『菅原四』(綾登)、『壺坂寺』(一

声)

□昭和4 (1929.11.03) 『台湾日日新報』

台北素人浄瑠璃会

台北素人浄瑠璃会では十二月二日午後六時から、本町常盤

生命三階に於て、高雄の江崎夫人（歡迎力）浄瑠璃会を開催する  
ると

□昭和4（1929.11.06）『台湾日日新報』

素人浄瑠璃会 五日午後六時より本町常盤生命三階にて甫、  
呂玉の糸にて、左の番組にて、開演多数来聴を希望すと

△『御祝儀』（入登）、『鈴ヶ森』（平和）、『太十奥』（斗志男）、  
「日吉」（梅玉）、『朝顔』（小松）、『酒屋』（土口）、『太十』（一玉）、  
『忠三』（菅枝）

□昭和4（1929.11.10）『台湾日日新報』

素人浄瑠璃会 十一日午後五時より台北南門公会堂に於て北  
投台北合同素人浄瑠璃会を開催するに付、多数の来聴を歓迎す  
と。其語り物左の通り

『御祝儀』（入登）、『鳴門』（美能羽）、『先代菘』（北投松助）、  
『八陣』（同音丸）、『白石揚屋』（同愛丸）、『■■■』（同一鳳）、  
『日吉丸』（同一星）、『酒屋』（雷雀）、『赤垣』（和楽）

※演目一ヶ所不明。一字目は「安」に似る。二字目は「錦」「越」  
「鶴」か。

□昭和4（1929.11.16）『台湾日日新報』  
素人義太夫納会

十六、十七両日市内本町常盤生命保険会社の三階にて、毎夜六  
時より鶴澤一平連義太夫納会を開き■■■〔午後力〕七時迄に  
来場の方には福引券進上■■〔同力〕夜金品進呈、■■■■■■  
■■〔入場無料〕同好一統の■■■■〔来聴力〕を■■■■■■〔希望す  
と力〕※不鮮明につき判読困難

□昭和4（1929.12.04）『台湾日日新報』

義太夫納会  
大力連義太夫納会は、四日午後六時より末広町楽々園にて開演  
することになった。番組は左の如く。多数来場を希望すと

『御祝儀』（入登）、『酒屋』（千歳）、『太十』（三能羽）、『壺坂』（嘯  
月）、『合邦』（艶司）、『弁慶』（雷雀）、『布四』（琴馬）、『寺子屋』  
（和楽）、大切掛合『本蔵下屋敷』（連中）、三味線大力師

□昭和4（1929.12.08）『台湾日日新報』

義太夫睦会納会  
三吉野師一派の睦会義太夫納会は、南門公会堂で七、八両日  
開催さるるが、八日の番組は左の如くで、多数来聴希望

▲『宝入船』（入登）▲『太功記孫市切腹』（七二八）▲『同尼ヶ崎』（嬰木）▲『寺子屋』（五色）▲『酒屋』（南枝）▲『百度平住家』（三石）▲『安達三』（琴馬）、三味、三吉野連中

□昭和5（1930-01-23）『台湾日日新報』

素人浄瑠璃会 素人浄瑠璃会は二十五、六両日午後六時から、南門公会堂で開催する語り物は、左の通りである

一、『梅の由兵衛』綾登 一、『御所桜三』平和 一、『合邦辻』宝珠 一、『太功記十』梅玉 一、『岸の姫松』竹司 一、『三勝酒屋』土口 一、『堀川猿廻し』貴昇 一、『勘平切腹』菅枝 一、『太功記十』南玉 一、『松王屋敷』綾登 一、『鈴ヶ森』栄枝 一、『赤垣源蔵』菊水 一、『朝顔日記』小松 一、『三十三間堂』美登志 一、『合邦辻』一声 一、『志度寺』大路 一、『寺小屋』三松 一、『日吉丸』竹司、（三味線）一、呂玉 一、甫 一、麗子 一、栄枝 一、美玉 一、小菊 一、千代寿

□昭和5（1930-02-16）『台湾日日新報』

素人義太夫会／十五、十六の両日午後六時より南門外公会堂にて素人合同義太夫会を時間厲行で開演するから、多数の来聴を希望すると

□昭和5（1930-03-08）『台湾日日新報』

陸会浄瑠璃会 三吉野浄瑠璃会では本月八、九の両日午後六時より、南門公会堂に於て、素人浄瑠璃会を左の番組で開催する由、多数の来聴を希望すると

（八日）『佐倉宗五郎』七二八、『菅原寺小屋』五色、『弁慶上使』嬰木、『酒屋』南枝、『加賀見山又助』多美治、『日蓮記勘作』琴馬、『お駒才三』白木屋三吉野

（九日）『岸の姫松』南枝、『太功記十』嬰木、『すし屋』友鶴、『三十三所壺坂』嘯月、『阿波鳴戸』五色、『太功記杉の森』七二八、『お俊伝兵衛』藤司、『お染久松質店』三吉野

□昭和5（1930-04-20）『台湾日日新報』

素人浄瑠璃会／南門公会堂で  
浄瑠璃三玉師匠門下一同は、来る二十、二十一の両日午後六時半より、南門公会堂に於て素人浄瑠璃大会を催す由で、多数来聴を希望すと、語り物左の如し（抽籤に依る）

▲二十日『揚屋』（千歳）、『菅四』（南玉）、『酒屋』（梅玉）、『日吉』（艶司）、『太十』（三石）、『沼津』（竹司）、『赤垣』（大路）、『野崎』（柳村）、『合邦』（一声）

▲二十一日『太十』（竹司）、『宿屋』（鳳玉）、『先代』（土口）、

『赤垣』（菊水）、『儀作』（蘭玉）、『陣屋』（宝珠）、『弁慶』（貴昇）、  
『菅四』（組次）、『本蔵』（和築（和楽力）） ▲糸三玉、呂玉、甫、  
千歳、栄枝、美玉、麗糸

□昭和5（1930-05-31）『台湾日日新報』

浄瑠璃大会／三吉野睦会浄瑠璃会では五月三十一日、六月一日  
の二日間、毎日午後六時より、南門公会堂に於て左の通り会員  
浄瑠璃会を催す由、多数の来聴を希望すると

（三十一日）『御祝儀宝の入船』（可祝）、『御所桜弁慶上使』（嬰  
木）、『菅原寺小屋』（五色）、『岸姫松飯原館』（南枝）、『忠臣二  
度目清書』（嘯月）、『千両幟猪名川内』（七二八）、『忠臣蔵山科  
嫁入場』（琴馬）、『忠臣蔵山科奥本蔵物語』（三吉野）

（六月一日）『式礼三番叟』（入登）、『佐倉の曙儀作切腹』（七二八）、  
『三十三間堂柳』（嘯月）、『三日太平記松下内』（南枝）、『阿波  
鳴戸順礼歌』（五色）、『八陣記正清本城』（嬰木）、『源平布引の  
滝松波琵琶の段』（琴馬）、『鰻谷恨の鮫鞘古手屋八郎兵衛』（三  
吉野）

□昭和5（1930-06-07）『台湾日日新報』

京都大人形浄瑠璃

高雄共楽連、同料理屋組合、下村吞海氏等の後援で七日午後五  
時から高雄劇場で開演するが、出し物は次の通りである

△『御祝儀三番叟』△『お駒才三鈴ヶ森の段』△『御所桜弁慶  
上使三段』△『八陣政清守護城之段』△『忠臣蔵八ツ日本蔵下  
屋敷之段』△『鎌倉三代記三浦別之段』

□昭和5（1930-06-12）『台湾日日新報』

勝玉連浄瑠璃会／十二日より十五日まで四日間、毎夜正六時か  
ら楽々園で勝玉連福引景品附追善浄瑠璃会を催すが、出演多数  
に付、成べく早くから多数の来聴を希望すと。其語り物左の通  
り

初日『御祝儀』（三峰）、『赤垣』（菊水）、『合邦』（宝珠）、『梅田』  
（友鶴）、『本蔵邸』（礁風）、『壺坂』（彫司）、『鳴門』（竹の家玉  
江）、切掛合『一力茶屋』（菅枝、綾子、彫司、三峰、礁風、友  
鶴、三松、美登志）、糸（勝玉、小菊、千代寿）（池田社中）

□昭和5（1930-07-13）『台湾日日新報』

一平会連の義太夫会／台北市義太同好者から成る一平会では、  
来る十四、五両日午後六時から本町常盤生命三階に於いて、  
義太夫会を開き一般に公開すると

□昭和5 (1930-08-09) 『台湾日日新報』

納涼素人浄瑠璃会／八、九両日午後六時より南門公会堂に於て開催。入場無料。多数来聴を乞ふと。語り物左の如し

八日(初日)『千代萩』升司、『合邦』宝珠、『梅の由兵衛』梅玉、

『妙心寺』綾登、『儀作』菊水、『阿波鳴門』小松、『沼津』組次

『炬燵』一声

九日(二日目)『尼ヶ崎』南玉、『菅原』柳枝、『太功記』南玉、

『壁(甍)』仇討』大路、『合邦』貴昇、『沼津の里』菅枝、『千代

萩』土口、『岸姫松』竹司

三味線 呂玉、甫、小菊、麗糸、栄枝、寿玉

□昭和5 (1930-08-12) 『台湾日日新報』

中継放送変更／義太夫野崎村

十一日の中継プログラム次の通り変更

義太夫『新版歌祭文』野崎村の段

浄瑠璃 竹本素女

ツレ弾き 豊竹和歌吉

□昭和5 (1930-10-04) 『台湾日日新報』

三吉野浄瑠璃会

三吉野の陸会では四、五両日午後六時より、南門公会堂に於て左の番組で浄瑠璃会を開催し、多数の来聴を希望すると

四日『御祝儀』入登、『寺岡切腹』ひさこ、『蝶花形』八五色、『千

両轍』七二八、『弁慶上使』松司、『玉藻前三』嘯月、『千本す

し屋』嬰木、『三日の丸』南枝、『阿漕浦』琴馬、『弥作鎌腹』

三吉野、

五日『三番叟』可祝、『妹背山四』春枝、『岸姫』南枝、『八陣

記八』嬰木、『玉藻前奥』嘯月、『本蔵下屋敷』松司、『皿屋敷』

七二八、『寺子屋』五色、『加賀見山尾上自害』琴馬、『赤垣源

造出立』三吉野

□昭和5 (1930-10-08) 『台湾日日新報』

素人浄瑠璃会／台北義太夫天狗連の主催で中秋聯合義太会を来る

七、八両日夕六時より、本町二丁目常盤生命三階にて開演する

ことになった。入場無料の上、福引を午後七時迄来場の方に

贈呈すると。番組は

▲七日『日吉』(土口)、『合邦』(可笑)、『壺坂』(南玉)、『酒

屋』(鳳玉)、『百度平』(竹司)、『新の口』(一声)、『沼津』(組

次)

▲八日『弁慶』(竹司)、『妙心寺』(菅枝)、『又助』(土口)、『太

十』(三光)、『本下』(雷雀)、『白石』(柳枝)、『酒屋』(梅玉)、絃は素人婦人連数名出演

□昭和5 (1930-12-07) 『台湾日日新報』

けふの催し／▲義太夫納会 午後六時より寿町西門公会にて  
義太夫納会 六、七日の両夜正六時から、寿町西門公会で  
勝玉連義太夫納会を催す。入場無料。多数来聴を歓迎すと。  
語り物左の通り

【初日】『御祝儀』(入登)、『鈴ヶ森』(勝登)、『忠六』(長楽)、『壺坂』(松月)、『朝顔』(新喜楽千房)、『野崎』(三笠)、『長局』(美登志)、『日蓮記』(三峰)、『壁』(菅枝)

【二日目】『御祝儀』(登山)、『玉三』(三峰)、『二度目』(勝登)、『柳』(品子)、『宿屋』(都鳥)、『本下』(礁風)、『松王』(彫司)、『太十』(友鶴)、『重の井子別れ』(三松)、『糸』(勝玉千代寿)

□昭和6 (1931-02-01) 『台湾日日新報』

義太夫初会 一月二日三日両夜、正六時から、末広町楽々園で  
勝玉連義太夫初会を開催するが、多数出演の為時間厲行する  
から、成べく早く多数の来聴を希望すると。両夜の語り物左の  
通り

『御祝儀』(入登)、『沼津』(登照)、『紙治』(友鶴)、『松王邸』(彫司)、『忠六』(長楽)、『谷組打』(勝登)、『寺子屋』(綾登)、『合邦奥』(三峰)、『重の井子別れ』(三松)、『日吉』(都鳥)、『安達』(美登志)、『合邦中』(三笠)、『弁慶』(品子)、『壺坂』(松月)、『先代萩』(新喜楽千房)、『本蔵下邸』(礁風)、『勘平切腹』(大坂清玉)、『判官切腹』(菅枝)、『糸』(勝玉、呂玉、千代寿)

□昭和6 (1931-02-12) 『台湾日日新報』

素人浄瑠璃大会

来る二月十二、十三、十四、三日間楽々園に於て午後正六時より  
開演、語り物

初日

一、『太十』三光 二、『酒屋』三石 三、『布四』美登志 四、『合邦』千歳 五、『菅四』菅枝 六、『又助』土口 七、『紙治』梅玉 八、『岸姫』組次

二日目

一、『弁慶』平和 二、『沼津』藤枝 三、『酒屋』菊水 四、『儀作』蘭玉 五、『合邦』一声 六、『松王』大路 七、『野崎』柳枝 八、『新口』貴昇

三日目

一、『鳴門』小松 二、『又助』三峰 三、『合邦』宝珠 四、『本下』綾登 五、『忠四』和楽 六、『玉三』竹司 七、『忠六』南玉 八、『菅四』三松

□昭和6 (1931-02-14) 『台湾日日新報』

けふの催し／▲素人浄瑠璃大会 午後六時より末広町楽々園にて

□昭和6 (1931-03-07) 『台湾日日新報』

義太夫会開催／七日八日の両日南門公会堂に於て、晴雨に拘はらず、正六時より浄瑠璃大会開催の由、語り物左の如し

七日 『御祝儀』入登、『先代』竹司、『弁慶』三石、『壺坂』南玉、『本下』菊水、『鳴門』三松、『菅四』柳枝、『沼津』一声  
八日 『鈴ヶ森』登上、『御所三』平和、『壺坂』組次、『合邦』宝珠、『日蓮記』綾登、『松王』大路、『紙治』梅玉、『太十』菅枝

□昭和6 (1931-03-15) 『台湾日日新報』

けふの催し／▲三吉野睦会義太夫 南門公会堂に於て

□昭和6 (1931-03-25) 『台湾日日新報』

義太夫大力連の素人大会／義太夫大力連素人春季大会は、廿五廿六、廿七の三日間末広町楽々園にて、午後六時より無料公開。芸題は左の通り

初日 一、『御祝儀宝の入船』(入登) 一、『太功記尼ヶ崎の段』(大鶴) 一、『菅原寺子屋の段』(可笑) 一、『忠臣蔵本蔵下屋敷の段』(松風) 一、『紙屋治兵衛内の段』(鳳玉) 一、『合邦ヶ辻合邦内の段』(藤司) 一、『梅野由兵衛内の段』(和楽)

二日目 一、『太功記尼ヶ崎の段』(三能羽) 一、『三勝半七酒屋』(松風) 一、『合邦ヶ辻合邦内の段』(可笑) 一、『千代萩政岡忠義の段』(土口) 一、『金毘羅利生記百度平内』(千歳) 一、『忠臣蔵判官切腹の段』(艶司)

三日目全部掛合 一、『朝顔日記宿屋の段』(掛合会員一同) 二、『忠臣蔵勘平腹切の段』(同) 三、『阿波鳴戸巡礼の段』(同) 四、『太功記十段目』(同) 五、『沼津の里平作腹切の段』(同) 三味線(大力、千歳)

□昭和6 (1931-04-08) 『台湾日日新報』

勝玉連義太夫大会／九、十両日の午後正六時より晴雨を論ぜず、末広町楽々園で勝玉連春季義太夫大会を開催し、多数出演する

から、成るべく早く来聴を希望すると。語り物左の通り

▲初日 『御祝儀』（品子）、『十八段掃寄』（美登志）、『由良港』（勝登）、『日吉』（都鳥）、『太功記十』（松月）、『本蔵下邸』（綾登）、『寺子屋』（礁風）、『安達祭文』（三峰）、『紙治内』（菊水）、『合邦』（宝珠）

▲二日目 『御祝儀』（三峰）、『鈴ヶ森』（勝登）、『三勝酒屋』（菊水）、『弁慶上使』（品子）、『勘平切腹』（長楽）、『梅野由兵衛』（友鶴）、『お染久松』（三笠）、『松王邸』（美登志）、『千本桜』（菅枝）、『毛谷村六助』（大路）、糸（勝玉、呂玉、栄枝、寿玉、千代寿）

□昭和6（1931-04-19）『台湾日日新報』

豊竹三玉隠浄瑠璃大会／十九日より楽々園で

渡台以来三十年間台北に居住して、義太夫界の先輩として重きをなしてゐた豊竹三玉氏は、最近三年ばかり病気の為め静養中であつたが、愈々今回斯界を隠退する事となつたので、同氏の伝授を受けた名士や関係者、門弟等後援の下に十九日より二十三日まで五日間、毎夕午後六時より台北市内楽々園で隠退浄瑠璃大会を開く。入場無料である。

□昭和6（1931-06-20）『台湾日日新報』

三吉野睦会の素人浄瑠璃会

三吉野睦会では来る二十一、二十二の両日、南門公会堂で素人浄瑠璃会を開く。番組は左の通り

△二十一日 一『御祝儀』入と、一『玉三』嬰木、一『紙治』南枝、一『本蔵』ひさい、一『飯原館』五色、一『矢口渡七』二八、一『忠四』司、一『彦山瓢箪棚』三吉野  
△二十二日 『三番叟』、一『五色』、一『勘平切腹』一口、一『三勝』、一『熊谷陣屋』一、一『七二八』、一『布引三人上戸』琴、一『彦山六助内』三吉野

□昭和6（1931-08-11）『台湾日日新報』

納涼義太夫大会

十二、十三両日午後六時半から、台北市末広町楽々園で勝玉連納涼義太夫大会を催すと。入場無料。語り物左の通り  
十二日（初日）

『御祝儀』（入登）、『本下』（藤？）司、（梅忠？）（小松）、『酒屋』（友鶴）、（野崎？）（千房）、『寺子屋』（三笠）、『太？（十？）』（土口）、（菅枝）  
十三日（二日目）

『御祝儀』（登山）、『太十』（友鶴）、『御所桜』（品子）、『先代萩』

〔松月〕、『■屋』（■■■）、『梅由』（綾登）、『妙心寺』（■■■■）（美登志?）、『松王邸』（■玉）、（糸）竹本勝玉、呂玉、千代寿

□昭和6（1931.08.25）『台湾日日新報』

『帯屋』のお絹 沼田笠峰

夏の読み物としては、余りにも暑苦しいだらうが、七月に文楽座人形浄瑠璃芝居を見たから、その時の感想の一端を書いて見たい。

××

と言つても、もとより人形芝居の批評をするのではない。それは舞台が違ふし、また自分の趣味にインダガルヂすることになるから、専門に属することは避けるつもりである。現代の新しい婦人たちの中では、文楽座人形芝居などに興味をもつ人は、極めて少いであらう。手ツ取り早い映画全盛時代に、人形芝居は余りにも時代離れがして居る、ジャズに昂奮を求める現代の若い婦人達に、浄瑠璃のメロデーは余りにも耳遠いものであるかも知れない。恐らくは文楽座が何んであるかを知らない人の方が、現代にふさはしいのであらう

××

併しそれほど古風なものであるだけに、これを愛好するもの、

所謂ファンに取つては、その芸術味ゆたかな技巧を見るのが、たまらなく嬉しいのである。私は不幸にも、こゝ数年間「文楽」を見る機会を得なかつたが、この七月に久々で見た時には、人形の遣ひ様がよほど進歩して、その技巧が著しく細やかになつたやうに思はれた『道行初音の旅路』の静御前「人形遣ひ吉田文五郎」と忠信「吉田栄三」との所作などには、すつかり陶醉させられてしまつた。人形に魂が入つたと言はうか、妙技神に迫ると言はうか、実にその感興は筆にも言葉にも現はしがたいものがあつた。

××

斯うした古典的芸術は、なるべく現代の若い人々にもそれを味はせるやうにしたいと思ふが、それは自己の趣味に偏することになるかも知れない。それで感想を述べると言つても、おのづから浄瑠璃の文句、又は脚本そのものに就いて記すより他にはない。

××

二回目狂言で見た『桂川連理の柵』は、帯屋の主人長右衛門とその隣の信濃屋の娘お半とが、心中するまでの経過を取扱つたものである。いふまでもなく、お半と長右衛門とはその年齢が余りに違ひ過ぎてまるで親子の様なので、昔から不釣合な恋と

して普く知られてゐるのである。

××

併し、もしこれを現代の恋として見たらどうであらうか、お半の無自覚は暫く論外として、単に年齢の差といふ点だけなら、決して珍らしくない。むしろ現代ではさういふ不自然な恋の三角関係の例が多過ぎる位である。もとより時勢が違ふからではあるが、長右衛門の妻お絹はどこまでも良人をかばつて「わたしや疾うから知つては居れど憎気どころか顔へも出さねば、気の毒がらす笑止なと舅御と、いぢ悪い姑御の耳へ入るかとそれが悲しき、私も女のはしぢやもの、大事の男を人の花、腹も立つし、りんきもしやうとまんざら知らぬでなけれど（中略）はかない女の心根を不愼と思つて何時までも見捨てず、添うて下さんせ」と涙ながらにかき口説いて居る。もしこれが現代の夫人であつたら何と云つてその良人をたしなめるであらうか。長右衛門はお絹の可憐な心根に対して、うしろから手を合せて拜みつ、感謝して居るが、このお絹が正面からガミガミと我鳴り立てたら、男の気持ちはどうねぢられて行くだらうか。

××

女子を奴隷視する封建時代の道德は、もはや遠い過去のものとなつて居るが、夫婦の間の心意（氣）を思ふとき、私はやつ

ぱりお絹の心を讚美せずには居られない。勿論お絹を讚美するからとて、長右衛門やお半を咎めずに置かうといふのでは決してない。

前の大錦が義太夫語りに……／津太夫の元で勉強中／近く文楽に出演

【大阪電信】やがて文楽座の床に現はれるであらうと噂される前の大錦事細川卯一郎君は、その後も津太夫指導のもとに血の出る様な

稽古を続けてゐるが、その熱心さと上達の早いのは周囲のものはじめ、師の津太夫も舌を捲いて驚嘆してゐる。先月文楽座が上京して明治座に出演した際にも、大錦は終始床の近くに座を占めて、みんなの語り口に耳を傾け、津太夫が宿に帰るとすぐ、その後を追つて

語り口の批判と教授を受けた時など、流石の津太夫もたぢぢの態だつた。大錦が既に完成の域に達したものは「朝顔日記」『寺小屋』『弁慶上使』があり、目下は『太閤記十段目』の稽古中である。後援者白井松竹社長、中村雁次郎等は一日も早く文楽へ演るやう奨めてゐるが、師の津太夫は大事を踏んで今年一杯みつちり勉強してからと押へてゐる。だが周囲の事情を綜合す

ると案外早く

文楽へ出勤するやうになるかも知れない。芸名は相撲の名をそのまゝ、竹本大錦太夫と名乗る事になるらしい

□昭和6 (1931-08-31) 『台湾日日新報』

義太夫琵琶大会 義太夫、筑前琵琶、合同納涼大会が三十一日より九月三日まで、毎夜六時から栄座で開かれる(入場無料)

□昭和6 (1931-10-04) 『台湾日日新報』

三吉野陸会の浄瑠璃会

台北市内児玉町の三吉野陸会では三四、五の三日間午後六時から、南門公会堂に於て浄瑠璃会を開く。その番組左の如し

三日(初日)

『玉藻前道春館』嬰木、『忠臣寺岡切腹』ひさい、『播州青山鉄山館』七二八、『岸の姫松飯原館』南枝、『金刀比羅利生記百度平内』五色、『四ツ谷怪談伊右衛門屋敷』藤司、『忠臣蔵九山科

隠家』三吉野

四日(二日目)

『蝶花形小阪部館』五色、『時雨炬燵紙治』南枝、『一の谷須磨の浦』ひさい、『御所桜弁慶上使』嬰木、『千両幟猪名川内』

七二八、『伊賀越沼津の里』藤司

『日蓮記勘作住家』琴馬、『忠臣蔵九本蔵切腹』三吉野

五日(三日目)

『加賀見山又助内』豊泉、『日吉丸五郎助内』小泉、『千本桜寿司屋』愛丸、『太功記尼ヶ崎』一口、『三十三所壺坂の段』一鳳、『三勝半七酒屋』一星、『おはん長右衛門帯屋』三吉野

JPAK 十月四日

▲午後八時 義太夫(大阪) 竹本清緑

▲午後八時四十分 筑前琵琶(台北) 『浜松城』法池山松長旭

瑠

□昭和6 (1931-11-22) 『台湾日日新報』

義太夫納会 二十三、二十四の両日午後正六時から、末広町楽々園で勝玉連義太夫納会を開催するが、入場下足共無料。出し物は左の通り

『御祝儀』(入登、『酒屋』(登照)、『紙治内』(友鶴)、『百度平』(彫司)、三浦別(勝登)、『先代萩』(松月)、『松王郎』(綾登)、『安達前』(三松)、『安達奥』(三峰)、『妙心寺』(美登志)、『合邦』(三笠)、『宿屋』(品子)、『寺小屋』(礁風)、『又助』(新喜

楽千奴、「柳」(同千房)、『堀川』(菅枝)、『忠臣蔵七段目』(男連掛合)、『白石噺』(女連掛合)、糸(勝玉、呂玉)

○昭和6(1931-11-25)『台湾日日新報』

台北素人天狗連の浄瑠璃納会

二十五、二十六日午後五時より二日間、楽々園に於て台北素人天狗連浄瑠璃納会開催。来聴無料。語り順左の如し

初日、『御祝儀宝の入舟』入登、『六助住家』(大路)『熊谷陣屋奥』(菅枝)、『合邦奥』(喜昇)、『伊賀越沼津』(組次)、『松王屋敷』(蘭玉)、『太十』(土口)、『二日目』、『合邦』(竹司)、『熊谷陣屋前』(宝珠)、『先代御殿』(小松)、『菅原四段目』(綾登)、『四ツ谷怪談』(一声)、『紙治』(梅玉)、『三味線』(呂玉、寿玉、栄枝)

ウエルカム

▲栄座や常設館にゐるお茶子は断然廃すべきだ。彼等は一種の寄生虫、警察よ注意されたい(不愉快生)

○昭和6(1931-11-27)『台湾日日新報』

三吉野睦会の浄瑠璃会

台北南門の三吉野睦会では二十八、二十九の両日、南門公会堂で年末見台納め浄瑠璃会を催す。芸題左の通り

二十八日 一、『本蔵下屋敷』(瓢) 一、『源蔵出立』(南枝) 一、『阿波鳴門』(五色) 一、『玉三道春館』(嬰木) 一、『矢口ノ渡』(七二八) 一、『三勝半七酒屋』(友鶴) 一、『忠丸山科住家』(琴馬) 一、『璧仇討滝の水』(三吉野) 二十九日 一、『千本桜寿司屋』(嬰木) 一、『太七杉の森』(七二八) 一、『一の谷須磨の浦』(瓢) 一、『三勝半七酒屋奥』(南枝) 一、『利生記百度平』(五色) 一、『おしゆん伝兵衛堀川』(藤司) 一、『四ツ谷怪談』(雷雀) 一、『阿漕浦平次内』(三吉野)、『三味線』(三吉野)

○昭和7(1932-02-17)『台湾日日新報』

義太夫大会

当十七、十八、十九の三日間、毎夜正六時から南門公会堂で窓谷綾登氏内地引揚送別義太夫大会を開催するから、多数の来聴を希望すると。其語り物左の通り

初日『御祝儀』(入登)、『菅四』(礁風)、『岸姫』(竹司)、『合邦』(宝珠)、『日蓮記』(綾登)、『弁慶』(品子)、『太十』(土口)、『一の谷』(蘭玉)、『鈴ヶ森』(三松) 二日目『御祝儀』(登山)、『腰越状』(菅枝)、『沼津』(登照)、

『太子』(組次)、『合邦奥』(三笠)、『安達』(綾登)、『新口村』(貴昇)、『志津寺』(大路)、『掛合』(阿波鳴門) (小松、甫)

三日目 『御祝儀』(宝山)、『太子奥』(三峰)、『沼津』(一声)、『弁慶』(南玉)、『三人上戸』(美登志)、『梅由』(梅玉)、『本藏下邸』(綾登)、『掛合』(千両幟) (小松、甫、栄枝)

三味線 (勝玉、呂玉、甫、千代万、栄枝、寿玉)

□昭和7 (1932.02.25) 『台湾日日新報』

義太夫大会

二十六、二十七の両日、午後六時から西門市場内台北稻荷神社社務所楼上で、初午祭奉納義太夫大会を開催する由。来聴随意。其語り物左の通り

▲初日 『御祝儀』(三峰)、『弁慶』(白峰)、『阿漕』(美登志)、『忠四』(菅枝)、『野崎』(宝珠)、『酒屋』(梅玉)、『新口村』(綾登)、『合邦奥』(三笠)

▲二日目 『御祝儀』(美登志)、『梅忠』(貴昇)、『朝顔』(品子)、『沼津』(登照)、『寺子屋』(礁風)、『安達』(三峰)、『合邦』(松風)、『酒屋』(榊枝) (柳枝力)、三味線 (勝玉、邑玉) (呂玉力)、千代寿、寿玉)

□昭和7 (1932.04.03) 『台湾日日新報』  
ラヂオ欄

今日番組 J・F・A・K / 四月三日(日)  
午前の部 (省略)

午後の部

【0:20放送開始、6:45-7:30「屏東の夕べ」7:30「台南の部」

【八・四〇】▲義太夫(台南)『忠臣蔵二度目清書 寺岡物語之段』浄瑠璃山本勝寿、三味線鶴澤安松

【九・〇五】▲長唄〔以下略〕

【写真】  
義太夫

『忠臣蔵二度目清書 寺岡物語の段』

浄瑠璃 山本勝寿氏

□昭和7 (1932.04.13) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K / 四月十三日(水)  
午前の部 (省略)

午後の部 (省略)

夜間の部 【7:30】

【七・三〇】 掛合義太夫（大阪）「未定」

【八・三一】 奉天より奉天放送局（以下略）

掛合義太夫 【午後七時三十分】（大阪）

残念ながら本日の掛合義太夫は、まだ出演者及芸題共決定なく、  
ために書き得ぬ次第ではあるが、大阪の本場からの義太夫故、  
内容は立派である事は間違ひない

□昭和7（1932.04.17）『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K／四月十七日（日）

午前の部（省略）

午後の部

【二〇二〇】 昼間娯楽時間（レコード演奏） 義太夫 『明烏六花曙』

（浦里時次郎吉原揚屋の段） 浄瑠璃竹本鋳太夫、三味線豊澤新

左衛門、ツレ弾野澤吉男

【二〇〇〇】 氣象予報（台南のみ） 台南測候所発表（以下略）

夜間の部（省略）

昼間娯楽時間 【午後零時二十分】

義太夫／『明烏六花曙』

浦里時次郎吉原揚屋の段』

浄瑠璃 竹本鋳太夫

三味線 豊澤新左衛門

ツレ弾 野澤吉男

この浄瑠璃は昭和六年七月三日、江戸三河島近くの田浦で蔵前の伊勢屋といふ町人の次男伊之助が、吉原の遊女三芳野と心中した事件を、初代鶴賀若狭掾が脚色して自ら節付した新内節で、弘化四年大阪で歌舞伎劇で上演された時、鶴賀馬蝶が出語り得非常に好評であつた所から、嘉永六年二月大阪新築地の綱太夫座の手■興行で義太夫に改作し『明烏六花曙』の外題で上場し、口を竹本田喜太夫、切を竹本咲太夫が語つたものである。新内節の方では単に浦里の時次郎が痴情関係から吉原を出奔するのであるが、義太夫では時次郎が金岡の書いた臥龍梅の一軸を詮議のため廊に入込み、いつしか浦里と馴染んだのを、亭主が一軸を盗み取つた犯人であるだけに、夫を楯にして浦里を折檻すると、手代の彦六が己惚から浦里の縄を解き鼻毛を抜かれるといふ滑稽な筋を取入れて潤色し、江戸より寧ろ上方気分のある情緒が濃厚に漂つてゐる、

雪はまだ残りて寒き春の風、吹晴れぬ身の浦里が湯上り姿その儘に、禿の緑打つれて上る二階の部屋の内、それと緑が煙草盆煙草に憂さは晴らしても晴れぬ思ひの時次郎、誰が恋人と夕間暮堰かれて今は山名屋の浦里にさへ怨めしく、人目の関を忍ぶ身の雪の夜道を迷ひ来て、塀の外面にしよんぼりと、お辰も流石物馴れし世間話を取混せて、「いや申し浦里様、モウ世間の事といふものは其の身にならねば知れぬもの、私も昔を思出せば満更恚うでもなかつたが、アアト、恚ういへばどうかかかう可笑い咄するやうなれど、どうした事やら常々から、お前のことが気に懸つて、サ、アノお前に聞いて貰ひ度いと思つてゐた咄、まあ一寸聞いて下んせ、あの私がやうな見つともない女子でも嘘へにもいふ鬼も十八とやらで、どないか思つてくれたが今の主ぢや、ホホモウ色々口説かれ、マアママア今のが済んだと思はんせ、サア深うなつて来て、もう何の事はない指切髪切りといふ様になると友達に怗した事で金が要る、二歩貸せ三步貸せサア了ふた、コリアマア小遣の錢箱にしられたわいと思ふたれど、サア迷うたが因果、エ、儘よ若い時は二度はないと仕面工面して、到頭小袖箆も何時の程。状の取遣沢山に紙屑が一杯詰つた揚句には、心中に出ようと、(中略)「お辰は部屋を振返り、コレ緑勝手に廻ると隙があるこの切戸からゆく

程に、ナしつぱりと締めてたもと、小蔭に忍ぶ時次郎を無理に押遣る切戸口、ぱつたり締めて左あらぬ顔傘振かたげ小提灯、掲げてお辰は急ぎ行く、涙ながらに時次郎いつまでくどき歎いても帰らぬ今の我身の不運、逆も生きては居られぬこの身和我も供にと云ひたいが二人一緒に死すならば、跡で可愛やこの緑はどうなるものぞ、不愆やな、今死ぬる身を存へて我亡き跡で一片の回向を頼む浦里と、聞く程せきくる涙ながらそりや余りぢや情ない今宵別れて私が身や可愛緑は何とならうと思はんす、死なねばならぬ覚悟なら三途の川もコレこの様に親子手を執り諸共と(中略)是こそ真に日頃尋ぬる金岡が一軸、エ、忝けないと人なきを幸ひに我が手に入れしも和女のお蔭コレ恚う<<と囁き合ひ庭に折しも足音に機転の浦里行灯の火吹き消す合図に彦六が探り足してコレコレお浦是さへあれば一飛にそ様と一緒に抜さうぢや抜けさうぢやい、幸裏の切戸から二人は先へ出給へ、我等は最前見て置いたあの床の間の掛物をせしめて来る内此の銀子を必ず屹度預けると財布を渡し彦六が奥へ行く跡浦里の緑を背に時次郎何処を指してゆく空や、はや東雲の明烏飛ぶが如くに遠近や後の噂や残るらん

□昭和7(1932.04.21)『台湾日日新報』

素人義太夫会

二十二、二十三両日午後六時半から末広町楽々園で勝玉連 ■■■

〔春季カ〕義太夫会を開催する。入場無料。成るべく多数の来聴を希望すると。両日の語り物左の通り

『御祝儀』（入登）、『弁慶』（■■■）（白カ）、『堀川猿廻し』（友鶴）、

『寺子屋』（長■■）、『八陣』（勝登）、『先代萩』（三松）、『野崎』（三

笠）、『太十』（松月）、『百度平』（美登志）、『日吉丸』（品子）、『又

助』（新喜楽千奴）、■■■■（梅由カ）（新喜楽千房）、『儀作』（菅

枝）、糸（勝玉、千代寿）

ラヂオ欄

清元【午後八時四十分】

『夢見草葉蔭一声——高尾縁切——』

浄瑠璃 清元吉栄太夫

三味線 浪越秀美

□昭和7（1932.05.02）『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K／五月二日（月）

午前の部〔省略〕

午後の部〔省略〕

夜間の部

【八・三〇】義太夫『艶姿女舞衣（酒屋の段）』浄瑠璃梅本梅玉、

三味線村崎呂玉

【九・二〇】時報〔以下略〕

義太夫

【午後八時三十分】

『艶姿女舞衣

（半七酒屋の段）』

浄瑠璃 梅本梅玉

三味線 村崎呂玉

三勝半七の物語り、今日は始めからさわりの所まで語られる事になつてゐる。此の曲は元禄八年十二月六日大阪長町四丁目美濃屋平左衛門の娘さん（芸名を三勝と云つて舞妓）が、大和五条新町赤根屋半七（放蕩のために大阪に漂浪して豆腐屋となつた独身物）と痴情のため、大阪下難波村墓所南石垣の下で情死した事実を、宝永六年八月大阪豊竹座で（笠屋三勝二十五回忌）と名題をつけて浄瑠璃に脚色して興行した。これが頗る評判だつたので、安永元年十二月笠屋を再び美濃屋に

改めて『艶姿女舞衣』といふ外題で興行したのが此の曲の最初で、全部を三巻物とし、上の巻は生玉の段、中の巻は新町橋の段、長町の段、下の巻は今宮戎の段、上塩町の段で、この上塩町の段が酒屋の段である、作者は竹本三郎兵衛、豊竹応律、八民半七である、酒屋といふ酒屋の半半七がお園といふ女房があるのにもかかはらず昔馴染の美濃屋の三勝といふ芸妓に迷ひ、遂に人殺しまで行ふ、お園の父宗岸は聲の放蕩を怒つて一度娘を連れ戻したが、再び考ふる所があつて酒屋に復帰させやうとすると、半七の親の半兵衛が拒む所から事件が展開されて、お園の貞節や、捨児のお道の守袋から現はれた遺書で一家が悲嘆するといふ人情の機微を穿つた場面が、それからそれと続く名作である

□昭和7 (1932.05.17) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 五月十七日(火) / J・F・A・K

午前の部 (省略)

午後の部 (省略)

夜間の部

【八・三〇】義太夫『伊賀越道中双六 平作腹切の段』、浄瑠璃

山田組次、三味線吉田大力

【九・二〇】時報 (以下略)

義太夫(台北)【午後八時三十分より】

▼『伊賀越道中双六 平作腹切の段』

浄瑠璃 山田組次

三味線 吉田大力

山田氏は既に台北にあつて二十数年、義太夫界の大先達である、三味の吉田大力さんは既にそのしつかりした腕前、音色等定評のある人

この出しものは、天明四年二月竹本座に上場、作者は近松半二と近松加作の二人で安永七年に近松東南作の『乗合合羽』を更に仕組んだものである。此の敵討ちは寛永十一年十一月七日伊賀上野の鍵屋の辻にあつた事実で、日本三大敵討の一つとなつてゐる。それは一方河合方には旗本が加担し、和田方には大名が四頭まで加勢したといふ、言はば大名旗本の喧嘩ともなつたので徳川幕府もこれには手古摺つたといふのである。敵の沢井股五郎は、実は河合又五郎、和田志津馬は渡辺数馬、唐木政右衛門は荒木又右衛門、およねの瀬川は唯筋に取入れたもので、享保三年頃京都生れの大森たかといふ女が吉原に来て瀬川

と名乗つたが、夫の敵を討つたといふ事蹟があるので作者はこれを取入れたものらしい。股五郎は志津馬の父靱負を殺して逐電した。志津馬は唐木政右衛門の助太刀を得て又五郎の行方を捜し廻つた。沼津の平作爺さんは、志津馬が吉原で深く馴染んだ瀬川といふ遊女の父である。同じく股五郎を探してゐると、泊り合せたのが平作の忰の十兵衛で、今は股五郎方の者、印籠からそれと知り親子の名乗もならず平作は腹を切つて漸く股五郎の在家を知るといふ筋である。今晩語られるのはおよね独り物おもひから平作臨終十兵衛出立の段切までである

【昭和7 (1932.05.26) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K / 五月二十六日(木)

午前の部 (省略)

午後の部 (省略)

夜間の部

【八・四五】義太夫、『傾城恋飛脚 新口村の段』浄瑠璃葉玉友鶴、

三味線竹本勝玉

【九・二〇】時報 (以下略)

義太夫(台北) 【午後八時四十五分より】

▼『傾城恋飛脚』(新口村の段)

浄瑠璃 葉玉友鶴

三味線 竹本勝玉

近松菓林子の『冥土の飛脚』を菅専助、若竹笛躬が改作したもの浪花淡路町の飛脚屋渡世の亀屋忠兵衛は北の新地へ通行の際、鼻紙■(袋カ)を落した時、通りかかりの遊女■屋の梅川が拾ひ、これを渡したのが縁の初めで、忠兵衛は日頃の品行方正も梅川に打ち込んで了つた。そしてやがて金に窮し西国方から廻つた封印金を一時融通して遂に入牢となり、忠兵衛は牢死した。そして梅川は尼となつたといふ事である。それを脚色したものである

【昭和7 (1932.05.31) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K / 五月三十一日(火)

午前の部 (省略)

午後の部 (省略)

夜間の部

【七・三〇】義太夫(台南のみ)『御所桜堀川夜討(弁慶上使の段)』

浄瑠璃竹本司加、三味線石持咲一

【八・〇五】台湾音楽（台南のみ）〔以下略〕

義太夫（台南のみ）【午後七時三十分より】

▲【御所桜堀川夜討（弁慶上使の段）】

浄瑠璃 竹本司加

三味線 石持咲一

此の浄瑠璃は文耕堂、三好松洛の合作の『御所桜堀川夜討』の第三段目の切で、梶原景高、土佐坊昌俊の二人が、源義経の問罪使として上洛し、義経の正妻卿の君が、平時忠の女であるので、義経が反逆人で無い証拠に、卿の君の首を討てと難題を言ひかけたので卿の君が妊娠中を預かつてゐる侍従太郎の邸へ弁慶が上使に赴く。侍従夫婦は卿の君を討つに忍びず腰元の信夫の身代に立てやうとすると、その母の針妙おわさが拒み、其の身の素性を語るうち、襖越しに聴いた弁慶は信夫こそ十八年前播磨の福井村で一夜の契りを結んだ時、おわさとの間に出来た子といふ事を知り、不意に突き殺して、本心を明しその首を討つて身代りに立てるといふ筋である（写真上竹本司加、下石持咲一）

□昭和7（1932.06.05）『台湾日日新報』

義太夫（台北）【午後八時十分より】

▲【仮名手本忠臣蔵（六段目、勘平腹切の段）】

浄瑠璃 渡 清玉

三味線 竹本勝玉

此の浄瑠璃は、勘平が軍用金の調達に悩んでゐるのを察し、女房のお軽が身売して百両を手に入れやうとして舅の与一兵衛が祇園町に赴き、半金を得て帰るさ、山崎街道で定九郎の為に斬り殺されて金を奪はれる。そんな事とは知らず勘平は猪に出会ひ発砲すると、その弾丸が定九郎に中つたので余儀なく其の財布を手にして帰ると、我家では一文字屋が来て約束でお軽を拉し去る。そこへ獵師共が与一兵衛の死体を担ぎ込む、姑の感違ひから勘平が舅殺しだと語られてゐる所へ、郷右衛門と弥五郎が訪れて不忠呼ばはりをするので、遂に勘平は腹を切つて一切を自白すると、其の身の潔白が明らかとなり、死して連判に加はるといふ悲壮な筋である

□昭和7（1932.06.08）『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K／六月八日（水）

午前の部〔省略〕

午後の部

【〇・二〇】昼間娯楽時間 レコード演奏（台北のみ）台湾苦楽  
滑稽談〔以下略〕

【〇・二〇】昼間娯楽時間 レコード演奏（台南のみ）義太夫  
『源平布引滝（松波琵琶の段）』浄瑠璃竹本大隅太夫、三味線  
鶴澤道八

【一・〇〇】気象予報（台南のみ）台南測候所発表〔以下略〕  
夜間の部〔省略〕

新内（台北）【午後七時五十分より】

▲『弥次喜多』

浄瑠璃 鶴賀秀美太夫  
三味線 富士松富士三郎

□昭和7（1932.06.09）『台湾日日新報』  
ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K／六月九日（木）

午前の部〔省略〕

午後の部〔省略〕

夜間の部

【八・五〇】掛合義太夫『関取千両幟（猪名川内の段）』猪名川  
（水野小松）おとわ（金柿栄枝）鉄ヶ嶽使（笠原甫）三味線（村  
崎呂玉）

【九・二〇】時報〔以下略〕

掛合義太夫【午後八時五十分より】（台北）  
掛合／『関取千両幟（猪名川内の段）』

配役

猪名川 水野小松

おとわ 金柿栄枝

鉄ヶ嶽、使 笠原 甫

三味線 村崎呂玉

めづ 珍らしい掛合義太夫で、この浄瑠璃は近松半二外五名の合作に  
なるもの、大阪の商人鶴屋礼三郎が新町大阪屋の遊女錦木に  
おぼ 溺れたが悪人団右衛門、九平太、鉄ヶ嶽等の奸計にかかつて  
窮地に陥つたのを礼三の最原力士猪名川夫婦の侠気によつて錦  
木の身請を済ませる、ところで近江の郷士三輪弥太夫の女お才  
は許婚の夫がある身で礼三と私通したため勘当されたのを千田  
川に隠まれる、錦木は猪名川の女房おとはに對する義理として

再び茶屋奉公の身となり、礼三は鉄ヶ嶽を切つたため前途を悲しみ、遂に錦木と情死まで企てたが結局人々の尽力で目出度納まるといふ筋で今晚放送されるのは、初めから、「帯引締て夫の跡慕うてこそは、行く空に」、までである

□昭和7 (1932.06.13) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

常磐津（台北）【午後八時五十五分より】

『権八小紫／廓仇夢』

浄瑠璃／三味線 梅本梅寿

上調子 岸澤さん

□昭和7 (1932.06.14) 『台湾日日新報』

竹本七五三登氏／歓迎義太夫会

以前台北に在住してゐたことのある義太夫の竹本七五三登氏が今回来台したので、十四日から十六日まで三日間毎夜午後六時半から市内末広町楽々園で歓迎義太夫大会を開催する事となつた。入場無料

□昭和7 (1932.06.15) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K／六月十五日（水）

午前の部（省略）

午後の部（省略）

夜間の部

【七・五〇】△義太夫、『四谷怪談伊右衛門住家の段』、浄瑠璃

■豊司、三味線野澤三吉野

【八・三〇】人情噺（以下略）

義太夫（台北）【午後八時五十分より】

▼『四谷怪談（伊右衛門住家の段）』

浄瑠璃 ■■勝司

三味線 野澤三吉野

久し振りの野澤三吉野さんの■■（糸カ）で語られる浄瑠璃夏  
の怪談の随一である『四谷怪談 伊右衛門住家の段』

□昭和7 (1932.06.24) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K／六月廿四日（金）

午前の部（省略）

午後の部〔省略〕

夜間の部

【八・〇〇】義太夫（台北のみ）『近頃河原達引（お俊伝兵衛）』

浄瑠璃竹本七五三登大夫、三味線野澤三吉野

【八・〇〇】台湾講古（台南のみ）三国誌（第三席）黄福

【八・四〇】映画物語、時代劇『め組の喧嘩』玉井潤、伴奏細田

管絃樂團（以下略）

義太夫【午後八時】（台北のみ）

▲『近頃河原達引（お俊伝兵衛）』

浄瑠璃 竹本七五三登

三味線 野澤三吉野

竹本七五三登師は最近内地より来られた人で、野澤三吉野の糸  
で語る

□昭和7（1932.07.14）『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K／七月十四日（木）

午前の部〔省略〕

午後の部〔省略〕

夜間の部

【七・三〇】義太夫（台北のみ）『梅野由兵衛、迎駕籠、聚楽町  
の段』浄瑠璃竹廻家友奴、三味線吉田大力

【七・三〇】講演（台南のみ）『盂蘭盆に就いて』掬月晴臣

【八・〇〇】連続講談（東京）（台北のみ）『野狐三次』第四席神

田伯治

【八・〇〇】常磐津（台北のみ）『大森彦七』（以下略）

義太夫【午後七時三十分】台北

『梅野由兵衛／迎駕籠』

聚楽町の段』

浄瑠璃 竹廻家友奴

三味線 吉田大力

西国の藩士であつた梅の由兵衛が旧主が紛失した宝刀を購ふた  
めに、百両の金子に困つて女房小梅の弟である長吉が七十両の  
金子を持つて泊つたのを幸ひに、女房を酒買ひに出した留守中  
に長吉を殺して金を奪ふと、長吉は初めから死を賭して由兵衛  
夫婦を救ふために訪ねたのだと本心を明かすといふのである。  
作者は原田由良之助添削者並木宗輔である

□昭和7 (1932-07-17) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K／七月十七日(日)

午前の部〔省略〕

午後の部〔省略〕

夜間の部

【七・三〇】ヴァイオリンとピアノ(大阪)(台北のみ) 曲目未定 ヴァイオリン、アレキサンダー・モギレフスキー、ピアノ、レオ・シロタ

【七・三〇】義太夫(台南のみ) 『仮名手本忠臣蔵六段目勘平切

腹の段』(浄瑠璃、丸玉勝朝。三味線、安松太夫)

【八・〇〇】吹奏楽(台北のみ)〔曲目略〕

【八・〇〇】長唄(台南のみ) 『巽八景』(以下略)

義太夫(台南のみ) 【午後七時三十分】

『仮名手本忠臣蔵 一六段目勘平切腹の段』

浄瑠璃 丸玉勝朝

三味線 安松太夫

勘平が軍用金の調達に悩んでゐるのを察し、女房のお軽が身売して百両を手に入れやうとして舅の与一兵衛が祇園町に赴

き半金を得て帰るさ、山崎街道で定九郎のために斬り殺されて金を奪はれる、そんな事は知らず勘平は猪に会い発砲するとその弾丸が定九郎に中つたので、余儀なく其の財布を手にして帰ると、我家では一文字屋が来て約束でお軽を拉し去る。そこへ獵師共が与一兵衛の死骸を担ぎ込む、姑の感違ひから勘平が舅殺しだと詰られてゐる所へ、郷右衛門と弥五郎が訪れて不忠呼ばはりをするので遂に勘平は腹を切つて一切を自白すると、其の身の潔白が明らかになり、死して連判に加はるといふ悲壮な筋である

□昭和7 (1932-07-18) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K／七月十八日(月)

午前の部〔省略〕

午後の部〔省略〕

夜間の部

【七・三〇】尺八合奏(名古屋) 『曲目未定』

【八・〇〇】未定(大阪)

【八・三〇】放送舞台劇 『梶谷笠』(以下略)

人形浄瑠璃（大阪）【午後七時五十分より】

大阪四ツ橋文楽座より中継

『傾城阿波の鳴門』

Ⅱ 順礼歌の段Ⅱ

浄瑠璃 竹本南部太夫

三味線 野澤吉弥

世界に誇るわが国独特の古典芸術人形浄瑠璃を文楽座から中継するものである。語るのは今文楽で中堅の南部太夫である。近來の名演であらう。此の浄瑠璃は明和五年六月大阪竹本座で上演された『傾城阿波鳴門』の八段目で、作者は近松半二、八民平七、寺田兵蔵、竹田文吉、竹本三郎兵衛の五人である。大體の趣向は、阿波徳島の藩主三木家のお家騒動で、忠義の家老桜井主膳が悪人小野田郡兵衛のために主家の重宝国次の名刀を盗まれて困難したが、旧臣十郎兵衛お弓夫婦及び藤屋伊左衛門等の艱難辛苦によつて悪人から再び名刀を取返し、主家が安泰になるといふ筋で、宝永七年七月近松門左衛門が書卸した『夕霧阿波鳴門』の翻案である。十郎兵衛が我子のお鶴を殺した出所は、その当時阿波の浪人某が大坂玉造辺に仮住居して家計の道なきままに詐欺強請夜盗、追剥等とあらゆる悪業をして

多くの人を悩ましたが、或時順礼の子が金を持つてゐるのを知つて欺いて家に連れ帰り、深夜縊り殺し、窃に其死骸を猪飼野の畑中へ埋め隠した。然るにこれが露顕して召捕れ重罪に処せられたといふ実説を取入れたので、此の浄瑠璃は全部十段続きであるが、この順礼歌の件だけが特に名高いのである

□昭和7（1932.07.19）『台湾日日新報』

ラヂオ欄

新内【午後九時】…台北：

『関取千両幟』

…猪名川内の段…』

浄瑠璃 岡本美根太夫

ツレ弾 岡本七五三吉

□昭和7（1932.08.05）『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K／七月五日（金）

午前の部（省略）

午後の部（省略）

夜間の部

【八・三〇】義太夫『本朝二十四孝 十種香の段』浄瑠璃小松崎

三松、三味線竹本勝玉

【九・二〇】時報〔以下略〕

義太夫【午後八時三十分】—台北—

『本朝二十四孝（十種香の段）』

浄瑠璃 小松崎三松

三味線 竹本勝玉

此の浄瑠璃は近松半二、三好松治、竹田小出雲等の合作で、  
武田と上杉の確執を書いたもので、趣向の多い非常に複雑した筋である

□昭和7 (1932.08.10) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

清元【午後八時五十三分】—台北

『紫雲鐘供養（道成寺）』

浄瑠璃 清元吉栄大夫

三味線 浪越秀美

□昭和7 (1932.08.13) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K／七月十三日(土)

午前の部〔省略〕

午後の部〔省略〕

夜間の部

【八・二〇】義太夫(レコード)『御所桜堀川夜討、弁慶上使の段』

…浄瑠璃竹本大隅太夫、三味線鶴澤道八

【九・二〇】時報〔以下略〕

義太夫【午後八時二十分】(台北)

…レコード演奏…

▲『御所桜堀川夜討（弁慶上使の段）』

浄瑠璃 竹本大隅太夫

三味線 鶴澤道八

□昭和7 (1932.08.16) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K／八月十六日(火)

午前の部〔省略〕

午後の部〔省略〕

夜間の部

【八・〇〇】義太夫（東京）竹本素女

【八・一〇】掛合噺「キッコーマン醤油製造元野田醤油株式会社提供前段

【九・〇〇】掛合噺（キッコーマン醤油製造元野田醤油株式会社提供）後段 一心亭豆八、一心亭太助（以下略）

義太夫【午後八時より】（東京）

出し物未定 竹本素女

竹本素女師は子供の時分から大に技を磨いて、最初竹本長広の門下となり娘義太夫として大に認められてゐたが其の後鶴澤道八、竹本越路太夫にもついて名を挙げ今は立派な一方の旗頭である艶物が得意である

□昭和7（1932.08.21）『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K／八月廿一日（日）

午前の部〔省略〕

午後の部〔省略〕

夜間の部

【七・〇〇】台湾人形戯『奇縁録』主演陳招仁、助演奇文閣団員

【七・三〇】ラヂオ風景（大坂）『未定』

【八・三〇】義太夫『艶姿女舞衣』三勝半七酒屋の段：浄瑠璃竹本七五三吉、三味線竹本七五三登太夫

【九・二〇】時報（以下略）

義太夫【午後八時三十分】—台北—

『艶姿女舞衣

—三勝半七酒屋の段—

浄瑠璃 竹本七五三吉

三味線 竹本七五三登太夫

此の曲は元禄八年十二月六日大阪長町四丁目美濃屋平左衛門の娘さん（芸名を三勝と云つて舞妓）が、大和五条新町赤根屋半七（放蕩のために大阪に漂浪して豆腐屋となつた独身もの）と痴情のために大阪下難波村墓所南石垣の下で情死した事実を、宝永六年八月大阪豊竹座で『笠屋三勝廿五回忌』と名題をつけて浄瑠璃に脚色して上演したこれが頗る好評だったので、安永元年十二月、笠屋を再び美濃屋に改めて『艶姿女舞衣』といふ外題で興行したのが此の曲の最初で、全部が三巻物、上の巻は生島の段島の内茶屋の段、中の巻は新町橋の段、長町の

段、下の巻は今宮戎の段、上塩町の段、この上塩町の段の切が酒屋の段である。作者は竹本三郎兵衛、豊竹応竹、八民半七である。茜屋といふ酒屋の悴半七がお園といふ女房があるのもかかはらず昔馴染の美濃屋の三勝といふ芸子に迷ひ、遂に人殺しまで行ふ。お園の父宗岸は聲の放蕩を怒つて一度娘を連れ戻したが再び考ふる所あつて茜屋へ復歸させやうとすると、半七の親の半兵衛が拒む所から事件が展開れて、お園の貞節や捨子のお道の守り袋から現はれた遺書で一家が悲嘆するといふ人情の機微を穿つた場面がそれからそれと続く名作である

#### 台湾人形戯

【午後七時より】（台北）

▲奇縁録 主演陳招仁、助演奇文閣团员

□昭和7（1932.09.05）『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K／八月五日（月）

午前の部（省略）

午後の部（省略）

夜間の部

【七・三〇】義太夫—人形浄瑠璃大阪大阪文楽座より中継『未定』  
浄瑠璃竹本大隅太夫、三味線鶴澤道八

【八・三〇】台湾講古『買義』趙福（以下略）

人形浄瑠璃（大阪）【午後七時三十五分】

『此幻影血桜日記』

—文楽座より中継—

竹本鍛太夫 外

我国芸術の粹である、文楽座の人形浄瑠璃で同座の重鎮竹本鍛太夫師その他の出演である

□昭和7（1932.09.13）『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K／九月十三日（火）

午前の部（省略）

午後の部（省略）

夜間の部

【七・三〇】乃木將軍紀念放送（東京）（台北のみ）△浪花節『最後の乃木將軍』東家楽燕△筑前琵琶『九月十三日』高峰筑風

【七・三〇】義太夫（台南のみ）『伊賀越道中双六』平作腹切の

段浄瑠璃竹本勝玉、三味線■■■■■〔福島原？澤〕

【八・三〇】講談（蜂ブドー酒、レッキス本舗近江屋利兵衛商店提供）『太閤と曾呂利新左衛門』読切邑井貞吉（以下略）

義太夫（台南のみ）

【午後七時三十分】

伊賀越道中双六 — 平作腹切の段 —

浄瑠璃 竹本勝玉

三味線 ■■■■■〔福島原？澤〕

日本三大仇討ちの一つ、伊賀上野で荒木また衛門の助太刀で行はれたもの、それを仕組んだものである。沼津の段といふのが今晚語られるのである

□昭和7（1932.09.23）『台湾日日新報』

ラヂオ欄

明日の番組 J・F・A・K／九月廿三日（金）〔省略〕

二十四日（土曜日）

午前の部〔省略〕

午後の部〔省略〕

夜間の部

【八・三〇】義太夫（味の素本舗鈴木商店提供）『菅原伝授手習鑑』

寺子屋の段（前段）竹本組春

【九・〇〇】義太夫（味の素本舗鈴木商店提供）『菅原伝授手習鑑』

寺子屋の段（後段）竹本組春

【九・三〇】時報（以下略）

二十四日の放送（二十四日本欄休載の為繰上掲載）

東都／女流義太夫界の立物／竹本組春師を招聘

J・F・A・K特別サービス／二十四日から三日間

講談邑井貞吉師のあとを受けて、プログラム特別サービスとして、今東京で評判の竹本組春師の義太夫を提供する事になった菅原伝授手習鑑 — 寺小屋の段 —

【午後八・三〇】竹本組春

此の浄瑠璃は■■■■■〔道真公？〕の■■■■■〔飛梅？〕の故事と、梅は飛びの歌を骨子として作ったもので、作者竹田出雲、並木千柳、三好松洛、竹田小出雲の合作この寺子屋は特に竹田出雲の作である、作は延享三年八月竹本座に上場した、当時竹本座は不入りであったが、この浄瑠璃で盛返し翌四年三月まで大入りを打続けたものである、『仮名手本忠臣蔵』に次いでの名作

である

□昭和7 (1932.09.25) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K／九月廿五日(日)

午前の部(省略)

午後の部(省略)

夜間の部

【八・三〇】義太夫(ラヂオ受信機製造元七欧無線電機商会提供)

『壺坂』前段…竹本組春

【九・〇〇】義太夫(ラヂオ受信機製造元七欧無線電機商会提供)

『壺坂』後段竹本組春

【九・三〇】時報(以下略)

義太夫【後八・三〇】—台北—

『壺坂』前段及後段』

(ラヂオ受信機製造元七欧無線電機商会提供) 竹本組春

昨晩に引続いて特別サービスの一つである、豊竹呂昇の得意も  
ので『三つ違ひの兄さんと云うて暮してゐる中に、情なやかな  
さんは……』といふ沢市の浄瑠璃で有名の曲、組春師の呂昇

に劣らぬ名調子のさわりは聴きものであらう

□昭和7 (1932.09.26) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K／九月廿六日(月)

午前の部(省略)

午後の部(省略)

夜間の部

【八・三〇】義太夫(森永ミルク森永ドライミルク製造元森永練

乳株式会社提供)『増補生写朝顔話』(朝顔日記) 前段…竹本組

春

【九・〇〇】義太夫(森永ミルク森永ドライミルク製造元森永練

乳株式会社提供)『増補生写朝顔話』(朝顔日記) 後段…竹本組

春

【九・二〇】時報(以下略)

義太夫【後八・三〇】

増補生写朝顔話 —朝顔日記—

(森永練乳株式会社提供) 竹本組春

此の浄瑠璃は、天保三年正月、大阪稻荷境内竹本愛太夫一座で

上演した山田案山子遺稿の『生写朝顔日記』の四段目である秋

月弓之助といふ九州辺の国家老の娘深雪が■■■〔京都?〕在住

中、宇治の蛭狩で宮城阿曾次郎といふ美男の■■■と契りを結び、

■■■の幾日かを過ごす中に秋月一家は■■〔急?〕に本国に引揚

ぐる事になり、深雪と阿曾次郎は明石の浦で本意ない別れを惜

む、その際深雪は朝顔の歌を記した扇を後日の証に阿曾次郎の

船に投げ入れて■■を■■いた、其の後阿曾次郎は任官し駒沢次郎

左衛門と改めて江戸へ出立する、一方帰国した深雪は男の事が

忘兼ね、本国を出奔して都へ上ると男は去つたので、其の行方

を追ふうちに盲目となる駒沢は同役の岩代と共に東海道を下り

島田宿の宿屋で偶然盲目姿の深雪に邂逅したがそれと明さず出

立する、後で知つた深雪は直ぐその後を追つたが一足違ひで大

井川で川止めとなり失望の結果入水して果てやうとした時、宿

屋の亭主と下部の閨助が駆け付けて助け宿屋の亭主は深雪が祖

父の家臣といふ事が分り、駒沢が患んだ眼薬は甲子生れの人間

の生血で服■■すれば癒えるといふので、甲子生れの亭主が切腹

して深雪の眼が開くといふのである

【写真あり、不鮮明】

□昭和7 (1932-10-06) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K / 十月六日 (水)

午前の部 (省略)

午後の部 (省略)

夜間の部

【七・三〇】人形浄瑠璃 (大阪) (大阪文楽座より中継) 竹本土

佐太夫外

【八・三一】満洲より (奉天)

【八・四五】謡曲 (喜多流) 『巴』大村武 (以下略)

人形浄瑠璃 (大阪) 【午後七時三十分】

(大阪文楽座より中継)

▲芸題未定

竹本土佐太夫外

現在義太夫界の巨星として錚々たる名声を謳はれて、斯界稀に

見る美音の持主として、芸風も完成の域にある竹本土佐太夫師

その他の出演にて文楽座からの人形浄瑠璃の中継である

□昭和7 (1932-10-08) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K / 十月八日 (土)

午前の部 (省略)

午後の部 (省略)

夜間の部

【八・四五】義太夫『日吉丸稚桜』浄瑠璃…富田品子、三味線…

竹本勝玉

【九・二〇】時報 (以下略)

義太夫【午後八時四十五分】(台北)

『日吉丸稚桜』

浄瑠璃 富田品子

三味線 竹本勝玉

此の浄瑠璃は、秀吉が木下藤吉郎時代に、堀尾茂助の案内で間道から進み、斎藤龍興が居城である美濃の稲葉山の城砦を陥れたといふ事と、清正が鍛冶屋の倅で、幼少で父を失ひ母の縁で秀吉の許に養はれ、遂に其の臣下となつて武名をあらはしたといふ『絵本太功記』の一節を綜合してこしらへたもので、享保元年十月大阪豊竹座で上場され、作者は近松柳、近松梅枝軒、近松加造、近松風寿の四人である、洵いうちに色氣のあ

るのが此の浄瑠璃の特色である

三吉野義太夫会 三吉野睦連は八、九の両日午後六時より南門公会堂にて左記番組の義太夫大会を催すと、今回は新作時局ものもあり多数の来聴を希望すると

◇初日(八日) △沼津の里平作切腹(七二八) △彦山権現六助住家(嬰木) △時雨炬燵治兵衛内(南枝) △一の谷嫩軍記須磨の浦(瓢) △阿波鳴戸順礼歌(五色) △新作皇国の精華血染のハンカチ弥谷住家の段(三吉野)

◇二日目(九日) △岸姫松飯原館(南枝) △忠臣二度目清書(瓢) △朝顔日記宿屋(五色) △玉藻前三道春館(嬰木) △お俊伝兵衛堀川(七二八) △新作噫肉弾 勇士江下武二住家の段(三吉野)

※「血染めのハンカチ」…三勇士のひとり・江下武二が、久留米駅から出征の際に家谷計男少年から激励され、小指を切った血染めのハンカチを少年に渡して覚悟を示したという美談。

□昭和7(1932.10.11)『台湾日日新報』

新竹

義太夫 新竹玉声会の義太夫温習会は八日午後七時から倶楽部にて開催太田弁護士、永井台湾等官民有力者の出演があったので非常に盛会であつた

□昭和7 (1932.10.24) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

きよもと…(台北)…【午後九時】

『月花茲友鳥(山姥)』

浄瑠璃 清元吉栄太夫

三味線 新喜楽千弥

上調子 日本亭桃丸

□昭和7 (1932.10.26) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K／十月廿六日(水)

午前の部〔省略〕

午後の部〔省略〕

夜間の部

【八・五〇】義太夫(台北のみ)『伊賀越道中双六』(沼津里の段)

浄瑠璃丹羽一声、三味線金柿栄枝

【八・五〇】義太夫(台南のみ)『菅原伝授手習鑑』(寺子屋の段)

浄瑠璃黒星夢路、三味線杉藤安松

【九・三〇】時報〔以下略〕

義太夫(台北のみ)【午後八時五十分】

▼『伊賀越道中双六』

浄瑠璃 丹羽一声

三味線 金柿栄枝

天明四年二月竹本座へ上場された近松加作■■■人の作になるもの、日本三大仇討ちの一つ、伊賀の上野で渡辺数馬が河合又五郎を討つた事実によつて作られたもので、渡辺数馬は和田志津馬、荒木又右衛門は唐木政右衛門となつてゐる

義太夫【午後八時五十分】(台南のみ)

▼『菅原伝授手習鑑』

—寺子屋の段—

浄瑠璃 黒星夢路

三味線 杉藤安松

道真公の飛梅の故事と、梅は飛びの歌を骨子として作つたもので、作者は竹田出雲、並木千柳、三好松治、竹田小出雲の合作、

この寺子屋の段は特に出雲の筆である

□昭和7 (1932-11-07) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K / 十一月七日 (月)

午前の部 (省略)

午後の部 (省略)

夜間の部

【八・五五】義太夫 (レコード) 『本朝二十四孝』 十種香の段、

浄瑠璃竹本鍔太夫、三味線豊澤新左衛門

【九・二〇】時報 (以下略)

義太夫 (台北)

(レコード演奏)

【午後八時五十分】

▼本朝二十四孝

十種香の段

浄瑠璃 竹本鍔太夫

三味線 豊澤新左衛門

□昭和7 (1932-11-21) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K / 十一月廿一日 (月)

午前の部 (省略)

午後の部 (省略)

夜間の部

【八・三〇】義太夫：浄瑠璃北村三峰、三味線竹本勝玉 撰州合邦辻

合邦内の段』

【九・二〇】時報

義太夫 (台北)

【午後八時三十分】

『撰州合邦辻

(合邦内の段)』

浄瑠璃 北村三峰

三味線 竹本勝玉

此の義太夫は遥曲の『弱法師』から出たものである、御家騒動であつてしかも夢幻劇である、『弱法師』の作者は結城元雅であるが浄瑠璃の出来たのは安永二年二月で作者は菅専助、若竹笛躬の二人、全部上下二段になつてゐるが合邦内の段はそ

の内下の段である

□昭和7 (1932.11.25) 『台湾日日新報』

義太夫納会 二十六、二十七両日午後五時半から南門公会堂に於て素人義太夫納会を開催するから多数の来聴を希望すると。

番組左の通り

(初日) 『御祝儀』(入登)、『朝顔』(甫)、『沼津』(組次)、『沓掛』(菅枝)、『梅忠』(貴昇)、『揚屋』(柳枝)、『太十』(土口)、『寺子屋』(梅玉)、(二日目) 『御祝儀』(登山)、『鳴門』(甫)、『太十』(竹司)、『志度寺』(小松)、『本下』(宝珠)、『合邦』(一声)、『百度平』(琴馬)、『儀作』(■玉)、三味線(呂玉勝玉、麗子)

□昭和7 (1932.11.29) 『台湾日日新報』

勝玉連義太夫納会

二十九、三十日両日、午後五時半から台北末広町楽々園に於て、勝玉連義太夫納会を開催し、入場下足共無料の上、景品を進呈する由

(初日) 『御祝儀』(入登)、『二度目清書』(勝登)、『太十』(新喜楽千奴)、『炬燵』(鬼笑)、『寺子屋』(礁風)、『安達』(三峰)、『柳』(新喜楽千房)、『梅由』(梅玉)、『松王』(三松)

(二日目) 『御祝儀』(登山)、『太十奥』(三峰)、『本下』(礁風)、『又助』(勝登)、『一の谷』(寿)、『弁慶』(三松)、『梅忠』(玉枝)、『鳴門』(友鶴)、『八陣』(菅枝)

□昭和7 (1932.12.03) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K/十二月三日(土)

午前の部(省略)

午後の部(省略)

夜間の部

【七・四五】『忠臣蔵花暦』(東京) 第三義太夫『仮名手本忠臣蔵

四段目』浄瑠璃初代長広事竹本旭嬢

【八・三一】満洲より(奉天) [以下略]

義太夫(東京)

【午後七時四十五分】

『忠臣蔵花暦』

『仮名手本忠臣蔵—四段目—』

浄瑠璃/初代長広事 竹本旭嬢

竹本旭嬢師は初代長広と云つて東都義太夫界の女流の随一であ

る。この四段目は塩谷館の段である

□昭和7 (1932.12.04) 『台湾日日新報』

三吉野義太夫納会

三日、四日両日午後六時より南門公会堂で左記要領により三吉野睦連の義太夫納会がある。多数の来聴を希望すると

△三日初日 『本蔵下屋敷』瓢、『佐倉曙儀作腹切』七二八、『毛谷村六助内』嬰木、『赤垣源蔵出立』南枝、『百度平内』五色、『布四琵琶の段』三吉野

△四日二日目 『八陣八ツ目』嬰木、『酒屋の段』五色、『三日の九』南枝、『勘平切腹』瓢、『沼津』七二八、『お染久松質屋の段』三吉野

□昭和7 (1932.12.05) 『台湾日日新報』

三味線音楽の戸籍調べ／角木泥土

日本音楽の料は未だ何といつても三味線音楽であります。三味線音楽の中でも今最も隆盛を極めてゐるのは長唄であり、その他にも三味線音楽があるが以下その戸籍調べをしてみやう  
長唄節

これは正確には江戸長唄といふべきで江戸の歌舞伎劇に使用す

る長篇の謡物の意味である。これの発達したのは享保の末から延享にかけてで起原は元禄の頃三味線の渡来からこれが芝居に取入れられ盲人の組歌、端歌などから長唄が出来て京長唄、大阪長唄、江戸長唄などといはれてゐたが、江戸には大阪から入つたもので、現在のは此の江戸長唄の延長で、開祖は杵屋勘五郎といふ人であります。これが宝暦明和の頃に至つて富士田吉次が出て一中節、豊後節から長唄に転じその他松尾五郎次郎萩江露友、坂田仙四郎等の名手が輩出し浄瑠璃の流れを汲んで成功■端緒に付き安永天明頃に至つて唄に中村兵治、松永忠五郎、富士田音蔵、三味線に杵屋佐吉、同正次郎が出て茲に長唄の歌謡界に於ける確乎たる地位を築くに至り豊後節、常磐津、富本と共に歌舞伎の所作事の地を演り、文政から天保にかけて空前の隆盛を見明治に入つてからは他諸流が衰微したのに反して益々繁榮し、特に明治三十五年吉住小三郎、稀音家六四郎の提携、長唄研精会を起し歌舞伎と別れてからは一層家庭音楽としての隆盛を極めるに至つた。此の長唄の家庭音楽として喜ばれる第一は取材の範囲が広く、歌詞が高尚な事では他の三味線音楽に比して拍子がシツカリして居り、リズムも明快でありつ刺戟的なのがあり、万人向である点がそれぞれ重要な役割を持つてゐるのである、それに

唄は唄だけ三味線は三味線だけでも相当興味があるといふ事も見逃せない所である。尚歌詞は二千番もあるが現に行はれてゐるのは三百位である、長唄の流派とその系統は次の通りである

(唄の家) 芳村家、吉住家、富士田家、松永家、松島家

(三味線の家) 六左衛門家、六三郎家、文四郎家、栄藏家、勝の字家、佐吉家、岡安家、弥の字家、正治郎家、今藤家、柏家(囃方の家) 田中家、望月家、福原家、梅屋家、住田家、堅田家

次に

義太夫節

であるが、これは貞享年代竹本義太夫が大坂道頓堀、竹本座の人形芝居に上せたのが最初である。従つてこれは人形劇と盛衰を共にして来たので、元禄から宝暦までに大成し文化以来衰勢の道を辿つてゐる。此の間に浄瑠璃は次第に人形劇から離れ、素語りのみも行はれ今日に至つてゐるが、今日でも人形劇中心に語られるのが本格で大阪の文楽座はこの唯一の聖堂である

常磐津

起原は宮古路節―豊後節を語つた宮古路豊後掾の弟子宮古路文字太夫が大坂から下つた師匠の浄瑠璃が江戸に於て風紀取

締から禁止されて後も江戸に止つて解禁運動を続け同時に名も常磐津文字太夫と改めて以来のもので実は豊後節の変名したものである

清元節

起原は初代富本齋宮太夫の子延寿太夫が文化の末年に創始したに始まる。従つて清元は富本節から分派したもので宗家は高輪派と称しこれから梅吉派が分れ、更に大正十一年に待遇問題から梅吉派を含む清元派が別れた各派の代表者は

(高輪派) 清元延寿太夫、同栄寿太夫、同栄次郎、(清元派) 清

元梅吉、同喜久太夫

歌沢節

歌沢節は江戸時代の端歌から改編されたもので嘉永安政の幕末時旗本の隠居笹本金平(笹丸)が御家人柴田金助、たのみ屋虎右衛門と共に当時の諸派歌謡の長所をとつて一流をたてたのものである。協議の上笹丸が初代歌沢笹丸を名乗つて二代目を虎右衛門に名乗らせ柴田は別に歌から欠字を除つて初代哥沢芝金を名乗つた。これが後の「寅派」と「芝派」とに別れ、技の争ひとともに家名を争ひ今日に至つてゐる(終)

□昭和7 (1932-12-07) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K／十二月七日(水)

午前の部〔省略〕

午後の部〔省略〕

夜間の部

【七・〇〇】『忠臣蔵花暦』大阪 第七、人形浄瑠璃、文楽座よ

り中継

【八・〇〇】琵琶(東京)『未定』

忠臣蔵花暦

【午後七時より】(大阪)

▼人形浄瑠璃

(文楽座より中継)

每晚連続の『忠臣蔵花暦』も第七日は大阪よりの中継で、大阪

自慢の文楽座からの人形浄瑠璃の中継である

□昭和7 (1932-12-10) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K／十二月十日(土)

午前の部〔省略〕

午後の部

【〇・二〇】昼間娯楽時間(レコード演奏) 義太夫『心中天網島

(新地茶屋の段) 浄瑠璃豊竹つばめ太夫、三味線豊竹仙声

【一・〇〇】気象通報(台南のみ)〔以下略〕

夜間の部

【八・四五】義太夫『恋飛脚大和往来(梅川忠兵衛新口村の段)』

浄瑠璃竹本七五三吉、三味線竹本七五三登

【九・二〇】時報〔以下略〕

義太夫【後八・四五】—台北—

『恋飛脚大和往来(梅川忠兵衛新口村の段)』

浄瑠璃 竹本七五三吉

三味線 竹本七五三登

近松菓林子の『冥土の飛脚』を菅専助、若竹笛 躬が改作し

たもので安永二年十二月堀江豊竹座に上場された。浪花淡路町

の飛脚屋渡世の亀屋忠兵衛は北の新地へ通行の際、鼻紙袋を

落した時、通りかかりの芸者榎屋の梅川が拾ひ、これを渡した

のが縁の初め、忠兵衛が牢死したのは三十五歳、梅川はその時

二十四歳、後発心して近江の矢橋へ帰り梅川庵の小庵を建立し

尼あまとなつて六十六歳さいで死ことんだとの事ことである

昼間娛樂時間

【午後零時二十分】(台北)

▼義太夫『心中天網島(新地茶屋の段)』

浄瑠璃 豊竹つばめ太夫

三味線 豊竹 仙糸

此の情死ぜうじは享保五年十月十五日明方大阪網島大長寺の墓場はかばにあつた事実談じじつだんである、劇聖近松門左衛門は直ぐさま筆をとつて同じ年の十二月に竹本座で演じ多大の好評を受けた。この小春治兵衛が心中した時近松は住吉の茶屋ちややにゐて、浪華からこの事を急使きゅうしで知らせて来て取急とくきゅうぎ書いてくれと頼たのまれて、すぐ様「謠うたひの本は近衛流、野郎帽子は紫むらさきの…」とつづけたのは有名な話はなし。此の新地茶屋あちやの段だんは後に増補ぞうほされたものである

□昭和7 (1932.12.13) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K / 十二月十三日(火)

午前の部(省略)

午後の部(省略)

夜間の部

【七・三〇】『忠臣蔵花暦』(大阪) 義太夫『七段目掛合』文楽座

若手連中

【八・三〇】ヴァイオリン演奏(台北) [以下略]

『忠臣蔵花暦』

【午後七時三十分】(大阪)

▲義太夫『七段目掛合』文楽座連中

此の掛合かけあひは特に文楽座の若手連中の出演である

□昭和7 (1932.12.14) 『台湾日日新報』

【後八・五五】—台北—

『春夜障子梅』

(夕霧伊左衛門)』

浄瑠璃 清元吉栄太夫

三味線 梅屋敷たね

三味線 丸新しん

□昭和8 (1933.01.08) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K／一月八日(日)

午前の部〔省略〕

午後の部〔省略〕

夜間の部

【七・〇〇】義太夫(東京) さはりの夕べ 竹本小津賀、竹本

静香、竹本素昇、竹本染登

【八・三〇】時報 〔以下略〕

義太夫

【午後七時より】(東京)

さはりの夕べ

東京の女流義太夫界の左の腕達者連が義太夫さはりの夕べとして七時から八時半までの放送である

竹本小津賀、竹本静香、竹本素昇、竹本染登

□昭和8(1933-01-09)『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 J・F・A・K／一月九日(月)

午前の部〔省略〕

午後の部〔省略〕

夜間の部

【八・三一】義太夫(台北) 三十三ヶ所花の山『壺坂靈験記 沢

市内の段』、浄瑠璃斎藤松月、三味線竹本勝玉

【九・二〇】気象通報 〔以下略〕

義太夫(台北)

【午後八時三十一分】

三十三ヶ所花の山

『壺坂靈験記

沢市内の段』

浄瑠璃 斎藤松月

三味線 竹本勝玉

三つ違ひの兄さんと云うて暮してゐるうちに——といふ最もよく知られた浄瑠璃である

□昭和8(1933-01-17)『台湾日日新報』

清元(台南のみ)

【午後九時より】

『深山桜及兼樹振』

浄瑠璃 雛千代

三味線 駒奴

□昭和8 (1933-02-02) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日のプログラム 台北 (AK) 周波六七〇／台南 (BK) 周波

七二〇

午前の部 (省略)

昼間の部 (省略)

夜間の部

【八・三一】義太夫 (台北) 『仮名手本忠臣蔵 判官切腹の段』、

鶴澤友京

【九・二〇】気象通報 (以下略)

演芸ヴァリエテ

「由良之助は未だ来ぬか」

『仮名手本忠臣蔵／判官切腹の段』

義太夫 鶴澤友糸

此の浄瑠璃は四段目で、元禄十四年三月十一日夜、浅野内匠頭 (塩谷判官) が江戸芝愛宕下町の田村右京大夫の邸 (鎌倉扇ヶ谷の下屋敷) で切腹仰せ付けられ、検使に大目付荘田下総守

(葉師寺) 副使として目付多門伝八郎、大久保権右衛門 (この二人を一人として石堂) が田村邸に赴き、夕七時時滞ほりなく相済み、死骸は弟大学引取つて芝泉岳寺に葬つた事実を前半として、同年四月十八日、播州赤穂で脇阪淡路守 (石堂) 木下肥後守 (葉師寺) の二人が出張して首尾よく城を受取つた事実と、江戸の兇変が本邸へ報ぜられて、大石 (大星) を初めとして家中の銘々が数回にわたつて大評定を遂げた事実などを、一日の中に掲ぎせて脚色したものである。出演者友糸師は、現在文楽の重鎮竹津大夫の相三味線鶴澤友治郎師の門に十三の時から入つて、今日まで二十数年此の道にあり、師友治郎師の秘蔵弟子として重宝がられ、少壮組の牛耳をとつてゐる人で、今小暇を得て台湾に遊びに来られたのである

□昭和8 (1933-02-03) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日のプログラム 台北 (AK) 周波六七〇／台南 (BK) 周波

七二〇

午前の部 (省略)

昼間の部

【〇・二〇】昼間娯楽時間 (レコード演奏) 義太夫 『三十三間堂

棟由来 平太郎住家の段」、浄瑠璃竹本鍛太夫、三味線豊澤新左衛門

【一・〇〇】気象通報（台南のみ）〔以下略〕

夜間の部〔省略〕

昼間娛樂時間

◆義太夫（午後零時廿分）

緑丸の可憐で泣かせる

『三十三間堂棟由来／平太郎住家の段』

レコード演奏 浄瑠璃 竹本鍛太夫

三味線 豊澤新左衛門

延宝九年に宇治加賀掾が書き卸した『熊野権現』を改作した山本河内掾の作『都三十三間堂棟由来』を藍本とした『祇園女御九重錦』の三段目の切である。種々の因果説を附合した仏教主義の夢幻劇で「和歌浦には名所がござる、一に権現、二に玉津島」の音頭が入つてゐて、よく膾炙された曲である

□昭和8（1933.02.05）『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日のプログラム 台北（AK）周波六七〇／台南（BK）周波

七二〇

午前の部〔省略〕

昼間の部〔省略〕

夜間の部

【七・一〇】人形浄瑠璃（大阪）『河原達引（堀川の段）』大阪文

楽座より中継

【八・三〇】時報（東京）〔以下略〕

浪花の古典芸術／文楽の中継

お俊・伝兵衛の情事

『近頃河原達引

（堀川の段）』夜7時10分

浄瑠璃 竹本津太夫

三味線 鶴澤綱造

ツレ弾 鶴澤綱右衛門

近松半二の作と云はれてゐるこの浄瑠璃は津太夫得意の出しもの。天明二年に竹本八重太夫が江戸に下つて語つた時は未曾有の評判であつたといふ出所は沢山あるが、いろいろの所から当時の心中ものを作り出したもので、頭に近頃とあるは当時の事実を取材にしたので、際物として語られたによるものである

津太夫師は文楽楽座の重鎮、大正十三年に紋下の栄位を贏てる

午前の部〔省略〕

昼間の部〔省略〕

夜間の部

【七・五〇】義太夫（大阪）『未定』浄瑠璃竹本東広、三味線豊

澤仙平

【八・三〇】時報（東京）〔以下略〕

演芸之賑  
美形競演

常磐津／『妹背山女貞苦』

（御殿の場）

義太夫（大阪）（午後七時五十分）

▲未定

浄瑠璃 稲六貞子

梅屋敷繁の助

竹廻家友奴

日本亭政千代

三味線 見晴千代子

上調子 梅屋敷花奴

□昭和8（1933-02-14）『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日のプログラム 台北（AK）周波六七〇／台南（BK）周波

七二〇

□昭和8（1933-02-16）『台湾日日新報』

ラヂオ欄

常磐津 午後八時五十五分（台北）

伊賀越道中双六（伊賀越）

沼津の里／平作印籠の場

浄瑠璃 常磐津文字正

三味線 瓢亭しん

今日のプログラム 台北 (AK) 周波六七〇／台南 (BK) 周波  
七二〇

午前の部〔省略〕

昼間の部〔省略〕

夜間の部

【八・三一】義太夫 (台北) 『絵本太閤記 十段目尼ヶ崎の段』

浄瑠璃竹本源平太夫、三味線竹本左近

【九・三〇】氣象通報 〔以下略〕

「夕顔棚のこなたより」で御存じの

『絵本太閤記 十段目』

義太夫 『尼ヶ崎の段』

夜八時三十一分 (台北)

浄瑠璃 竹本源平太夫

三味線 竹本左近

織田信長に対する光秀の反逆を取扱ったもので、尼ヶ崎の段は  
廻国に出た光秀の母皇月閑居の場で、旅僧に化けて探りに来  
た木下藤吉 (ママ) を刺すつもりで、光秀は母皇月を刺してし  
まふ場面である

竹本源平太夫と左近師は去る十四日来台した太夫で、直ちに

AKより放送するものである、此の作者は近松柳、近松湖水  
軒、近松千葉軒等で寛政十一年に豊竹座で上演したのが初めて  
である

□昭和8 (1933.02.25) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

新内【午後七時三十分】(台南のみ)

『若葉草』

浄瑠璃 お石

三味線 一葉

□昭和8 (1933.02.26) 『台湾日日新報』

歓迎義太夫大会 子て馴染のある大阪文楽座出勤竹本源平太夫  
が女義竹本左近と来台したので当地素義聯合主催で二十七、  
二十八の両夜六時から楽々園で歓迎義太夫大会を開く。語り物  
左の通り

△初日 『御祝儀』(入登)、『又助』(勝登)、『白石揚屋』(登照)、  
『壺坂』(彫司)、『弁慶』(南玉)、『太十』(まさ子)、『合邦』(松  
風)、『三勝酒屋』(源平太夫)、『お初仇討』(左近)

△二日目 『御祝儀』(登山)、『二度目』(勝登)、『酒屋』(菊水)、

『百度平』（五色）、「本下」（礁風）、「御所桜」（品子）、「合邦」（鳳

玉）、「太功記」（源平太夫）、「阿波鳴門」（左近）

三味線（左近、一平、三吉野、勝玉、千蔵、甫）

□昭和8（1933.02.27）『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 台北（AK）周波六七〇／台南（BK）周波七二〇

午前の部（省略）

昼間の部（省略）

夜間の部

【七・〇〇】義太夫（大阪）『恋娘昔八丈（鈴ヶ森の段）』浄瑠璃

竹本南部太夫 三味線野澤吉弥

【七・五〇】講演（東京）『仇討伝の四』神田伯治（以下略）

義太夫／『大岡政談』／『恋娘昔八丈／鈴ヶ森の段』／夜七時・

大阪

浄瑠璃 竹本南部太夫

三味線 野澤吉弥

松貫四、吉田角丸の作で、安永四年に出来たものである、享保  
年中江戸新材木町の白子屋騒動を取扱つたものである、大岡政

談の一つである

□昭和8（1933.03.01）『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 台北（AK）周波六七〇／台南（BK）周波七二〇

午前の部（省略）

昼間の部（省略）

夜間の部

【八・三一】義太夫（台北）『伽羅先代萩（政岡忠義の段）』竹  
本左近

義太夫（台北）

【午後八時三十一分】

『伽羅先代萩』

（政岡忠義の段）

竹本左近

万治年間に伊達家に起つたお家騒動を骨子として作つたもの、  
作者は松貫四、高橋武兵衛、吉田角丸の三人、全部九段物で、  
これは六段目の切りである。伽羅とは結構の意、それをめいば  
くと読ませてゐる、先代は仙台のこと、萩は宮城野の名物であ

る

【七・二五】人形浄瑠璃（大阪）『出し物未定』大阪文楽座より  
中継

【八・三〇】時報（東京）〔以下略〕

□昭和8（1933-03-03）『台湾日日新報』

ラヂオ欄

新内

『明烏夢泡雪／浦里雪責の段』

夜八時三十一分・台北

浄瑠璃 岡本美根大夫

三味線 岡本七五三吉

□昭和8（1933-03-05）『台湾日日新報』

けふの催し

△初午祭奉祝義太夫大会、午後七時から、西門市場内稲荷社務

所にて

ラヂオ欄

今日の番組 台北（AK）周波六七〇／台南（BK）周波七二〇

午前の部〔省略〕

昼間の部〔省略〕

夜間の部

古典日本の姿！浪花の誇り！／文楽の人形浄瑠璃／夜7時25分 大坂より

『壇の浦兜軍記／阿古屋琴責の巻』

畠山重忠 竹本文字大夫

遊君阿古屋 竹本南部大夫

岩永左衛門 竹本鏡大夫

榛沢六郎 竹本陸路大夫

三味線 野澤勝平

ツレ弾 鶴澤友二

琴、胡弓 鶴澤綱治

□昭和8（1933-03-14）『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 台北（AK）周波六七〇／台南（BK）周波七二〇

午前の部〔省略〕

昼間の部〔省略〕

夜間の部

【七・〇〇】義太夫（大阪）『未定』豊竹団司、豊澤小住

【七・三〇】台湾講古（台北のみ）〔以下略〕

義太夫

夜七時より（大阪）

▲未定

浄瑠璃 豊竹団司

三味線 豊澤小住

□昭和8（1933-03-14）『台湾日日新報』

義太夫競演会の感ある三吉野師還暦祝賀会

◇……十三、四両日栄座で

義太夫師匠野澤三吉野師は渡台二十二年をけみす古顔であるが、此度還暦を迎ふる齡となつたので門下連中睦会世話方となり還暦祝賀義太夫大会を十三、四両夜、栄座に於て開催することになつた、本島の男性義太夫師としては鶴澤一平師と双壁であり、今日の本島義太夫界隆盛を導いた功労者である三吉野師の事として今回の大会に於ても各師連心的後援出演あり、台湾義太夫競演会の感がある。番組は次の通りである

十三日 『御祝儀宝の入船』（入登）、『矢口』（七二八）、『寺子屋』

（五色）、『柳』（田鶴子）、『壺阪』（松月）、『蝶花形八』（土口）、

『揚屋』（松風）、『お駒才三』（菊水）、『恋飛脚』（七五三吉）、『桂川連理柵』（三吉野）

十四日 『式礼三番叟』（可祝）、『嘉平次』（南枝）、『彦山権現』

（嬰木）、『尼ヶ崎』（瓢）、『恋飛脚』（貴昇）、『菅原四』（竹司）、

『弁慶上使』（新）、『合邦』（可笑）、『伊賀越』（鳳玉）、『熊谷陣谷』（雷雀）、『忠臣蔵判官切腹』（三吉野）

□昭和8（1933-04-11）『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 台北（AK）周波六七〇／台南（BK）周波七二〇

午前の部（省略）

午後の部（省略）

夜間の部

【六・三〇】人形浄瑠璃（大阪）―文座より中継―『出しもの未定』豊竹古鞠太夫外

【八・三〇】時報（東京）〔以下略〕

文楽／人形浄瑠璃舞台中継

出し物未定(夕六時半)

豊竹古鞠太夫その他

恋飛脚大和往来

浄瑠璃 吉田貴昇

三味線 竹本勝玉

新内【夜八時五十五分】(台北)

『朝顔日記／宿屋の段』

浄瑠璃 岡本美根太夫

三味線 岡本七五三吉

□昭和8(1933.04.21)『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 台北(AK) 周波六七〇／台南(BK) 周波七二〇

午前の部(省略)

午後の部

【〇・二〇】昼間娯楽時間(レコード演奏)義太夫、『傾城阿波

鳴門、巡礼歌の段』、豊竹昇之助、三味線豊澤東重

【一・〇〇】気象通報(台南のみ)〔以下略〕

夜間の部(省略)

□昭和8(1933.04.14)『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 台北(AK) 周波六七〇／台南(BK) 周波七二〇

午前の部(省略)

午後の部

夜間の部

【八・三一】義太夫(台北)『恋飛脚大和往来、梅川忠兵衛新口

村の段』、浄瑠璃吉田貴昇、三味線竹本勝玉

【九・二〇】気象通報〔以下略〕

お昼の楽しみ

涙の義太夫

『傾城阿波鳴門

新口村の段』

浄瑠璃 豊竹昇之助

三味線 豊澤東重

義太夫(夜八時三十一分・台北)

『梅川忠兵衛 新口村の段』

此の浄瑠璃の大体の趣向は、阿波徳島の藩主三木家の御家騒動で、忠義の家老桜井主膳か悪人小野田重兵衛のために主家の重宝国次の名刀を盗まれて困難したが、旧臣十郎兵衛、お弓夫婦及び藤屋伊左衛門等の艱難苦心によつて悪人から再び名刀を取返し、主家が安泰になるといふ筋である

□昭和8 (1933.04.21) 『台湾日日新報』夕刊

会事

▲義太夫会 ●豊竹富光の義太夫会は、二十二日午後六時より南門公会堂で催され、出演者は全部で七名である

□昭和8 (1933.04.22) 『台湾日日新報』

けふの催し

△豊竹富光義太夫会、午後六時から南門公会堂にて

□昭和8 (1933.04.24) 『台湾日日新報』

清元 (夜八・三二)

『明烏花濡衣』

浄瑠璃 花奴

三味線 秀美

□昭和8 (1933.04.25) 『台湾日日新報』

万華浄楽会の義太夫会

二十五日昼間／入場者に景品付

万華浄楽会主催春季義太夫会が二十五日午前十一時から万華芳明館で開催されるが、当日は入場者に抽籤により景品もある入

場無料

◇番組◇

『御祝儀宝の入船』 入登

『先代萩政岡忠義』 瑞穂

『太功記十尻ヶ崎』 柳司

『忠臣蔵六勘平切腹』 寿

『御所桜弁慶上使』 新高

『忠臣蔵本蔵下邸』 新玉

『菅原伝授松王邸』 松玉

『白石嘶揚屋』 友鶴

『合邦辻合邦内』 源平太夫

『加賀見山お初仇討』 竹本左近

◇景品◇

一等一本 金側腕時計 一箇

二等二本 反物 一反宛

三等二本 反物 一反宛

四等四本 下駄 一足宛

五等五本 ハンカチ 半打宛

六等二十本 友鶴コーヒー券 三枚宛

□昭和8 (1933-05-07) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 台北 (AK) 周波六七〇／台南 (BK) 周波七二〇

午前の部 (省略)

午後の部 (省略)

夜間の部

【六・三〇】人形浄瑠璃 (大阪) 文楽座より中継『未定』豊竹古

鞠太夫他

【七・三〇】合唱と管絃楽 (東京) ▲ブラームス誕生百年祭 (以下略)

今日の聞きもの

文楽座の／人形浄瑠璃

出し物未定／夕六時三十分

豊竹古鞠太夫外

□昭和8 (1933-05-21) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 台北 (AK) 周波六七〇／台南 (BK) 周波七二〇

午前の部 (省略)

午後の部 (省略)

夜間の部

【六・三〇】女義太夫の夕 (東京) (台北のみ) 未定

【六・三〇】独唱と斉唱 (台南のみ) 台南西本願寺新生日曜学校

【七・三〇】台湾講古 (台北) (以下略)

寄席芸集

女義太夫の夕

夜 六時三十分より／七時三十五分まで

演題未定 東京より (台北のみ)

□昭和8 (1933-05-24) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 台北 (AK) 周波六七〇／台南 (BK) 周波七二〇

午前の部〔省略〕

午後の部〔省略〕

夜間の部

【八・三一】義太夫（台北）『勢州阿漕浦 平治住家の段』野澤

三吉野

【九・三〇】気象通報〔以下略〕

義太夫（台北）

午後八時三十一分

▼『勢州阿漕浦

平治住家の段』野澤三吉野

此の浄瑠璃は寛保元年九月、大阪豊竹座で上場した『田村磨鈴鹿合戦』の四段目の切で、作者は浅田一鳥、豊田正蔵である。全曲は五段続きで、天智天皇の御代に逆賊藤原千方が高円山に隠遁し、妖術を学んで百八十余歳の長寿を保ち、火鬼水鬼を使つて三種の神器を奪ひ、桓武天皇の皇弟水上皇子及び藤原小黒丸等を与党として、忠義の英傑坂上田村麿を滅し、天下を覆へさんと企てたが、田村磨は謀計を以て神器を奪還し、妖賊の心胆を寒からしめ、鈴鹿山で兇徒を討ち滅すといふのが大体の筋である。阿漕の平治が殺生禁断の場所に網を入れて、十束の

ほうげん 宝剣を得るといふ事は実説ではなく、例の作り物語りで、この こんしん 根拠は「伊勢の海阿漕が浦にひく網のたびかさなればあらはれ にけり」といふ古歌と謡曲の『阿漕』とを結び合はせて脚色したもので、悪者の平瓦の治郎蔵が平治の父の旧臣で、平治の科を引受けるといふのも旧道徳主義から割出した慣用手段である

□昭和8（1933-05-30）『台湾日日新報』

勝玉連義太夫会

三十、三十一の両日午後六時から末広町楽々園で、勝玉連義太夫会を開催する。入場下足無料。其番組左の通り

△初日 『御祝儀』（三峰）、『本下』（彫司）、『弁慶』（勝登）、『十

種香』（美人座登志子）、『宿屋』（美人座嘉代子）、『鳴門』（白峰）、

『先代萩』（松月）、『壺坂』（静原）、『安達』（三松）

△二日目 『御祝儀』（三松）、『二度目』（勝登）、『鳴門』（新喜

楽千房）、『宿屋』（品子）、『御所桜』（新喜楽千奴）、『壺坂』（彫

司）、『酒屋』（友鶴）、『儀作』（菊水）、『梅由』（梅玉）、三味線

（勝玉、呂玉、千代寿）

□昭和8（1933-06-08）『台湾日日新報』

ラデオ欄

今日の番組 台北 (AK) 周波六七〇／台南 (BK) 周波七二〇

午前の部 (省略)

午後の部 (省略)

夜間の部

【八・三一】義太夫 (台北) 『恋娘昔八丈、鈴ヶ森の段』…浄瑠璃竹本メ吉、三味線竹本メ登太夫

【九・〇五】ハワイアン・ギター (台北) (レコード) (以下略)

義太夫

午後八時三十一分 (台北)

▼『恋娘昔八丈、鈴ヶ森の段』

浄瑠璃 竹本メ吉

三味線 竹本メ登太夫

松貫四、吉田角丸の作で、享保年中江戸新材木町に白子屋といふ材木商があつて、主人庄三郎の娘お熊が、家産の傾いたため持参金付の髻又四郎を迎へ、お熊はなほ手代忠八と通じてゐた。

後に又持参金付の髻を取らんとして又四郎をなきものにしやうとして発覚、大岡越前守の裁判となりお熊は鈴ヶ森で斬罪梟首となつた事実を脚色したもので、全部で七段あるが、内最もよく語られるものは城木屋の段とこの鈴ヶ森の段である

□昭和8 (1933-07-01) 『台湾日日新報』

浄瑠璃大会 大阪浄瑠璃界に名ある鶴澤友栄師は過般台北義太夫同好連の招聘で来台したが友声会主催となり、同師の名披露浄瑠璃大会を七月一日より三日間栄座にて毎夕正六時より開演することになった。素人連の出演ながら三日共出演者は異なり、左の番組にて台北在住師匠連も応援し、最後の掛合物に至つては凝つたものである。入場は無料(写真は友栄師)

◇一日 『御祝儀』(入登)、『先代萩御殿』(友路)、『酒屋』(梅玉)、『忠臣蔵六』(寿)、『紙治内の段』(勇耕)、『堀川』(七二八)、『野崎村』(藤司)、『壺坂』(南玉)、『新口村』(一声)、『引窓』(菊水)、掛合『曾我対面』

◇二日 『御祝儀』(入登)、『朝顔宿屋』(友二三)、『弁慶上使』(松風)、『小坂部館』(五色)、『太功記十』(龍玉)、『新口村』(友鶴)、『堀川』(鳳玉)、『鱒谷』(貴昇)、『鈴ヶ森』(七五三吉)、掛合『野崎村』

◇三日 『御祝儀』(入登)、『合邦』(藤司)、『儀作』(菊水)、『弥作鎌腹』(雷雀)、『宿屋』(静)、『沼津里の段』(松風)、『順礼歌』(友路)、『寺子屋』(土口)、『日吉丸三』(琴馬)、掛合『先代萩対決』

夜八・三二 竹本東猿

□昭和8 (1933-07-20) 『台湾日日新報』  
ラヂオ欄  
今日の番組 台北 (AK) 周波六七〇／台南 (BK) 周波七二〇

午前の部 (省略)  
午後の部 (省略)

夜間の部

【八・三一】義太夫 (夏季特別サービス) 竹本東猿、第一日『伽羅先代萩 政岡忠義の段』

【九・二〇】気象通報 [以下略]

此度は女義太夫

夏季特別サービス

第四回 (向ふ七日間)

今東都にあつて女義太夫として元老株、若い時から大阪でその名を知られた竹本東猿師が、夏季特別サービスの第四陣として、いよいよ本日より放送される

初日は／

伽羅先代萩

政岡忠義の段』

万治年間に伊達家にとつたお家騒動を骨子として作つたもの、作者は松貫四、高橋武兵衛、吉田角丸の三人、全部で九段もの、これは六段目の切りである

筋は余りにも有名であるが、中でも政岡が千松の死骸に取すがつて悲嘆にくれる「思ひ廻せば此の程から」以下は最も聴き所であらう

【写真・竹本東猿】

□昭和8 (1933-07-21) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 台北 (AK) 周波六七〇／台南 (BK) 周波七二〇

午前の部 (省略)

午後の部 (省略)

夜間の部

【八・三一】義太夫 (夏季特別サービス) 竹本東猿 第二日：三十三所花の山―壺坂靈験記―沢市内の段』

【九・二〇】気象通報 [以下略]

女房の真情で泣かす

『壺坂靈驗記』

義太夫 沢市内の段』

夜八・三二 竹本東猿

竹本東猿師得意中の得意の出しもの「三つ違ひの兄さんというて暮してゐるうちに情なやこなさんは生れもつかぬほうさうで」——といふ沢市の眼を癒さんものと壺坂の観音に祈る女房の真情は義太夫好きの者の涙して聴く所

□昭和8 (1933.07.24) 『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 台北 (AK) 周波六七〇／台南 (BK) 周波七二〇

午前の部 (省略)

午後の部 (省略)

夜間の部

【八・三二】義太夫 (夏季特別サービス) (台北) 『絵本大功記』  
尼ヶ崎の段』 竹本東猿

【九・二〇】氣象通報 (以下略)

義太夫／

『絵本大功記』

『尼ヶ崎の段』

夜八・三二 竹本東猿

作者は近松柳、近松湖水軒、近松千葉軒、此の大功記は安土の城が初段で、天正十年六月一日から十三日迄の出来事を十四段に分けてあるが、就中今晚演じられる十段目尼ヶ崎の段は最も人口に膾炙して居る

【梗概】尼ヶ崎の閑居に光秀の母臯月と妻操は謀叛人を子に持ち夫に持った身の因果を嘆き、一子十次郎は許婚の初菊とつきぬ名残を惜んで、初陣の門出を急ぐ、そこへ旅僧に身をやつした久吉は、一夜の宿を求めて様子を窺ふ、跡をつけた光秀は夕顔棚の下から、ぬつと現はれて竹槍を以つて襖越しにこれを刺したが、あつと玉ぎる女の悲鳴は母の声

□昭和8 (1933.08.01) 『台湾日日新報』

義太夫大会 台北淨瑠璃界の人氣者浜田七郎翁が昨今病床に親しむやうになつたので、素義連一同は翁の渡台三十五年記念といふことで、義太夫大会を八月一日より三日間、毎夜六時半より西門町台北稻荷神社事務所で開催する事になり、三吉野、友糸、一平、七五三登、勝玉の諸師、其他全部出演応援することになつた。番組左の如し

△一日『御祝儀』（入登）、『寺子屋』（組次）、『妙心寺』（昔枝）、  
『阿漕平治』（菊水）、『玉三』（琴馬）、『鈴ヶ森』（七二八）、『日  
吉三』（松丸）、『沼津』（藤司）△二日『御祝儀』（入登）、『宿屋』  
（静）、『太十』（田鶴子）、『紙治』（鳳玉）、『寺子屋』（五色）、『岸  
の姫松』（竹司）、『弁慶上使』（七五三吉）△三日『御祝儀』（入  
登）、『玉三』（三峯）、『宿屋』（品子）、『弁慶上使』（勝登）、『寺  
子屋』（土口）、『合邦』（宝珠）、『鰻谷古八』（貴昇）、『二谷陣屋』  
（雷雀）

□昭和8（1933-08-05）『台湾日日新報』

清元◆保名

夜八時・台北

『深山桜及兼樹振』  
みやまのはなじしつかぬえだぶり

浄瑠璃 メ丸

富春

梅丸

三味線 千弥

上調子 桃丸

□昭和8（1933-08-06）『台湾日日新報』

ラヂオ欄

今日の番組 台北（AK）周波七六〇／台南（BK）周波七二〇

午前の部（省略）

午後の部

【二・五九】正午の時報△気象通報（台北のみ）台北測候所発  
表△放送局編輯ニュース△昼間娯楽時間（レコード演奏）（台  
北のみ）△独唱 一、『蚤の歌』（詳細略）二、『巡礼の唄』（詳  
細略）三、『祈り』（詳細略）四、『悔改めの門を開かせ給へ』（詳  
細略）五、歌劇『アイーダ 神々しきアイーダ』（詳細略）六、歌  
劇（真珠取り）『夢の如き歌声』（詳細略）△義太夫ぎだいふ『本朝  
二十四孝、十種香の段』浄瑠璃竹本鍛太夫、三味線豊澤新左衛  
門

△昼間娯楽時間（レコード演奏）（台南のみ）△長唄『汐汲』（詳  
細略）△ジャズ 一、『南京豆売り』（ルムバ）、二、『あなたを忘  
れずに』（ワルツ）〔詳細略〕三、『靈感』（タンゴ）、四、『古き恋』  
（タンゴ）〔詳細略〕△落語『田楽喰ひ』桂春団治  
【一・〇〇】気象通報（台南のみ）〔以下略〕

夜間の部（省略）

ボーカルNO1集 [No.1の誤植か]

昼間娯楽／台北のみ

▲独唱〔詳細略〕

▲義太夫

『本朝二十四孝、十種香の段』

浄瑠璃 竹本鍛太夫

三味線 豊澤新左衛門

□昭和8 (1933-08-31) 『台湾日日新報』

※夜間の部 2031-2120 春風やなぎ・柳家つばめ・メ柳幾代の

『流行小唄』に義太夫文句入り吹き寄せあり。義太夫演奏ではないため省略。

□昭和8 (1933-09-03) 『台湾日日新報』

友声会温習会 台北浄瑠璃友声会にては二、三両夜本町常盤生

命三階にて大温習会を催す、雨天順延 番組は

▲初日 『合邦』(一声)、『宿屋』(友二三)、『忠四』(藤司)、『太

十』(龍玉)、『油屋』(雷雀)、『二ツ玉』(菊水)、『陣屋』(菅枝)、

掛合『野崎村』

△二日 『竹に雀』(友栄)、『堀川』(友路)、『古八前』(友玉)、

『対面』(南玉)、『本下』(蘭玉)、『古八奥』(貴昇)、『寺子屋』(士

口)、『沼津里』(松風)、『絃友系』(友玉)、『友二三』(友栄)

□昭和8 (1933-09-27) 『台湾日日新報』

追善義太夫大会

二十七日から三十日迄、四日間毎夕六時から南門公会堂で故金  
柿大路氏追善のため素人義太夫会を開催。入場無料、語りもの

は

△二十七日 『志度寺』(栄枝)、『竹雀』(友栄)、『松王』(蘭玉)、

『矢口』(三峰)、『鳴門』(田鶴子)、『新の口』(一声)、『二ツ玉』

(菊水)、『酒屋』(七五三吉)

△二十八日 『本下』(小路)、『鳴門』(友二三)、『野崎』(柳枝)、

『合邦前』(藤司)、『堀川』(友路)、『寺小屋』(梅玉)、『先代』(竹

司)、『沼津』(琴馬)

△二十九日 『合邦前』(友玉)、『酒屋』(三石)、『合邦奥』(宝

珠)、『岸姫』(組次)、『沼津』(松風)、『壺坂』(南玉)、『日吉丸

(貴昇)、『鎌腹』(雷雀)

△三十日 『菅四』(南玉)、『陣屋奥』(菅枝)、『三吉子別』(三

松)、『太十』(龍玉)、『忠六』(可笑)、『寺小屋』(士口)、『酒屋』

(鳳玉)、『沼津』(七五三登) △三味線 三吉野、七五三登、友系、

勝玉、富光、大力、七五三吉、友玉、寿玉

□昭和8 (1933-10-31) 『台湾日日新報』

ラヂオ

常磐津／夜八・三二／レコード演奏

『三保の松富士晨明／(三保の松)』

浄瑠璃 常磐津松尾太夫

三味線 常磐津文字兵衛

上調子 常磐津梅次

□昭和8 (1933-11-01) 『台湾日日新報』

竹本鐘龍師引退の慰安義太夫会

竹本鐘龍師は、渡台以来三十余年間義太夫界に尽し、今回引退することとなった。台北素義連が一日から四日迄(毎夕六時から)南門公会堂で、同師引退慰安義太夫会を開催

△初日 『御祝儀』、『朝顔日記』、『鰻谷』、『太功記』、『揚屋』、『野崎村』、『御所桜』、『合邦』、『酒屋』

△二日目 『御祝儀』、『勘平腹切』、『太功記』、『先代萩』、『合邦』、『熊谷陣屋』、『玉藻前』、『赤垣出立』、『御所桜』

△三日目 『妹背山』、『曾我対面』、『太功記』、『天の網島』、『鏡山』、『酒屋』、『寺子屋』、『酒屋』、『合邦』

△四日目 『御祝儀』、『寺子屋』、『太功記』、『御所桜』、『百度平内』、『堀川』、『阿波鳴戸』、『酒屋』、『先代萩』

□昭和8 (1933-11-26) 『台湾日日新報』

今日の番組 二十六日／日曜日

午前の部(省略)

午後の部

【二・五九】正午の時報、氣象通報(台北のみ) 台北測候所発表、放送局編輯ニュース、昼間娯楽時間(レコード演奏)

義太夫：『天網島時雨炬燵一紙治の段』：浄瑠璃竹本鋸太夫、三味線豊澤新左衛門△ヴァイオリン独奏 一、『朧月夜』(詳細略)二、『アレグロ』(詳細略)三、『ペルペテウム・モビール』

(詳細略)四、『ジヨスリンの子守唄』(詳細略)五、『カルメン幻想曲』(詳細略)

【一・〇〇】氣象通報(台南のみ) (以下略)

夜間の部(省略)

和洋取り混ぜの昼間娯楽

義太夫

浄瑠璃 竹本鋸太夫

三味線 豊澤新左衛門

『天網島、時雨炬燵』

(紙治内の段)

【解説】此の情死は享保五年十月十五日の明方大阪網島大長寺の墓場にあつた事実談である、それを近松門左衛門がその年の十二月に竹本座で心中天網島と外題して上場したのが初めてである。小春治兵衛が心中した時には近松は住吉の茶屋に遊んでゐたさうで、この事を齎した急使が来たので、直ぐ様「走り書き」と書き出して「謡の本は近衛流野郎帽子は紫の」とつづけたのは有名な話である

ヴァイオリン独奏 (以下略)

□昭和8 (1933.11.29) 『台湾日日新報』

勝玉連義太夫納会

二十九日より三日間毎夜五時半から京町朝日小会館で勝玉連義太夫納会を開催し、入場無料で多数の来聴を歓迎すると。其語り物左の通り

初日 (二十九日) 『御祝儀』、『寺子屋』、『忠六』、『酒屋』、『御所桜』、『新口村』、『堀川』、『先代萩』、『忠四』△二日目 (三十日) 『御祝儀』、『揚屋』、『本下』、『妙心寺』、『御所桜』、『太十』、

『合邦奥』、『酒屋奥』△三日目 (一日) 『御祝儀』、『重の井』、『先代萩』、『百度平』、『弁慶上使』、『宿屋』、『合邦奥』、『白石噺』、『梅田』、『三味線 (勝玉、友玉、寿玉、北投小春)』

□昭和8 (1933.12.03) 『台湾日日新報』

ラヂオ JFAK 台北 周波七六〇 JFBK 台南 周波七二〇  
ラヂオ / 今日の日番組

午前の部 (省略)

昼間の部

【一・五九】正午の時報、気象通報 (台北のみ) 台北測候所発表、放送局編輯ニュース、昼間娯楽時間 (レコード演奏) 浪花節『頼朝の恋』春野百合子、歌舞伎小唄『直侍』(木村富子作詞、柏伊三郎作曲) 台詞市村羽左衛門、唄浅草メ香、義太夫『伊賀越 平作内の段』竹本東広

【一・〇〇】気象通報 (台南のみ) (以下略)  
夜間の部 (省略)

日本趣味の昼間娯楽  
浪花節・歌舞伎小唄 (略)

義太夫

『伊賀越一平作内の段』

竹本東広

沼津の平作爺さんは和田志津馬が吉原で深く馴染んだ瀬川と云ふ遊女の父である。同じく股五郎を捜してみると、泊り合えたのが平作の悴の十兵衛で、今は股五郎方のもの。印籠からそれと知り親子の名乗りもならず、平作は腹を切つて漸く股五郎の在所を知ると云ふ筋である

□昭和8 (1933-12-05) 『台湾日日新報』

友声会浄瑠璃納会 鶴澤友声連の友声会は、五、六兩日午後

六時から京町朝日小会館で納会開催。入場無料

語物初日、『御祝儀』(入登)、『太十』(友栄)、『先代萩』(友二二三)、『鰻谷』(貴昇)、『一の谷』(龍玉)、『沼津』(松風)、『忠六』(吉(土口か))、掛合『忠臣蔵七段目』由良之助(友糸)、おかる(南玉)、平右衛門(菊水)、糸(友玉)、囃子(梅村操) 二日目、『朝顔』(南玉)、『阿漕浦』(菊水)、『竹雀』(友栄)、『紙治』(梅玉)、『野崎』(藤司)、『明烏』(友路)、『本下』(蘭玉)、『陣屋』(雷雀)、糸(友糸)、友玉、友二二三

□昭和8 (1933-12-10) 『台湾日日新報』

ラヂオ JFAK 台北 周波七六〇 JFBK 台南 周波七二〇

ラヂオ/今日の番組

午前の部(省略)

昼間の部(省略)

夜間の部

【七・四〇】義太夫(東京) 『仮名手本忠臣蔵、七段目(一力茶屋の段)』

【八・三〇】時報(東京) (以下略)

ラヂオ名物

今日は義太夫

『仮名手本忠臣蔵(第六回)』

一力茶屋の段(七段目)』

夜七時四十分・東京から

配役

由良之助 竹本旭嬢

おかる 豊竹昇之助

平右衛門 竹本東広

九太夫 竹本広春

伴内 竹本久国

力弥 竹本旭次

三味線 豊澤仙平

外はやし連中

【梗概】敵を欺く為めの計略に大星由良之助が祇園の一方で遊蕩に耽つてゐると同志の矢間、千崎、竹林等が平右衛門を伴つて谷子を見に来たり、九太夫が伴内など案内して這入つて来るが、由良之助はあくまで酔ひ崩れてゐると力弥が御台かほよの文を持参して来たので灯影でそれを読まうとするとお軽が覗き読みするので、由良之助は急にお軽に戯れて身受けすると言ひ出す、お軽の兄の平右衛門は由良之助の心中を察してお軽を斬らうとすると由良之助がこれを支へて本心を明かし、お軽に力を添へて縁の下に忍んでゐた九太夫を刺し殺すと、前に入りこんだ三人侍も初めて大星の苦肉の策を知つて感心すると云ふのである

□昭和8 (1933.12.22) 『台湾日日新報』

常磐津

『新荷雪間の市川』

(新山姥) 夜八時三十一分

台北

浄瑠璃 岸澤古民

三味線 梅本梅奴

上調子 梅本梅恪

□昭和9 (1934.03.10) 『台湾日日新報』

三吉野睦会の浄瑠璃会

三吉野睦会浄瑠璃会は、十日(土曜)十一日(日曜)の両日、

毎正六時より南門公会堂に於て開催。入場無料

△初日語物 『御祝儀』(入登)、『日蓮記』(嬰木)、『勘平切腹』

(瓢)、『御所桜』(多美次)、『判官切腹』(南枝)、『百度平』(五

色)、『堀川』(七二八)、『阿漕浦』(琴馬)、『逆櫓』(三吉野)、

糸(才五郎)

△二日目 『酒屋』(五色)、『揚屋』(南枝)、『梅由』(嬰木)、『太

十』(瓢)、『沼津口』(七二八)、『沼津奥』(琴馬)、『忠九』(三

吉野)、糸(才五郎)、三味線 野澤三吉野 鶴澤才五郎

□昭和9 (1934.03.24) 『台湾日日新報』

勝玉連義太夫会

二十四、二十五の両日午後六時から、台北建成小学校西隣大稲

捏倶楽部で勝玉連春季義太夫会を開催する。入場無料多数来聴を歓迎すると。其語り物左の通り

『御祝儀』（入登）、『御所桜』、『寺子屋』（北投一口）、『鳴門』、『太子』（白峰）、『先代』、『鳴門』（友鶴）、『本下』、『酒屋』（彫司）、『鈴ヶ森』、『太子』（勝司）、『沼津』、『合邦』（基隆東）、『安達』、『壺坂』（三松）、『柳』、『梅忠』（松月）、三味線（勝玉）

□昭和9（1934.05.29）『台湾日日新報』

豊竹三玉師の追善浄瑠璃会 栄町朝日小会館階上に於て多年台北浄瑠璃界に尽した故豊竹三玉師の追善浄瑠璃会を、二十九、三十日の二日間毎夕六時より開催。入場無料

初日語物『御祝儀』（入登）、『鳴戸』（友栄）、『鰻谷』（藤司）、『菅四』（松風）、『合邦』（二声）、『沼津』（貴昇）、『酒屋』（土口）、『本下』（宝珠）、二日目『肉付面』（菅枝）、『忠七』（南玉）、『太十奥』（三峰）、『先代萩』（友路）、『合邦』（鳳玉）、『忠四』（蘭玉）、『酒屋奥』（雷雀）

□昭和9（1934.07.26）『台湾日日新報』

関西女義太夫一行来台

関西女義太夫大阪因会最高幹部合同一行は、来る八月一日よ

り五日間、台北榮座に於て開催、顔触れは

竹本国香、竹本国秀、竹本雛若  
豊竹昇鶴、竹本久国、竹本雛駒

三味線豊澤萬之助

今回の義太夫は十年來の事で而も一流幹部で美人揃ひの事とて華やかに感じられる。台北検番と台北素人義界因連の後援あり。前景気盛んである

※「国香」は「国雪」の誤力

□昭和9（1934.07.27）『台湾日日新報』

廿六日より四日間／浄瑠璃大会／於朝日小会館  
既報の如く台北素義因会創立記念浄瑠璃大会は、二十六日から四日間、栄町朝日小会館で開催されるが、番組は左の通りである

初日

- 一、『御祝儀宝の入船』 入登
- 一、『中将姫（雪責め之段）』 琴馬 糸才五郎
- 一、『加賀見山（又輔住家之段）』 組次 糸千歳
- 一、『菅原伝授（寺子屋之段）』 朝日 糸才五郎
- 一、『撰州合邦ヶ辻（合邦内之段）』 鬼笑 糸勝玉

一、『加賀見山（長局之段）』 美登志 糸勝玉

一、『伊賀越道中双六（沼津里之段）』 七二八 糸三吉野

二日目

一、『御祝儀宝の入船』 入登

一、『朝顔日記（宿屋之段）』 梅玉 糸才五郎

一、『御所桜（弁慶上使之段）』 貴昇 糸勝玉

一、『恋女房染分手綱（三吉愁嘆之段）』 三松 糸勝玉

一、『撰州合邦ヶ辻（合邦内之段）』 可笑 糸大力

一、『大功記十段目（尼ヶ崎之段）』 市丸 糸大力

一、『安達原三段目（袖萩祭文之段）』 三峰 糸勝玉

一、『先代萩（御殿之段）』 友鶴 糸勝玉

二日目

一、『御祝儀宝の入船』 入登

一、『明烏（山名屋之段）』 松風 糸才五郎

一、『義士忠臣蔵（本蔵下邸之段）』 菊水 糸勝玉

一、『恋飛脚大和往来（新口村之段）』 鳳玉 糸大力

一、『菅原伝授（寺子屋之段）』 長楽 糸勝玉

一、『阿波鳴戸（順礼歌之段）』 品子 糸勝玉

一、『一の谷嫩軍記（熊谷陣屋之段）』 雷雀 糸勝玉

一、『御所桜三段目（弁慶上使之段）』 多美次 糸大力

四日目

一、『御祝儀宝の入船』 入登

一、『恋飛脚大和往来（新口村之段）』 松月 糸勝玉

一、『吃の又平（四ツ目之段）』 菅枝 糸才五郎

一、『阿波鳴戸（順礼歌之段）』 栄玉 糸栄玉

一、『絵本太功記（尼ヶ崎之段）』 勝司 糸勝玉

一、『御所桜（篋片袖之段）』 勝登 糸勝玉

一、『伊勢音頭（酒屋之段）』 千歳 糸大力

一、『艶容女舞衣（酒屋之段）』 土口 糸才五郎

□昭和9（1934.08.02）『台湾日日新報』

大阪女義太夫

竹本雛駒一座

初日、二日目番組

この程来台せる大阪女義太夫竹本雛駒一座は、八月二日より榮座に於て毎夜語り物を替へ上演するが、初日二日目の番組は左の通りである

△初日 『一の谷須磨の浦』—勝登、『三十三間堂柳』—国雪、『日吉丸五郎助内』—雛若、『お染久松野崎村』—昇鶴、『撰州合邦ヶ辻』—久国、『三十三所壺坂』—雛駒、糸—豊澤鳶の助

△二日目 『迎駕梅の由兵衛』—勝登、『忠臣蔵勘平切腹』—国雪、『和田合戦市若初陣』—雛若、『岸の姫松飯原館』—昇鶴、『おはん長右衛門帯屋の段』—久国、『先代萩御殿』—雛駒、糸—  
豊澤萬の助

□昭和6 (1931.08.25) 『台湾日日新報』

新竹の素人浄瑠璃公開

【新竹電話】新竹市の浄瑠璃同好者十数名は、二十七日午後六時半より新竹座に於て、一般に公開批判を乞ふこととなつてゐる。同夜は入場料は勿論お茶代その他の小物代も一切無料の由

□昭和9 (1934.09.15) 『台湾日日新報』

鶴澤才五郎名披露浄瑠璃会

市内佐久間町南門公会堂に於て十五日より四日間、鶴澤才五郎名披露の浄瑠璃会を、毎夕六時半から開催する。入場無料語物は

△初日『御祝儀』(入登)、『本下』(七二八)、『梅由』(勝登)、『寺小屋』(松風)、『鰻谷』(貴昇)、『忠四』(南枝)、『合邦』(鬼笑)、『酒屋』(一声)

△二日目『寺小屋』(三尾)、『合邦』(嬰木)、『日吉丸』(多美次)、

『松王屋敷』(蘭玉)、『沼津』(鳳玉)、『明烏』(雷雀)、『中将姫』(琴馬)

△三日目『油屋』(千歳)、『忠五』(菊水)、『安達』(栄玉)、『恋女房』(三松)、『一の谷』(瓢)、『猿廻』(藤司)、『梅由』(梅玉) △四日目『百度平』(五色)、『鳴戸』(朝日)、『酒屋』(土口)、『野崎』(友鶴)、『朝顔』(品子)、『布引』(菅枝) 三味線 三吉野、勝玉、友玉、大力、才五郎

□昭和9 (1934.11.10) 『台湾日日新報』

浄瑠璃納会 十日、十一日の両日午後六時より南門公会堂で大力連納浄瑠璃会を開く由(入場無料)

△初日語物『合邦』(可笑)、『御所桜』(多美次)、『鈴ヶ森』(市丸)、『阿波鳴戸』(栄玉)、『新吉原』(松風)、『梅由』(千歳)、『日吉丸』(琴馬)

△二日目『日吉丸』(栄玉)、『忠六』(松風)、『又助』(多美次)、『菅四』(可笑)、『新の口』(鳳玉)、『沼津』(藤司)、『長局』(琴馬)、糸 吉田大力 中尾千歳

□昭和9 (1934.11.23) 『台湾日日新報』

義太夫納会

二葉連 二十三、二十四日の両日、毎夕六時から、南門公会堂で南門二葉連納会を開く。入場無料。語物左の如し

△初日『八陣』（嬰木）、『源藏立』（南枝）、『菅原』（五色）、『寺小屋』（松風）、『猿廻し』（七二八）、『壺坂』（つるえ）、『忠九』（琴馬）

△二日目『重の井』（つるえ）、『伊賀越』（七二八）、『日吉丸』（五色）、『野崎』（南枝）、『合邦』（嬰木）、『鏡山』（瓢）、『布引』（菅枝）、『三味線鶴澤才五郎、ツレかよ子、つるえ』

勝玉連 廿三、廿四日の両日毎夜六時から文化村城東俱樂部で勝玉連義太夫納会を開く。入場無料。語り物左の通り

△初日『御祝儀』（美登志）、『太十』（友鶴）、『十種香』（松月）、『鳴門』（品子）、『安達』（三峰）、『宿屋』（勝司）、『重の井子別』（三松）、掛合『野崎村』（総出）

△二日目『御祝儀』（勝司）、『弁慶』（三峰）、『寺子屋』（一口）  
『谷組打』（南玉）、『酒屋』（友鶴）、『新口村』（静糸）、『ニッ玉』（菊水）、掛合『茶屋場』（総出）糸（勝玉、友玉、千代寿）

□昭和6（1934.12.12）『台湾日日新報』

新声会浄瑠璃納会

十二、十三の両日午後六時から南門公会堂に於て、新声会浄瑠璃会開催。多数来聴を希望すると

△十二日語り物  
『朝顔』（勝司）、『竹の間』（友栄）、『新口』（貴昇）、『酒屋』（友鶴）、『忠四』（蘭玉）、『妙心寺』（雷雀）

△十三日語り物  
『弁慶』（友栄）、『太十』（龍玉）、『御殿』（勝司）『須磨浦』（南玉）、『阿漕』（菊水）、『太十奥』（三峰）、『百度平』（一声）、三味線友玉、千代寿、勝玉

□昭和10（1935.02.01）『台湾日日新報』

二葉連の義太夫初会  
二月一、二日の両日午後六時から、南門二葉連の義太夫初会が南門公会堂で開演される

□昭和10（1935.03.10）『台湾日日新報』  
けふの催し

△浄瑠璃会 十、十一の両日午後七時より本町一丸館にて

□昭和10（1935.04.18）『台湾日日新報』

## 送別義太夫大会

市野美登志氏送別義太夫大会が、十八日から二十一日まで四日間、毎夕六時から栄町朝日小会館で催される。語物は左の如し

◇初日『御祝儀』（入登）、『三日九』（艶司）、『又助』（千奴）、『梅由』（可笑）、『二度目』（友栄）、『布四』（美登志）、『本下』（南玉）、『菅四』（長楽）、『宿屋』（千房）、『沼津』（一声）

◇二日目『御祝儀』（入平）、『鳴津』（白峯）、『安達』（三峯）、『一の谷』（瓢）、『新の口村』（松風）、『阿漕』（嬰木）、『日吉』（品子）、『壺坂』（静糸）、『八陣』（勝司）、『忠九』（琴馬）

◇三日目『御祝儀』（入昇）、『先代萩』（三松）、『鳴門』（勝登）、『又助』（千歳）、『梅忠』（貴昇）、『忠四』（美登志）、『炬燵』（鳳玉）、『忠六』（多見次）、『堀川』（蘭玉）、『白木屋』（三吉野）

◇四日目『御祝儀』（入楽）、『弁慶』（松濤）、『合邦』（藤司）、『十種香』（松月）、『菅四』（一口）、『野崎』（友鶴）、『明烏』（雷雀）、『安達』（栄玉）、『二ツ玉』（菊水）、『布四』（菅枝）

◇三味線鶴澤才五郎、同竹本勝玉、村崎友玉、吉田大力、市野千代寿

□昭和10 (1935-08-03) 『台湾日日新報』

義太夫会 二葉連義太夫会は三、四両日午後六時より、南門公

会堂に於て南門二葉連の納涼義太夫会開催。入場無料

□昭和10 (1935-10-11) 『台湾日日新報』

勝玉連義太夫会 始政四十周年を記念して勝玉連は十一、十二の両日、午後六時から南門公会堂で義太夫会を開く（入場無料）。語り物は左の如し

△初日『御祝儀』（入登）、『鎌三』（勝登）、『鳴戸』（友栄）、『日吉』（秀豊）、『梅忠』（勝司）、『沼津』（松風）、『堀川』（蘭玉）、掛合『須磨の浦』（南玉、龍玉）

△二日目『御祝儀』（入登）、『朝顔』（勝司）、『菅四』（松濤）、『梅由』（勝登）、『三日九』（龍玉）、『太十』（白峯）、『先代』（南玉）、『本下』（一口）、三味線—竹本勝玉、友玉

□昭和10 (1935-10-12) 『台湾日日新報』  
今日の催し

△勝玉連義太夫会 午後六時より南門公会堂にて

□昭和10 (1935-11-19) 『台湾日日新報』

政談演説で義太夫一席／新手の策戦

【新竹電話】新竹市議候補石井員夫氏は普通の政談演説では人

が寄らないとあつて珍妙な演説会を発売し、新竹署の許可を得たので、十九日夜七時から鉄道クラブに於て開催することとなつたが、まづ露払いとして有本兼治氏が義太夫太閤記を語り、次いで石井氏が支那漫遊中上海に於て爆弾に遭難した一くさりを述べ、ちよつぱり選挙に触れ肩の凝らぬやうに聞かせようと思ふ趣向で、この催しに成功すれば旭町クラブに於ても催す筈である

□昭和10 (1935-12-07) 『台湾日日新報』

三吉野陸連義太夫納会 三吉野陸連義太夫納会は七、八の両日、午後六時半から南門公会堂で開演する。語物は初日『御祝儀』(入登)、『酒屋』(五色)、『儀作腹切』(七二八)、『熊谷陣屋』(瓢)、『合邦』(嬰木)、『近江八』(つるえ)、『古八』(三吉野) 二日目『寿司屋』(嬰木)、『本下』(瓢)、『堀川』(七二八)、『菅四』(五色)、『壺坂』(つるえ)、『二十四孝勤助内』(三吉野) 糸三吉野

□昭和10 (1935-12-08) 『台湾日日新報』

本日の催し

△三吉野陸連義太夫納会 午後六時半より南門公会堂にて

□昭和10 (1935-12-15) 『台湾日日新報』

今日の催し

△新声会勝玉会合同義太夫納会 午後六時から栄町理容会館で勝玉会新声会の合同浄瑠璃納会 台北勝玉会新声会合同浄瑠璃納会は十二月十五、六の両夜午後六時から、栄町理容会館(天野医院隣)に於て催されるが、同好者多数の来聴を歓迎する由

演芸

竹本勝玉の義太夫大会/十五日より理容会館で

竹本勝玉師は渡台二十五年を記念して二月十五日より五日間毎夕六時より市内新公園前理容会館に於て「義太夫大会」を開催する。初日より三日目までの語物番組は左の通り

初日『傾城阿波鳴戸』(入登)、『朝顔日記』(長門)、『伊賀越』(吾妻)、『金毘羅御利生』(嬰木)、『仮名手本忠臣蔵』(常竹)、『絵本太功記』(巴)、『増補忠臣蔵』(朝日)、『明烏雪曙』(つるえ)、『仮名手本忠臣蔵』(菅枝)

二日目『絵本太功記』(富村)、『御所桜』(平和)、『傾城阿波鳴戸』(友栄)、『先代萩』(品子)、『三日太平記』(龍玉)、『撰

州合邦ヶ辻』（つるゑ）、『鎌倉三代記』（栄玉）、『菅原伝授手習鑑』（蘭玉）、『恋女房染分手綱』（三松）

三日目 『日吉丸稚桜』（勝登）、『御所桜』（秀豊）、『菅原伝授手習鑑』（長楽）、『増補忠臣蔵』（瓢）、『蝶花形』（すみはる）、『仮名手本忠臣蔵』（南玉）、『近頃河原達引』（七二八）、『仮名手本忠臣蔵』（菊水）、『御所桜』（雷雀）

□昭和11（1936-02-18）『台湾日日新報』

演芸

竹本勝玉の義太夫番組／四日目と五日目

既報竹本勝玉師の渡台二十五年記念義太夫大会の四日目、五日目の番組は次の通り

十八日（火曜日）

『彦九』（友栄）、『三勝半七酒屋の段』（松濤）、『朝顔日記』（勝登）、『鎌倉三代記』（栄玉）、『千代萩』（友路）、『菅原伝授手習鑑』（円治）、『近頃河原達引』（鳳玉）、『古手屋八郎兵衛』（貴昇）、『迎籠梅野由兵衛』（梅玉）

十九日（水曜日）

『御祝儀』（友栄）、『松王』（勝司）、『日吉丸』（松濤）、『菅四』（一〇）、『合邦』（藤司）、『堀川』（友路）、『一之谷嫩軍記』（樵風）、

『撰州合邦ヶ辻』（艶司）、『加賀見山』（文華）

□昭和11（1936-05-16）『台湾日日新報』

三吉野、陸、会、浄瑠璃会 三吉野陸連浄瑠璃会は十六、七日の両日、午後六時半から南門公会堂で開催されるが、芸題は左の通り

初日 『御祝儀』、『加賀見山』（又助往来）、『太功記十段目』、『義士（赤垣出立）』、『朝顔日記』、『恋女房染分手綱』、『加賀見山（長局）』

二日目 『御祝儀』、『伊賀越』、『阿波鳴門』、『忠臣蔵（判官切腹）』、『金比羅利生記』、『三勝半七』、『日吉丸』

□昭和11（1936-10-16）『台湾日日新報』

友伊久氏披露義太夫大会 義太夫友愛会では今回義太夫三絃界の権威、鶴澤友次郎師の門人鶴澤友伊久師を聘し義太夫の稽古を始めたので十七、十八、十九、二十の四日間毎夜六時から新公園前の理容会館に於て、友伊久師披露義太夫大会を開催することとなった（入場無料）

□昭和11（1936-11-18）『台湾日日新報』

追善義太夫会 丹羽一声氏追善義太夫会は、来る十八、九両日、

午後六時から新公園前の理容会館に於て開催する。語物十八日  
『志渡寺』（金柿）、『酒屋』（竹司）、『太十』（龍玉）、『日吉丸』（梅  
豊）、『日蓮記』（清玉）、『炬燵』（鳳玉）、『忠六』（雷雀）、掛合  
『二ツ玉』、十九日『合邦』（鳳玉）、『先代』（南玉）『弁慶』（友  
栄）、『鳴戸』（友路）、『沼津』（藤司）、『儀作』（蘭玉）、『新ノ口』  
（貴昇）、掛合『野崎村』

□昭和11（1936-12-05）『台湾日日新報』  
義太夫の聯合納会 鶴澤友伊久 竹本勝玉両師の聯合納会は、  
六日午後六時から南門公会堂で開催（入場無料）。プログラム  
次の通り

『御祝儀』（入登）、『日吉丸』（梅豊）、『一の谷』（龍玉）、『毛谷  
村』（友栄）、『先代萩』（南玉）、『太十』（大力）、『木下』（松濤）、  
『明烏』（清玉）、『壺坂』（友路）、『白木屋』（菊水）、『河庄』（鳳  
玉）、『堀川』（蘭玉）、『忠四』（菅枝）、『酒屋』（雷雀）、『千両  
幟』（掛合）、『忠七』（掛合）、糸、友伊久、勝玉

□昭和12（1937-02-10）『台湾日日新報』

会事

△新竹素人義太夫大会 十二日午後六時半より新竹クラブ日本

間（新竹電話）

□昭和12（1937-04-16）『台湾日日新報』

ラヂオ

朝〔略〕

昼〔略〕

夜

【七・三〇】義太夫（大阪）

【八・〇〇】講演（台北）〔以下略〕

大阪七、三〇

義太夫／『磐城恋飛脚』／新口村の段

浄瑠璃竹本清糸さんは、大阪播重座の真打で義太夫界の花形と  
して名声噴々たり糸の豊澤仙平さんも同じく播重座に属し  
義太夫三絃界で令名を謳はれてゐる、演し物は義太夫愛好家には  
余りに膾炙されてゐる名曲傾城恋飛脚新口村の段

浪華淡路町の飛脚屋渡世の亀屋忠兵衛は北の新地へ通行の際  
鼻紙袋を落した時通りがかりの芸者榎屋の梅川に打込んで終つ  
た。そしてやがて金に窮し西国方から廻つた封印金を一時融通  
した。遂に入牢を被仰付けられたのが宝永七年十二月で、忠兵

衛は十日許りで牢死、梅川は尼になつたと云はる。この新口村の段は捕手に囲まれた二人が危い所で落ちのびる所である

□昭和12 (1937-03-06) 『台湾日日新報』

今日の催し

△素人浄瑠璃会 午後六時理容会館

素人浄瑠璃会

台北素義連は六七の両日午後六時から新公園前の理容会館に於て、春季素人浄瑠璃会を開催する由。入場料は無料。一般多数来会を希望してゐる。尚プログラムは次の通りである

六日語物「柳」(友子) 掛合(「曾我」)、「堀川」(「油屋」)(「弁慶」)(「赤坂」)

七日「忠臣蔵」三段目から、七段目まで

因みに糸は竹本勝玉、吉澤友玉、鶴澤伊久師である

□昭和12 (1937-03-07) 『台湾日日新報』

今日の催し

△素人浄瑠璃会 午後六時 理容会館

□昭和12 (1937-04-23) 『台湾日日新報』

ラヂオ

清元(台北のみ)九・〇〇)

『深山桜及兼樹振』

浄瑠璃 清元吉栄太夫

三味線 清元弥生

□昭和12 (1937-05-06) 『台湾日日新報』

ラヂオ

朝〔略〕

昼〔略〕

夜

【七・五五】義太夫(東京)

【八・三〇】時報(東京)〔以下略〕

義太夫／『日本振袖始／大蛇退治の段』

七・五五 東京から

此の曲は近松門左衛門作の浄瑠璃で、初演は享保三年二月大阪竹本座、素戔嗚尊が木花開耶姫に恋してこれを奪はんとする隙に乗じて、悪鬼は岩長姫に化けて十握の宝剣を奪ひ去る。尊

は宝剑を尋ねて出雲の簸の川原に到り、そこで大蛇の犠牲になる稲田姫を救ひ、八岐大蛇を酒の計略で退治し、その腹を裂いて宝剑を取戻し稲田姫を妻にし給ふ……と云ふ筋の曲、出演者は次の通り

岩長姫実は大蛇―豊竹つばめ太夫、稲田姫―竹本越名太夫、素  
浅鳴尊―竹本叶美太夫、三味線野澤勝平

□昭和12 (1937-05-07) 『台湾日日新報』

ラヂオ

朝〔略〕

昼〔略〕

夜

【八・三二】義太夫 (台北)

【九・〇〇】ジャズ (台北) (以下略)

義太夫 (台北八・三二) / 加藤三吉郎

△『中将姫古跡の松 (雪貞の段)』

△『三略卷五条橋弁慶』

□昭和12 (1937-05-12) 『台湾日日新報』

ラヂオ

朝〔略〕

昼〔略〕

夜

【七・三〇】人形浄瑠璃 (大阪)

【八・三〇】時報 (東京) (以下略)

土佐太夫引退興行 / 人形浄瑠璃 / 七・三〇文楽座より中継

竹本土佐太夫は現在日本義太夫界の巨星として錚々たる名声を謳はれ斯界稀に見る美音の持主として其の芸風は今日完成の境地に達し、老来益々渾然たる芸能に聴く者をとう然たらしめてゐたが、今回功成り名遂げ斯界を引退する事になつたので今夕師自ら文楽座に思ひ出の最後の出演となつたのである

演し物は師の十八番の一つ『桂川連理柵』帯屋の段全曲一時間に亘る熱演

『桂川連理柵 / 帯屋の段』

浄瑠璃 竹本土佐太夫

三味線 野澤吉兵衛

此の浄瑠璃が最初に上演されたのは安永五年十月大阪堀江へ

の側芝居での操浄瑠璃、作者は菅伝助(註)或は近松東南の作として  
上場された又後天明元年四月江戸市村座で桜田治助作で『お半  
長右衛門道行瀬川の仇浪』と題して上演された

全部は上下二巻からなり、上巻は六角堂の場で、下巻がこの  
帯屋の段である

鳴物 福原百之助社中

△『松廼羽衣』

□昭和12 (1937-05-16) 『台湾日日新報』

ラヂオ

朝〔略〕

昼〔略〕

夜

【七・四五】義太夫(東京)

【八・三〇】時報(東京)〔以下略〕

△清元 (東京／八・〇〇)  
浄瑠璃 清元喜久大夫／外二名  
三味線 清元梅吉 一名

義太夫(東京七・四五)／『近頃河原達引／堀川の段』

浄瑠璃 竹本鍛太夫

三味線 豊澤新左工門

豊澤新太郎

□昭和12 (1937-05-15) 『台湾日日新報』  
ラヂオ  
常磐津 (東京／八・〇〇)  
浄瑠璃 常磐津松尾太夫

この曲はお俊伝兵衛の心中情話を脚色した浄瑠璃、三巻物で  
この堀川の段は中の巻である。

同 常磐津宮尾太夫

三味線 常磐津文字兵衛

上調子 常磐津八百八

井筒屋伝兵衛が命にかけて惚れた祇園近江屋の抱お俊を横合  
から出て張り合つたのは勢州亀山の家中横淵官左衛門と云ふ悪  
侍伝兵衛に三百両の偽金を掴ませて八橋の鏝を奪つた上に四糸

河原で散々に擲つたり蹴つたりの非道にさすがの伝兵衛も憤怒に堪へず遂に官左衛門をその場に殺害して人殺しの科人となる。お尋ね者の伝兵衛が落ちて行つたのはお俊の兄猿廻し与次郎とて堀川の片辺に盲目の老母を養ふ律義者の侘住居、既にお俊と謀し合せて心中の覚悟である。与次郎は最初こそ門口を閉ざして男を入れずお俊に去り状まで書かせたが死ぬ程思ひつめた。両人の仲、兄の情で心中を合点して両人を落してやり門出の祝儀にお初徳兵衛の猿舞をはなむけとする。やがて聖護院の森にお俊と相抱いて死なうとした伝兵衛は官左衛門の悪事露顕して殺し得となり。両人は天下晴れて夫婦となると云ふのが此の曲の大筋である。

□昭和12 (1937-07-01) 『台湾日日新報』

人形浄瑠璃南部太夫一行来台

古典的芸術として独り大阪にのみ存在する文楽新義座の人形浄瑠璃南部太夫一行は愈々七月十八日入港の蓬萊丸で来台、十九、二十日の両日栄座で開演する由

□昭和12 (1937-07-07) 『台湾日日新報』

ラヂオ

朝〔略〕

昼〔略〕

夜

【七・〇〇】人形浄瑠璃（大阪）：豊竹呂太夫、友右衛門

【八・〇〇】落語名作選第二夜（東京）〔以下略〕

人形浄瑠璃（大阪七・〇〇）

『菅原伝授手習鑑』

四ツ橋文楽座から中継

浄瑠璃 豊竹昌太夫

三味線 豊澤友衛門

松王首実験の段

この浄瑠璃は延享三年八月竹本座初演に初まり作者は竹田出雲並木千柳、三好松洛、竹田小出雲の合作で、この『寺小屋』は竹田出雲の作と伝えられてゐる、初演当時竹本座はこの浄瑠璃で異常な盛況を見翌年三月迄大入統で竹本座の衰運を挽回し得たと云ふ名作

菅公の御世継菅秀才は芦生の里に寺小屋を開いてゐる武部源蔵が我子の如くにして囲まつてゐる、源蔵は今の妻戸浪と恋に落ちその為菅公のお館を勘当になつたのであるが菅公にその才能

を惜しまれて筆法伝授を受けた大恩は一身を賭しても忘れなかつたのである、この菅秀才のことがいつか時平公の耳に入りその首打つて渡せと厳命をうけて源蔵はとほとほと我家へ帰つて見ると一人今日入門した伶俐な子供があつた、夫婦はお主のためには代へられぬとその子の首を打つて身替りに立てた檢視の役は松王丸であつた、病にまぎらして咽ぶのも道理、その首の子は現在の我子女房の千代と謀つてお主のため我子を犠牲に身替に立てたのであつた、松王丸の本心も見え菅秀才は御台と共に河内国へ落ちて行かれるといふのであるが、哀音迫るいろは歌の野辺の送りには誰でも臉に涙を宿す親子恩愛の情味が流れてゐる

□昭和12 (1937-07-09) 『台湾日日新報』

ラヂオ

一中節 (東京／七・〇五)

『小町少将道行』

浄瑠璃 菅野序遊

三味線 菅野序園

□昭和12 (1937-07-18) 『台湾日日新報』

ラヂオ

朝〔略〕

昼〔略〕

夜

【八・三一】義太夫(台北)

【九・二〇】気象通報：台北観測所発表 (以下略)

義太夫(台北八・三一)

『奥州安達ヶ原』

浄瑠璃 豊竹つばめ太夫

三味線 豊澤猿糸

今回来台した義太夫界の錚々豊竹つばめ太夫と豊澤猿糸さんの出演放送、つばめ太夫は本年三十四歳の新進第一人者として義太夫界に声名を謳はれてゐる人で、小学校在学中既に豊竹古朝太夫師の下に入門、天授の技は日ならずして師匠を驚嘆せしめ大正末年二代目つばめ太夫を継承、豊澤猿糸は明治三十六年松葉屋の名跡を譲られ、三十七年二月恩師の歿後一時文楽座を退き堀江座に出たが、後再び文楽座に帰り、大正十一年正月豊澤猿糸を襲名、披露に『加賀見山』を弾き一躍斯界に認められ今日に至つた

『奥州安達原』の書卸しは宝暦十二年九月の大阪竹本座作者は竹田和泉、近松半二等、前九年の役の安倍貞任宗任兄弟を主題として、これに謡曲の『安達原』『善知鳥』の趣向を加味した全五段物で就中この第三段目の僊仗館袖萩祭文が最も有名親しまれてゐる

□昭和12 (1937-07-21) 『台湾日日新報』

人形浄瑠璃日延べ 栄座で開演中の大阪文楽新義座の人形浄瑠璃は非常な人気を呼んでゐるが後援会では二日間では物足らずとて二十一日まで日延開演することになった、二十一日の語物は『御祝儀宝入船』『日吉丸稚桜(小牧山城中の段)』『三十三間堂棟由来(平太郎住家の段)』『三十三所花の山(壺坂寺の段)』『菅原伝授手習鑑(寺小屋の段)』『肉弾三勇士(廟行鎮の段)』

□昭和12 (1937-07-28) 『台湾日日新報』

ラヂオ

朝〔略〕

昼〔略〕

夜

【七・五〇】義太夫(大阪)

【八・三〇】時報(東京)〔以下略〕

義太夫(大阪七・五〇)

浄瑠璃 竹本叶太夫

三味線 鶴澤友造

【二葉楠

久子の方意見の段』

義太夫愛好家にお送りする竹本叶太夫の久方振りの出演、糸は鶴澤友造さん、曲は、『二葉楠 久子の方意見の段』である

□昭和12 (1937-08-05) 『台湾日日新報』

ラヂオ

朝〔略〕

昼〔略〕

夜

【七・〇〇】義太夫(東京) 日吉丸稚桜

【七・三〇】水十夜(第四夜)〔以下略〕

義太夫(東京七・二〇)

【日吉丸稚桜

〔小牧山城中の段〕

浄瑠璃 竹本米太夫

三味線 竹澤仲造

此の浄瑠璃は、秀吉が木下藤吉郎時代に、堀尾茂助の案内で、間道口から進み、斎藤龍興が居城である美濃の稲葉山の城砦を陥れたといふ事と、清正が鍛冶屋の倅で幼少で父を失ひ母の縁で秀吉の許に養はれ遂に其の臣下となつて武名を顕はしたと云ふ『絵本太功記』の一節を綜合してこしらへたもので享保元年十月大阪豊竹座で上場され、作者は近松柳、近松梅枝軒、近松加造、近松万寿の四人である

□昭和12 (1937-11-03) 『台湾日日新報』

ラヂオ

朝〔略〕

昼

【一・五〇】義太夫 (東京)

【二・二五】講談 (東京) 〔以下略〕

夜〔略〕

義太夫 (東京一・五〇)

浄瑠璃 竹本小土佐

三味線 豊澤美佐尾

△『菅原伝授手習鑑 (寺小屋の段)』

□昭和13 (1938-01-20) 『台湾日日新報』

ラヂオ

朝〔略〕

昼〔略〕

夜

【八・〇〇】義太夫 (大阪)

【八・三五】和洋合奏 (東京) 〔以下略〕

義太夫 (大阪八・〇〇)

浄瑠璃 竹本角太夫

三味線 豊澤新造、外

△『義経千本桜道行初音旅 吉野山の段』

此の浄瑠璃は、延享四年十一月大阪竹本座で上演した『義経千本桜』の四段目で、作者は竹田出雲、三好松洛、並木千柳の三名である、この浄瑠璃は無論夢幻劇で五段よりなつてゐる、この千本桜が江戸で芝居として上場されたのは延享五年五月中村

座であつた

□昭和13 (1938.02.01) 『台湾日日新報』

ラヂオ

朝〔略〕

昼〔略〕

夜

【八・五五】義太夫ぎだいふ (大阪)

【九・三〇】時報 (東京)〔以下略〕

義太夫ぎだいふ (大阪八・五五)

『傾城阿波の鳴戸』

浄瑠璃 豊竹昇之助

三味線 豊澤力松

この浄瑠璃は、明和五年六月大阪竹本座で上演された『傾城阿波鳴戸』の八段目で作者は近松半二、八民平七、寺田兵蔵、竹田文吉、竹本三郎兵衛の五人である。大体の趣向は、阿波徳島の藩主三木家の御家騒動で、忠義の家老桜井主膳が悪人小野田郡兵衛の為に主家の重宝国次の名刀を盗まれて困難したが、旧臣十郎兵衛、お弓夫婦及び藤屋伊左衛門等の艱難苦心によつて

悪人から再び名刀を取返し主家が安泰になるといふ筋で、宝永七年七月近松門左衛門が書卸した『夕霧阿波鳴戸』の翻案である。十郎兵衛が我子のお鶴を殺した場所は、其当時阿波の浪人某が大坂玉造辺に仮住居して家計の道なきままに詐欺強盗夜盗追剥等とあらゆる悪業をして多くの人を悩まして居たが、或時順礼の子が金持て居るのを知つて、欺いて家に連れ帰り、深夜縊り殺し、窃かに其死骸を猪飼野の畑中へ埋め隠した。然るにこれが露顕して召捕られ重罪に処せられたといふ実説を取り入れたので、此の浄瑠璃は全部十段続きであるがこの順礼歌の件だけが特に名高く専ら上場されてゐる。

□昭和13 (1938.03.07) 『台湾日日新報』

ラヂオ

朝〔略〕

昼〔略〕

夜

【八・四〇】人形浄瑠璃にぎやま (大阪) (大阪新町演舞場より中継)

【九・三〇】時報 (東京)〔以下略〕

人形浄瑠璃

八・四〇／大阪から

△『妹背山婦女庭訓（山の段、背山の段）』

大判事…竹本相生大夫

三味線…鶴澤道八

久我之助…竹本源太夫

三味線…野沢吉佐

妹山の段

定高…豊竹つばめ太夫

三味線…竹澤団二郎／外四名

此の曲は明治八年正月書卸されたもので、作者は近松半二、松田ばく、栄善平、近松東南の四名で、外に後見として三好松洛が行年七十六才と肩書して名を出してゐる

この浄瑠璃は王朝時代の入鹿の暴政を背景にしたもので、武士の意地つくから紀州背山の領主大判事清澄と、大和妹山の領主太宰の山式国人の後室が、国境の吉野川を境にして互に反目して軋轢をつづけてゐたが、清澄の倅久我之助清船は何時しか国人の遺子雛鳥と恋愛關係を結ぶ、然るに当時国勢を左右してゐた、入鹿が其の権政を恃んで雛鳥を後宮に迎へやうとし其の手段として清船に難題を言ひかけて自滅させる、雛鳥も入内を拒

み、清船に操を立てて母の手にかかつて蓄の花を散らすといふ筋である

□昭和13（1938.4.17）『台湾日日新報』

人形浄瑠璃／大阪文楽「新義座」／廿、廿一の両日栄座で世界に誇る本邦唯一の国粹芸術人形浄瑠璃は古い伝統と歴史を持つてゐる大阪文楽が其の代表的なものである。此の最高の芸術殿堂より伸び行く芸術的使命に目覚めて、敢然脱退した竹本南部太夫、並に野澤勝平新進気鋭の二団は、全島義太夫界の理解ある同情と支援のもとに昨年渡台し、圧倒的人気を博し、年年衰へ行く歌舞伎及浄瑠璃の為に心強き記録的成績を残したが、本年は愈々内容を充実し、再度渡台を決行し、来る二十日より二日間、栄座に於て公演することになった、一行は竹本南部太夫、竹本陸路太夫、竹本美叶太夫、竹本隅栄太夫、竹本越名太夫等の義太夫連に野澤勝平、野澤勝芳、野澤綱延、野澤徳若等の三味線連の一行にお馴染みの桐竹門造が指導する乙女人形の二団を加へたる四十余名の一大座である、尚今回は特に支那事変で感激を与へた有名な山中尉の母を浄瑠璃化した軍国美談『代唱万歳母書簡』を座員総出にて掛合演出するさうである

□昭和13 (1938-10-10) 『台湾日日新報』

ラデオ

朝〔略〕

昼〔略〕

夜

【八・五〇】人形浄瑠璃 (大阪) (大阪四ツ橋文楽座より中継)

【九・三九より四〇分】の時報 (東京) (以下略)

人形浄瑠璃

(大阪／八・五〇) 大阪四ツ橋文楽座より中継

浄瑠璃 竹古朝太夫

三味線 鶴澤清六

『玉藻前曦袂』

この浄瑠璃は宝暦元年正月大阪豊竹座で上演した『玉藻前曦の袂』三段目で、作者は浪岡橘平、浅田一鳥、安田蛙桂である。

大体の構想は、殺生石の伝説を題材として鳥羽帝の御兄薄雲王子の反逆で妖狐の化現と、玉藻前とを合わせて作り上げたもので、此の三段目道春館と四段目の十住住家が最も現はれてゐる。

〔写真：豊竹古朝太夫〕

□昭和13 (1938-11-10) 『台湾日日新報』

ラデオ

朝〔略〕

昼〔略〕

夜

【八・五〇】人形浄瑠璃 (大阪) (大阪四ツ橋文楽座より中継) 『恋娘昔八丈鈴ヶ森の段』…浄瑠璃―豊澤駒太夫、三味線―鶴澤清

二郎

【九・三九】九・四〇時報 (東京) (以下略)

人形浄瑠璃

大阪・午後八時五〇分

―大阪四ツ橋文楽座より中継―

お駒才三／『恋娘昔八丈』／鈴ヶ森の段

浄瑠璃 豊竹駒太夫

三味線 鶴澤清二郎

□昭和14 (1939-01-09) 『台湾日日新報』

独逸人が独逸語で／忠臣蔵を演出

俳優の足袋、大さ十六文／浄瑠璃語りもつけ大成功

【ベルリン中西特派員発】押し迫つた歳の暮であつた、日独協会から突然全く突然に「忠臣蔵劇招待券」が郵送された。日本でも義士祭のある十二月中旬だ、一体誰がやるのか、どんなにしてやるのか。どこの言葉で等々、疑問が次から次へ起つて来る。

どんなことがあつても万障繰合せて出席する気になつたのである。場所は

伯林の 西部シヤロツテンブルグ区のツリブユーネ劇場、と云つても、精々二百人這入れるか這入れないかと云つた小劇場ではあるが、中に這入ると、小さいながら舞台もあり、中央には花道までがチヤンと作つてある

プログラムを貰つて見ると

日本歌舞伎を独逸語に翻訳して日本式に生かして演出する、日独協会主催、ベルツ・エルウイン・トク演出、独逸演劇学校生徒出演、ウエルネル・カール監督

衣裳 鬘は純日本物使用、浄瑠璃ギーゼ氏、日本式拍子木ノイマン氏ハヤノ・カンペイ、ボルド氏、オカル、リュディングハウゼ嬢等々役割、第一幕山崎街道、第二幕山崎村与市兵衛宅（翌朝）忠臣蔵説明書出演は三日間、等其他

やがて定刻になるとベルツ氏の説明があつた。

日独文化協定が出来た。独逸人は日本人を真実に知らなければならぬ、外面はもとより日本人の精神をも識らなければならぬこの意味から本劇を独逸語で独逸人の手により演出し、独逸人自身で出演することを企てて独逸演劇学校の後援を得た。さていよいよとなると諸種の難問題に遭遇した、第一に

浄瑠璃 と云ふものを独逸語に訳して節をつけて見ると、初めはとんでもないものになつた。しかし熱心は成功の母で、とにかく何とか、日本式に感ずるやうになつた、次に生活状態の全然異なる独逸人には、日本式にすわることや、座したまま立ち上ることが困難だ。最も困つたことは三十分以上も浄瑠璃語りの男は座り通しであるから、稽古のときいつも足がシビれてあとから大変である、殊に女型になる女優は五十人もの学生からより抜いた、たつた二人しか立ち座りすることが出来るものがなかつた。次に困つたことは男優全部が六尺豊かの大男で、折角出来た舞台の家の中で、立つと鬘が天井にスレスレでヒヤヒヤさせる。またゲルマン族で

髪の毛の色が茶乃至ブロンドが多い、日本の鬘をつけると、頭が黒くて、目のあたりがどうもつり合はない。足袋の如きはたいいてい十五文十六文と云ふので、足袋や草鞋は二足をきり合

せて一足にすると云つたかくれた苦心がある、元来日本の俳優は全部の行動に形があつて幕あけから幕降りまでの一挙足一挙手総て形通りの踊である。日本人は十年も踊を稽古して舞台に出るが、我々は僅々三週間か五週間の稽古で、その感を出させようと云ふのだから無理だ。しかし、俳優諸君の熱心からとにかく、大体日本劇の外輪廓だけは出来た積りである云々の前口上があつて幕が上つた。

裨姿の大男が腕のあたりまでしかないチンチヨクリンの袖に膝のあたりまでしかない袴をつけてヒヨツコリ出て来て、浄瑠璃の御簾の中にすわつた。内部から電灯がついてハツキリとはしないが、浄瑠璃語り者の感が出る、山崎街道の勘平の猿師姿

定九郎 は鼻の高い四角な顔でスラリとした大男だ。ちやうど写楽の錦画から飛び出したやうな感がした、勘平は日本の芝居で見る勘平と違はない。全部のセリフは独逸語であるからちよつと変な気持であるが、すぐに劇の中に溶け込んでゆく。第二幕でのおかるは日本娘のやうな、それよりもつと美しいおかるである、おかるの母もよく出来てゐた。一文字屋のサイベイはキセルを口にくはえて文句を云ふのだが、何だかソグハグした

子供が 始めて煙草を飲むときのやうに地についてゐない。借用証文をさかさにして読み上げたり、懐の中に入れるとき、首のすぐ下辺へ証文を入れたりするのが目障りになるが、草履や足袋は立派にはきこなしてゐる、思つたよりは上出来で、日本の田舎芝居よりは遙かによい。少くともその特徴を取り入れてゐるところは実に感心した。決して可笑しいものではない。今暫らく専門家が振付けをすれば上等の部に属するであらう。唯全体として受ける感は何となく一平の漫画を見るやうだ。どこかに真実がこもつてゐる為であらう。

短時間にあれだけこなした独逸人の研究的の觀察については驚くの外はない。さうして兎に角自分のものとしてこなしてゐるだけに滑稽味がなく、劇中に真面目にとけ込んで行くやうな感がする。いづれにしても一同は熱心な研究的なもので熱演の一語をもつて讚美するに足りる。恐らく今後どこかの一流の劇場で出演すれば、異国情緒の多分にある。しかも独逸語で日本式に演出するのだから、どこでも大人気にうけることであらう。オペラに出るマダム・パツタフライなどは、ただ音楽ばかりが日本味があるので、これに比ぶればこの『独逸忠臣蔵』は確かに日本歌舞伎を表現してゐるものである

□昭和14 (1939-07-11) 『台湾日日新報』

故水野一水君追善義大夫会 十、十一、十二の三日間、毎夕七時から東本願寺別院にて追善義大夫会を開く。語物左の如し

△初日『二十四孝』(靜枝)、『壺坂』(多見次)、『儀作』(窓月)、

『太十』(梅豊)、『安達』(松月)、『帯屋の口』(菊水)、『帯屋の

奥』(鳳玉)、『野崎村』(掛合) △二日目『野崎村』(嵐玉)、『鈴ヶ

森』(耕人)、『御殿』(一笑)、『忠六』(友栄)、『長局』(千歳)、

『沼津』(吾妻)、『妙心寺』(雷雀)、『下屋敷』(掛合) △三日目

『八百屋』(菊水)、『酒屋』(鳳玉)、『松王』(品子)、『明鳥』(勝

司)、『壺坂』(万知子)、『先代』(多見次)、『忠四』(嵐玉)、『太

功記』(掛合)

□昭和14 (1939-12-14) 『台湾日日新報』

新興新映画

娘義太夫

脚本／演出 野淵昶

撮影 竹野治夫

【配役】

豊竹小仙……………高山広子

落合小次郎……………市川男女之助

まち子……………松浦妙子

豊竹昇之助……………歌川絹枝

同仙之助……………梅村蓉子

仙之助一座菊助……………高松昌子

同メ虎……………香陵不二根

同小豊……………小川操

同綱之助……………不二初子

同京之助……………山田俊子

まちこ乳母おしま……………郡光子

髪結女……………東明喜子

梗概 頃は文久の初年——ここは近松物の物語りに悲しい蜩川のとおり、近くの寄席万亭の娘浄瑠璃はねたのであらう、降りつづく長雨に曾根崎のさんざめきもひつそりと静まつた夜更け——と、河岸にもやえる苦舟から突然猛々しい船頭の怒声が聞えて若い男が泥濘の道に投出されて来た——蘭法医を志し笈を負うて上阪した丹波の落合小次郎であつた、泥塗れになつたターヘルアナトミア(解体新書)を大事さうに拾ひあげて口惜しさに泣いてゐた

数日後——黄昏の瀬戸内海を播州へ急ぐ船があつた、旅に出

た娘義太夫の華かな一行を乗せた船である、長い水■の果てに沈み行く陽を眺めて、小二郎は限らない運命の不思議さと、自分を救つて呉れた一座の花、豊竹小仙の美しい姿を思ひつづけてゐた、小仙も亦自分の周囲に嘗て見ぬこの純朴な青年の汚れなき瞳と、阿蘭陀文字に熱情を捧げ理想に燃える小次郎の男々しい気魄に何時とはなしに心惹かれるものがあつた——小仙の母仙之助は芸で磨きあげた厳しい人であつた、割れ返る人氣の中に『二十四孝』を語る小仙の浄瑠璃に早くも心の乱れを知つて「芸人の世界に色恋の入るときは芸も身も滅びるのが慣ひだ」と稽古の撥によせて堅く誡めるのであつただだ剽軽者の三味線弾き昇之助だけが人に隠れて二人の仲をあれこれと同情し一人で気を揉むのであつた——盆踊りの夜、一座の厄介者扱ひの小次郎は居たたまれぬ思ひに小屋を飛び出した。追ひ絶つた小仙は身を切る辛さをして造つた旅費を小次郎の手に握らせ、芸人の身は覚束なくとも自分の誠心はきつとあなたを人の世の為に尽す立派な蘭医学者にして見せると勵し誓ひ合つた空しく三年の月日が流れたが——小仙は矢張り侘しい流転の身であつた、華かな誘惑にも身を持して一途に遙かな小次郎に思ひをはせる小仙に浮気な人氣は日に薄れて今は誰も顧る者もなかつた——江戸に出た小次郎は伊東玄朴の象先塾に入門し、その秀で

た学才を認められて、塾頭になる日も近かつた、玄朴の愛娘まぢ子は、ひそかに小次郎に想ひをはせる身であつた、玄朴はこの事を喜び、行先は小次郎をまぢ子と、めあわせ、後継者と目してゐたが、嘗つて仙之助との間に出来た小仙が小次郎の身に関はりあるとは知る由もなかつた

雪の降る或る夜、蜷川に浮かぶ船風呂の小座敷に一人うどんを啜つてゐる小仙の胸には、嘗ての日泥塗れの小次郎を救つたことが思ひ出されて仕方がなかつた。窮屈さうに坐つて泣くみ乍ら美味さうにうどんを何杯も貪り食つた小次郎の純朴だつた姿が昨日のこのやうに思へるのであつた——と剽軽者の昇之助が「小仙はん、何ぼんやりしてんね、吉報や、吉報や小次はんにも逢へる、江戸の旅決まりはつた」と、うどん鉢蹴散らす勢ひで駆け込んで来た

日々と続く東海道——大井川、藤枝を過ぎて江戸上りの娘義太夫豊竹仙之助の一行が賑かに行く、自づと足早やになる小仙に追付いた昇之助が「そない早う歩かんかて目ざす所は江戸や、どつちに着くがな」と、是も明るく明日の小仙の幸福を思つて擲諭するが、扱て——夢に見る小次郎の立派になつた姿を見て、手を取り合つて泣かん日は何時のことであらうか

小次郎とまぢ子の結ばれる日は来た。義理と恩愛に錯綜する

運命の前には所詮小仙も悲しい女であつた。両国の小屋には小仙を祝ふ無数の幟がはためいて、客足を呼ぶ締め太鼓に、場内は破れかへる景気である。総てを諦めた小仙は神憑かれた如くに近松の悲しき物語『酒屋』を語り続けるのだつた。あかあかと面映ゆる灯に、肩衣姿美しく、『廿四孝』を語る小仙の美声に、魅せられた聴衆の中に、人目を憍ぶ伊藤玄朴、小次郎、まち子の姿があつた

□昭和15(1940.4.16)『台湾日日新報』

俳優協会附属の歌舞伎義太夫聯盟

全国歌舞伎に附随する義太夫の太夫、三味線を一同とする組合は震災後連理会の名称で組織されて居たが一昨年事変勃発の際同会積立金全部を陸海軍に献金し、同時に同会を解散して以来今日に至つたが、今回新興行取締規則改正に依つて組合設定が必要となつたので、大日本俳優協会附属の下に帝都劇場に關係する太夫三味線を以て「歌舞伎義太夫聯盟」を組織した、事務所は本郷区龍岡町二二、巖太夫宅に置くが、役員は互選によつて左の如く決定した

常務委員(豊竹巖太夫)、委員(竹本米太夫、同一登太夫、野澤吉作、竹澤仲造)、監事、会稽(竹本鏡太夫)

## 2 台湾日日新報浄瑠璃・義太夫記事一覧

(1) 明治

1898/10/21	1898/10/20	1898/10/19	1898/9/17	1898/9/17	1898/9/13	1898/7/17	1898/6/7	1898/5/8	1898/3/31	1898/1/16	1898/7/15	1898/8/16	1898/7/16	記事年月日
台北の諸典 行物(つき)	本日 の十字 館	淡水館に於 ける上長官 送別会	十字館本日 の芸題	本日 の共衆 会	十字館の替 狂言	素人浄瑠璃 温習会	共衆会	新竹 通信 寄席	台北のもろ もろ	鍾龍の娘義 太夫評の 太夫の評	素人浄瑠璃 会	娘浄瑠璃	女義太夫	記事名
女義	女義	女義	女義	芸妓	女義	素義	女義	女義	門付	女義	素義	女義	女義	芸能
雑報	予告	雑報	予告	予告	予告	雑報	雑報	予告	雑報	芸評	雑報	雑報	雑報	記事 種別
雀の丞										はなふさ				評者
	1898/10/20	1898/10/19	1898/9/17	1898/9/17	1898/9/13	1898/7/16	1898/6/4	1898/5/5	1898/3/31		1898/7/13	1898/8/11	1898/7/16	興行年月日
	台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北	新竹	台北		台北	台北	台北	都市
						府直街		後車路			府前街	北門街	北門街	町名
	十字館	淡水館	十字館	淡水館	十字館	阪友亭	共衆会場	元栄亭		幸亭	丸三商行	一龍亭	一龍亭	劇場
	竹本八重吉一座	竹本八重吉	竹本八重吉一座	玉ずし鈴八	竹本八重吉一座		竹本八重吉一座			鍾龍	天狗連	竹本一座	阿波の娘浄瑠璃	出演者 (浄瑠璃のみ)
	新作道化俄「交際家の大失敗」新作音曲俄「打目寺子屋の段(梅虎)・盛衰記三段目逆櫓の段(八重吉)・忠臣講釈喜内住家の段(八重吉)」	虎丸・誠玉等の講談、八重吉の浄瑠璃等	道化俄(無銭遊興、道化浄瑠璃(堀川、浄瑠璃(蝶八、梅虎)、六助住家(八重吉、平太郎住家(八重吉))	義太夫、琴、手踊(忍夜恋曲者、吹寄、清元)	道化俄(平和の仇討、捕へて見れば主人なり)、浄瑠璃(松王館の段、梅虎、幡随院長兵衛(八重吉)、千本桜すしやの段(八重吉))	梅四、可水、友魚など	千代萩の御殿(梅虎、お駒)三白木屋の段(八重吉)、おしゆん伝兵衛堀川の段(八重吉)、桂寿・吉川虎丸の落語講談	女義太夫、軽口、昔噺、新内、音曲囃		阿漕浦平治住家	鎌倉三代記(喜楽、大功記尼ヶ崎(友魚、亦助住家(語勇、千阿職、松巻)、合邦辻(可水)、寺子屋(梅枝)等			演目
明治31年時点の台北興行界。竹本八重吉だけが上流から下流までの客を寄せ、他の演芸は下流向けののみ。4月から始まった共衆会が中流以上の娯楽場となるよう望む。		軍人幹部送別会の余興					八重吉一座は今度の台南丸で渡台、船中で共衆会塚本幹事の遭遇を得て出演、大評判		台北では流しの義太夫が一段に一円もかかる	大阪出身の女義		人形入り		備考

19 28 00	3 27 00	3 27 00	同	5 18 99	2 18 99	2 18 99	10 28 98	10 28 98	10 28 98	10 28 98	10 26 98	10 26 98	10 26 98	10 21 98
会 素人浄瑠璃	会 浄瑠璃温習	会 余興評	評 淡永館余興	淡永館の例 裏口からの 淡永館余興	今晩の十字 館	寄席の大入 基隆通信	本日の寄席	本日の寄席	見立 興評「食物 共栄会の余 評	評 共栄会余興	館 今晩の十字	興 共栄会の余	館 本日の十字	
素義	素義	女義 女義	女義 女義	女義 女義	女義	女義	女義	女義	芸妓	芸妓	女義	芸妓	女義	
雑報	雑報	芸評	芸評	芸評	予告	予告	予告	予告	芸評	芸評	予告	予告	予告	
			反対老人 娼法芸者						はまのや	雀之丞				
9 26 00	3 26 00	3 24 00	5 18 99	5 18 99	2 18 99	15 日間	10 28 98	10 28 98	10 26 98	10 26 98	10 26 98	10 26 98	10 21 98	
台北	台北	台北	台北	台北	台北	基隆	台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北	
府前街	艇艸													
吉川亭	源屋	淡水館	淡水館	淡水館	十字館	五光亭	幸亭	十字館	淡水館	淡水館	十字館	淡水館	十字館	
基隆・台北の天狗連	竹本八重松、艇艸各様の芸妓及び素人浄	竹本大枝	竹本清登太夫	竹本清登太夫	竹本八重吉一座	金蝶	才吉、小文字、春登代、歳八重、鐘龍	竹本八重吉一座	艇検の小高	艇検の小高	竹本八重吉一座	艇検の小高	竹本八重吉一座	
		落語、踊、浄瑠璃（太功記十段目）、壮士踊り、新内、舞、講談、踊	滑稽咄、清元、舞、源氏節、浄瑠璃梅忠、歌浄瑠璃	新作道化俄三笠山、同人情俄浮世の軽業、浄るり千本松すしやの段（梅虎）、伊勢音頭油屋の段（八重松）、古手屋八郎兵衛古手屋の段（八重吉）	講談、義太夫、新内、浄瑠璃	勝半七酒屋の段（春登代）、人情音頭（小文字）、三梅川二の口村（歳八重）、若旦那遊山話（万朝）、忠臣蔵三ツ目（鐘龍）、懸取万才（文字助）、さか様踊（正玉）	忠臣蔵六ツ目（才吉）、伊勢音頭（小文字）、三勝半七酒屋の段（春登代）、人情音頭（小文字）、三梅川二の口村（歳八重）、若旦那遊山話（万朝）、忠臣蔵三ツ目（鐘龍）、懸取万才（文字助）、さか様踊（正玉）	新作道化女房の一心一幕、いぬ芝居五幕、忠臣蔵八ツ目日本蔵下屋敷（梅虎）、お染久松野崎村の段（八重松）、玉藻前二ツ目道春館の段（八重吉）	三十三間堂棟の由来平太郎住家より木遣音頭まで	三十三間堂棟の由来平太郎住家より木遣音頭まで	新作道化俄「高山羅維能のぼんちえ、大芝居五ツ幕」、新作人情俄「美人の薄命一幕、仙台萩御殿場（梅虎）、色娘昔八丈白木屋の段（八重松）一の谷熊谷陣家（八重吉）	新作道化俄「疑心暗鬼を生ず」、音曲俄「打つや太鼓越路の獅子舞」、女浄瑠璃（一の谷三段目熊谷物語りの段（梅虎）、金比羅御利生記百度平住家（八重松）、三日太平記松上嘉平治住家の段（八重吉）	新作道化俄「疑心暗鬼を生ず」、音曲俄「打つや太鼓越路の獅子舞」、女浄瑠璃（一の谷三段目熊谷物語りの段（梅虎）、金比羅御利生記百度平住家（八重松）、三日太平記松上嘉平治住家の段（八重吉）	
		見れば大枝が十八番丈ありて八重吉に劣らぬ処あり	義太夫老功骨折つたものなり		大評判	松林伯寿の講談・金蝶の義太夫								

10/16 1901	10/16 1901	3/29 1901	2/19 1901	2/19 1901	1/13 1901	12/13 1900	12/12 1900	11/9 1900	11/9 1900	10/5 1900	9/28 1900	
淡水館月例 会(つゞき) 余興	淡水館月例 夫 順子の義太	雀連の素人 浄瑠璃 順子の義太	新起亭の大 寄	基隆の素人 浄瑠璃会	義太夫の行 旅病人	浄瑠璃温習 会一口評	淡水館浄瑠 璃会一口評	亭 今晚の新起	今川亭浄瑠 璃	新起亭の語 物	新起亭今夜 の語物	
芸妓 芸義	芸妓 芸義	素義 素義	女義	素義	素義	芸妓	芸妓	女義	素義	女義	女義	
芸評	雑報	雑報	予告	雑報	雑報	芸評	芸評	予告	予告	予告	予告	
不明		3/27 1901	2/19 1901	2/16 1901				11/9 1900	11/9 1900	10/5 1900	9/28 1900	
台北	台北	基隆	台北	基隆	台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北	
			新起街		艇脚			新起街	府前街	新起街	新起街	
淡水館		福楽座	新起亭	福楽座		淡水館	淡水館	新起亭	吉川亭	新起亭	新起亭	
八重吉(三味線)踊 りは順子、留吉	橋弁慶か代、半若丸、 染八(弁慶)、おちか、 八重吉(三味線)踊	順子、竹本八重吉	大枝	雀連	和歌大夫			若鶴、若玉、大枝、小 若?		若玉、亀鶴、小若?	若玉、 亀鶴、小若?	
慶 常磐津(辰橋)、道化俄(忠臣蔵五段目)、橋弁			落語(小芝楽)新内(豊鶴)落語(文字助)新 内(若玉)素はなし(福三)新内(飛鶴)新作 落語(権兵衛)源氏節(若伴)義太夫(大枝) 即席(光芝)新内(小若)人情講談(誠玉)大 切娘連中手踊狂言			狐火(花吉)、新吉原(市六)、鈴が森(為八)、 千代萩御殿場(おもん)、蝶花形(住)、梅忠 (小半)、二度目(か代)、三味線(梅八)、三日 太平記(成駒)、六助住家(住栄)、紙治(す め)、油屋(万野)・成駒、おこん(住)	御祝儀(入登太夫、白石羅、豊鶴)浦里詫住居 (至三)三日太平記(大枝、千両職聲)(誠玉) 由井流千軒長者(小若)落語(文字助) 太十(秀八)、三浦別れ(春路)、平太郎住家(歌 吉)、三十三間堂の下の巻(綾子、琴責(留吉)、 琴胡弓つや、利生記(幾久)、判官切腹(小勇)、 忠臣蔵茶屋場(徳拱合)	菅原伝授手習鑑四ツ目(錦石)三十三間堂棟木 由來(柳枝)加古川本蔵下屋敷(十三)伽羅先 代萩(相生)忠臣蔵六ツ目(竹本一三五大夫)	御祝儀(入登太夫)お品福助(豊鶴)五右衛門 嘶(文字助)かさね士橋(小若)講談義士銘々 伝(誠玉)	御祝儀(入登太夫)疍賞札掛(豊鶴)日高川(若 玉)滑稽落語(竹馬)小(四字不明)心中(小 鶴)講談馬術(福対)(誠玉)国分寺三庄大夫(小 若)音曲落語(文字助)		
	西檢の芸妓順子、竹本八重吉に 弟子入りし、下手な義太夫で夫 を苦しめる。	満場立錐の余地なき大入り		近來稀れる大入	伊予松山の蔵元当主、浄瑠璃稽 古に入れあげて破産。和歌大夫 を名乗り台湾へ興行に来たがマ ラリアにかかり、艇脚支置の御 厄介に、「御当地でも随分浄るり や清元が流行する様子です。」 芸事に身を持ち崩してはいけな い。							

10/16 1903	7/14 1903	同	4/24 1903	3/4 1903	2/26 1903	8/23 1902	6/8 1902	5/31 1902	1/29 1902	10/16 1901
会素人浄瑠璃	浄瑠璃会	同	め南龍の夫定	大会素人浄瑠璃	の梵語浄瑠璃本中	習浄瑠璃大温	夫温習会	女義太夫鶴澤重八	十把一束	亭今晩の新起
素義	素義	同	女義	素義	義大夫	素義	素義	女義	芸妓	居人形芝
予告	雑報	同	雑報	予告	論説	予告	予告	雑報	投書	糸操り
					上田恭輔					
10/16 1903 17	7/12 1903	2より	1903	4/5 1903	2/24 1903	8/23 1902	6/7 1902 8			10/16 1901
台北	台北	基隆	台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北	
北門街	北門街		北門街	北門街		府中街	大湊口街	石防街		
北門亭	土橋商店	福祿屋	北門亭	北門亭	淡水館	家大倉組隣	河原	だるま寿司二階		新起亭
		竹本南龍	竹本南龍	竹本八重松門人中		竹本八重連中(高砂連)	軀軀の竹本八重松門人中、基隆の素人連	鶴澤重八		千両幟…竹本小八重、白石噺…竹本若菜、萩祭文…竹本時松、琴責…竹本若花
十六日 宝入船(福来)彦山九(松光)賢女鑑(小柳)一の谷陣屋(都)大功記十段目(美笑)おちよ半兵衛(都)安達原三段目(梅枝)忠臣蔵本蔵下屋敷(都雀)中入後、累物語土橋(南木)天網 ※以下スキヤン範囲外				御祝儀、八陣本城(小八重)合邦住家(宮本)忠臣蔵三段目(鶴子)毛谷村六助住家(白目)明烏山名屋(繁)梅忠二の口村(花笑)時雨炬燵紙治内(助六)鏡見山又助住家(可憐)三十三間堂柳(懸)太閤記十(梅枝)弁慶上使(徳勢)惣五郎子別れ(都雀)安達原三(喜來)本蔵下屋敷(十三)三味線(八重松、大吉、常子)				壺坂靈験記		千両幟猪名川内、白石噺揚屋、袖萩祭文、琴責、東獅子の一曲(新内(廊文章))
	種草「花月」売込め祝い		美貌で知られる竹本南龍、基隆のファンと熱愛			毎月月並温習を催すといふ	基基督教青年会講演、2/28まで三回連載。上田は「東西の文学に精通せるドクトル」、下記リンクによれば比較言語学者、見玉源太郎総督秘書、のち満鉄幹部 http://www.shotoku.com.or.jp/db/jinbu/2904	「久しく軀軀の女義大旦に牛耳を執りたりしはね馬事竹本八重松は今度帰国するに付き」開催		台北芸妓評「義大夫の旨いは西の染八声のよいは東のおえん」、鶴澤重八の経歴(備後生まれ、重造門下、1898(頃東京進出)と渡台。素義・芸妓しかない台湾に「本色の大夫」が来るのは心強いと歓迎。



同	10 1 9 22 0 3 /	同	10 1 9 21 0 3 /
同	台北の義太 夫界(下)	同	台北の義太 夫界(中)
同(芸 妓上が り?)	素義	同	素義
同	評判記	同	評判記
店、旧名繁心)	女将・おちか太夫 島檢、台湾一の大天 狗、松之江女将、小六、 幾久女将(旧名助六)、 だるま女将(西洋料理 店、旧名繁心)	八光(提灯屋)、花笑(三 味線屋)、南木太夫(金 庫屋)、暇遊(芸妓お ことの亭主深見君、 白鳳(近江屋の弟、 栄旭(近江屋隣の印刷 屋)、藤岡不二太夫(大 倉組社員)、平茶(雜 貨屋)、三日月、色煎 館屋)、可笑(古道具 屋)、寿玉(古道具屋、 都山太夫(松坂君、 寿山(専売局の守衛、 錦石(おかず屋)、美 笑(職工)、一鳳(船 大工)、栄(御用商人 北川)、十四太夫(日 本亭の飯場)、十一(日 本亭の飯場)、寿太夫 (毒)、春香太夫(高等 待合はてい主人)、塚 本小柳太夫(徳永商店、 柳枝太夫の弟子)	

11 9 0 3 /	11 9 0 3 /	11 9 0 3 /	11 9 0 3 /	同	同	同	同	同	同	同				
同	同	台北座の素 人淨瑠璃	黄菊白菊	同	同	同	同	同	同	同				
同	同	素義	女義・ 義・ 義	男義	女義	同	俳優	芸妓	芸妓	芸妓				
同	同	予告	評判記	同	同	同	同	同	同	同				
11 9 23 0 3 /	11 9 22 0 3 /	11 9 21 0 3 /												
台北	台北	台北												
台北座	台北座	台北座												
			衛 竹本八重吉、足利利兵衛 (十三太夫)	男師匠・時太夫(台北座竹本)、東太夫(柴座竹本)、野澤庄吉(柴座?)	京新下り 八重(八重松の義弟子の有望株)、政重(東)	駒八、六助の玉六、小八重(八重松の義弟子の有望株)、政重(東)	女師匠・八重吉、八重松、鐘龍(森梅の妻、常子(鍛冶屋の妻、澤連の師匠)、米八の)	金(家幸の子)	栄座俳優・五郎、駒之丞、扇平、岡之助、百々藏、梅一、眼之助、小金(家幸の子)	八重七、鶴三郎	台北座俳優・三司、小福、小吉、小仙	日本亭の芸妓・小勇、小福、小吉、小仙	芸妓・政吉(呂太夫の娘)、園香(京都出身、住栄(名古屋出身、留吉(名古屋出身、お茶良、奴、お染、村八(高砂検)、滝尾(高砂検))	
合、糸(鐘龍(八重松)(重八)	佐倉曙義作内(十四)志度寺(十三)忠臣蔵山科(都倉)妹背山芝(六)寿楽、明烏揚屋(柳枝)毛谷村六助(国松)賢女鑑片岡(小柳)松王下屋敷(相生)阿漕(五郎)大切本藏下屋敷惣掛合、糸(鐘龍(八重松)(重八)	鏡山又助(十四)合邦(十三)近江源氏(寿楽)助四(寿楽)鈴が森(柳枝)吃又平(澤村次住家(国松)勘作住家(嵐三司)鏡山長局(実川八百七)百度平住家(相生)大切忠臣蔵惣掛合	岸姫の三(中村駒之丞)日吉の三(十三)忠臣蔵(四)寿楽)鈴が森(柳枝)吃又平(澤村次住家(国松)勘作住家(嵐三司)鏡山長局(実川八百七)百度平住家(相生)大切忠臣蔵惣掛合											天狗連の相生、柳枝、寿楽が発起となり素人淨瑠璃会を催す由にて毎日午後四時開演木戸場代無料

7 19 14 0 4	6 19 25 0 4	6 19 5 0 4	3 19 16 0 4	2 19 10 0 4	1 19 16 0 4	12 19 3 0 3	12 19 2 0 3	12 19 1 0 3	11 19 26 0 3	11 19 15 0 3
台北座 浄瑠璃 大会	会 都連 浄瑠璃	会 素人 浄瑠璃	浄瑠璃 会 檀兵 献金の 太夫会	北門亭 の義	若松連 の浄 瑠璃会	梨園 雜俎	浄瑠璃 狂	北門亭 の女 寄と新 伯知	十把一 束	タレ義 太の 四タレ
素義	素義	素義	女義	素義	素義	俳優	女義・ 素義・ 素義	女義	女義	女義
予告	予告	予告	予告	予告	予告	雑報	雑報	予告	投書	雑報
									堂摺生	
7 19 13 0 4 15	6 19 25 0 4	6 19 7 0 4 8	3 19 19 0 4		1 19 16 0 4 17		二三日 前	12 19 1 0 3		
台北	台北	台北	台北	台北	不明	台北	台北	台北		
				北門街			西門外 街	北門街		
台北座	北門亭	台北座	淡水館	北門亭			松方	北門亭		
	竹本八 重松、 小八重、 都連	竹本重八、 老松連	竹本八重 吉発起		野澤三 次郎、 若松連	俳優の 義太夫 芸名、 多見松 は梅幸	野澤三 次郎、 若松連 の弟子 常子	竹本八 重松、 白牡丹 太夫 常子	小八重	竹本重八
	鈴ヶ森(柳香)弁慶上使(米八)先代御殿(余奈)ニヶ崎(小柳)春香(玉三)野崎(紙治)茶屋場(柳枝)岸姫(相生)吉の三(本藏)下屋敷(十三)重の井子(別)揚巻助(六)大文字屋(重八)	八陣(小八重)三代記(八)都喜和(二度目)清水(都松)日吉丸三(都鳥)太功記(十)司(千代)秋御殿(都水)柳(松鶴)梅よし(鶴子)三日本平記(不二)明鴉(梅枝)布引四(相生)三味線(竹本八重松)等			以上十七日、三味線(三次郎)				落語、義太夫(小八重)、西洋奇術、講談、剣舞	
台北基隆聯合素人浄瑠璃大会	木戸下足は勿論無料	下足料三銭木戸場代無料	献金の方法は凡て其語るものが分担願金し来聴者は一切無料	スキャン枠外のため詳細不明	最近渡台した野澤三次郎を迎えての浄瑠璃会		浪物屋が八重松の稽古を聞き、自分の師匠の常子とちがら上手いか聞いて詰めて八重松を困らせる			竹本南龍(新起横街二丁目)の弟子・南吉、九州の実家へ送金を怠り、師弟ともに警察から説諭される

6/19 24/05	6/19 1/05	3/19 11/05	2/19 11/05	12/19 2/04	10/19 22/04	10/19 9/04	10/19 8/04	8/19 20/04
台北座の素人浄瑠璃	寄贈	素人義太夫会	浄瑠璃会	蒼連の義太夫会	追善浄瑠璃大会	別義太夫会	送別義太夫会	追善浄瑠璃会
素義	素義	素義	素義	素義	素義・女義	素義	女義・素義	女義・素義・芸妓
予告	雑報	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告
6/19 24/05 25		3/19 11/05 12	2/19 11/05	12/19 3/04 4	10/19 23/04 25	日程未定	10/19 10/04 12	8/19 20/04
台北		台北	台北	台北	台北		台北	台北
台北座		北門街	隣の本社部	北門街	台北座		台北座	武蔵屋
蒼連		蒼連・他連合同			竹本鐘龍、鞍馬連、都連つばみ連、老松連、雀連等		都連(八重松門下)、蒼連・若松連三派合同	竹本八重吉、鐘龍、鞍馬連
白鳳軒(三味線) 竹本重八(豊竹東太夫)	先代萩(一風) 浜松の段(花笠) 桂川帯屋(貴司) 菅原四(都鶴) 二度目(枝雀) 御所萩三(不三) 日吉丸三(二声) 安達原三(梅枝) 染分手綱子別れ(柳枝) 箱根滝の段(三五太夫串白風軒) 以上二十四日役 加賀見山五(一福) 太功記十(三洋) 柳(花笠) 三勝半七(貴司) 菅原四(枝雀) 日吉丸三(不三) 御所萩(梅枝) 百度平(二声) 新吉原揚屋(柳枝) 三日太平記(白鳳軒)	枝、百度平(相生、野崎村(柳枝))	11日・千代萩(一風、志度寺(三洋、廿四孝(都水、浜松小屋(枝雀、日高川(貴司) 御所萩三(松鶴、玉藻前三(十四、本蔵下屋敷(十三) ▲12日 橋弁慶(九三、浜松小屋(花笑、本蔵下屋敷(十二)、柳(南木、先代萩(不三、お千代半兵衛(八十一、日吉丸三(梅枝、百度平(相生、野崎村(柳枝))	▲三日、先代萩(笑) 志度寺(三洋、菅四(魁二度目(一枝、日吉丸(十一) 蝶花形(亀龜新二村(花笠) 玉三(松鶴) 御所萩(二声) 阿漕浦(十四) 酒屋(十三) ▲四日、太功記(一風) の谷(松雀) 助作(都水) 寺子屋(枝雀) 又助内(不三) 皿屋敷(十四) 本蔵下屋敷(十三) 帯屋(室司) 袖萩(梅枝) 鳴戸(南木)	玉藻前三段目(金露) 鎌倉二代記(嚙) 先代萩御殿(都水) 本蔵下屋敷(十一) 弁慶上使(松鶴) 三十三間堂柳(南木) 三日太平記(不三) 百度平(一声) 八陣本城(梅枝) 播州皿屋敷(十四、合邦下の巻(十三))		都連(八重松門下)、蒼連・若松連三派合同	式三番(八重吉) 千両織(とよ) 二度目(叶) 天網鳥(松の江奴) ニヶ崎(台北橋おぢや) 三莊太夫(同園香) の谷陣屋(花蝶) 松下住家(台北橋住家) 鏡山又助(秀人) 堀川(梅八) 伊賀八(呂三) 日吉丸三(雷石) 柳(鈍八) 阿漕(冬木) 中入後御所萩上使(重爾) 六合住家(二葉) 四段目(古亭) 臺坂(一風) 合助住家(卷(十三) 壇浦兜軍記掛合遊君あこや(古亭) 味縁(八重吉) 重忠(重 橋沢六郎(十三) 三味縁(八重吉) ツレ(幸久) 琴胡弓(台北檢さく) 糸(松の江しを) 幾久ひさ(日高堂さく) (初音さく) (竹本鐘龍)
	12月50銭寄附				竹本鐘龍が亡父鐘大夫の十七回忌追善	都合により無期延期	竹本八重松10/25内地へ引き揚げの送別	竹本八重吉が亡父母の遠忌追善

2/23 1906	浄瑠璃大会 素義 予告	1/7 1906	高専文官招 宴総督 不明 雑報	11/18 1905	送別浄瑠璃 会 素義 予告	11/15 1905	桃園慈善会 ドレコー 雑報	8/24 1905	素人義太夫 会 素義 予告
2/23 1905	台北 台北座 基隆雀連 天狗連 台北香連	1/3 1905	台北 官邸 仮民政長	11/19 1905	台北 新起横街 台北座	11/10、11 1905	桃園 桃園街 館内 林家之租	8/23、24 1905	台北 栄座
福之助(十三)三味線(東)鳴物(楽屋)唄(小	御祝儀(宝入船)三日太平記(梅土)明烏山名屋(梅枝)朝顔日記(花笠)沼津(南木)鳴門(鴨子)太功記十(弥生)加賀見山又助(五字)御所松三(三洋)新吉原揚屋(貴司)忠臣蔵本蔵(亀鶴)合邦(白風軒)千両轆猪名川内掛合猪名川(都水)大阪屋若者(一)鉄ヶ嶽(松鶴)角力使(三)おとわ(不)三味線(三)次郎)菅原寺子屋掛合、松王(十三)千代(花遊)玄蕃(弥生)百姓子供(十)御台(五音勇)菅秀才(三)戸浪(一)源蔵(余雀)力弥(三)線(三)治郎)忠臣蔵一力の段掛合、平右衛門(十)雀(九)大夫(余雀)伴内(音勇)力弥(三)おかる(相生)重太郎(三)治郎)弥五郎(由良)喜多八(都八)亭主(貴司)仲居(大勢)花笠	合奏音曲義太夫等之余興	見玉総督凱旋祝賀会	重八(春花)三次郎)	御祝儀(福寿)太功記七(二葉)布引四(二重)平治内(是調)日蓮記三(都水)朝顔宿屋(松鶴)三勝酒屋(不)紙箱内(一)本蔵下屋敷(相生)合邦下(十三)安達三(梅枝)野崎御枝菅原四(白風軒)大切掛合妹背山々の段小葉(二重)栞樓(福寿)雛鳥(相生)久我之助(柳枝)定高(白風)大判事(十三)糸(乘)	御祝儀(福寿)太功記七(二葉)布引四(二重)平治内(是調)日蓮記三(都水)朝顔宿屋(松鶴)三勝酒屋(不)紙箱内(一)本蔵下屋敷(相生)合邦下(十三)安達三(梅枝)野崎御枝菅原四(白風軒)大切掛合妹背山々の段小葉(二重)栞樓(福寿)雛鳥(相生)久我之助(柳枝)定高(白風)大判事(十三)糸(乘)	御祝儀(福寿)太功記七(二葉)布引四(二重)平治内(是調)日蓮記三(都水)朝顔宿屋(松鶴)三勝酒屋(不)紙箱内(一)本蔵下屋敷(相生)合邦下(十三)安達三(梅枝)野崎御枝菅原四(白風軒)大切掛合妹背山々の段小葉(二重)栞樓(福寿)雛鳥(相生)久我之助(柳枝)定高(白風)大判事(十三)糸(乘)	尺八・洋琴・琴・笛・三絃の合奏、蓄音器(落語)筑摩川、勸進帳、寺子屋之浄瑠璃、活人写眞(桃太郎)小楠公、小督、曾我夜討、活動	24日・朝顔宿屋(南木)、柳(松鶴)、蝶花形八(亀鶴)、十種老新吉原(花笠)、先代御殿(都鶴)、寺子屋(魁)、三勝酒屋(貴司)、尼が崎(梅枝)、弁慶上使(一)、鈴ヶ森(不)、二合邦の下(白風軒)、糸(東太夫)
					笠松柳枝太夫の大連渡航につき送別会		桃園之婦人慈善会支部之音楽会。内地人・本島人ともに来会。	白風軒新規参加、西門外街の齒科医、もとは内地で玄人だったこともある素人離れした名人	



6/22 1907	6/22 1907	6/22 1907	同	同	6/19 1907	6/19 1907
朝日座の今 晩の語物	十把一東	瑠璃の義金浄瑠璃	同	同	瑠璃朝日座の浄瑠璃	夜会の余興
文楽	文楽	文楽	同	同	文楽	文楽
予告	投書	予告	同	同	予告	芸評
	連					一里者
6/22 1907		6/23 1907	6/19 1907	6/18 1907	6/18 1907	6/17 1907
台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北
朝日座	朝日座	部台北俱楽	朝日座	朝日座	朝日座	総督官邸
竹本大島太夫一座	竹本大島太夫一座	竹本大島太夫一座	竹本大島太夫一座	竹本大島太夫一座	竹本大島太夫一座	竹本大島太夫一座
御祝儀室入船（竹本松島太夫（鶴澤仲吉）彦山権現毛谷村六助住家（竹本鞍登太夫（鶴澤勝之助）阿波崎戸十郎兵衛住家（竹本山城太夫（鶴澤伴太郎）忠臣蔵六目助平腹切（竹本津はめ太夫（鶴澤仲治）桂川連理柵（竹本大島太夫（鶴澤仲助）大切御好につき歌舞妓十八番義太夫勸進帳（太夫総掛合三味線 仲助（仲治）（仲太郎）（勝之助）			鞍登太夫の十種香、山城太夫の油屋、津はめ太夫の弁慶上使、大島太夫の堀川等			乗合萬成、勸進帳安宅問所の段（弁慶竹本大島太夫、富屋山城太夫、義経つばめ太夫、海尊鞍登太夫、三味線鶴澤仲助、連れ弾き仲治、仲太郎、勝之助）お兼晒しヴァイオリン、彈奏、劍舞、五人はやし引我夏船頭
婦人慈善会主催、監勇前進隊の慰問義金（午後六時より）一枚一円宛の切符二百枚限り	大島太夫は艶物ばかり出しているが時代物を望む。つばめ太夫は本筋の浄瑠璃だが声を潰して聞き苦しい。山城太夫の世話物は実に感心。				当地の吾妻、魚金、日本亭の三大料亭が請元となり……木戸三十銭場代は特別一円五十銭一等一円二十銭八十銭割二十銭	総督府始政記念会余興。久しく太棹に渴して居た処へ大隅太夫に亜ぐ大島がやつて来たといふ評判は船がまだ基隆棧橋へ着かぬ前から人々の口に伝へられて居たので当夜参会の面々は固唾を呑み呼吸を殺して聞惚れて居たもの無理はない、殊に出し物が出し物だけに一層我人の耳を刺した。待ち焦がれた聴衆の受けはお話にならず其の幕となつた時の如きはさしもの物事に騒がぬ紳士連も此時ばかりは殆ど狂喜の態で拍手喝采漸く止んだかと思ふと後はアリアといふ感嘆の聲暫くは動揺めき巨つた。



3/6/8/0/8/	2/21/0/8/	2/19/0/8/	2/16/0/8/	1/14/0/8/	1/12/0/8/
東寧連の浄瑠璃会	聯合浄瑠璃会	基隆雀連の浄瑠璃会	積古屋親 浄瑠璃東太夫	素人浄瑠璃会	互友連浄瑠璃会
素義	素義	素義	素義	素義	素義
予告	予告	予告	雄報	予告	予告
			李大郎		
3/6/8/7/	2/21/0/8/23/	2/18/0/8/19/		1/14/0/8/	1/12/0/8/
台北	台北	基隆		台北	台北
朝日座	新起横街 台北座	公会堂		新起街 一力	府前街 店
東寧連	基隆、台北の素人連	雀連、三味線三次郎、芸妓連	鶴、喜楽(不二)	蒼連改め東寧連	互友連
夫、小蝶 功記七ツ目(喜楽)朝顔日流浜松(亀鶴)三味線東太夫 見山又助内(於多福)壺坂花の山、御所松三段目(忠臣蔵六ツ目)国姓爺三洋(血屋敷、太夫) 阿波鳴門八ツ目、鎌倉三代目(一水)加賀見山又助内、鬮鏡別場(一笑)日吉丸三段目、岸松三段目(米花)先代萩御殿(都鶴)太功記三段目、鱈七上使(可笑)由良港汐汲、三十三間堂(だるま)菅原四段目、本藏下屋敷(鱈)忠臣蔵二番目、信功記(南勢)阿漕平治内、加賀見山又助内(於多福)壺坂花の山、御所松三段目(忠臣蔵六ツ目)国姓爺三洋(血屋敷、太夫) 初日伊勢音頭油屋、中日菅原寺子屋、三日目お染久松野崎村	箱根(靈験滝の場(都鶴)、血屋敷鉄山館(喜楽)、阿波十(不二)) 安達ヶ原三(可笑)三日太平記九(ねぶか)忠臣蔵三(福雀)日吉丸三(呉服)紙治内の場(小ふじ)野崎村(京糸)玉藻前三(大石)太功記十(弥生)鏡山又助内(吾才)本藏下屋敷(十雀)阿波鳴門八(かしく)大日本旭旗揚旗順攻撃(小)壺坂沢市内(松雀)彦山九ツ目(糸雀)千本桜三(吾勇)二十四孝十種香より狐火まで総掛合(小あじ、若初、小美、琴豆)以上十八日分一の谷舞谷陣屋(一團)鏡山又助内(福雀)梅の由兵衛内(小妻)菅原松王屋敷(ねぶか)中将姫雪貴(春助)太功記十(駒功助)三十三間堂平太郎内(大石)賢女舞十(弥生)日吉丸三(吾才)忠臣蔵六(糸雀)紙治内の場(松雀)お後伝兵衛堀川(小)阿漕浦平治内(十雀)四ツ谷怪談伊右衛門内(かしく)百度平内(吾勇)伊勢音頭総掛合(糸雀、小、やよひ、吾勇、かしく、十雀)以上十九日分)	豊竹東太夫、弟子(都鶴、喜楽(不二))	蒼連改め東寧連	互友連	
午後六時より	木戸場代無料 午後六時より			蒼連改め東寧連での豊竹東太夫の積古風景。	

9/19 1908	6/26 1908	6/24 1908	6/9 1908	6/9 1908	5/29 1908	5/15 1908	5/12 1908	5/1 1908	3/27 1908	3/14 1908
鞍馬連浄瑠璃大会	歓迎余興	げ太夫の打揚義	朝日座娘義の語り物	朝日座の娘義太夫	朝日座の娘浄瑠璃	合同浄瑠璃会	朝日座の浄瑠璃会	鞍馬連の浄瑠璃会	朝日座の素人浄瑠璃会	基隆の浄瑠璃会
素義	芸妓	女義	女義	女義	女義	素義	素義	素義	素義	素義
予告	予告	予告	予告	芸評	予告	予告	予告	予告	予告	予告
				名代男						
9/20 1908	6/27 1908	6/25 1908	6/9 1908	不明(三日目)	来月早々	5/15 1908	5/11 1908	5/2 1908	3/27 1908	3/16 1908
台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北	基隆
								西門街		
部 法曹倶楽	彩票局	朝日座	朝日座	朝日座	朝日座	朝日座	朝日座	部 法曹倶楽	朝日座	日本亭
鞍馬連	台北檢				大阪の娘浄瑠璃一座	東寧連・核鳴連	基隆雀連	鞍馬連	東寧連	雀連
平記(呂三)	六玉川(台北檢)、六歌仙(高砂檢、浄瑠璃芳衛総踊(台北檢)、石橋(福柳檢)) 御祝儀宝入船(可)壺坂(一重)毛谷村(古亭)忠臣蔵四(蘭風)二度目清書(一葉)八陣(平水)布引四(二三)平次住家(冬木)三日太		近江源氏八つ目(亀之助、伊賀越沼津の里(尾の治)、彦山権現九つ目(浪亀、二十四孝三段目(浪米)阿波鳴門八つ目(光玉)、安達原三段目(小浪))	大江山(亀之助)八台郡(尾の治)、酒屋(浪亀)日吉の三(浪米、船川(光玉)、腰盛伏三段目(和泉三郎の館(小浪)、三味線・町造ほか)	豊澤町の助(一六)竹本亀之助(一六)豊竹尾の治(四)竹本咲菜(一八)竹本千代治(二二)豊竹光玉(二三)竹本小浪(二七)三味線豊澤町七	「殺行不明」吉原(友枝)本蔵下屋敷、重の井子別(松鶴)御所検三段目、忠臣蔵四つ目(白風軒 糸(東太夫)(小蝶))	宿屋(梶子)大日本旭の旗上げ旅順攻撃の段(小)赤垣出立(弥生)忠六(糸雀)菅四(十雀)鳴戸の八(かし)百度平内(吾勇)掛合油屋、貢(糸雀)喜助(かし)北六(叶)掛合(吾勇)岩谷(弥生)おこん(小)万野(十雀)三味線野澤三次郎	梅川忠兵衛新の口村(都水)松下屋敷(五二)二度目清書(二葉)白石斬馬屋(古亭)箱根道の談(蘭風)掛合堀川の段、母(呂三)おつる(蘭風)伝兵衛(同)おしゆん(都水)与次郎(古亭)糸(八重吉)ッレ千賀子)	御所桜の三(一葉)合那下の巻(巴昇)加賀見山の五つ目(米花)本蔵下屋敷(十一)寺子屋(龍鶴)日吉の三(於多御覽の仇討十一冊目(龍鶴)岸姫の三(不)壺坂清内(小鏡峨)平衛門の切腹(嘉菜)三日太平記九つ目(亀鶴)逆櫓(白風軒)三味線(東太夫)等	太功記十段目(紅雀)三日太平記三(ねぶか)本蔵下屋敷(福雀)忠臣蔵塞門(小)玉澤前三段目(大石)賢女鏡十(弥生)日吉丸三つ目(吾才)鏡山又助住家(十雀)忠臣蔵六つ目(糸雀)二代鏡秋津島内(かし)お俊伝兵衛堀川(吾勇)三勝半七酒屋(松雀)大切忠臣蔵茶屋場総掛合、三味線三次郎
	「新方伯」新任の民政長官(大島久瀧次)夫妻歓迎余興			「要するに此の一座の客種は、三戸朝日座主が来阪し契約「真打の小浪は京阪中にて美貌美声の評あるもの」				午後六時より	西門外街の安原会主となる午後五時より	



19110	121909	111909	91909	91909	91909	81909
巾幗初会	瑠璃 朝日座の浄	瑠璃会 鞍馬連の浄	演芸雑俎	爱国婦人会 活動写真	義捐浄瑠璃	義捐素人浄 瑠璃会
不明	素義	素義	女義	不明	素義	素義
雑報	予告	予告	芸評	予告	予告	予告
19910	121909	111909	91909	19909	91909	81909
台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北
支那医院	朝日座		朝日座	台北演芸場	朝日座	朝日座
赤十字社	東寧連		竹本国芳			
義大夫三曲及其他福壽等為余興	御祝儀宝の入船、百度平、四ツ谷怪談(一声) 彦山権現、岸姫松(米花) 弁慶上使、三日太平記(鹿生) 三十三間堂、合邦住家(小嵯峨) 七酒屋(佐藤) 本蔵下屋敷、日吉丸(亀鶴) 又助住家、弁慶上使(肥声) 三味線東大夫、松助		源氏節(岡本美根二)、娘義大夫(竹本国芳)、諸芸大寄せ(早口、手品、落語など)	活動写真「狸野の夜嵐」(曾我兄弟討入より五郎捕縛まで)の前後を義大夫で繋ぐ ※「狸野の嵐」Mパター、1909/08/01 封切あり。内容未詳。(映画D B、日本映画データベース)	阿漕平治内(一声) 岸姫松及毛谷村住家 采花(日吉丸三段目及二度目清音(珍宝) 玉藻前) 花笑 千本松すしや及番掛(雷雀) 鷺滝(鱒) 日吉丸三及杉の森(語蝶) 壺坂及合邦(小嵯峨) 太十及お胸才三鈴森(燕司) 蝶花形(三洋) 浜松及五右衛門釜入(亀鶴) 宗五郎及百度平(勝木) 太十及先代萩(松鶴) 弁慶上使及亦助住家(肥声) 四谷怪談血屋敷及秋津高切腹(白鳳軒 掛合初日目忠臣蔵本蔵下屋敷本蔵(松鶴) 伴左衛門(雷雀) 二日目菅原四段目松上(肥声) 之助(小嵯峨) 同日目菅原四段目松上(肥声) 玄蕃(亀鶴) 源蔵(勝木) 戸浪(松鶴) 千代(小嵯峨) 百姓(燕司) 同日目忠臣蔵六つ目助平(吉) かや(三洋) 郷右衛門(本花) 弥五郎(亀鶴) 角兵衛(雷雀) 種々鳥六(小嵯峨) 滅法(八(肥声) 三味線竹本松助、同たつ女、豊竹東大夫)	平治住家(一声) 宗五子別れ(梅枝) 岸姫松兵衛館(米花) 加賀見山又助住家(常盤) 日吉丸五郎助住家(珍宝) 血屋敷鉄山館(麟鳳) 玉三(花衣) 染分手細香掛村(雷雀) 阿波十(語蝶) 壺坂沢市内(小嵯峨) 膝栗毛並木(吾勇) 太十(燕司) 蝶花形八つ目(三洋) 朝顔浜松小屋(弁慶) 宗五郎子別れ(勝木) 松下屋敷(松鶴) 弁慶上使(肥声) 補助、本蔵下屋敷(柳枝) 酒屋(相生) 合邦住家(白鳳軒) 三味線(東大夫、松助、アイ) 大切掛合は初日寺小屋、二日目忠臣蔵六つ目、三日目野崎村
初会式	篤志看護婦人会台北支会の新年	スキヤン枠外のため詳細不明		1週間内地人向け興行の後、1週間本島人向け興行あり(観覧自由)。活動写真前後に義大夫を奏するの観客の目と耳を休ませるため。 「国芳は以前とは違ひ場数をこなした丈けあつて若いに似合はず喉も出来調子も好く語口に余裕が出た丈け修業が積んだ証抱此分で行けば将来有望」		大阪大火義捐 入場券15銭均一 ※9月1日延期・演目変更



1914 11	1913 11	同	12/26	11/9	11/8	同	10/30	10/20	10/14	10/13	10/12	10/11
義太夫初大会	陣中之元旦	同	七面棒	台南演芸	台南公館の娘義太夫	同	女義太夫一	娘義太夫	娘義太夫	娘義太夫	娘義太夫	娘義太夫
素義	ドレコー	素義	女義	女義	女義	同	女義	女義	女義	女義	女義	女義
予告	雑報	同	雑報	雑報	予告	同	予告	予告	予告	予告	予告	予告
1915 11	1911 11		12/24	11/07	11/07	10/30	10/27	10/20	10/14	10/13	10/12	10/11
台北	南投 蕃山		台北	台南	台南	台中	新竹	台北	台北	台北	台北	台北
			府前街									
女紅場			朝陽亭	台南公館	台南公館	竹聖倶楽部	芳野亭	芳野亭	芳野亭	芳野亭	芳野亭	芳野亭
東寧連(たかさね)			竹本千代登一座	竹本千代登一座	竹本千代登一座	竹本千代登一座	竹本千代登一座	竹本千代登一座	竹本千代登一座	竹本千代登一座	竹本千代登一座	竹本千代登一座
風軒(三味線(東太夫))	御祝儀(入登) 祇屋右兵衛内の段(一声) 日吉丸(米花) 鈴ヶ森(二枝) 三日月平記 筑紫悉玉 深前(蝶) 野崎村(目松) 酒屋の段(小睦) 巖(相生) 忠臣蔵四段目(稻葉) 儀作内の段(白)	筑前琵琶義太夫其他数種之高音器					恋女房重の井子別(千代志) 日吉丸三段目(錦木) 二十四孝十種香(团菊) 普原寺子屋(花千代) 加賀見山七(目) 千代登 お駒才三鈴ヶ森(国芳) 太珑記(総懸合)	先代萩御殿場(千代玉) お千代半兵衛八百屋の段(錦木) 日吉丸三段目(团菊) 伊勢音頭油屋の段(花千代) 二十四孝十種香の段(国芳) 三十三間堂原太郎内(千代登) 大切総掛合忠臣蔵本蔵下屋敷(本蔵国芳) 三千歳团菊、伴右衛門花千代、下部錦木	白石啣茶屋場(国芳) 播州皿屋敷(千代玉) 先代萩御殿場(錦木) 普原松王下屋敷(元千代) 腰越状三(目) (团菊) 中将姫貴貞の段(千代登) 大切懸合お駒才三木屋の段(喜連国芳) 八花千代 お駒团菊 庄兵衛錦木 稚丁千代玉 鎌倉三代記八(目) (千代志) 普原松王下屋敷(錦木) 三勝半七酒屋の段(花千代) 安達原三段目(团菊) お染久松野崎村(国芳) 岸姫松原館(千代登) 大切総掛合忠臣蔵本蔵下屋敷(本蔵国芳) 三千歳团菊、播右衛門錦木、下部花千代)	朝顔日記宿屋(国芳) 宗五郎子別(千代玉) 鈴ヶ森(錦木) 二十四孝四段目(团菊) 鏡山七(目) (花千代) お千代半兵衛八百屋の段(千代登) 大切懸合お染久松野崎村(おみつ) 花千代、久松千代玉、久作国芳、お染团菊、母錦木)		
	素人音曲の流行に苦言	興	初日盛況					22日千秋楽を予告				

3 1 9 1 1 5	3 1 9 1 1 5	3 1 9 1 1 5	3 1 9 1 1 5	3 1 9 1 1 5	2 1 9 1 1 26	2 1 9 1 1 26	2 1 9 1 1 11	2 1 9 1 1 3	2 1 9 1 1 2
活動館の操 人形	三次郎送別 会	肥後琵琶師 来る	愛国婦人演 芸会	素人義太夫 人合評	娘義太夫素 人合評	活動館	盛況 素人浄瑠璃	共進会 其二	共進会 其二
人形	素義	その他	女義	素義	女義	女義	素義	素義	素義
予告	予告	予告	雑報	予告	芸評	予告	雑報	予告	予告
					拾得・次 郎兵				
3 1 9 1 1 5	3 1 9 1 1 5	3 1 9 2 1 1 より	3 1 9 1 1 4	3 1 9 1 1 3	2 1 9 1 1 26	2 1 9 1 1 9、10	2 1 9 1 1 11	2 1 9 1 1 5	2 1 9 1 1 4
台北	台北	台南	台北	台北	台北	台南	台南	台南	台南
				新起横街					
活動館	芳野亭	台南座	活動館	芳野亭	活動館	新公館樓 下広間	新公館樓 下広間	新公館樓 下広間	新公館樓 下広間
山本三之助一座	おかめ連、基隆雀連(語 物未定)、三味線は 吾妻 鐘籠 三次郎等			素人義太夫の大会	竹本千葉一座	竹本千葉一座	野澤吉六、木の葉連、 太掉芸者(御影花壇の 五郎、歌仙の駒吉、亀 甲屋の春香、山吹の頓 兵衛など)		
前三段目、壺坂、先代萩、山本一流崎村の曲	佐賀夜桜鍋島猫動、実録先代萩、小間物屋彦 兵衛、丸橋忠弥、松前屋五郎兵衛、宮本武勇伝 又意外、己が罪、琵琶唄、刑事の誉、書生の犯 罪、人名犯、三方一両損、掛取万蔵、大工調、 慶上使、伊賀越沼津、日吉丸三、野崎村、玉藻 慶上使、伊賀越沼津、日吉丸三、野崎村、玉藻	御祝儀寿三番(当司美咲) 新の口村(曙) 壺坂 (尺八入雨堂) 義士銘々伝赤垣出立(勝木) 千 本桜すし屋(松鶴) 三十三間堂平太郎内腹(白 風軒) 日吉丸三段目(秀吉) 鈴ヶ森(国芳尺八 雨堂) 大切野崎村掛合(国芳、駒助、秀吉、相 生、三味線三次郎、連弾秀吉、えん、六べ、小 竹、万流、貞奴、駒助、尺八雨堂)	開会の挨拶(三村主事)、大功記十段目、小三咲、 落語子は姦(素々齋柏葉)、壮士踊り(娘義太 夫梅之助の隠し志、三勝半七酒屋の段(光玉) 勤儉講談塩原多助の伝(素々齋柏葉)	千葉、光玉、梅之助	玉藻前三段目(梅玉) 忠臣蔵六(小三咲) 佐倉 曙儀作内(小町) 御所桜(梅之助) おしゆん伝 兵衛堀川(光玉) 太功記(千葉)	壺坂(吉六)	靖会(6、11時)	芸妓舞踏(午後1、5時、子弟戯及子弟浄瑠 璃会(6、10時))	芸妓舞踏(午後1、5時、子弟戯及子弟浄瑠 璃会(6、10時))
山本三之助出語り	鶴澤三次郎引揚堀国送別会 午 後六時より			午後一時より五時頃まで	竹本千葉顔写真あり 3/4千 秋葉、基隆へ乗り込み(3/5 記事「活動館の操人形」)	吉六は盲人。2月4日から時間 の都合で延期		台南嘉義阿緞三庁農会所聯合多 部物産共進会。楼上では歌留多 大会。通行券大人30銭、童子15銭、 席料5銭。9、10日に延期。	



1912/1512	朝日座	人形	予告		3/15 1912	台北	朝日座	上村一座	前「生写朝顔日記」秋月巴之助屋敷(浪尾太夫 糸浅次郎 小瀬川の段・島勢大夫糸千賀平)摩谷ヶ藏の段(綱登太夫糸仙右衛門)浜松小屋の段(春木太夫糸千賀平)徳右衛門宿屋より大井川迄(浜木太夫糸仙右衛門)深雪(岡助)道行の段(懸合)切(伽羅先代萩御殿の段)(内匠太夫糸勝次	東太夫は今後、打狗、鳳山、九曲堂、阿綴、蕃薯寮及び各種糖会社所在地等を巡業
1912/612	娘義太夫	女義	予告		3/15 1912	台北	芳野亭	娘義太夫の若手連数名		
1912/1312	素人義太夫	素義	雑報		2/13 1912	澎湖	庁長官邸			
1912/1312	一昨日の円	不明	雑報		2/13 1912	台北	豊川稲荷			
1912/712	素人浄瑠璃	素義	予告		2/13 1912	台北	日蓮宗布教所			
1912/2012	淡水の素人浄瑠璃	素義	予告		1/21 1912	淡水	公会堂	歓音連		
1912/1912	素人義太夫	素義・女義	雑報		1/15 1912	台北	八甲庄			
1912/1512	追善浄瑠璃	素義	予告		1/15 1912	台北	八甲庄	素人浄瑠璃各連聯合大会		
1912/1212	南座の素人浄瑠璃	素義・芸妓	予告		1/12 1912	台南	南座	東太夫、台南天狗連、芸妓連		

3/31 1912	3/31 1912	3/31 1912	3/29 1912	3/28 1912	3/28 1912	3/26 1912	3/18 1912	3/18 1912	3/18 1912	3/18 1912	3/16 1912	3/16 1912
座 津国太夫一	座 芳野亭	座 津国太夫を聴く	座 朝日座の浄瑠璃	座 朝日座	座 芳野亭	座 朝日座	座 十把一東	座 芳野亭	座 朝日座	座 人形浄瑠璃	座 朝日座	座 芳野亭
文楽	女義	文楽	文楽	文楽	女義	文楽	人形	女義	人形	人形	人形	女義
予告	予告	芸評	予告	予告	予告	予告	投書	評判記	予告	評判記	予告	予告
		烏天狗					人形新					
4/1 1912より	3/31 1912	3/30 1912	3/29 1912	3/28 1912	3/28 1912	一兩日中に開演					3/16 1912	3/16 1912
基隆	台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北
基隆座	芳野亭	朝日座	朝日座	朝日座	芳野亭	朝日座	朝日座	芳野亭	朝日座	朝日座	朝日座	芳野亭
津国太夫一座		津国太夫一座	津国太夫一座	津国太夫一座		大阪文楽連(太夫・津国太夫、其太夫、鶴尾太夫以下数名三味線・大四郎、六之助、六蔵等)	上村一座		上村一座	上村一座		
	「親心」二幕、「見合」二幕、忠臣蔵六ツ目(団加津)	弁慶上使(其太夫)朝顔宿屋・大井川(鶴尾太夫・六之助)合邦(津国太夫・大四郎)	三十三間堂(国子太夫)忠臣蔵六ツ目助平切腹(里太夫)本蔵下屋敷(其太夫)お駒才三鈴ヶ森(鶴尾太夫)太功記十段目(津国太夫)	御所松弁慶上使の段(国子太夫、糸六之助)王簾前道春船の段(里太夫、糸六之助)盛衰記逆櫓の松の段(其太夫、糸六四郎)日吉丸小牧山城中の段(鶴尾太夫、糸六三)菅原伝授手習鑑寺子屋の段(津国太夫、糸六四郎)	「相続争ひ」三幕、「靈魂不滅」二幕、お染久松野崎村(団加津、糸三次郎)、菅原伝授手習鑑寺子屋(国芳、糸三次郎)				前「奥州秀衡有髮髻」池田駅宿屋の段(春木太夫、千賀平)藤原秀衡館の段(内匠太夫、勝笠也)後藤昌司館の段(綱登太夫、千賀平)中箱根靈験記十一段目「三人上戸段」浜太夫、仙右衛門「切」都五条牛若弁慶仕合段(かけ色)	「近江源氏先陣館」和田兵衛隠家の段(綱太夫、糸千賀平)佐々木盛輝陣家の段(内匠太夫、勝笠也)「艶姿女舞衣」三勝半七酒屋の段(其太夫、糸仙右衛門)「肥後駒下駄」五条鯉屋の段(春木太夫、糸浅次郎)		
旧合同劇を開始	同日より朝日座では台湾初の新	ひで歓迎されたらしい、	4年前の大島太夫一座以来待望の男義太夫、勘からず医湯の思ひで歓迎されたらしい、	初日は大人りでもなかったが天狗達も熱心に聴いていた。道が確かりとした語り口で一人として落が無いと大に感寸満足して居た様だ		「去る地方の同好天狗連」の後援を受け渡台。27、30日(3/31付記事による)	国芳の帰来と団加津の加入、二人の女義の乱れ髪により大人気の舞台は感心だが浄瑠璃は訛りだらけ			人形は立派だが人氣が無くて気の毒		











6/19 19/4	6/19 10/4	4/20 19/4	3/19 5/4	3/19 4/4	2/27 19/4	2/19 18/4	2/19 8/4	1/25 19/4
芳乃亭	素人義太夫 会	芳乃亭	素人義太夫 会	素人義太夫 大会	素人義太夫 大会	送別浄瑠璃 会	浄瑠璃 淡水の素人	義捐義太夫 大会
女義	素義	女義	素義	素義	素義	素義	素義	素義
予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告
6/19 19/4	6/19 10/4 12	4/20 19/4	3/19 5/4	3/19 4/4	2/28 19/4 3	2/19 18/4 19	2/19 8/4	1/25 19/4 26
台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北	淡水	台北
	八甲庄					八甲庄		新起街
芳乃亭	日蓮宗布 教所	芳乃亭	芳乃亭	芳乃亭	芳乃亭	日蓮宗布 教所	淡水倶楽 部	弘法寺
竹本鐘龍					台北・基隆・淡水聯合	稲丸連	淡水演芸会	
中村歌扇一庵出演活動写真「旧劇壺坂靈驗記」の出語り						国松		同右か
						本蔵下屋敷、油屋、百度平、布四、野崎、相生、逆槽、寺子屋、忠四(南風「ママ?」)帯屋、阿漕、布四(三吉野、柳、日吉丸、新口村(花笑)すしや、寺子屋、太十(松鶴)十種香、壺坂、酒屋(不二)本蔵、鈴ヶ森、合邦、藤枝、又助内、本蔵(朝平)三日太平記、沼津、八陣、一の谷(調)大文字屋、岸姫(叶)、蝶所、赤垣(艶次)柳、合邦(久木)いざり、壺八(我笑)秋津島、忠四(和菜)御所(かね子)沼津、宿屋(三洋)皿屋敷、陣屋(ねぶか)壺坂、岸姫(組次)赤垣、壺阪(ママ)(吾男)岸姫、玉三(三脚)		
正清水城(ねぶか)又助(半吉)鎌倉三代記(明石)合邦辻(まっげ)三日太平記(貴勝)松石下屋敷(魁)御所核三(吾妻)又助(勝次)柳(三松)日吉丸三(翠水)柳(夷笑)普原四(松鶴)玉三(白樂)御殿(久木)日吉丸三(吾妻)合邦辻(藤枝)御殿(五角)志渡寺(松倉)好(志渡寺)御殿(愛水)赤垣源蔵(吾本蔵)下屋敷(春声)紙治(愛水)逆籠(三洋勇)四ツ谷(一声)野崎村(和菜)逆籠(三洋三味線)竹本三五		話色鳴物入り (旧制)先代萩上二巻竹本鐘龍太夫出語り声	布引流(三好野(花笑)百度平(相生)忠臣蔵六(松鶴)鈴ヶ森(花笑)太功記十(藤枝)御所核三(兼子)忠臣蔵四(南風)	同右 五日目のこと、て台北天狗連中の四天王と称する人々々々顔合せ	春季聯合大会 ただし実際には3/19より5と思われる	芳乃亭国松の帰国送別会	午後五時より	右記聯合大会を、場所・日程変更の上で、桜島噴火義捐大会に姿更し開催
その他活動写真省略		御殿より床下まで。						



11/28 19/4	11/26 19/4	10/31 19/4	10/25 19/4	10/21 19/4	10/2 19/4	8/27 19/4	8/19 19/4			
聯合素人浄瑠璃会	素人義太夫大会	素人義太夫大会	素人浄瑠璃	素人義太夫会	素人浄瑠璃大会	素人浄瑠璃会	素人浄瑠璃大会			
素義	素義	素義	素義	素義	素義	素義	素義			
予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告			
僕										
11/26 19/4	11/26 19/4	10/31 19/4	10/24 19/4	10/21 19/4	10/2 19/4	8/27 19/4	8/19 19/4			
台北	台北	淡水	台北	台北	台北	台北	台北			
				新起横街	八甲庄					
新高館	新高館	淡水倶楽部	新高館	丸新前藤本氏宅	日蓮宗布教所	上 勤工場階	上 勤工場階			
台北・基隆・淡水の素人連	鐘龍、勝玉、八重吉、三玉等			竹本八重吉						
柳(六助、ツレ鈴弥、八重吉) 菅原四段目(松鶴) 御所桜三段目(岬) 本蔵下屋敷(鈴弥、ツレ六助) 三十三所壺坂(二声) 帯屋(三吉野) 大切掛合妹背山	御祝儀(入登) 菅原四(橋) 安達原三(二声) 御所桜弁慶上使(三笑) 先代萩御殿(奴) 三日本平記(錦声) 玉澤前三(岬) 里雀梅川忠兵衛新口村(愛水) 関取二代鑑(和楽) 酒屋(相生) 大切かけ合一大功記十段目(光秀) 岬(婆) 里雀(操) 愛水(十次郎) (相生) 初菊(和楽) 三味線(竹本鐘龍)	三十三間堂(當代) 加賀見山又助(秀八) 菅原松王内(す、め) 三勝半七(寿) 彦山権現六助内(きかく) 合邦ヶ辻(鈴弥) 菅原寺子屋(六助) 二度目消書(峰菊) 布引の四(〇〇坊) 太功記尼ヶ崎(魁) 大功記妙心寺(二調) 三日本平記九(叶) 新吉原揚屋(小娘魁) 勢州阿漕浦(三吉野) 伊勢音頭油屋(相生) 忠臣蔵本蔵下屋敷掛合(相生) (三吉野) (二調) 関取千両幟掛合(相生) (三吉野) (六助)	二十四孝(小鹿) 大功記十段目(朝平) 三十三間堂平太郎内(花笑) 日吉丸三段目(花笑) 弁慶上使(琴水) 岸松松三段目(冬木) 本蔵下屋敷(藤枝) 松王下屋敷(魁) 太功記杉の森(二調) 惣五郎子別れ(美好) 三十三間堂平太郎内(檢番きかく) 摂州合邦ヶ辻(檢番鈴弥) 三勝半七酒屋の段(相生) 三味線(三玉、八重吉)	八陣八ツ目(ねぼけ) 柳(嘉楽) 三日本平記實(當) 堀川(松葉) 太十(明石) 柳(亀笑) 又助(時次) 菅四(冬木) 日吉丸(可) 岸姫(二声) 弁慶上使(琴水) 菅四(松風) 玉三(白蝶) 儀作(美好) 忠三(如月) 志渡寺(松香) 又助(半吉) 忠六(三洋) 皿屋敷(吾妻) 酒屋(龜鶴) 日吉丸(花笑) 柳(木) 忠三(我笑) 御殿(下敷) 六十(梅枝) 六助(藤枝) 弁慶(二調) 下屋敷(松鶴) 堀川(魁) 四ツ谷(一声) 日吉丸(鈴弥) 忠(吾勇) 忠四(三吉野) 声六(愛水) 菅四(和楽) 柳(きかく) 帯屋(相生) 酒屋(寿) 志渡寺(峰菊) 糸三玉、糸鐘龍 同八重吉	故竹本鐘龍十五周年追悼					
	台北素人義太夫等の老練株相生が会主となり開催	午後二時より七時まで 水合併素人義太夫大会 台北淡	スキャン範囲外のため詳細不明	午後六時より		午後六時より				

7/24 1916	1/25 1916	1/19 1916	12/12 1915	12/7 1915	11/25 1915	5/21 1915	4/24 1915	3/10 1915	1/30 1915	11/28 1914
素人浄瑠璃	素人義太夫 初会	素人浄瑠璃 初会	素人浄瑠璃 大会	浄瑠璃大さ らひ	月並会 素人浄瑠璃	秘密の糸 (二) 義太 夫の縁	素人義太夫 大会	素人義太夫	浄瑠璃初会	聯合素人浄 瑠璃会
素義	素義	素義	素義	素義	素義	素義 素義 素義	素義	素義	素義	素義
予告	予告	予告	予告	予告	予告	雑報	予告	予告	予告	予告
										僕
7/25 1916	1/25 1916 27	1/19 1916	12/12 1915	12/7 1915 8	11/25 1915		4/24 1915	3/10 1915	1/31 1915 2	11/28 1914
台北	台北	台北	台北	台北	台北		台北	台北	台北	台北
八甲庄		西門外街		城内	西門外街			城内		
公会堂	勤工場	楽座前 倶	勤工場二 階	勤商場階 上	楽座前 倶		新高館	上 勤商場階	上 勤工場 後	新高館
鶴澤一平連中		勝玉連		勝玉連	勝玉連			勝玉連	台北の素人	台北・基隆 人連 淡水の素
御祝儀室入船(久登) 鴨門八ツ目(古菊) 勤平切段目(我笑) 梅川忠兵衛新口村(菊水) 太功記十段目(艶次) 小春治兵衛紙屋(三七七) 御所核三段目(相生)			忠三(なほけ) 壺坂(かね子) 五郎助(白墨) 袖萩(松葉) 木十(ねぶた) 鈴ヶ森(勝二) 陣谷(ママ) (五角丸) 揚屋(小菊) 忠三(菊小) 忠六(三洋) 日吉丸(半三) 滝(我笑) 鈴ヶ森(亀鶴) 鳴戸(三松) 日吉丸(翠水) 太十(寿) 下屋敷(魁) 六助(藤枝) 太十(梅枝) 又助(陣風) 赤垣(艶治) 揚屋(久木) 下屋敷(美好) 志渡寺(松香) 合那(松鶴) 鈴ヶ森(一声) 柳(巴豆) 酒屋(柳枝) 忠四(和楽) 三味線(三玉)		四ツ谷(一声) 御所萩(かね子) 八津(梅枝) 寺小屋(松鶴) 鴨門(三松) 御殿(首枝) 忠六(三洋) 儀作(三好) 合那(寿) 下屋敷(柳枝) 糸(三玉) 勝玉		八重吉 忠臣蔵七(和楽) 三味線三玉、勝玉、鐘鹿	上 勤商場階	勝玉連	御祝儀室入船(久登) 太十(明石) 本蔵下屋敷(鱒) 玉三(美好) 寺子屋(松香) 壺坂(二調) 紙治(峯菊) 酒や(寿) 合那(相生) 艶谷(藤枝) 柳(久木) 百度寺(ママ) (菊水) 大切掛(阿古屋琴吉) 峯菊、相生、三吉野、六助) 三味線(八重吉、鈴弥)
午後六時より		午後六時半より	午後六時より 二階) は12/16十把一束による	午後六時より 懸賞付き 飛び入り可	午後六時三十分より	芸妓鈴弥と素人義太夫加藤(ともに竹本八重吉門下)の恋愛ゴシップ	台北素人義太夫聯合大会	午後六時より	スキヤン不鮮明 午後六時より 錦81歳にして上床	



9/17 8/17	9/17 3/17	8/29 1917	8/27 1917	7/28 1917
会 素人浄瑠璃	会 素人浄瑠璃	会 素人義太夫	会 素人義太夫	会 素人浄瑠璃
素義	素義	素義	素義	素義
予告	予告	予告	予告	予告
9/17 8/17 9/17	9/17 3/17 4/17	8/29 1917	8/27 1917 28/17	7/28 1917 29/17
台北	台北	台北	台北	台北
		南門外	南門外	府前街四丁目丸福
部 八甲倶楽	階上 台北検番	龍口亭	龍口亭	神鳥表具 店楼上
三省連	鶴澤一平連			
屋敷(組次) 揖州合邦ヶ辻(美好)菅原伝授寺屋(鱗鳳) 鏡山又助内(菅枝)桜囃儀作内(一声)松王下	御祝儀宝入船(入登)お駒才三鈴ヶ森(梅子)太功記十段目(中司)阿波鳴門八ッ日(ねぼけ)鏡山又助内(橋昇)三勝半七酒屋(玉三)朝顔日記宿屋(桜玉)弁慶上使(西屋)大和(朝日)揖州合邦ヶ辻(美好)菅原伝授寺屋(鱗鳳)屋敷(組次)桜囃儀作内(一声)松王下	▽三日の分 御祝儀宝入船(入登)梅川忠兵衛新口村(勝好)三十三所壺坂沢市内(山根)蔵下屋敷(梅笑)玉澤前三段目(我笑)佐倉曙儀作内(菊水)才三お駒鈴ヶ森(花香)伝兵衛お後堀川(魁)大功記十段目(花香)天網烏紙治内(三七)▽四日の分 梅野由兵衛聚楽町(勝好)大功記十段目(山根)忠臣蔵六つ目(我笑)加賀見山又助内(梅笑)久松お染野崎村(花香)梅川忠兵衛新口村(菊水)三十三所壺坂沢市内(魁)浦里時治郎山名屋の内(元化)壺坂沢市内(紅葉局)勝好(藤作)又五郎(梅笑)平治(菊水)小椋(花笑)松浪校校(三七)三味線(鶴澤)平、ツレ同小種、ツレ同梅三	朝顔日記(久木)三勝酒屋(相生)沼津里(改玉)四ッ谷怪談(一声)壺坂(小菊)阿波十(かね子)柳(三松)玉三(鱗鳳)大十(魁)谷渡(うくむす)	四ッ谷怪談(一声)台処記棚ヶ先(梅枝)お染久松野崎村之段(柳枝)菅原伝授寺屋鑑四ッ目(相生)加賀見山又助内之段(梅笑)忠臣蔵六段目(我笑)日吉丸三段目(花笑)楠三の口とんぶりこ(森鱗)平仮名盛衰記逆槽之段(改玉)加賀越(マ)八段目岡崎之段(菅枝)松王下屋敷(魁)古手屋八郎兵衛(藤枝)三勝半七酒屋之段(鱗鳳)明島山名屋之段(菊水)壺坂寺沢市内(小菊)伊賀越六(六日沼津之段)二下敷(美好)金比羅利生記志渡寺之段(楽間)玉澤前道春館之段(中村)
午後六時より	午後六時より	延長	台北義太夫界の古老久木氏内地帰還送別演芸会 福引あり	

8/19 8/18	5/28 1/8	5/19 24/18	1/15 1/8	12/19 1/7	9/19 28/17	9/19 20/17	9/19 19/17	9/19 17/7
部の浄瑠璃 台中近事	地方打狗 大会	地方打狗 大会	素人義太夫 会	慈善演劇 会	追善義太夫 会	地方浄瑠璃 追善	追善浄瑠璃	十把一東
素義	素義	素義	素義	素義	素義	素義	素義	素義
雑報	雑報	予告	予告	雑報	予告	雑報	予告	投書
								義太夫狂
8/19 6/18	5/19 24/25	5/19 24/25	1/15 1/8 16	11/19 27/28	9/19 28/17	9/19 20/17	9/19 20/17	不明(此間)
台中	打狗	打狗	台北	嘉義	街淡水	基隆	基隆	台北
			新起街					
台中倶楽	打狗公館	打狗公館	古道具屋	嘉義座	部 淡水倶楽	基隆座	基隆座	龍口亭
鶴澤一平一行	連 天狗連 梅屋敷の芸妓			嘉義素人義太夫研究会				
		△初日芸題 御所桜弁慶上使(小玉) 玉藻前三段目(梅先(ママ) 阿波鳴戸巡礼歌の段(巴津昇 千代萩御殿場(九重) 本蔵下屋敷(巴津昇) △二日目芸題 太功記十段目(小玉) 朝顔日記浜松小屋(梅光) 朝顔日記宿屋の段(巴津昇) 覽仇討三人上戸(九重) お染久松野崎村(巴津昇)	双蝶々(菅板(ママ) 日吉丸(改玉) 朝顔日記(大和) 岸姫(組次) 太十(中司) 梅忠(菊水) 勘平切腹(三洋) 紙治(三十七) 寺小屋(寿四度寺(ママ) 築馬) 千両のぼり(桜(?) 玉忠(和楽) 壺坂寺(二声) 三勝酒屋(三笑) 平次住家(ねぶか) 阿波十(小菊) 野崎(柳枝) お後(魁) 御所桜(かね子) 鈴ヶ森(梅子) 三味線豊澤三省	毎夜各演十八番	錦声(二度目) 相生(布川(ママ) 山口やすよ(安達原) 和楽(沼津) 菊水(梅忠) ねぶか(阿漕) 改玉(日吉丸) 小菊(壺坂) 三笑(佐倉曙)	龍(番左衛門(十雀) 本蔵(十三) 三味線(鐘)	たむけ(入笠) 壺坂寺(松雀) 鏡山古郷錦絵(弥生) 佐倉曙(十一) 弁慶上使(立石) 阿波鳴戸(天石) 忠臣蔵(福徳軒) 布引(四) 若衆(酒屋) 松花(八陣) 東(箱根野駱記(松香) 勢州阿漕(浦十) 水掛村(マ) 音吉(合那ヶ辻(十二) 三味線(鐘龍梅香) 大阪(マ) 掛合本蔵下屋敷(若狭之助(弥生) 三十歳(松雀) 下部(吾勇) 番左衛門(十雀) 本蔵(十三) 三味線(鐘)	
午後七時半より 倶楽部会員・家族無料 雨天だが盛況		午後七時半より 倶楽部会員・家族無料 雨天だが盛況	午後六時より	午後五時より 東京大阪水害義捐のため事前演劇会 発起人代表者山本久蔵・安倍馬治	午後五時より 愛水三年忌追善	未広館主糸雀一年祭 友人柴田氏等の発起、午後五時より	未広館主一年祭	橘昇君の義太夫には感心しました一層勉強して台湾の花形たらん事を希望す

1/23 1919	1/20 1919	12/16 1918	12/14 1918	12/9 1918	9/21 1918	8/14 1918
会 義太夫天狗	会 素人浄瑠璃	会 素人義太夫	大会 素人浄瑠璃	納会 素人義太夫	大会 追善浄瑠璃	会 素人義太夫
素義	素義	素義	素義	素義	素義	素義
予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告
不明	1/20 1919 21	12/16 1918 17	12/14 1918	不明	9/22 1918	8/14 1918 15
不明	台北	台北	台北	台北	基隆	台北
	北門街		新起街	新起街		八甲庄
	方 鍼力屋督	所 魚金向心 古物競売	妓 魚金裏芸 富丸宅	浅 新起揚向 原方 ひ建具屋	基隆屋	日蓮宗布 教所
					追善句作者・弥生、雀 連中、梅鷺連中、竹本 鐘麗、豊澤梅香、小松 利三郎、宇田伊代吉、 藤川与一郎、広木秋太 郎、足利藤吉	
二度目(美佐子) 御所(冬木) 儀作(菊水) 壺坂(一声) 忠四(和楽) 酒屋(相生) 三味線豊竹三五	二度目(美佐子) 御所(冬木) 儀作(菊水) 壺坂(一声) 忠四(和楽) 酒屋(相生) 三味線豊竹三五	白石新吉原(梅子) 三十三間堂(小柳) 関兼千両幟(二三) 三勝半七(中司) 壺坂沢市(兼子) 朝顔宿や(桜玉) 八陣政清本城(菅枝) 渡寺(松香) 新口村(菊水) 阿漕浦(藤藤) 忠六(我笑) 鳴門(三松) 岸崎(竹司) 中將姫(組次) お駒才三(鱸鳳) 野崎村(柳枝) 四ツ谷(談(一声) お後伝兵衛(魁) 弥次郎兵衛喜多八(和楽) 布四三入戸(相生) 中切に筑前琵琶を演ず三味線(豊澤三省)	大切・実録先代萩対決総拵合	線(豊竹三五) 忠(菊水) 堀川(魁) 本藏下屋敷(相生) 三味線(豊竹三五)	六十(ねほけ) 上硬(かね子) 浜松(改玉) 二度目(真砂) 柳(文司) 五良助(記玉) 宿屋(白蝶) 蝶(野崎) 太郎 壺坂(小菊) 八陣(菅枝) 酒屋(柳枝) 小坂節節(三洋) 岸姫(冬木) 菅四(鱸鳳) 忠六(我笑) 鈴ヶ森(花笑) 六助内(藤枝) 滝(松香) 鳴門(三松) 四ツ谷(一声) 梅忠(菊水) 堀川(魁) 本藏下屋敷(相生) 三味線(豊竹三五)	鎌三(文司) 浜松(ねほけ) 宿屋(白蝶) 二度目(清書(真砂) 酒屋(冬木) 菅四(鱸鳳) 箱根(松香) 沼津(三洋) 酒屋(柳枝) 沼津(一声) 儀作(菊水) 鳴門(小菊) 鈴ヶ森(花笑) 下屋敷(三松) 百度平(藤枝) 壺坂(組次) 阿漕(ねぶた) 三松 忠四(和楽) 壺坂(組次) 阿漕(ねぶた) 八陣(菅枝) 五良助(改玉) 野崎(大和) 新野口(二三) 宿屋(中司) 合邦(松葉) 野崎(相生) 三味線三五、三省
一部スキャン範囲外			午後六時半より		午後五時より 氏百箇日 大商組組長柴田	故三好常次郎追善



3/24	1920	2/6	1920	1/22	1920	12/10	1919	11/6	1919	10/21	1919	7/28	1919	7/25	1919	6/19	1919
会	浄瑠璃演芸会	会	素人浄瑠璃	会	素人浄瑠璃	会	浄瑠璃大芸	訪ふ	田新総督を	会	地方近事 嘉義素人 浄瑠璃会	会	素人浄瑠璃	会	素人浄瑠璃	会	素人浄瑠璃
	素義		素義		素義		素義		素義		素義		素義		素義		素義
	予告		予告		予告		予告		雑報		予告		予告		予告		予告
3/25	1920	2/6	1920	1/22	1920	12/10	1919			10/20、21	1919	7/28、29	1919	7/26、27	1919	6/19	1919
	基隆		台北		台北		基隆				嘉義		台北		台北		台北
			府中街		府中街								古亭庄		南門		新起街
	日本亭		台北庁舎 跡関柔道 道場		台北庁跡 柔道道場		基隆座				嘉義座				公会堂		一力
					若松連		雀連				水島質屋、田中洗濯屋、 薛香豆屋、音吉畳屋、 其他台南台中よりの応 援		若松連		三玉連		一平連
											大切・素人芝居忠臣蔵・壺坂等						又助住家(託玉)阿漕浦平次住家(我笑)明鳥 (花芝)本蔵下屋敷(梅笑)壺坂(魁)野崎村(花 香)岸姫(二平)三味線(一平、小種)
	午後四時より 位経王大菩薩祭日余興				筑前琵琶聯合大会										午後六時より 納涼大会		午後七時より

9/28 1920	栄座の娘義 大夫	女義	恭評	みの字	09/27? 1920	新竹	新竹座	大阪娘義大夫竹本弥栄 子一行	君広の「朝顔の宿屋」、龍光の「晋四」、弥栄子の「壺坂」	「娘義大夫」それは随分久しぶりに聞く声である。「然るに今度、山本営業部の手で大阪娘義大夫竹本弥栄子の一行が渡台して今夜から栄座で開演する、この弥栄子は未だ若い満るやうな女、呂昇の門下で師匠順業中はそのと云ふ事だ」
9/26 1920	娘義大夫	女義	予告		9/26 1920	新竹	新竹座	大阪娘義大夫竹本弥栄 子一行	合白石喇揚屋之段	27/2両日開演
6/21 1920	素人連浄瑠璃会 八甲庄法華寺で	素義	予告		6/21 1920	台北	法華寺	在台北の天狗連殆んど 総出		故井部茂吉追善
5/21 1920	花声会の義 大夫	素義	予告		5/21 1920	台北	西本願寺 別院	花声会		宗祖大師降誕会余興
4/25 1920	素人浄瑠璃会	素義	予告		4/25 1920	台北	日蓮宗妙見寺	相生、柳枝、偶登、魁、藤枝、菅枝、三松、竹司、三友、一三三、峯菊、竹子、かね子、みさ子	御祝儀宝の入舟(入登)三十三間堂(七五三嬢(三))お駒才三鈴ヶ森(竹司改め七五三柳)太十(艶次改め七五三雀)鳴門八ツ目(七五三三)日吉丸三の切(琴馬)寺小屋(組次改七五三寿沼津(七五三登)大切東上る新内節十両織掛合(七五三三子、七五三登)樽太鼓入り三味線曲弾十八弾	春季大会
3/25 1920	素人浄瑠璃会	素義	予告		3/25 1920	台北	台北庁舎 跡関柔道館	相生、柳枝、偶登、魁、藤枝、菅枝、三松、竹司、三友、一三三、峯菊、竹子、かね子、みさ子	梅忠(花笑)二度目(みさ子)二代鑑(和衆)志渡寺(峯菊)太十(石磊)	春季大会



8/4 1922/	素人浄瑠璃 会	素義	予告		8/4、5 1922/	台北	八甲町	法華寺	三吉野陸会連	阿漕ヶ浦(我笑) 紙治(鳳玉) 菅四(艶次) 玉三(竹司) 鳴戸(越次) 合那(雷雀) 下屋敷(真玉) 三味線(二平)	一年ぶりの娘義太夫来台 清花までは野次が飛んだが住助以降は勝まり返り、要するに弥栄子等の比ではないと一般頗る好評であった
6/3 1922/	素人義太夫 会	素義	予告		6/3、5 1922/	台北	元八甲庄	法華寺		御祝儀玉の入船、愛子、友司、清花(以上演目不明)、住助(三十三間堂)、文昇(弁慶上使)、末千代(壺飯)	午後六時より 午後六時より
5/19 1922/	還暦浄瑠璃 会	素義	予告		5/21 1921/	台北		榮座	基隆雀連の応援あり	初日) 若手連 宿屋(鳳玉) 酒屋(藤枝) 赤垣(艶次) 壺坂(貴昇) 新口村(菊水) 太十(松鶴) 儀作(真玉) 日吉(中間) 忠三(花玉) (二日目) 老人連 堀川(松香) 野崎村(相生) 四ツ谷(一声) 酒屋(柳枝) 三十三間堂(兼玉) 岸松(組次) 太十(七五三登) 鳴戸(光玉) 梅忠(梅枝) 大十(七五三登) 三日(雷雀) 沼津(琴馬) 安達(新玉)	午後六時より 雨天順延 井波茂吉追善
3/19 1922/	追善浄瑠璃 会	素義	予告		3/18、19 1921/	台南		新泉座	台南近松会	初日) 若手連 宿屋(鳳玉) 酒屋(藤枝) 赤垣(艶次) 壺坂(貴昇) 新口村(菊水) 太十(松鶴) 儀作(真玉) 日吉(中間) 忠三(花玉) (二日目) 老人連 堀川(松香) 野崎村(相生) 四ツ谷(一声) 酒屋(柳枝) 三十三間堂(兼玉) 岸松(組次) 太十(七五三登) 鳴戸(光玉) 梅忠(梅枝) 大十(七五三登) 三日(雷雀) 沼津(琴馬) 安達(新玉)	午後五時より 台北浄瑠璃界の横綱格として知られた相生太夫の還暦祝
12/8 1921/	素人浄瑠璃 会	素義	予告		12/8、9 1921/	台北		堂	三玉会	初日) 若手連 宿屋(鳳玉) 酒屋(藤枝) 赤垣(艶次) 壺坂(貴昇) 新口村(菊水) 太十(松鶴) 儀作(真玉) 日吉(中間) 忠三(花玉) (二日目) 老人連 堀川(松香) 野崎村(相生) 四ツ谷(一声) 酒屋(柳枝) 三十三間堂(兼玉) 岸松(組次) 太十(七五三登) 鳴戸(光玉) 梅忠(梅枝) 大十(七五三登) 三日(雷雀) 沼津(琴馬) 安達(新玉)	午後六時より 納会
11/7 1921/	栄座の娘義 太夫	女義	芸評			台北		榮座	大阪娘義太夫竹本末十代一行	御祝儀玉の入船、愛子、友司、清花(以上演目不明)、住助(三十三間堂)、文昇(弁慶上使)、末千代(壺飯)	午後六時より
7/16 1921/	素人義太夫 会	素義	予告		7/17 1921/	台北	撫台街二ノ角	天野商会	一平連	阿漕ヶ浦(我笑) 紙治(鳳玉) 菅四(艶次) 玉三(竹司) 鳴戸(越次) 合那(雷雀) 下屋敷(真玉) 三味線(二平)	午後六時より

11/15 1922	陸会の発会 式 栄座の 浄瑠璃大云	素義	予告		11/16、17 1922	台北	栄座 三吉野、睦会	馬切一力茶屋場(総掛合)	
11/11 1922	素人浄瑠璃 会	素義	予告		11/16、17 1922	台北	三吉野、睦会	▲十六日初日 仮名手本忠臣蔵大序(三吉野) 本蔵松伐(乙鶴) 殿中刃場(ママ) 菊水 足利裏門之場(三峰) 扇ヶ谷花籠(三楽) 判官腹(艶次) 山崎鉄砲場(い京) おかる身立(松風) 勘平切腹(組次) 山科徳家(琴馬) 同奥(三洋) 切一力茶屋場総掛合 由良之助(琴馬) 平右衛門(艶次) せがる(ママ) (松風) 九太夫竹森(組次) 伴内 矢間(菊水) 力弥 千崎(延寿) ▲十七日二日目 御祝儀室入船(三吉野) 鈴ヶ森(千歳) 阿古屋琴責(い京) 菅原四段目(二豊) 日吉丸三(鞍馬) 忠臣一 度清書(三光) 二十四孝十種香(延寿) 朝顔日記宿屋(古柳) ツレ三味線芳子、ツレ琴清子、ツレ琴光子、加賀見山又助内(三峰) お胸才三白木屋(菊水) 布引滝三入戸(藤司) 加賀見山長局之段(琴馬) 切一力茶屋場(総掛合)	
11/4 1922	ウエルカム	素義	投書	一昔生	11月中旬	台北	三吉野		久方振に氏の帯屋か鎌腹を聞きたいものぢや
11/4 1922	素人浄瑠璃 会	素義	予告		11/4 1922	台北	乙女会	大阪源之丞人形芝居一座の語手として既に定形ある三吉野太夫は台湾に縁故者ある関係から過般渡台し睦会なる義太夫一派を組織し……	
11/1 1922	素人浄瑠璃 会	素義	予告		11/1 1922	台北	不動明王 社 陸連	日吉丸三(くらま) 二度目清書(三光) 朝顔宿屋(松風) 先代御殿(小菊) 又助住家(三峰) 沼津の里(藤司) 義作住家(菊水) 志渡寺(艶次) 廿四孝(三洋) 勘平腹切(組次) 長局の殿(ママ) 琴馬) 蝶花形八(延寿)	午後六時より 大雨順延
10/14 1922	義太夫会	素義	予告		10/14 1922	台北	南門公会 竹本乙鶴門下		
8/16 1922	素人義太夫 大会	素義・ 芸妓	予告		8/17、18 1922	台北	勝玉連	(初二) 寿式三番叟(芸妓十名出演) 新口村(竹若) 日吉丸(勝叟) 壺坂(新喜楽千胸) 沼津(乃家竹奴) 岸姫(日本亭吉枝) 本蔵(美登里) 柳(新喜楽千樂) 合邦(竹乃家峰菊) 忠四(勝三) 宗五郎(住登) 柳(新喜楽千昇) 吉丸(牛若) 柳(錦糸) 弁慶(新喜楽千歌) 又助(可笑) 壺坂(竹乃家勇吉) 太十(勝美) 鳴門(三松) 野崎村(相生)	午後五時より 納涼大会



8 / 4 1 9 2 3 / 3 /	7 / 21 1 9 2 3 / 2 /	6 / 9 1 9 2 3 / 3 /	5 / 19 1 9 2 3 / 2 /	5 / 4 1 9 2 3 / 3 /	5 / 2 1 9 2 3 / 3 /	4 / 26 1 9 2 3 / 3 /	4 / 12 1 9 2 3 / 3 /
会 素人義太夫	会 素人義太夫	会 素人浄瑠璃	会 素人浄瑠璃	会 素人浄瑠璃	会 勝玉送別大	浄瑠璃大会 竹澤力造師 の名披露	素人義太夫 大会
素義	素義	素義	素義	素義	素義	素義	素義
予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告
8 / 4 1 9 2 3 / 3 /	7 / 22 1 9 2 3 / 2 /	6 / 10 1 9 2 3 / 3 /	5 / 21 1 9 2 3 / 2 /	5 / 5 1 9 2 3 / 3 /	5 / 2 1 9 2 3 / 3 /	4 / 27 1 9 2 3 / 3 /	4 / 13 1 9 2 3 / 3 /
台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北
堂 南門公会	堂 南門公会	日蓮寺	堂 南門公会	堂 古亭町了 覚寺	4日新富 町不動尊	栄座	堂 南門公会
	三吉野睦連中	三玉連	美登里会	乙鶴連		勝玉連	睦連
司 片岡忠義 (寿業礼)	又助住家 (大和) 棟木の由来 (友鶴) 三浦別れ (多美次) 酒屋 (水菜) ニヶ崎 (鶴昇) 竹の間 (清)	儀作 (一声) 酒屋 (鳳玉) 鈴ヶ森 (千歳) 又助 (中司) 下屋敷 (加玉) 赤垣 (艶次) 忠臣講釈 (光玉) 沼津 (寿) 鳴戸 (栄玉) 弁慶 (貫昇) 加賀見山 (明玉) 皿屋敷 (司玉) 日吉 (土口) 志度寺 (松香) 三十三間堂 (錦糸)	御祝儀 (入登) 忠三 (一瓢) 本蔵 (仁光) 壺坂 (鳳菊) 炬燵 (鳳玉) 三勝 (都) 日吉 (花笑) 八陣 (染下) 円覚寺 (雷雀) 菅四 (古鶴) 太十 (旭) 白石嘶 (糸) 柳 (美登里) 阿漕 (美登志) 沓掛 (菅枝) 糸 (力) 遣	▲宝の入船 (入登) ▲阿波鳴戸 (真玉) ▲弁慶 上使 (多美次) ▲太功記十段目 (鶴昇) 三十三間堂 (豊司) ▲開取千両輪 (清司) ▲梅野由兵衛 (大和) ▲仙台袂御殿 (延寿) ▲忠臣蔵二度目清書 (三光)	室入船 (入登) 又助 (勝榮) 白石 (千歌) 壺坂 (千駒) 柳 (錦糸) 本蔵 (住登) 玉三 (可笑) 日吉 (寿) 三勝 (峰菊) 忠四 (勝榮) 菅四 (千昇) 野崎 (竹奴) 新日村 (千葉) 壺坂 (三松)	▲二十六日 御祝儀 (入登) 本蔵 (仁光) 壺坂 (鳳菊) 日吉丸 (かね子) 太十 (艶次) 酒屋 (雷雀) 忠六 (古鶴) 夕顔棚 (旭) 鳴戸 (美登里) 千両職 (清司) 合邦 (花香) 逆櫓 (相生) 大切 掛合寺子屋 (総出) 糸力遣 一平、乙鶴、千代 寿 ▲二十七日 御祝儀 (入登) 忠三 (一瓢) 野崎 (鳳玉) 三勝 (都) 日吉丸 (花笑) 八陣 (染下) 弁慶 (天和) 白石嘶 (勇吉) 菅四 (美登志) 岡崎 (菅枝) 太十 (七五三登) 大切掛合 十種香 (勇吉) 越次 かね子、小浜 糸力遣 東映、乙鶴	妹背山三 (い京) 大十 (ママ) (くらま) いざり (艶次) 紙治 (古菊) 義作 (菊水) 酒や (松風) 陣や (三峰) 八陣 (三光) 合邦ヶ辻 (藤司) 布引三 (延寿) 布引四 (琴馬) 鳴門八 (組次) 二十四孝四 (三洋) いざり (東)
午後五時より			午後六時より 月例会			竹本勝玉内地婦還送別浄瑠璃会	月並会

11/22/3	11/18/3	11/17/3	11/9/3	11/9/4	11/9/3	10/27/3	9/9/3	8/19/3	
会 素人淨瑠璃	会 素人淨瑠璃	追善義太夫	会 素人義太夫	会 素人淨瑠璃	会 素人淨瑠璃	会 素人義太夫	期 淨瑠璃会延	会 素人義太夫	
素義	素義	素義	素義	素義	素義	素義	素義	素義	
予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	
11/22/3	11/18/3	11/17/3	11/9/10/2/3/11	11/9/4	11/9/3	10/27/2/28	9/9/3/3/4	8/19/2/20	
台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北	
	古亭庄	万華		栄町二丁目			若竹町		
堂 南門公会	屋 細井植木	女紅場	栄座	新高咲茶店楼上	堂 南門公会	堂 南門公会	法華寺	法華寺	
美登里会			連中	美登里会		睦会		睦会連中	
御祝儀(入登)紙治(風玉)合邦(風菊)三勝(都)一(日吉丸)かね子(妙心寺)雷雀(竹の間)(古鶴)弁慶(旭)須磨の浦(美登志)鳴戸(美登里)沓掛村(菅枝)	御祝儀(入登)八陣記正清水城(三光)腰越状泉三郎館(三洋)一の谷熊谷陣屋(三峯)源平布引滝琵琶(翠馬)忠臣赤垣出立(菊水)日蓮記勅作住家(琴馬)関取千両職猪名川内(古菊)敵討志渡寺の段(艶次)忠臣蔵勘平切腹(松風)	御祝儀宝の入船(入登)白石斬揚屋(友鶴)千両職(清司)鎌倉三代記(多美次)由賀見山又助(寿美礼)千代萩御殿(延寿)梅の由兵衛(大和)三十三間堂(豊司)樹平切腹(三洋)蝶花形(乙鶴)	乙鶴(力造)三玉、東	美登里会	御祝儀(入登)野崎(風玉)壺坂奥(風菊)三勝(都)一(鈴ヶ森)花笑(妙心寺)雷雀(先代萩)(古鶴)太十(旭)壺坂前(雛笑)伊賀八(菅枝)	御祝儀宝の入船(入登)太功記十日目(東柳)於染久松野崎村(東遊)八陣八ノ目致事(城東昇)鏡見山(マゴ)又助住家(東月)三拾三間堂平太郎住家(東栄)一の谷熊ヶ谷陣屋(兼司)太功記十次郎物語(東秀)おしゆん(伝兵衛猿廻し(七五三登)(糸東咲ツレ峰菊)	御祝儀(入登)安達原三(琴馬)三勝酒屋(三光)鉄皿屋敷(組次)	賢女鑑片岡忠義(乙鶴)梅の由兵衛迎駕籠(大和)彦山権現六助内(松風)本朝二十四孝笥(三洋)関取千両職(清司)矢口渡(伝兵衛内)(三峰)蝶花形小阪御館(い京)仙台萩御殿(土口)義民伝義作切腹(菊水)千本桜すしや(艶次)伊賀越沼津の里(藤司)四ツ谷怪談伊右衛門内(巴城)安達原三(琴馬)三勝酒屋(三光)鉄皿屋敷(組次)	布引三(延寿)阿古屋(い糸)おしゆん(伝兵衛)(藤司)太十(くらま)城木屋(菊水)百度平(組次)忠九(三洋)すし屋(艶次)弁慶上使(土口)沼津(琴馬)忠六(松風)矢口渡(三峰)酒屋(三光)阿漕(三柴)
午後五時より	午後六時より	午後五時より 故葉玉吉次郎追善	露	午後五時より	午後五時より	午後五時より	関東大震災に配慮して無期延期	午後六時より	



9 / 28 24 /	9 / 23 24 /	9 / 19 24 / 4	7 / 19 24 / 26	7 / 19 24 / 13 24 /	5 / 19 24 / 29 24 /	5 / 19 24 / 25	4 / 19 24 / 17	3 / 19 24 / 15	3 / 19 24 / 6	
素人浄瑠璃	会 素人義太夫	会 素人浄瑠璃	会 素人浄瑠璃	会 素人義太夫	浄瑠璃大台	会 素人浄瑠璃	夫 栄屋娘義太	夫会 東咲連義太	会 素人義太夫	
素義	素義	素義	素義	素義	素義	素義	女義	素義	素義	
予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	芸評	予告	予告	
9 / 28 24 /	9 / 23、24 / 24	9 / 19 24 / 4	7 / 19 24 / 26	7 / 19 24 / 13、14	5 / 19 24 / 30、6	5 / 19 24 / 25	4 / 19 24 / 15より	3 / 19 24 / 15	3 / 19 24 / 7	
台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北	
若竹町	本町一	若竹町				目表町二丁				
法華寺	楼上	吉田屋築器店新築	堂 南門公会	堂 南門公会	栄座	関通場	栄座	堂 南門公会	ル 鉄道ホテ	
東咲連			東咲連	勝玉連	三玉門下	一平連	竹本弥栄子一行	東咲連	美登里会連	
御祝儀宝の入船(入登) 鈴ヶ森(東昇) 梅川忠兵衛二(マ)ノ口村(東遊) 本蔵下屋敷(東寿) 日吉丸三の切(東玉) 菅原四段目(東松) 一の谷三ノ切(東司) 朝顔日記(東感) をしゆん伝兵衛堀川の段(七五三登) 糸(東咲)	御祝儀(入登) 玉三(巴) 先代狭(千夜) 千代	御祝儀(入登) 野菊(東一) 本蔵下屋敷(東秀) 千代萩(東玉) 又助住家(東松) 新口村(東遊) 酒屋(東感) 岸の姫松三の切(東司) 尼ヶ崎(七五三登) 糸(東咲)	御祝儀(入登) 野菊(東一) 本蔵下屋敷(東秀) 千代萩(東玉) 又助住家(東松) 新口村(東遊) 酒屋(東感) 岸の姫松三の切(東司) 尼ヶ崎(七五三登) 糸(東咲)	御祝儀(入登) 忠六(浪速) 御所(勝美) 壺坂柳三(松) 沼津、本蔵住登 御所、鈴ヶ森(二三) 太十、先代(寿) 三勝、合邦(峰菊) 梅由(千駒) 朝顔(竹奴) 糸(勝玉) 勝好、勝登	宝入船(入登) 忠六(浪速) 御所(勝美) 壺坂柳三(松) 沼津、本蔵住登 御所、鈴ヶ森(二三) 太十、先代(寿) 三勝、合邦(峰菊) 梅由(千駒) 朝顔(竹奴) 糸(勝玉) 勝好、勝登	三十日・寿式例三番度(かしく) 忠臣二度目清書(光玉) 鏡山又助住家の段(三峰糸中司) 朝顔日記宿屋の段(桜玉、糸三五) 一(ママ) 先代萩政岡忠義の段(ちとせ) 菅原伝授寺子屋の段(松香、糸三五) 日吉丸稚松五郎即内の段(貴昇、糸ちとせ) 三日本平記松下住家の段(雷雀、糸三五) 阿漕ヶ浦平治住家の段(菊水、糸一平) 伊賀越平作内の段(霧馬、糸芳子) 八陣記政清本城の段(梅枝、糸三五) お染久松野崎村の段(柳枝、糸三五)	御祝儀(入登) 先代萩(義石) 日吉丸(錦赤) 又助(土口) 阿漕(三寒) 儀作(菊水) 経治(風玉) 合邦(魁)	御祝儀宝の入船、大功記(漆榮)、朝顔(君広)、八陣(仙園)、忠臣蔵六段目(龍光)、壺坂(弥栄子) (総掛合(野崎村))	御祝儀宝の入船、大功記(漆榮)、朝顔(君広)、八陣(仙園)、忠臣蔵六段目(龍光)、壺坂(弥栄子) (総掛合(野崎村))	日吉丸(かね子) 阿漕(美登志) 梅忠(花光) 太功記(風菊) 炬燵(風玉) 油屋(雷雀) 壺坂(雛美) 伊賀八(宵枝) 四谷怪談(長男) 逆櫓(生)
午後六時より	午後六時より 義太夫天狗聯合会	午後六時より 雨天順延	午後六時より 元記事「西門公会堂」7/27付記事で訂正	納涼大会	午後五時より 豊竹三玉渡台三十年記念	午後六時より	「宣伝の良しきを得なかつたのか殆ど義太夫定連ばかりの顔振れであった」、芸評も弥栄子以外は辛口	午後六時より	午後五時より	

1925/25	1924/8	1924/7	1924/1	1924/28	1924/25	1924/30	1924/19
素人浄瑠璃会	一平連義太夫納会	東咲連義太夫納会	三玉連義太夫納会	素人義太夫納会	睦連義太夫会	南門義太夫大会	義太夫月例会
素義	素義	素義	素義	素義・芸妓	素義	素義	素義
予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告
1925/25	1924/7(マ)	1924/6	1924/01,02	1924/28,29	1924/25	1924/30	1924/19
台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北
若竹町	本町二丁目			本町			八甲町
法華寺	吉田屋楽器店楼上	南門公会堂	南門公会堂	吉田屋演芸場	南門公会堂	南門公会堂	法華寺
美登里会	一平連	東咲連	三玉連	勝玉連	三吉野睦会	南門義太夫研究会	三吉野睦会
幸	御祝儀(入登)八陣(郡)本藏(千歳)弁慶(かね子)忠六(雷雀)玉三(三峰)三勝(相生)日吉丸(松風)安達(至玉)又助(普枝)糸(久)	一、宝の入船(入登)一、太十奥(土口)一、松十口(小菊)一、新吉原(芳子)一、岸の姫(松)一、阿漕の浦奥(菊水)一、日吉丸(奥)錦糸一、又助住家(一景)一、三浦別(一徳)一、酒屋(一正)一、玉三(一平節)	▲一日 安達三(光玉)柳(喜玉)日吉(松志)又助(寿玉)箱根滝(栄生玉)先代(土口)沼津(扇玉)寺子屋(松香)紙治(一声)▲二日 日吉(花玉)弁慶(鶴水)玉三(加玉)先代(千歳)安達三(梅枝)皿屋敷(東寿)岸姫(貴昇)赤垣(鏡司)本藏(柳枝)▲御祝儀(入登)鈴ヶ森(東柳)鳴戸(東里)又助(東寿)日吉丸(東玉)菅四(東松)岸姫(東司)太十(東艶)酒屋(東風)沼津の里(七五三登)糸東咲、七五三登	▲一日 安達三(光玉)柳(喜玉)日吉(松志)又助(寿玉)箱根滝(栄生玉)先代(土口)沼津(扇玉)寺子屋(松香)紙治(一声)▲二日 日吉(花玉)弁慶(鶴水)玉三(加玉)先代(千歳)安達三(梅枝)皿屋敷(東寿)岸姫(貴昇)赤垣(鏡司)本藏(柳枝)▲御祝儀(入登)鈴ヶ森(東柳)鳴戸(東里)又助(東寿)日吉丸(東玉)菅四(東松)岸姫(東司)太十(東艶)酒屋(東風)沼津の里(七五三登)糸東咲、七五三登	▲三十一日 壺坂(入登)先代(新喜楽千房)太功記(寿)梅田(新喜楽千房)鳴門(三松)三勝(一三)箱根(栄玉)本藏(藤玉)忠六(住登)	▲宝の入船▲太功記十段目▲朝顔日記宿屋▲三十三間堂平太郎▲千代萩(御堂「マ」)▲御所桜弁慶▲加賀山(「マ」)又助	御祝儀宝の入船(入登)一の谷須磨の浦(むつみ)三日本平記嘉平治内(三昇)三十三所壺坂(河泉)一の谷熊谷陣屋(友鶴)御所桜弁慶上使(高砂)朝顔日記宿屋(友鶴)太功記局の注進(三三)太功記尼ヶ崎(い京)四ツ谷怪談物語(藤司)先代萩御殿(輝昇)日進記勘作住家(琴馬)二代鑑秋津島内(菅枝)安達原一ツ家(三洋)
午後五時半より 雨天順延	午後六時より		午後六時より		午後六時より	午後六時より 「南門方面の娯楽機関として有志後援の下に生れた南門義太夫研究会」の第一回演奏大会	









2 / 5 1929 /	2 / 2 1929 /	1 / 19 1929 /	11 / 23 1928 /	11 / 23 1928 /	10 / 5 1928 /	7 / 20 1928 /	5 / 5 1928 /	12 / 1 1927 /	10 / 23 1927 /	7 / 26 1927 /
楽々園	挨拶廻り 日各方面へ	先代追善のため 四代目大隅太夫	J F A K (十九日) 局発表	二十四日から 正式放送 II 台北放送	素人義太夫 君の三味線	長唄や義太夫の西洋音楽の独唱 永井郁子さんの新しい試み 伴奏は柗屋佐吉	素人義太夫会	尚武義太夫会 福引進呈	素人義太夫大会	拳地蔵尊夏祭
文楽・素義	文楽	ラジオ(芸妓)	ラジオ	素義	その他	素義	素義	素義	素義	素義
予告	雑報	予告	予告	予告	雑報	予告	予告	雑報	予告	雑報
2 / 5 1929 /		1 / 19 1928 /		11 / 23 1928 /	東京	7 / 21 1928 /	5 / 5 1927 /	11 / 27 1927 /	10 / 24 1927 /	7 / 24 1927 /
台北			台北	本町		台北	台北	嘉義	台北	新竹
							本町		末広町	西門
楽々園			常磐生命 保険会社 三階			末広会館	常磐生命 保険会社 三階	消防組 会所	末広会館	弘法寺
台北義太夫会主催		味線竹本勝玉		永井郁子・柗屋佐吉		台北みどり会	鶴澤亀助師及び高雄東京堂後見	嘉義君業会		
一、御祝儀(隅太夫)一、忠六(隅尾太夫)、鳴戸(三能羽)一、又助(三峯)一、酒屋(三笠)一、聚楽所(マコ)一、千歳一、松王屋敷(綾登)一、玉三(綱次)一、妙心寺(雷雀)一、先代萩(源平太夫後釜跡)一、合邦(隅菜太夫絃道造)一、布四(竹本大隅太夫、絃鶴澤道)		日吉丸				段(相生)一、忠臣蔵勘平腹切(菊水)				
	追善義太夫大会二日目	三代目大隅太夫十七回忌追善のため四代目大隅・鶴澤道八一行が来台	午後八時四十五分より絃楽四重奏・義太夫	午後六時より	義太夫・長唄の西洋音楽の独唱を研究中、伴奏は三味線	午後六時半より	午後六時半より	午後六時より 三吉野吉之助師披露浄瑠璃さらへ会	午後六時より	午後六時～十時 漢文表記「素人劇義太夫」



8/12 1930	7/13 1930	2/16 1930	12/8 1929	12/4 1929	11/16 1929	8/31 1929	6/19 1929	6/19 1929		2/23 1929
野崎村 更ノ義太夫	中継放送委 義太夫会	会 素人義太夫	納会 義太夫睦会	義太夫納会	納会 素人義太夫	奏会日取 奏会日取	福引 素人義太夫	素人義太夫		大隅太夫義 太夫会ノ 廿三日語物
（女義） ラジヲ	素義	素義	素義	素義	素義	素義	芸妓・ 素義	素義		文楽
予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告		予告
8/11 1930	7/14、 15 1930	2/15、 16 1930	12/7、 8 1929	12/4 1929	11/16、 17 1929	8/31 1929	6/19 1929	6/1 1929		2/23 1929
	台北	台北	台北	台北	台北	基隆	台北	台北		台北
	本町			末広町	本町		万華			
	三階	常磐生命 会堂	南門外公 堂	楽々園	常磐生命 保険会社 三階	基隆座	女組場	南門公会		共楽座
弾き豊竹和歌吉	浄瑠璃竹本素女・ツレ	一平会	睦会	大力連	鶴澤一平連	基隆在郷軍人分会主催	台北万華共立検査後援	睦会		
新版歌祭文野崎村の段			▲宝入船（入登）▲太功記孫市切腹（七二八） ▲同尼ヶ崎（粟木）▲寺子屋（五色）▲酒屋（南 枝）▲百度平住家（三石）▲安達三（琴馬）三 味（マ）三吉野連中	御祝儀（入登）酒屋（千歳）六十（三能羽）壺 坂（嘘月）合邦（艶可）弁慶（雷雀）布四（琴 馬）寺子屋（和泉）大切掛合本蔵下屋敷（連中） 三味線大力師			忠三、木下酒屋白石噺、弁慶、玉三、二十四 合邦岸姫寺子屋、源蔵生立（マ）、堀川	一、義経千本桜道行の段、静御前竹本隅栄太夫、 忠信竹本隅尾太夫、糸鶴澤金路同道造 三十三間堂柳、太功記十尼ヶ崎、菅原寺子屋、 三勝半七酒屋、太功記孫市切腹、二度目清書寺 岡切腹 撰州合邦ヶ辻、国姓爺合戦	一、恋娘昔八丈、お駒才三鈴ヶ森の段、竹本隅 寿太夫、糸鶴澤道造 一、御所桜堀川夜討二弁慶上使の段、竹本隅尾 太夫、糸鶴澤金路 一、加賀山日錦絵草履打の段、竹本源平太夫、 糸鶴澤金路 一、生写朝顔日記宿屋の段、竹本隅栄太夫、糸 鶴澤道造 一、撰州合邦ヶ辻合邦内の段、竹本大隅太夫、 糸鶴澤道入 掛合	
	午後六時より	午後六時より （時間勵行）素人 合同義太夫会		午後六時より	者に福引券進呈 午後六時より 七時までの来場		午後六時より 福引実施 幾久 まち子・竹の家峰千代ら応援	午後七時より		



4/17 19/32 2/	4/13 19/32 2/	4/3 19/32 2/	2/25 19/32 2/	2/17 19/32 2/	11/22 19/31 2/	8/31 19/31 1/	8/11 19/31 1/	
ラヂオ欄	ラヂオ欄	ラヂオ欄	義太夫大会	義太夫大会	義太夫納会	大会	納涼義太夫大会	
(ド)	ラヂオ(文楽)	ラヂオ(文楽)	素義	素義	素義	素義	素義	
予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	
	4/13 19/32 2/	4/3 19/32 2/	2/26 19/32 2/27	2/17 19/32 2/19	11/23 19/31 2/24	8/31 19/31 2/9	8/12 19/31 2/13	
	大阪	台南	台北	台北	台北	台北	台北	
			内西門市場		末広町		末広町	
			台北稲荷神社社務所楼上	南門公會堂	楽々園	栄座	楽々園	
浄瑠璃竹本綴太夫、三味線豊澤新左衛門、ツレ強野澤吉男	未定	浄瑠璃山本勝寿、三味線鶴澤安松			勝玉連		勝玉連	
明烏六花曙(浦里時次郎吉原揚屋の段)	掛合義太夫(未定)	忠臣蔵二度目清書	新口村(綾登合邦奥(三笠) 二日目 御祝儀(美登志)梅忠(貴昇)朝顔(合郎)沼津(登照)寺子屋(徳風)安達(三峰)合邦(松風)酒屋(柳枝)三味線(勝玉、邑玉)呂玉?、千代寿、寿玉)	照 太十(組次)合邦奥(三笠)安達(綾登)新口村(貴昇)志津寺(ママ)(大路)掛合阿波鳴門(小松、甫) 三日目 御祝儀(宝山)太十奥(三峰)沼津(二声)弁慶(南玉)三人上戸(美登志)梅田(梅玉)本蔵下郎(綾登)掛合千両幟(小松、甫、栄枝)三味線(勝玉、邑玉、甫、千代万、栄枝、寿玉) ▲初日 御祝儀(三峰)弁慶(白峰)阿漕(美登志) 忠四(菅枝)野崎(宝珠)酒屋(梅玉)新口村(綾登)合邦奥(三笠) ▲二日目 御祝儀(美登志)梅忠(貴昇)朝顔(合郎)沼津(登照)寺子屋(徳風)安達(三峰)合邦(松風)酒屋(柳枝)三味線(勝玉、邑玉)呂玉?、千代寿、寿玉)	初日 御祝儀(入登)菅四(徳風)岸姫(竹竹)合邦(宝珠)日蓮記(綾登)弁慶(品子)太十(土口)一の谷(蘭玉)鈴ヶ森(三松)二日目 御祝儀(登山)腰越状(雷)菅枝沼津(登照)太十(組次)合邦奥(三笠)安達(綾登)新口村(貴昇)志津寺(ママ)(大路)掛合阿波鳴門(小松、甫) 三日目 御祝儀(宝山)太十奥(三峰)沼津(二声)弁慶(南玉)三人上戸(美登志)梅田(梅玉)本蔵下郎(綾登)掛合千両幟(小松、甫、栄枝)三味線(勝玉、邑玉、甫、千代万、栄枝、寿玉) ▲初日 御祝儀(三峰)弁慶(白峰)阿漕(美登志) 忠四(菅枝)野崎(宝珠)酒屋(梅玉)新口村(綾登)合邦奥(三笠) ▲二日目 御祝儀(美登志)梅忠(貴昇)朝顔(合郎)沼津(登照)寺子屋(徳風)安達(三峰)合邦(松風)酒屋(柳枝)三味線(勝玉、邑玉)呂玉?、千代寿、寿玉)	御祝儀(入登)酒屋(登照)紙治内(友鶴)百度平(彫司)三浦別(勝登)先代萩(松月)松王邸(綾登)安達前(三松)安達奥(三峰)妙心寺(美登志)合邦(三笠)宿屋(品子)寺小屋(徳風)又助(新喜楽千奴)柳(同千房)堀川(菅枝)忠臣蔵七段目(勇連掛合)白石噺(女連掛合)糸(勝玉、邑玉)	御祝儀(登山)太十(友鶴)御所桜(品子)先代萩(松月)酒屋(徳風)梅田(綾登)妙心寺(美登志?)松王邸(三玉)、糸)竹本勝玉、邑玉、千代寿	十二日(初日) 御祝儀(入登)本下(藤?)司(梅忠?)(小松)酒屋(友鶴)(野崎?)(千房)寺子屋(三笠)太十(十?)土口(菅枝)十三日(二日目)
12:20~20:13:00	19:30~20:31	掲載	午後六時より 初午祭奉納義太夫大会	午後六時より 室谷綾登氏内地引揚送別義太夫大会	午後六時より	午後六時より 入場無料	午後六時半より	

8 19 32 21	8 19 32 16	8 19 32 13	8 19 32 5	7 19 32 17	7 19 32 14	6 19 32 24	6 19 32 15	6 19 32 14	6 19 32 9	6 19 32 5	5 19 32 31	5 19 32 26	5 19 32 17	5 19 32 2	4 19 32 21		
ラゾオ欄	ラゾオ欄	ラゾオ欄	ラゾオ欄	ラゾオ欄	ラゾオ欄	ラゾオ欄	ラゾオ欄	義太夫会	ラゾオ欄	ラゾオ欄	ラゾオ欄	ラゾオ欄	ラゾオ欄	ラゾオ欄	素人義太夫会		
(女義)	(女義)	(女義)	(女義)	(女義)	(女義)	(女義)	(女義)	素義	(女義)	(女義)	(女義)	(女義)	(女義)	(女義)	素義		
予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告		
8 19 32 21	8 19 32 16		8 19 32 5	7 19 32 17	7 19 32 14	6 19 32 24	6 19 32 15	6 19 32 14	6 19 32 9	6 19 32 5	5 19 32 31	5 19 32 26	5 19 32 17	5 19 32 2	4 19 32 22、23		
台北	東京	のみ 台北	台北	台南	台北	台北	なし	記載	台北	台北	台南	台北	台北	なし	記載		
								末広町							末広町		
								楽々園							楽々園		
夫	浄瑠璃竹本七五三登太・三味線竹本七五三登太	竹本素女	浄瑠璃竹本大隅太夫・三味線鶴澤道八	浄瑠璃小松崎三松・三味線竹本勝玉	浄瑠璃丸玉勝朝・三味線安松太夫	浄瑠璃竹通家友奴・三味線吉田大力	浄瑠璃河原達引(お後伝兵衛)	浄瑠璃竹本七五三登太・三味線野澤三吉野	浄瑠璃渡清玉・三味線竹本勝玉	猪名川(水野小松)おとわ(金柳栄枝)三味線(村崎呂玉)	掛合/関取千両轍(猪名川内の段)	御所松堀川夜討(弁慶上使の段)	傾城恋飛脚(新口村の段)	浄瑠璃梅本梅玉・三味線村崎呂玉	浄瑠璃山田組次・三味線吉田大力	浄瑠璃梅本梅玉・三味線村崎呂玉	勝玉連
	未定		御所松堀川夜討(弁慶上使の段)	本朝二十四孝(十種香の段)	仮名手本忠臣蔵六段目勘平切腹の段	梅野由兵衛、迎駕籠、聚楽町の段	近頃河原達引(お後伝兵衛)	四谷怪談伊右衛門住家の段	掛合/関取千両轍(猪名川内の段)	御所松堀川夜討(弁慶上使の段)	傾城恋飛脚(新口村の段)	伊賀越道中双六(平作腹切の段)	艶姿女舞衣(酒屋の段)	浄瑠璃梅本梅玉・三味線村崎呂玉	浄瑠璃山田組次・三味線吉田大力	浄瑠璃梅本梅玉・三味線村崎呂玉	御祝儀(入登)弁慶(三三)白?、堀川猿廻し(友鶴)寺子屋(長八)八陣(勝登)先代萩(三三)野崎(三笠)太十(松月)百度平(美登志)日吉丸(品子)又助(新喜楽千奴)三三(梅田?) (新喜楽千房)儀作(首枝)糸勝玉(千代寿)
20 .. 30   21 .. 20	20 .. 00   20 .. 10	20 .. 20   21 .. 20	20 .. 30   21 .. 20	19 .. 30   20 .. 00	19 .. 30   20 .. 00	20 .. 00   20 .. 40	19 .. 50   20 .. 30	竹本七五三登来台歓迎 午後六時半より	20 .. 50   21 .. 20	20 .. 10   20 .. 05	20 .. 45   21 .. 20	20 .. 30   21 .. 20	20 .. 30   21 .. 20	20 .. 30   21 .. 20	午後六時半より		



2/16 19/33 3/3	2/14 19/33 3/3	2/3 19/33 3/3	2/2 19/33 3/3	1/9 19/33 3/3	1/8 19/33 3/3	12/13 19/33 2/2	12/10 19/33 2/2	12/10 19/33 2/2	12/4 19/33 2/2	12/3 19/33 2/2	11/29 19/33 2/2	
ラヂオ欄	ラヂオ欄	ラヂオ欄	ラヂオ欄	ラヂオ欄	ラヂオ欄	ラヂオ欄	ラヂオ欄	ラヂオ欄	素義 夫納会 三玉野義太	ラヂオ欄	勝玉連義太 夫納会	
(文楽) ラジヲ	(女義) ラジヲ	(文楽) レコー ラジヲ	(女義) ラジヲ	(素義) ラジヲ	(女義) ラジヲ	(文楽) ラジヲ	(女義) ラジヲ	(文楽) レコー ラジヲ	素義	(女義) ラジヲ	素義	
予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	
2/16 19/33 3/3	2/14 19/33 3/3	2/2 19/33 3/3	1/9 19/33 3/3	1/8 19/33 3/3	12/13 19/33 2/2	12/10 19/33 2/2	12/10 19/33 2/2	12/3 19/33 2/4	12/3 19/33 2/2	11/29 19/33 2/30		
台北	大阪	台北	台北	東京	大阪	台北	台北	台北	東京	台北		
										末広町		
								堂 南門公会		楽々園		
浄瑠璃竹本源平太夫、三味線竹本左近	浄瑠璃竹本東広、三味線豊澤仙平	浄瑠璃竹本綴太夫、三味線豊澤左衛門	鶴澤友糸	竹本小津賀、竹本静香、竹本素貞、竹本榮登	浄瑠璃斎藤松月、三味線竹本勝玉	文楽座若手連中	三味線竹本七五三登	浄瑠璃竹本七五三吉、三味線竹本七五三登	浄瑠璃豊竹つばめ太夫、三味線豊竹仙糸	三吉野陸連	勝玉連	
絵本太閤記十段目尼ヶ崎の段	未定	「三十三間堂棟由来」平太郎住家の段	「假名手本忠臣蔵」判官切腹の段	三十三ヶ所花の山「壺坂雲験記」沢市内の段	さよりの夕べ	「假名手本忠臣蔵」七段目掛合	「恋飛脚大和往来」梅川忠兵衛新口村の段	「心中天網島」(新地茶屋の段)		「假名手本忠臣蔵」四段目「塩谷館の段」 △三月初日 本藏下屋敷瓢、佐倉曙儀作腹切 七二八、毛谷村六助内嬰木、赤垣源藏成立南枝 百度平内五色、布四豆程の段三吉野 △四日二日目 八陣八ツ目嬰木、酒屋の段五色、 三日の九南枝、勘平切腹飄、沼津七二八、お染、 久松質屋の段三吉野		(初日) 御祝儀(入登)二度目清書(勝登)太 十(新喜楽千奴)炬燵(鬼笑)寺子屋(熊風) 安達(三峰)柳(新喜楽千房)梅由(梅玉)松 王(三松)御祝儀(登山)太十奥(三峰)本下(礁 風)又助(勝登)一の谷(寿)弁慶(三松)梅 忠(玉枝)鳴門(友鶴)八陣(菅枝)
20 19 31 11 21 30	19 19 50 12 20 30	12 12 20 13 00	20 20 31 21 20	20 20 31 21 20	19 19 00 20 30	19 19 30 20 30	20 20 45 21 20	12 12 20 13 00	午後六時より	19 19 45 20 31	午後五時半より	
した太夫で、直ちにAKより放送するものである											竹本源平太夫 師と左近師は去る十四日来台した太夫で、直ちにAKより放送するものである	

4 19 22 3 3 3	4 19 21 3 3	4 19 21 3 3	4 19 14 3 3	3 19 14 3 3	3 19 14 3 3	3 19 12 3 3	3 19 5 3 3	3 19 1 3 3	2 19 27 3 3	2 19 26 3 3
けふの催し	義太夫会	ラゾオ欄 (女義 レコー ド)	ラゾオ欄 (素義)	義太夫競演 会の感ある 三吉野師選 暦祝賀会	ラゾオ欄	素義 素義	素義 素義	ラゾオ欄 (女義)	ラゾオ欄 (文楽)	ラゾオ欄
予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告
	4 19 22 3 3	4 19 21 3 3	4 19 14 3 3	3 19 13 14 3 3	3 19 14 3 3	3 19 13 14 3 3	3 19 5 3 3	3 19 1 3 3	2 19 27 3 3	2 19 27 28 3 3
	台北		台北	台北	大阪	台北	台北	台北	大阪	台北
	堂	南門公会		栄座		栄座	内稲荷社	西門市場		楽々園
	豊竹富光など7名	浄瑠璃豊竹昇之助、三味線豊澤東重	浄瑠璃吉田貴昇、三味線竹本勝玉		浄瑠璃豊竹団司、三味線豊澤小住	各師門下陸芸連		竹本左近	浄瑠璃竹本南部太夫、三味線野澤吉弥	当地素義聯合主催
		傾城阿波鳴門、巡礼歌の段	恋飛脚大和往來、梅川忠兵衛新口村の段	十三日 御祝儀玉の入船(入登) 矢口(七二八) 寺子屋(五色) 柳(田鶴子) 壺阪(松月) 蝶花形八(土口) 揚屋(松風) お胸才三(菊水) 恋飛脚(七三三吉) 桂川連理桐(三吉野) 十四日 式礼三番叟(可祝) 嘉平次(南枝) 彦山権現(粟木) 尼ヶ崎(露) 恋飛脚(貴昇) 菅原四(竹司) 弁慶上使(新) 合邦(可笑) 伊賀越(鳳玉) 熊谷陣谷(ママ) 雷雀 忠臣蔵判官切腹(三吉野)	未定			「伽羅先代萩」(政岡忠義の段)	恋娘昔八丈(鈴ヶ森の段)	△初日 御祝儀(入登) 又助(勝登) 白石揚屋(登照) 壺坂(彫司) 弁慶(南玉) 太十(まさご) 合邦(松風) 三勝酒屋(源平太夫) お初仇討(左近) △二日目 御祝儀(登山) 二度目(勝登) 酒屋(菊水) 百度平(五色) 本下(龍風) 御所桜(品子) 合邦(鳳玉) 太功記(源平太夫) 阿波鳴門(左近) 三味線(左近、一平、三吉野、勝玉、千蔵、甫)
同上	午後六時より	12:20-13:00	20:31-21:20	三吉野は「渡台十二年をけみす古顔」「本島の男性義太夫師と今日本の本島義太夫界隆盛を導いた功労者」	19:00-19:30	指瀧歴十二年	午後七時より	20:31(終演記載なし)	19:00-19:50	午後六時より 源平太夫・左近 歓迎「子て馴染のある」源平太夫

8/6 1933 3/3	8/1 1933 3/3	7/24 1933 3/3	7/21 1933 3/3	7/20 1933 3/3	6/8 1933 3/3	5/30 1933 3/3	5/24 1933 3/3	5/21 1933 3/3	4/25 1933 3/3
ラヂオ欄	義太夫大芸	ラヂオ欄	ラヂオ欄	ラヂオ欄	ラヂオ欄	勝玉連義太夫会	ラヂオ欄	ラヂオ欄	万華浄栄会の義太夫芸
(ラヂオ) レコー	素義	(ラヂオ) (女義)	(ラヂオ) (女義)	(ラヂオ) (女義)	(ラヂオ) (女義)	素義	(男義) ラヂオ	(女義) ラヂオ	素義
予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告	予告
	8/1 1933 3/3	7/24 1933 3/3	7/21 1933 3/3	7/20 1933 3/3	6/8 1933 3/3	05/30 1933 3/31	5/24 1933 3/3	5/21 1933 3/3	4/25 1933 3/3
のみ	台北	台北	台北	台北	台北	台北	台北	東京	台北
	西門町					末広町			
	所 台北稲荷 神社社務					楽々園			館 万華芳明
味線豊澤新左衛門	浄瑠璃竹本義太夫、三	竹本東猿	竹本東猿	竹本東猿	線竹本メ登太夫	勝玉連	野澤三吉野		万華浄栄会主催
本朝二十四孝、十種香の段	△一日御祝儀(入登) 寺子屋(組次 妙心寺) 枝(阿漕平治 菊水) 玉三(琴馬) 鈴ヶ森(七八) 日吉三(松丸) 沼津(藤司) △二日御祝儀(入登) 宿屋(静) 太十(田鶴子) 紙治(風玉) 寺子屋(五色) 岸の姫松(竹司) 弁慶上使(七五三) 吉(△三日御祝儀(入登) 玉三(三壱) 宿屋(品) 弁慶上使(勝登) 寺子屋(土口) 合邦(宝珠) 鯉谷古八(貴昇) 一谷陣屋(雷雀)	絵本大功記(マゴ) 尼ヶ崎の段	三十三所花の山 壺坂靈験記 沢市内の段	伽羅先代萩 政岡忠義の段	恋娘昔八丈、鈴ヶ森の段	△初日 御祝儀(三峰) 本下(彫司) 弁慶(勝登) 十種香(美人座登志子) 宿屋(美人座嘉代子) 鴨門(白峰) 先代萩(松月) 壺坂(静原) 安達(三松) 御祝儀(三松) 二度目(勝登) 鴨門(△二日目 御祝儀(品子) 御所松(新喜楽千奴) (新喜楽千房) 宿屋(品子) 御所松(新喜楽千奴) 壺坂(彫司) 酒屋(友鶴) 儀作(菊水) 梅由(梅玉) 三味線(勝玉、呂玉、千代寿)	勢州阿漕浦 平治住家の段	未定	御祝儀宝の入船 入登 先代萩政岡忠義(瑞穂) 柳司 太功記十尻ヶ崎(ママ) 忠臣蔵六勸平切腹、寿 御所松弁慶上使 新高 忠臣蔵本蔵下郎 新玉 菅原伝授松主郎 松玉 白石断揚屋 友鶴 合邦辻合邦内 源平太夫 加賀見山お初仇討 竹本左近
昼間観劇時間(12時台)の内		午後六時より	午後六時より	午後六時より	午後六時より	午後六時より	20・31・21・30	18・30・19・35	午前十一時より 抽選景品付き

12/10 1933	12/3 1933	11/29 1933	11/26 1933	11/1 1933	9/27 1933
ラヂオ/今日の番組	ラヂオ/今日の番組	勝玉連義太夫納会	今日の番組	竹本鐘龍師引退の慰安義太夫会	追善義太夫大会
ラジオ(女義)	ラジオ(女義)レコー	素義	ラジオ(文楽)レコー	素義	素義
予告	予告	予告	予告	予告	予告
12/10 1933		11/29 1933		11/1 1933	9/27 1933
東京		台北		台北	台北
		京町			
		館朝日小会		堂南門公会	堂南門公会
由良之助 おかる 平右衛門 九太夫 件内 竹本久春 竹本旭次 豊澤仙平 三味線 外はやし連中	竹本東広	勝玉連	浄瑠璃竹本義太夫、三味線豊澤新左衛門	台北素義連	
仮名手本忠臣蔵、七段目(力茶屋の段)	伊賀越一平作内の段	初日(二十九日) 御祝儀、寺子屋、忠六、酒屋、御所桜、新口村、堀川、先代萩、忠四(二二日)(二十日) 御祝儀、揚屋、本下、妙心寺、御所萩、太十、合邦奥、酒屋奥(三日) 御祝儀、重の井、先代萩、百度平、弁慶上使、宿屋、合邦奥、白石嘶、梅山、三味線(勝玉、友玉、寿玉、北投小卷)	天網島時雨炬燵 紙治内の段	△初日 御祝儀、朝顔日記、鰻谷、太功記、揚屋、野崎村、御所桜、合邦、酒屋 △二日目 御祝儀、勘平腹切、太功記、先代萩、合邦、熊谷陣屋、玉澤前、赤垣立、御所桜 △三日目 妹背山、曾我対面、太功記、天の網、島、鏡山、油屋、寺子屋、酒屋、合邦 △四日目 御祝儀、寺子屋、太功記、御所桜、百度平内、堀川、阿波鳴戸、酒屋、先代萩	△二十七日 志度寺(栄枝) 竹雀(友栄) 松王(蘭玉) 矢口(三峰) 鳴門(田鶴子) 新の口(一声) 二ツ玉(菊水) 酒屋(七五三吉) △二十八日 本下(小路) 鳴門(友三) 野梅(柳枝) 合邦前(藤司) 堀川(友路) 寺小屋(梅玉) 先代(竹司) 沼津(琴馬) △二十九日 合邦前(友玉) 酒屋(三石) 合邦奥(宝珠) 岸姫(組次) 沼津(松風) 壺坂(南玉) 日吉丸(貴昇) 鎌腹(雷雀) △三十日 菅四(南玉) 陣屋奥(菅枝) 三吉子別(三松) 太十(龍玉) 忠六(可笑) 寺小屋(土口) 酒屋(風玉) 沼津(七五三登) △三味線三吉野、七五三登、友糸、勝玉、富光、大丸、七五三吉、友玉、寿玉
19:40-20:30	昼間娯楽時間(12時台)の内	午後五時半より	昼間娯楽時間(12時台)の内	午後六時より 竹本鐘龍師は渡台以来三十余年間義太夫界に尽し今回引退することとなった 同師引退慰安義太夫会	午後六時より 金柿大路追善

2 1 9 3 5 /	11 23 3 4 /	11 23 3 4 /	8 2 1 9 3 4 /	7 26 1 9 3 4 /	3 24 1 9 3 4 /
二葉連の義 大夫初会	義大夫納会	義大夫納会	大阪女義太 夫／竹本雛 駒／座／初 日、二日目 番組	関西女義太 夫一行来白	勝玉連義太 夫会
素義	素義	素義	女義	女義	素義
予告	予告	予告	予告	予告	予告
2 1 9 3 5 /	11 23 3 4 /	11 23 3 4 /	8 1 9 3 4 /	8 1 9 3 4 /	3 24 1 9 3 4 /
台北	台北	台北	台北	台北	台北
	文化村				
堂	南門公会	南門公会	楽座	楽座	大桶埴俱 楽部
二葉連	勝玉連	二葉連	竹本雛駒二座	味線豊澤萬之助 本国香 竹本国秀、竹 本雛若 豊竹昇駒、竹 本久国 竹本雛駒 三	勝玉連
	城東倶楽部			関西女義太夫大阪因会 最高幹部台同一行(竹 本国香 竹本国秀、竹 本雛若 豊竹昇駒、竹 本久国 竹本雛駒 三 味線豊澤萬之助)	御祝儀(入登) 御所桜、寺子屋(北投一口) 鳴 門、太十(白峰)、先代、鳴門(友鶴) 本下、鴨 屋(彫司) 鈴ヶ森、太十(勝司) 沼津合邦(基 隆東) 安達、壺坂(三松) 柳、梅忠(松月) 三 味線(勝玉)
午後六時より	午後六時より	午後六時より		「十年來」の来白 台北檢番・台 北素義界因連の後援	午後六時より

12/15 1935	12/8 1935	12/7 1935	11/19 1935	10/12 1935	10/11 1935	8/3 1935		4/18 1935
新声会・勝玉会 会合義太夫納会	義太夫納会	三吉野睦連 義太夫納会	義太夫・席 戦／新書の策	義談演説で 義太夫・席 夫会	勝玉連義太 夫会	義太夫会		送別義太夫 大会
素義	素義	素義	素義	素義	素義	素義		素義
予告	予告	予告	雑報	予告	予告	予告		予告
12/15 1935	同上	12/7、8 1935	11/19 1935	同上	10/11、12 1935	8/3、4 1935		4/18、21 1935
台北		台北	新竹		台北	台北		台北
栄町								栄町
理容会館		堂 南門公会	ブ 鉄道クラ		堂 南門公会	堂 南門公会		館 朝日小会
新声会・勝玉会		三吉野睦連	有本兼治		勝玉連	二葉連		
		初日御祝儀(入登)酒屋(五色)儀作腹切(七二八)熊谷陣屋(瓢)合邦(嬰木)近江八(つるえ)古八(三吉野)二日目寿司屋(嬰木)本下(鷹堀川(七二八)菅四(五色)壺坂(つるえ)二十四孝勸助内(三吉野)糸三吉野	太閤記		△初日 御祝儀(入登)鎌三(勝登)鳴戸(友栄)日吉(秀豊)梅忠(勝司)沼津(松風)堀川(蘭玉)掛合須磨の浦(南玉、龍玉) △二日目 御祝儀(入登)朝顔(勝司)菅四(松湾)梅由(勝登)三日九(龍玉)木十(白峯)先代(南玉)本下(口)三味線十竹本勝玉友玉			◇初日御祝儀(入登)三日九(艶司)又助(千奴)梅田(可笑)二度目(友栄)布四(美登志本下(南玉)菅四(長楽)宿屋(千房)沼津(二声) ◇二日目御祝儀(入平)鳴津(ママ)(白峯)安達(三峯)一の谷(瓢)新の口村(松風)阿漕(嬰木)日吉(品子)壺坂(静糸)八陣(勝司)忠九(琴馬) ◇三日目御祝儀(入昇)先代萩(三松)鳴門(勝登)又助(千歳)梅忠(貴丹)忠四(美登志)炬燵(風玉)忠六(多見岳)堀川(蘭玉)白木屋(三吉野) ◇四日目御祝儀(入染)弁慶(松湾)合邦(藤司)十種香(松月)菅四(口)野崎(友鶴)明鳥(雷雀)安達(栄玉)二ツ玉(菊水)布四(菅枝) ◇三味線鶴澤才五郎、同竹本勝玉、村崎友玉、吉田大友、市野千代寿
		午後六時半より	新竹市議候補石井員夫選挙演説の露払い 成功すれば旭町クラブでも催行予定		始政四十周年記念 午後六時より	午後六時より		市野美登志氏送別義太夫大会

2 / 1936 / 1836 /	2 / 1936 / 1536 /
五日目 竹本勝玉の 義太夫番組 ／四日目と	で 竹本勝玉の 義太夫大会 ／十五日よ り理容会館
素義	素義
予告	予告
同上	2 / 1936 / 1536 / 19
	台北
	栄町
	理容会館
司) 加賀見山 (文華)	初日 傾城阿波鳴戸 (入登) 朝顔日記 (長門) 伊賀越 (吾妻) 金毘羅御利生 (嬰木) 仮名手本 忠臣蔵 (常竹) 絵本太功記 (口) 増補忠臣蔵 (朝 日) 明烏雪曙 (るる) 仮名手本忠臣蔵 (音母) 二日目 絵本太功記 (富村) 御所桜 (平和) 傾 城阿波鳴戸 (友栄) 先代萩 (品子) 三日 太平記 (龍志) 摂州合邦ヶ辻 (つるぎ) 鎌倉三代記 (栄 玉) 菅原伝授手習鑑 (蘭玉) 恋女房榮分手綱 (三 松) 三日目 日吉丸稚桜 (勝登) 御所桜 (秀豊) 菅 原伝授手習鑑 (長染) 増補忠臣蔵 (瓢) 蝶花形 (すみはる) 仮名手本忠臣蔵 (南玉) 近頃河原 達引 (七二八) 仮名手本忠臣蔵 (菊水) 御所桜 (雷雀)
十八日 (火曜日) 彦九 (友栄) 三勝半七酒屋 の段 (松壽) 朝顔日記 (勝登) 鎌倉三代記 (栄 玉) 千代萩 (友路) 菅原伝授手習鑑 (円治) 近 頃河原達引 (鳳玉) 古手屋八郎兵衛 (貴昇) 迎 籠梅野出兵衛 (梅玉) 御祝儀 (友栄) 松王 (勝司) 十九日 (水曜日) 御祝儀 (友栄) 松王 (勝司) 日吉丸 (松壽) 菅四 (一口) 合邦 (藤司) 堀川 (友路) 一之谷嫩軍記 (樵風) 摂州合邦ヶ辻 (鮎 司) 加賀見山 (文華)	竹本勝玉渡台二十五周年纪念 午後六時より
同上	